熊本県文化財調査報告　第26集

沈目立山遺跡

―県道宇土・甲佐線改良工事に伴う文化財調査―

1977

熊本県教育委員会

熊本県文化財報告書　第26集

沈目立山遺跡

しずめたてやま

—熊本県下益城郡城南町—

1977

熊本県教育委員会

序　　文

生活文化の向上に伴い車社会に突入し、交通網の整備と道路の新設改良は今や現実的要請として受けとめられています。そこで本県では、これらの各事業との調整につとめ、やむを得ず破壊される遺跡については、事前に調査を実施するよう努めております。

このたび県土木部において県道宇土甲佐線の改良工事が計画され、昭和50・51年度にわたって現地の発掘調査を実施しました。周知の如く、この一帯は国指定の塚原古墳群をはじめ、重要遺跡が櫛立する地域であります。さきに九州縦貫自動車道建設に際して「沈目」、「塚原」を、また民間開発に際して「沈目奥野」の各報告書が公刊されています。ここに重ねて、本報告書を発刊する運びになりました。

調査にあたって、文化財に対する理解と協力をいただいた県土木部、地元の方々および城南町教育委員会、また調査について指導助言をたまわった先生方に対して深く感謝いたします。

ここに報告書を発刊するにあたり、これが広く県民をはじめ関係者の文化財に対する理解の一助となり、また専門学者の方々に活用していただければ幸いに存じます。

昭和52年8月31日

熊本県教育委員会
教育長　林田正恒

例　　言

1．本書は、昭和50・51年度に実施した県道宇土・甲佐線改良工事に伴う埋蔵文化財調査の報告である。

2．現地の埋蔵文化財の発掘調査は、熊本県教育委員会文化課が実施し、文化課参事緒方勉が主としてこれを担当した。

3．現場での実測および写真撮影は緒方があたり、整理後の遺物についての写真は白石巌が撮影した。

4．出土遺物の整理および遺物の実測については、県文化財収蔵庫の担当者があたり、適宜緒方が点検補正した。

5．本報告書の編集には緒方があたった。なお資料整理にあたり、佐藤征子、西町圭子らの手をわづらわした。

調査の組織

調査責任者	文化課長	合志太助	(昭和52年度)
	同	境　信三郎	(昭和51年度)
	同	田辺哲夫	(昭和50年度)
	文化課長補佐	河野宗忠	
	同	前田利郎	
	文化財調査係長	隈　昭志	
調査事務担当者	文化課管理係長	松本　巽	
	土木部道路建設課長	中山昭三郎	
	土木部道路建設課参事	中田　博	
現場担当者	文化課参事	緒方　勉	
	同　技師	村井真輝	
調査の指導・助言	熊本大学教授	松本雅明	
	同	白木原和美	
	熊本県文化財保護審議会委員	斉藤林次	
	同	原口長之	
	九州産業大学教授	森　貞次郎	
地元協力者	城南町教育委員会		
	城南町沈目・塚原区各位		
	城南町沈目区区長　山口直之		

目　次

Ⅰ　序　　説

1　調査にいたる経緯 …… 1

2　遺跡の位置および環境 …… 2

3　沈目立山遺跡の試掘 …… 7

(1)　試掘調査の目的 …… 7

(2)　調査の概要 …… 7

Ⅱ　調　　査

1　調査の経過 …… 11

(1)　昭和50年度調査 …… 11

(2)　昭和51年度調査 …… 12

2　遺構および遺物 …… 16

(1)　縄文時代 …… 16

炉穴とその周辺 …… 16

本遺跡出土の縄文土器 …… 19

本遺跡出土石器 …… 21

(2)　弥生時代 …… 30

甕　棺　群 …… 30

その他の弥生式土器 …… 57

住　居　址 …… 58

(3) 古墳時代 …… 64
甚九郎山古墳 …… 64
古墳時代の遺物 …… 67
(4) 歴史時代 …… 75
溝 …… 75
道路様遺構 …… 77
溝様遺構 …… 78
ピット群および土壙 …… 79
出土遺物 …… 82
(5) C14による年代測定 …… 102

Ⅲ 調査の成果と展望

縄文時代 …… 103
弥生時代 …… 104
古墳時代 …… 108
歴史時代 …… 108

付 1 城南町沈目含土器層地質調査報告(中間報告) …… 斉藤林次 …… 116
付 2 甲佐町麻生原遺跡および八ツ割ドルメン群 …… 緒方 勉 …… 118
付 3 熊本市御幸木部町加勢川河底遺跡 …… 緒方 勉 …… 123

表　目　次

表 1　沈目立山遺跡出土　石器一覧 …… 110

表 2　沈目立山遺跡出土　甕棺一覧 …… 110

表 3　沈目立山遺跡出土　須恵器一覧 …… 111

表 4　沈目立山遺跡出土　土師器一覧 …… 113

表 5　沈目立山遺跡出土　黒色土器一覧 …… 115

挿　図　目　次

第１図　沈目立山遺跡の位置と周辺主要遺跡 …… 3

第２図　沈目立山遺跡全体図 …… 5

第３図　熊本周辺沖積火山灰土壌対比図 …… 10

第４図　沈目立山遺跡土層図 …… 10

第５図　炉穴とその周辺 …… 17

第６図　撚り糸文土器出土状態 …… 20

第７図　沈目立山遺跡出土　縄文土器１ …… 22

第８図　沈目立山遺跡出土　縄文土器２ …… 23

第９図　沈目立山遺跡出土　縄文土器３ …… 24

第10図　沈目立山遺跡出土　縄文土器４ …… 25

第11図　沈目立山遺跡出土　縄文土器５ …… 26

第12図　沈目立山遺跡出土　石器１ …… 27

第13図　沈目立山遺跡出土　石器２ …… 28

第14図　沈目立山遺跡　甕棺分布図１ …… 29

第15図　１・２号甕棺出土状態 …… 30

第16図　１号甕棺 …… 31

第17図　２号甕棺 …… 32

第18図　３号甕棺とその周辺遺物出土状態 …… 33

第19図　３号甕棺 …… 34

第20図　４・12号甕棺出土状態 …… 35

第21図　４号甕棺 …… 36

第22図　５号甕棺とその出土状態 …… 38

第23図　６・７号甕棺の出土状態 …… 39

第24図　6・7号甕棺 …… 40
第25図　8・9号甕棺出土状態 …… 41
第26図　8号甕棺と一括出土土器 …… 42
第27図　9号甕棺 …… 43
第28図　10号甕棺と土壙 …… 44
第29図　10号甕棺 …… 45
第30図　11号甕棺とその出土状態 …… 46
第31図　12号甕棺の出土状態 …… 47
第32図　12号甕棺 …… 48
第33図　13号甕棺の出土状態 …… 50
第34図　13号甕棺と小壺 …… 51
第35図　14号甕棺の出土状態 …… 52
第36図　14号甕棺 …… 53
第37図　15号甕棺とその出土状態 …… 54
第38図　16号甕棺の出土状態 …… 55
第39図　16号甕棺 …… 56
第40図　沈目立山遺跡出土　弥生式土器1 …… 59
第41図　沈目立山遺跡出土　弥生式土器2 …… 60
第42図　沈目立山遺跡出土　弥生式土器3 …… 61
第43図　沈目立山遺跡出土　弥生式土器4 …… 62
第44図　住居址とその周辺 …… 63
第45図　甚九郎山古墳　実測図 …… 64
第46図　甚九郎山古墳　周溝1 …… 65
第47図　甚九郎山古墳　周溝2 …… 66
第48図　沈目立山遺跡　第Ⅱ層遺構分布図1 …… 69

第49図　沈目立山遺跡　第Ⅱ層遺構分布図２ …… 71
第50図　沈目立山遺跡　第Ⅱ層遺構分布図３ …… 72
第51図　沈目立山遺跡　第Ⅱ層遺構分布図４ …… 73
第52図　１号溝（水溜め）実測図 ……
第53図　製鉄関連遺構実測図 …… 80
第54図　沈目立山遺跡出土　須恵器１ …… 89
第55図　沈目立山遺跡出土　須恵器２ …… 90
第56図　沈目立山遺跡出土　須恵器３ …… 91
第57図　沈目立山遺跡出土　須恵器４・他 …… 92
第58図　沈目立山遺跡出土　布目瓦 …… 93
第59図　沈目立山遺跡出土　土師器１ …… 94
第60図　沈目立山遺跡出土　土師器２ …… 95
第61図　沈目立山遺跡出土　土師器３ …… 96
第62図　沈目立山遺跡出土　土師器４ …… 97
第63図　沈目立山遺跡出土　丹塗り土師器 …… 98
第64図　沈目立山遺跡出土　黒色土器１ …… 99
第65図　沈目立山遺跡出土　黒色土器２ …… 100
第66図　墨書土器と鉄釘 …… 101
第67図　沈目立山遺跡　甕棺分布図２ …… 105
第68図　沈目立山遺跡　甕棺集成 …… 106
第69図　溜池実測図 …… 117
第70図　麻生原遺跡出土　土器１ …… 121
第71図　麻生原遺跡出土　土器２ …… 122
第72図　加勢川河底遺跡出土　土器１ …… 125
第73図　加勢川河底遺跡出土　土器２ …… 126

図　版　目　次

図版１　沈目立山遺跡調査風景、遺跡展望

図版２　炉穴とその周辺

図版３　No.28付近の土器出土状態、撚り糸文土器とその出土状態

図版４　沈目立山遺跡出土石器

図版５　縄文土器１（塞ノ神式土器他）

図版６　縄文土器２（擦り消縄文系）

図版７　縄文土器３（各種）

図版８　弥生甕棺群

図版９　１・２号棺とその出土状態

図版10　３・４号棺とその出土状態

図版11　10号棺と５・６・８・10号棺出土状態

図版12　５・６・８・９号棺

図版13　７号棺とその出土状態

図版14　11・12号棺とその出土状態

図版15　13・14号棺と13号棺の出土状態

図版16　15・16号棺とその出土状態

図版17　住居址、弥生式土器他

図版18　甚九郎山古墳と周溝

図版19　甚九郎山古墳周溝

図版20　ピット群と出土貝類

図版21　溝様遺構、ピット群とタニシ

図版22　１号溝

図版23　製鉄関連遺構

図版24　沈目立山遺跡出土　須恵器

図版25　沈目立山遺跡出土　土師器

図版26　沈目立山遺跡出土　土師器と黒色土器

図版27　沈目立山遺跡出土　墨書銘土器

図版28　八ツ割ドルメン群

沈目立山遺跡調査報告書

Ⅰ 序　　説

1　調査にいたる経緯

昭和50年４月10日付をもって県土木部（主管課道路建設課）より、下益城郡城南町沈目地区に一般県道宇土一甲佐線の道路改良を計画しているので、この地域内の文化財の有無についての照会があった。そこで文化課ではこれを受けて、４月30日土木部に対して、この地域には沈目遺跡や甚九郎山古墳などがある旨を回答した。

昭和50年10月にいたり、16日付をもって土木部より本遺跡の試掘調査の依頼を受けた。文化課では早速調査を計画、試掘調査に要する費用を算出、予算の令達方を申し出た。予算の令達を受け、後述する如く試掘調査を実施した。昭和51年１月14日試掘調査の結果をそえて、土木部に対して本調査が必要であることを連絡した。またこれについての費用を算出し、予算の令達を受けて昭和50年度分の調査を実施した。[注]

昭和51年６月22日付で土木部より前年度に引き続き本遺跡の調査の依頼があった。そこで、調査を企画、調査に必要とする経費を算出、それを土木部に通知した。７月29日に至り予算の令達を受け、直ちに手続きをすませ二年度目の調査を実施することになった。　　（緒方）

注　本稿３の「沈目立山遺跡の試掘」がこれに相当する。

2　遺跡の位置および環境

本遺跡の行政的区分は、熊本県下益城郡城南町大字沈目字立山（一部奥野）に属し、沈目地区の東約500m に位置する。これを国土地理院発行５万分の１（昭和42年編集、昭和47年修正）「御船」に求めれば、図幅の北より30.7㎝、西より0.5㎝のあたりに相当する。

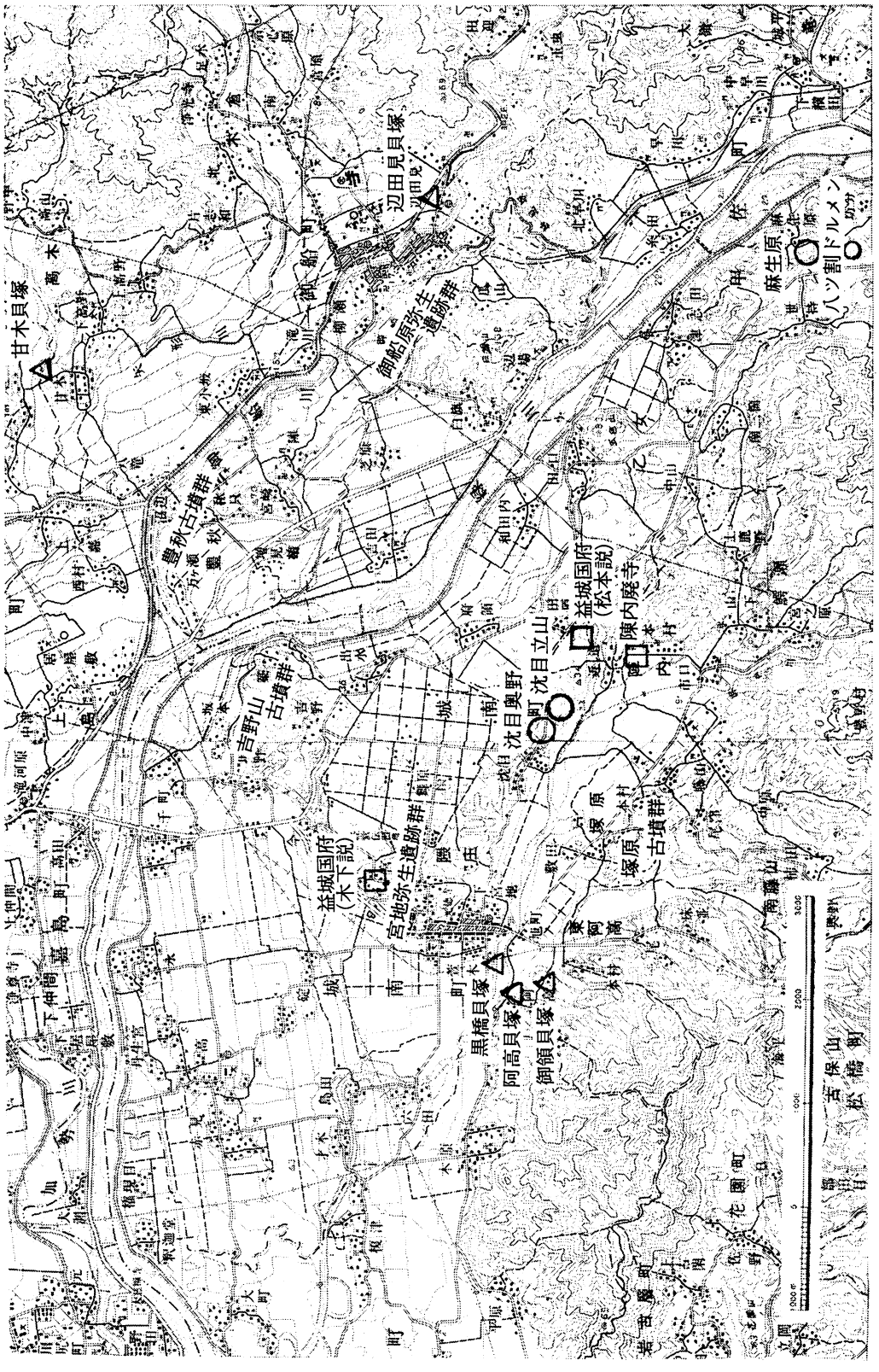
熊本市を南下する。最近は国道３号線の混雑を避けて、熊本一隈庄（城南町）一松橋へ抜けるルートをとるドライバーも多い。12～13㎞、時間にして20分位で城南町の中心部、隈庄に到達する。隈庄より東行すること約２㎞にして沈目地区、さらに県道を東に約500m のあたりが本遺跡で、それはあたかも城南町の東のはずれにあたる。計画道路は別図による如く、既設の県道に直交する形で南行し、そして台地を下り水田面、更に浜戸川を越えて塚原地区に向けて建設されることになった。建設予定地の台地の部分、長さにして約180m が今回の調査対象地である。

この地域の歴史的地理的環境については、最近続けざまに発行された報告書「塚原」[注1]、「沈目」[注2]そして「沈目奥野」[注3]に詳しく、今さら縷説を要しない。そこで本遺跡に直接関係ありそうなことについて述べる。

現地は標高29.4～30m の比較的なだらかな火山灰台地「舞ノ原」の一角で、その辺縁部にあたる。この一帯は太平洋戦中航空隊により飛行場が建設され、その際大幅な地均しが行われた。そこで、現況がそのまま元の地形、地貌を現わしていないことは注意する必要がある。今回の調査で、特に№22付近の甕棺群のあたりで削平、均平されていることは結果の示すとおりである。

今回の調査地域は大部分農耕地で、桑、茶、栗などの樹園、最近は花木、庭園樹などの樹芸作物の作付けも多い。ひところは桑の間作として、その作条の間に牛蒡が栽培されたものである。その結果、遺物の包含層が攪乱され、調査時の障害となったことは後述のとおりである。

本遺跡の調査により縄文早期より、後期、弥生前期、古墳期そして歴史時代にわたる複合遺跡ということが判明した。あたかも遺跡が集約された感のある沈目立山遺跡は、よほど古代人の生活立地として条件に恵まれていたものとみられる。縄文前期の沈目式土器として呼称される押型文平底の土器は、この沈目に由来しており、浜戸川の沖積平野を隔てて対峙する塚原台地から、縄文平底とみられる土器が、また塞ノ神式土器が出土している。また塞ノ神式土器を出土した中央町中郡は、舞ノ原（まいはら）台地と同じ流れの緑川の左岸台地上にある。今次の調査により弥生前期の甕棺群が出土した。前期の中でも比較的下る時期の恰好の遺跡は、加勢川河底の八幡塚である。この遺跡は本遺跡から西北約６㎞の地点である。近くの熊本市田迎町二石からも前期の甕が出土し、加勢川上流の江津湖周辺[注4]に同様の遺跡の群存することは、人のよく知るところである。塚原台地の一角にある尾窪地区の北側からも土器片が出土している。舞ノ原台地



第１図　　沈目立山遺跡の位置と周辺主要遺跡

の同じ流れの緑川左岸の麻生原（甲佐町）にも、弥生前期の生活址がある。また、これより西南に約1km隔てた八ツ割には、10数基からなるドルメン群がある。これは弥生前期の墓地とみられ、麻生原遺跡と対置して、墓地、住居址として考えるには好都合な位置的関係にある。

次に、本遺跡と重要なかかわりあいのあると考えられる国府について述べる。肥後国府については数説あり、必ずしも所在、年代等について定説をみない。松本雅明氏は、益城（城南町舞ノ原）→託麻（熊本市出水町本村）→飽田（熊本市二本木町）と国府の遷移過程を説明している。[注5] それによると、肥後で初めての国府（白鳳期？）の位置は、本遺跡の東700m～800mの至近の地である。その定立された松本説に対して、木下良氏は異説を唱えている。[注6] それによると国府の変遷の過程を、託麻→益城→飽田というように考定している。また益城国府の位置も松本説と違いをみせ、城南町宮地（舞ノ原台地の西端）に推定地を求めている。この場所は、今回調査地の東約1.5kmの同一台地上である。「和名抄」に記録された益城万国志岐府の存在は、沈目立山遺跡の性格を考える上のモーメントとして重視される。

沈目立山遺跡の一般的層序についてまとめておくことにする。それは、遺跡における遺物の包含状態を知る上に有効で、同時に遺跡の性格を知る上に重要であるからである。第3図は、地質の専門家による火山灰土壌の対比図[注7]である。この中で「沈目東」としてあるのは、いわゆる九州縦貫自動車道建設に先立って調査された沈目遺跡である。同一台地上の沈目立山遺跡は、ほぼ同様の土壌組成をしていると考えてよかろう。第4図の断面図はNo.28の西側の土層図で、また第5図はNo.21付近の西側の土層図である。これによると土層にかなりの乱れがみられ、20cm前後の耕作土（表土）、ついで第Ⅱ層は約20cmの層厚を示し、No.28付近では第Ⅱ層が2層に分離できる。この層は主として弥生以降の遺物包含層とみられ、青磁、布目瓦もこの層の上部から出土する。第Ⅲ層の火山灰沖積層をはさんで縄文晩期の土器が出土することは、他の各遺跡において経験するところである。第Ⅲ層下部は縄文土器や石器の包含層で、第Ⅳ層との界面は不鮮明である。第Ⅰ層の黒色土は第Ⅱ層ほどの黒味はなく、むしろ暗褐色を呈する。第Ⅴ層は層中に軽石や火山ガラスを含み、層が縦にクラックを生ずる。この層からいまのところ、文化的遺物は出土していない。

（緒方）

注1　熊本県文化財調査報告第16集「塚原」　熊本県教育委員会　1975

注2　熊本県文化財調査報告第13集「沈目」　熊本県教育委員会　1974

注3　「沈目奥野遺跡」　沈目奥野遺跡調査団　1975

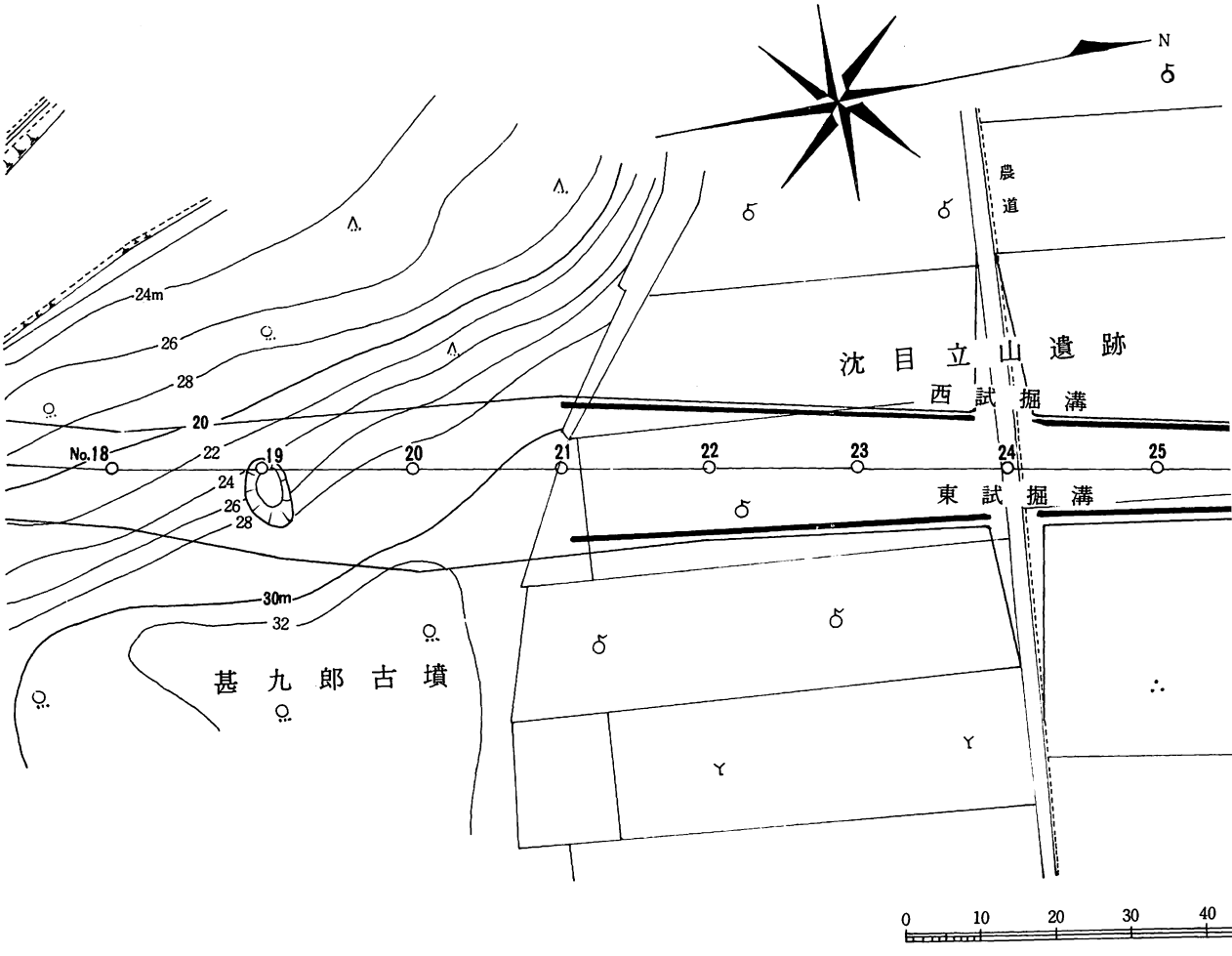
注4　熊本県文化財調査報告第15集「江津湖苗代津遺跡」　熊本県教育委員会　1974

「熊本市東部地区文化財調査報告書」　熊本市教育委員会　昭和48年などを参照のこと。

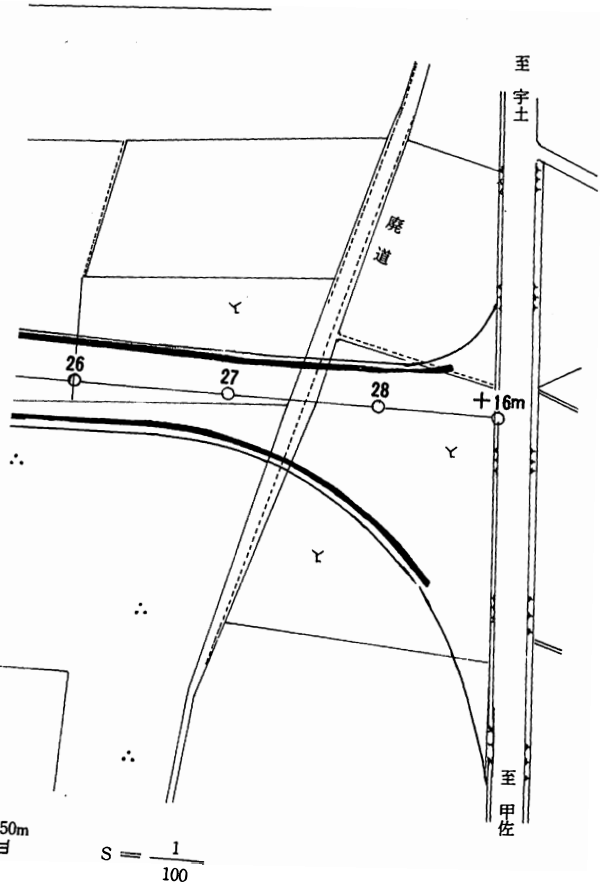
注5　松本雅明編「城南町史」　昭和40年

注6　木下良「肥後国府の変遷について」　古代文化27巻9号　昭和50年

注7　籾倉克幹「塚原周辺の地形地質」―（熊本県文化財調査報告第16集「塚原」付論）1975参照



第2図　沈目立山遺跡全体図


至
宇土
廃
道
26
27
28
+16m
至
甲佐
50m
S = 1/100

3．沈目立山遺跡の試掘[注1]

(1) 試掘調査の目的

県道宇土甲佐線道路改良工事現場（城南町沈目地内）の舞ノ原台地は隣接地に沈目遺跡があり、また従来この地域一帯から縄文土器、須恵器、土師器などの土器片が採集されていて、道路建設予定地のNo.20～No.28＋16m の台地上は遺跡であることが考えられる。この調査対象地域[注2]はおよそ2700m²に達する広大な面積である。そこで本調査に先立って現地の試掘調査を実施しさらに詳しく遺跡の規模範囲を確認、それにより本調査のための資料を得る。

(2) 調査の概要

調査期日

昭和50年12月１日～昭和50年12月25日までの間

調査担当者　　緒方　勉

調査

調査は、舞ノ原台地上のNo.21より既設の県道宇土甲佐線の接点No.28＋16m の間を試掘することにした。試掘にあたり幅約10m の新設県道の両側にそって、バックフォーを使用して試掘溝を設けた。そして、各試掘溝の土層断面の観察により、この域内における遺跡の存否、遺構の状態を推定するための資料を得る。

土層層位　この一帯は火山灰台地である。地点により多少の違いはあっても、大要において変りはない。No.25付近の土層は第Ⅰ層耕作土で約23cm、現代の耕作土で常時耕起反転される土層である。第Ⅱ層は黒色土で漆黒色を呈する。この層の粒度は小さく、第Ⅰ層下の約12cmである。この層はまた本遺跡における主な遺物包含層である。第Ⅲ層は第Ⅱ層の下約30cmで黄褐色土層である。この層は他の地域では縄文土器の包含層であることが知られている。第Ⅳ層は第Ⅲ層下の約25cmである。この層は第Ⅲ層より幾分暗色の暗褐色である。第Ⅴ層は比較的粒度の大きい軽石を含んだ火山灰土で、上面が地表から約90cmの深さである。この層はおよそ１万年以前の土層であることが判明しており、今までのところ文化層は確認されていない。第Ⅵ層以下は明らかでないが、他の地域からして粘土層、また第Ⅶ層は砂礫層であるものとみられる。

各試掘溝の状態

試掘溝は道路計画線にそって両側の東西トレンチを設けた。それを便宜的に東側のトレンチを東トレンチ、西側のを西トレンチとする。トレンチの土層の状況は以下のとおりである。

東トレンチ

No.21～No.22　この間の遺物は少なく、わずかにNo.21＋10m付近の黒土層より土師器が発見された。また顕著な遺構はないものとみられる。

No.22～No.23　この間も遺物は少なかった。西側壁には黒土層の落ち込みがあり、これは幅5.5m、深さ70cm、断面U字形の溝様の遺構である。この中には礫が混入していた。

No.23～No.24　この区間は土器の出土が多くNo.23＋10m付近が最も多かった。西壁面No.23＋2mあたりにはピットが観察された。この一帯には住居址のあることが考えられる。

No.24～No.25　農道をはさんで北側のNo.24＋12m、No.24＋13.5m（幅1m、深さ65cm）の東壁面、No.24＋15m（幅85cm、深さ75cm）の側壁面に黒土層より落ち込むピットが発見された。この溝様の遺構から土師器、須恵器の破片が検出された。

No.25～No.26　No.25＋4m付近に黒土層より落ち込む幅35cm、深さ65cmのピットが、またNo.25＋10m付近には幅2mにわたる溝様の断面が東壁面に観察された。

No.26～No.27　No.26＋5m付近の東壁面に幅40cm、深さ1m位のピットが、またこの付近の黒土層には点々と土器片が包含されており、焼土も少量発見された。

No.27～No.28　No.27＋5m位のところには幅1.5m位の溝が東西にはしる。この溝はさらに東西方向に伸びる。この区間はピット断面が点々と土層断面に現われており、遺構分布の濃密なことを示している。

西トレンチ

No.21～No.22　No.21＋4m位の東壁面には地表約60cmのところの黒土層に板付式土器が発見された。この土器片は板付Ⅱの甕とみられ、刻み目をもった二条の凸帯がある。周辺に板付式の遺構のあることも考えられよう。またNo.21＋10mには幅43cm、深さ50cmのピットが観察された。

No.22～No.23　この区間には遺物が少ない。わずかにNo.22＋4mの地表下60cmの黒土層に土師片が発見された。

No.23～No.24　この区間には遺構が顕著で、遺物が多い。No.23＋1mのあたりに幅40cm、深さ25cmのピットが、またこの区間には逆カマボコ形の緩くカーブをした溝様の落ち込みがあり、それは深さ約80cm、幅6mにおよぶものである。この溝様の落ち込みの中から土師の甕が出土している。

No.24～No.25　この区間は比較的遺物は少ない。No.24＋17.5m付近から土師片が出土した。

No.25～No.26　No.25＋2mのところに焼土が、また焼土はNo.25＋7mの東壁断面でも確認された。No.25＋16.5mには断面V字形の溝が発見された。この溝は幅4m、深さ1.5m位である（底未確認）。またNo.25＋18mの付近の断面両側には焼土が発見された。地表下約1mには硬い面があり、その状態から住居址とみられる。

No.26～No.27　No.26＋7m付近の地表下60cmのあたりに人頭大の石が発見された。また同様の

石がNo.27＋０の付近にも発見されている。これらの石は、火山灰土中に自然礫として存在しないところから、当然遺構に結びつくものとみられる。

No.27～No.28　No.27＋24mの付近には焼土が多量に出土した。焼土は地表下40cm～80cmの間の約40cmの厚みに堆積していて、一帯は赤変している。これは住居址に関連した遺物とみられる。

出土遺物（別図）[注3]

縄文土器　１がそれで小破片である。器面には刺突連点文がある。２は黒色磨研土器で縄文晩期の土器である。

弥生式土器　４～７は弥生前期の板付Ⅱ式土器である。いずれも甕で、口縁部に一条ないし二条の凸帯がめぐる。凸帯にはいずれも刻み目が付されている。３は高坏の底部とみられ、前記の甕と共伴することが考えられる。８は黒髪式土器の甕破片で口縁の一部である。これは弥生中期である。

土師式土器　９～26が土師式土器である。このうち９～11が甕形土器で、12以下が坏形土器である。坏には篦切りによる平底の12、15～18と19以下の高台を付すものがある。これらの土師器はその形態から平安期のものとみられる。トレンチにおける遺物出土状態からこの一帯には、平安期の住居址群のあることが考えられる。

須恵器　27、28が須恵器で、27が大形甕、28は坏蓋の破片である。このうち坏は新しい様相を示し、前記の土師器と共伴することが考えられる。

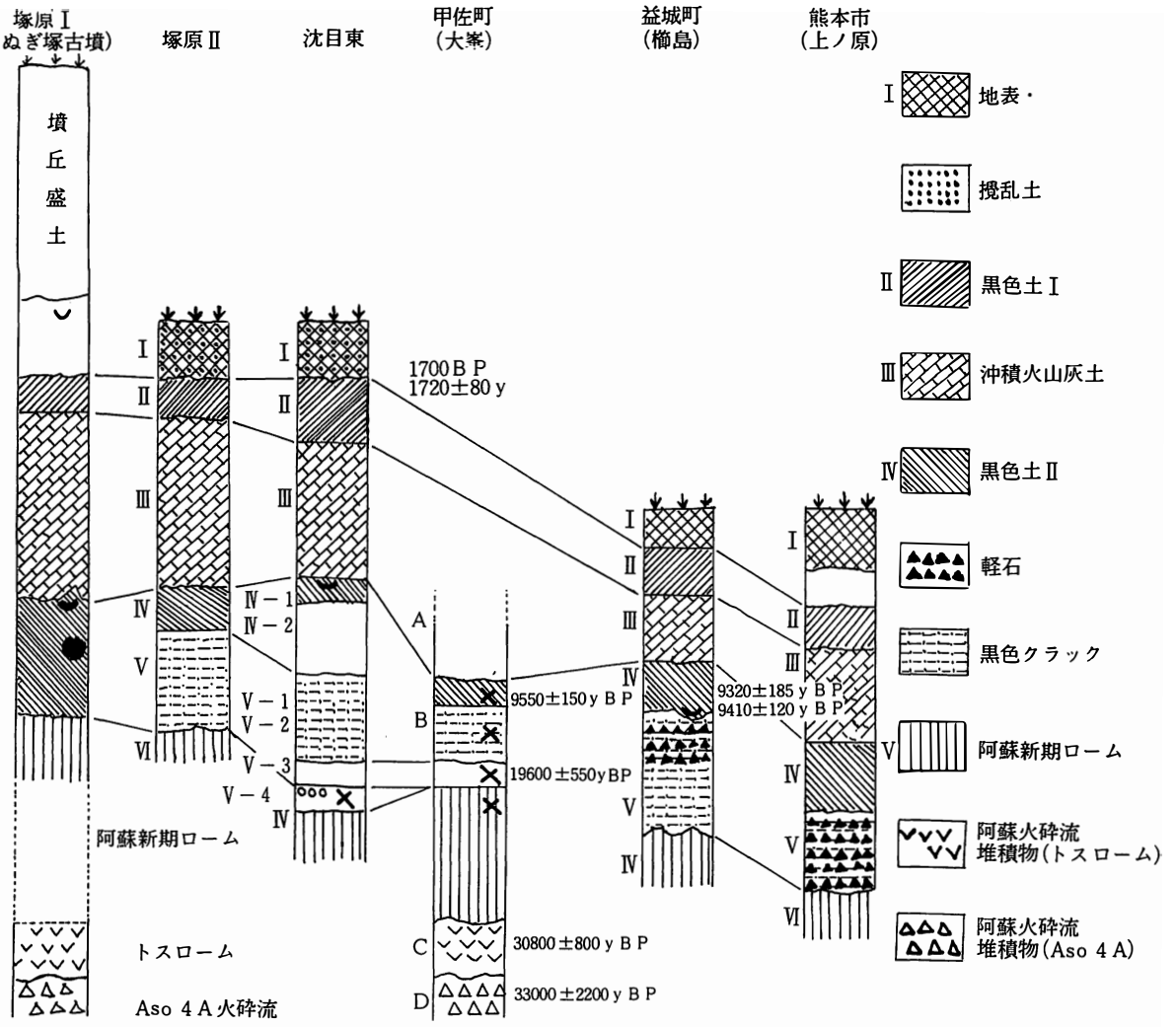
調査についての所見

No.21～No.28まで県道予定地の東・西トレンチの試掘の結果より遺跡の分布範囲を推定すれば遺構はほぼ全域に拡がっていることが考えられる。なかでもNo.23～No.28＋16mの間に濃密に遺構が存在し、遺物の出土状況から平安期の住居址群が存在することが考えられ、全域にわたって本調査を実施する必要がある。　（緒方）

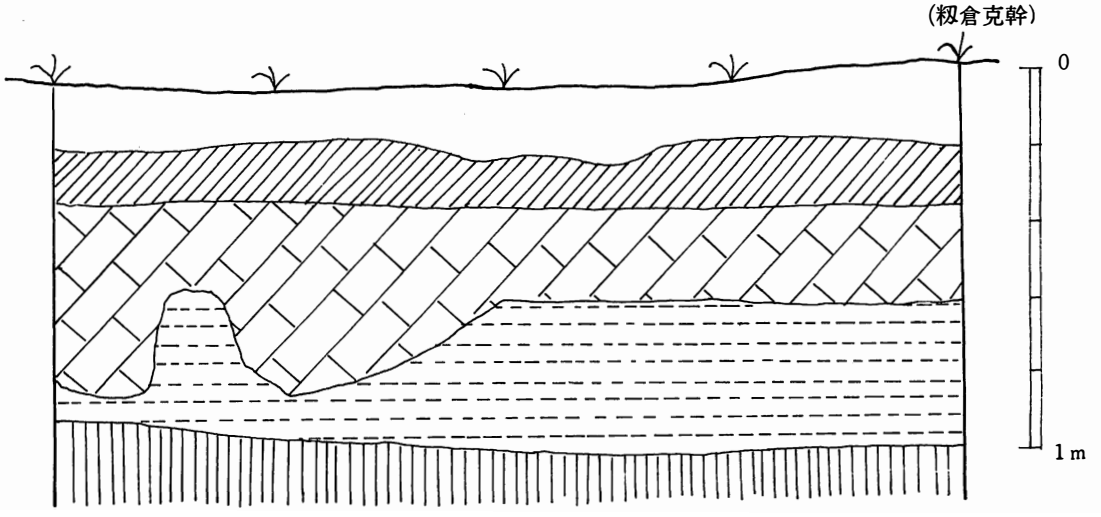
注１　これは昭和51年１月14日、県土木部への報告である。

注２　道路計画のNo.で、１区間が20mとしてある。「沈目立山遺跡全体図」参照、以下同様。

注３　「別図」は省略する。



第３図　熊本周辺沖積火山灰土壌対比図



—No.21付近甕棺墓西側断面—

第４図　沈目立山遺跡土層図

Ⅱ 調　　査

1　調査の経過

いよいよ調査である。これから２ケ年度にわたっての調査が始まる。行政的な諸手続きをすまして２月９日にいたり、現地調査にはいることになった。昭和50年度、51年度にわけて調査の経過を調査日誌より抄出すれば、次のとおりである。

(1)　昭和50年度調査（調査日数延42日）

2月9日　現地に２間×２間の現場小屋を建設、まず調査資材を保管する場を確保した。

2月10日　調査資材を搬入、作業員の確保に努める。さらに、ともかく問題をおこし易い境界確認を実施、草を払い範囲を明確にした。

2月12日　大型土木機械であるバックフォーを搬入、調査域内に排土のためのトラック運搬路をつくる。本事業が道路の改良工事であるため、幅10m前後で帯状に長く、全域を調査するには排土を調査域外に搬出する必要がある。そこで、２月13日にはダンプカーを入れ、北側より南の調査域外へ搬出した。調査地域の北側一帯は桑園であるが、みるみるうちに表土が剝ぎ取られる。桑の作条の間には間作として植えられた牛蒡、その掘り込みのあとが幾条もみえる。難しい調査になりそうである。大型機械を駆使した排土は効果的で、表土を持ち去られた黒々とした大地が顔を出す。早くも焼土が現われる。土器片、須恵・土師器が大部分で、試掘などで予察のとおり平安期頃のものらしい。

数日間は排土と併行して、桑の根切り作業が続く。２月19日には、排土も道路計画標示のNo.25のあたりまで終了する。本年度分の表土剝ぎはこれで終り、No.25以南は明年の作業区となる。

2月23日　道路がほぼ南北に計画されているところから、道路の中心線を基準にして調査を進めることにした。表土の排除、桑の抜根、根切りをしたあとを削る。黒土の面に、さらに黒い円または不正円形のピットが現われ始める。当分は遺構、ピット探しになりそうである。

2月25日　久しぶりの強霜、まだ早春である。溝が発見される。23日には南北方向の２号溝、続いて今日東西溝一条がNo.

号溝とした。27日にはNo.28の南一帯の黒土層下約10cmほどに下げる。しかし、攪乱の多いせいかピットなどの遺構は発見されなかった。ただ、この層には遺物が多く、なかには布目瓦もみえる。２号溝の発掘にかかる。幅80cm、深さ80cm位のＵ字溝で、層中より発見される土器片も多い。層は上下ほとんど単一である。

2月28日　あたかも春の嵐であろう。春一番が吹きあれる。作業は前日に引き続き発掘作業を進める。

3月1日　月が改まるが、早春の風はまだ冷たい。梅は盛りを過ぎ沈丁花、椿と季節の変化はめまぐるしい。2号溝の発掘を続ける。また1号溝も断面を残して発掘にかかる。

3月4日　みぞれ、強霜と寒い日が続く。1号溝を発掘、土層断面の写真をとる。No.28付近の黒土層の発掘、併行してピットの実測をする。

3月5日　今日は啓蟄。発掘、実測と忙殺される。陽気も日毎に暖かくなる。

3月8日　1号、2号の各溝の発掘を続ける。No.27付近のピット中から石鏃が出土する。9日には1号溝の発掘もほぼ完了。これは溝というより、むしろ水溜状である。

3月12日　1号溝の50分の1図を作る。No.27～No.28付近のピット掘り、本日また布目瓦が発掘される。

3月13日　No.26～No.27の西側に溝様の遺構が現われる。この中には柱穴状のピットが多数存在する。15日もピット掘りが続く。

3月16日　溝様遺構の発掘が進む。須恵・土師器などの破片も遺構中より出土する。溝様遺構の中から点々とピットが現われる。ともかく性格の知れない遺構である。ピットの中の一つは、その中にタニシをつめており、かなりの量が発見された。溝様遺構は2号溝の下にもぐっていて、相対的時間の差は、前者が古いことは言うまでもない。

3月22日　ピット掘り、そして実測、測量と忙しい日々が続く。今年度はともかく、10日足らずの日数で終わらざるを得ない。51年度当初からの調査の継続は手続き上無理で、50年度の現場の締め括りをしなくてはならない。単調で心急ぐ毎日である。25日には溝様遺構の発掘を急ぐ。また1号溝は20分の1図を作る。

3月29日　雨の間隙をぬって測量を強行する。期日が迫り、遺跡を長期に放置はできない。

3月30日　雨のち晴れ、なんとか晴れである。残りの測量、実測を実施した。4月は当初から川を隔てた塚原台地の遺跡確認調査が待っている。ともかく調査を一時中断することになった。

(2) 昭和51年度調査（調査日数延64日）

塚原古墳群の遺跡確認調査も終わり、沈目遺跡の調査を再開することになった。梅雨を過ごし、梅雨あけの大気はさわやかである。行政的な諸手続きを済ませ、8月9日には再び現地調査に入ることになった。

8月9日　熟耕地の調査予定地は全域雑草に覆われ、草の根の逞しさを知らされる。草刈りに数日を要するものとみられる。マムシ、蜂と思わぬ伏兵も現われ、草刈り中に蜂にやられる人が出た。

8月19日　草刈りをする一方、甚九郎山古墳の精密測量にはいる。23日にはバックフォーとダンプカーを入れ、再び表土剝ぎを始める。午後には2度の夕立ちに見舞われ、ダンプカーが浮き上がった新土の上にスリップ、暫々作業を中断する。併行して古墳のコンター入れをする。

8月25日　表土剝ぎが続く。新土のかおりのする一帯には遺物が散見される。ことにNo.23の北よりには焼土が、そしてカキ殻を詰めたピットが見える。27日から桑の根切り作業を始めた。

8月30日　No.24～No.25のあたりの遺構、ピット探しをする。No.21～No.22の間の表土剝ぎを行う。ことに、東よりの部分には土器片が多い。なかに弥生式土器（壺形）がまとまって発見され後でこれが弥生前期の甕棺基ということが判明する。

9月8日　甚九郎山古墳の測量（コンター）、実測、ピット掘りと連日忙しい日が続く。No.24の南側には多数のピットが現われ、遺物の状態から古代の住居址があるらしい。柱穴が輻奏して配列が捉えにくい。

9月14日　発掘作業は続く。No.23～No.24の間のピット掘りを進める。No.23付近に小判形プランの遺構が発見され、出土土器からみて弥生前期の住居址ではないかと考えられる。この遺構の全容を知るには、東側をもう少し拡張する必要がある。

9月27日　No.22とNo.23の間に東西方向の道路様遺構がみつかる。幅1mたらずで、上面は堅く締り、その状況から道ではないかと判断される。引き続きピット群の実測。本日でNo.24より北側の実測を終る。

9月28日　道路が甚九郎山古墳の墳丘をかすめる形で計画されているため、古墳の周溝が発見される可能性がある。そこで古墳の西側に数条のトレンチを入れ、周溝の有無の探索に努める。また先日発見の住居址発掘を急ぐ。

9月30日　甚九郎山古墳には周溝がまわることが確実になる。そこで、工事にかかる部分を全掘する必要がでてきた。No.22周辺より南にはスラッグ、縄文土器、甕棺と遺物の量も多く、調査にはかなり時間と手間がかかりそうである。

10月1日　月が替り、工事請負業者の出入りも多くなる。時間的に第Ⅲ層以下の発掘は無理と思われるが、No.28付近の焼土は無視できない。縄文期の炉穴と考えられるこの焼土と、周辺を探索する必要がある。そこで、この一帯を掘り下げることにした。本日早くも第Ⅲ層中からチャートの礫器など発見された。No.23付近の実測および甕棺周辺の表土剝ぎをする。

10月4日　調査も大詰めで、本日より村井眞輝技師の援助を受ける。慢性的調査員不足。1名増加により大助かりである。

10月7日　甕棺がつぎつぎと現われる。全般的に保存は悪く、大部分破砕されているらしい。甕棺の形態は個性的で、口縁に刻み目をもった壺、突帯を三条、あるいは四条をめぐらしたものなどがある。甕棺基の全容を知るには東側、南側を掘り広げる必要がある。群として捉

えることにより、遺跡の価値が倍加するからである。

10月 8日　今日は二十四季の一つの甘露ということで、そのせいかうすら寒い。盛夏に始めた調査もようやく季節を感じるようになる。引き続き炉穴周辺、甕棺の調査を急ぐ。

10月13日　古墳の周溝のトレンチの断面実測。本日は、大阪大学理学部の川井研究室の各氏により熱残留磁気測定のため資料採集。

10月15日　甚九郎山古墳周溝部トレンチ断面の実測を急ぐ。住居址の実測。それによれば3.5m×2.3m位の小判形のプランで、東側は新しい別の遺構による攪乱があることが知れる。

10月19日　甕棺、古墳周構の全域調査のため表土剝ぎを急ぐ。住居址、炉穴の実測、発掘、写真撮影と繁忙な日々が続く。

10月25日　甕棺周辺の発掘、各甕棺の露出を急ぐ。

10月26日　前日に引き続き甕棺の発掘、そして清掃、甕棺群の全体写真を撮る。また甚九郎山古墳の周溝のプラン検出を急ぐ。

10月29日　前日、古墳周溝を20cmコンターにして測量、続いて本日は溝の発掘に取りかかる。周溝中よりフイゴの羽口の破片が出土する。この羽口は、No.22付近のスラッグとの関連が考慮されよう。3号、5号の甕棺の実測。

11月 1日　3、4、5号の甕棺の実測。3号棺は甕、壺の合口甕らしい。

11月 4日　古墳周溝の発掘が進む。溝中に小ピットが存在し、問題を投げ掛ける。甕棺の発掘実測を急ぐ。3号棺周辺には縄文土器（後期）が多量に散乱し、また土師・須恵器およびスラッグも少量出土する。

11月 8日　甕棺発掘作業、実測を続ける。No.22の南側には大小の礫を集めた集石遺構がある。その実測に取りかかる。

11月16日　引き続き甕棺の実測、発掘あるいは取り上げとめまぐるしい作業が続く。甕棺の中でも比較的保存がよい7号棺に注意が注がれる。口縁部の変った四条の突帯は、何か、発掘者に暗示するものがあるようである。甕棺の中から副葬品が出た。丸玉で、径1cm余のめのう質の玉である。玉は確実に棺底にあって、鈍い光彩を放っている。

11月24日　霜月も下旬となれば結氷をみるようになる。甕棺も1号棺も取り上げ終り、調査の見通しがつくようになる。甕棺の中には12号棺のように、相当深く埋まっているものもある。そこで念のため、掘り残しのないように、全面20cm位づつ掘り下げることにした。

11月25日　結氷の寒い朝である。発掘作業は続く。小壺の破片が発見される。図を突き合わせることにより、それが何号棺の近くであるかが知れる。甕棺地帯、群の西側少し離れて、縄文土器が埋没していることが判明。層位的に第Ⅲ層に掘り込まれていて、小形の完形土器らしい。平底で、薄手の撚り糸文土器である。また、その近くには同一層位に、塞ノ神式土器も顔を出してきた。

11月26日　いよいよ調査も大詰めが近づいた。集石遺構の南側に、スラッグを出す遺構のあることが知れる。この掘り込みの中には、スラッグのほか土器片、木炭、鍛鉄によるとみられる鉄片がある。同様の掘り込みは2ケ所にみられた。

11月30日　強霜により、萬象一時に枯るの感あり。大詰めで残りの実測を急ぐ。製鉄関連遺構も発掘、実測を完了。8月の酷暑の頃に始めた2年度目の調査も終り、明日は現場を畳んで引き揚げることになる。

以上のように、昭和50・51の両年にわたる調査で、50年度分調査費111万2838円、51年度分調査費314万7130円、総額433万9968円の調査費を必要とした。　（緒方）

2　遺構および遺物

(1)　縄文時代

縄文期の遺構については、時間的制約等により充分な調査ができなかった。先に土層層位の項で述べたごとく、この地域では第Ⅲ層が縄文期の主たる遺物包含層である。ほぼ全域にわたって歴史時代の遺構・遺物に覆われていることから、第Ⅲ層の調査には改めて相当の時間的ゆとりを必要とする。しかるに、試掘により縄文の遺物・遺構についての手応えは充分である。ことにNo.28付近の西トレンチには、強烈・鮮明な焼土が印象的であった。そこで、頃合いをみて調査を実施した。

炉穴とその周辺（第５図）

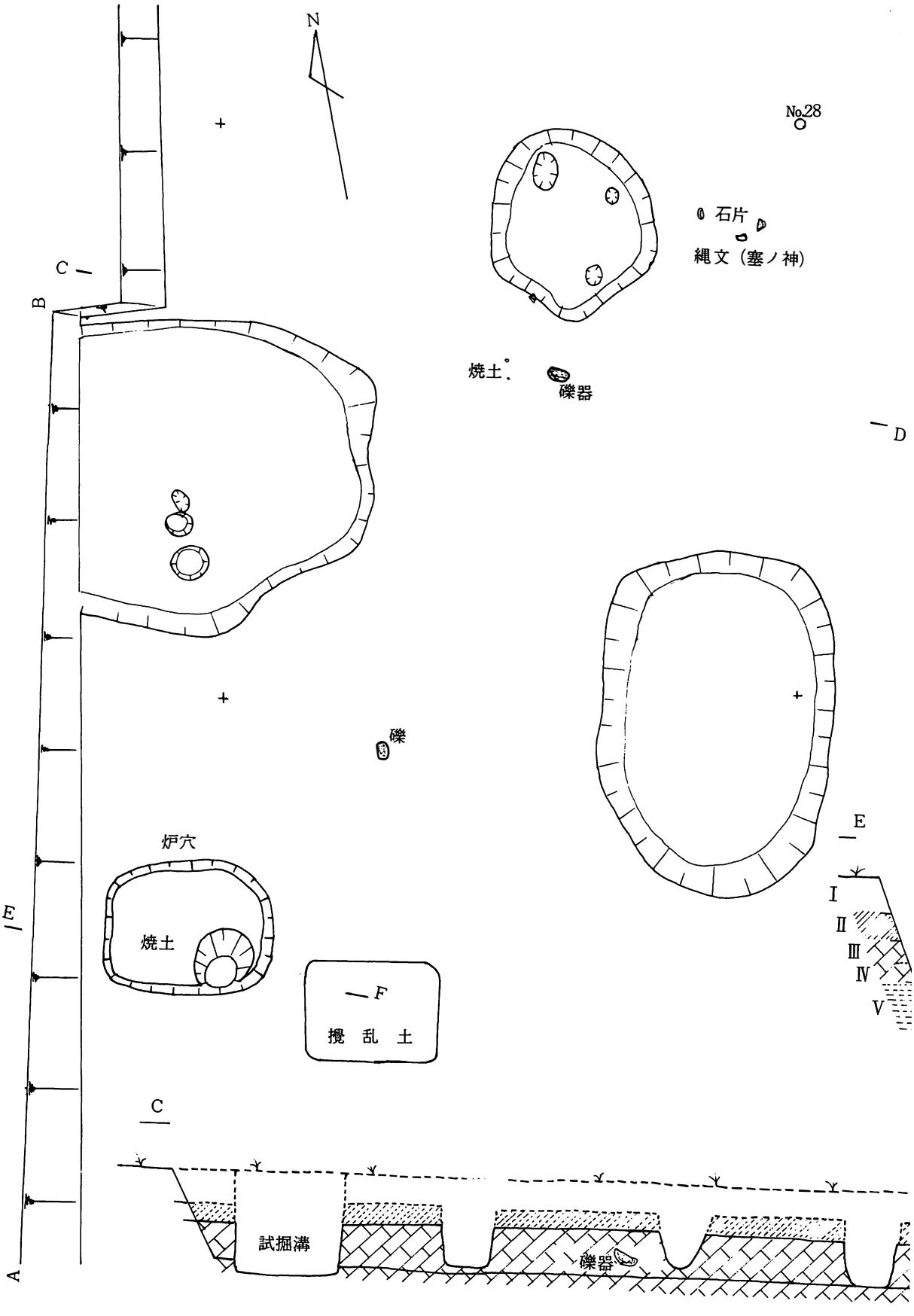
No.28付近の西トレンチで発見された焼土は、調査の結果炉穴とみられるに至った。炉穴は第Ⅳ層、地表から約70cmのあたりから落ち込み、東西１ｍ20cm、南北90cmの楕円形に近い形をしている。炉底は強く灼け、焼土が約20cm詰まっていた。焼土を掘り進めると、炉穴の南東隅に落ち込みがあり、炉底よりさらに約40cm円錐形に掘り込まれている。炉穴の中には焼土と少量の木炭片が発見されたが、土器などの文化的遺物はなかった。

このようなことから、炉穴周辺を発掘することにした。６×10ｍの範囲を、第Ⅱ層（黒色土）の発掘後数回にわけて掘り下げた。その際、第Ⅲ層の下部にいたり礫、石片、石器、土器および焼土が発見された。焼土の出土はこのあたり（層位）が、ある時期の生活面であったことを示している。炉穴の周辺から土壙が発見されたが、掘り込みが曖昧で、調査に時間をかけ工夫を凝らす必要がある。図示した３個の土壙は参考に止めたい。第５図東端近くの黄色土（60×50cm）は、先年調査した櫛島遺跡に類例がみられる。ほぼ円形、第Ⅳ層面に点々と現われ、鮮明な黄色をしていた。櫛島遺跡[注1]の場合、この中より縄文を施した土器片が出土している。

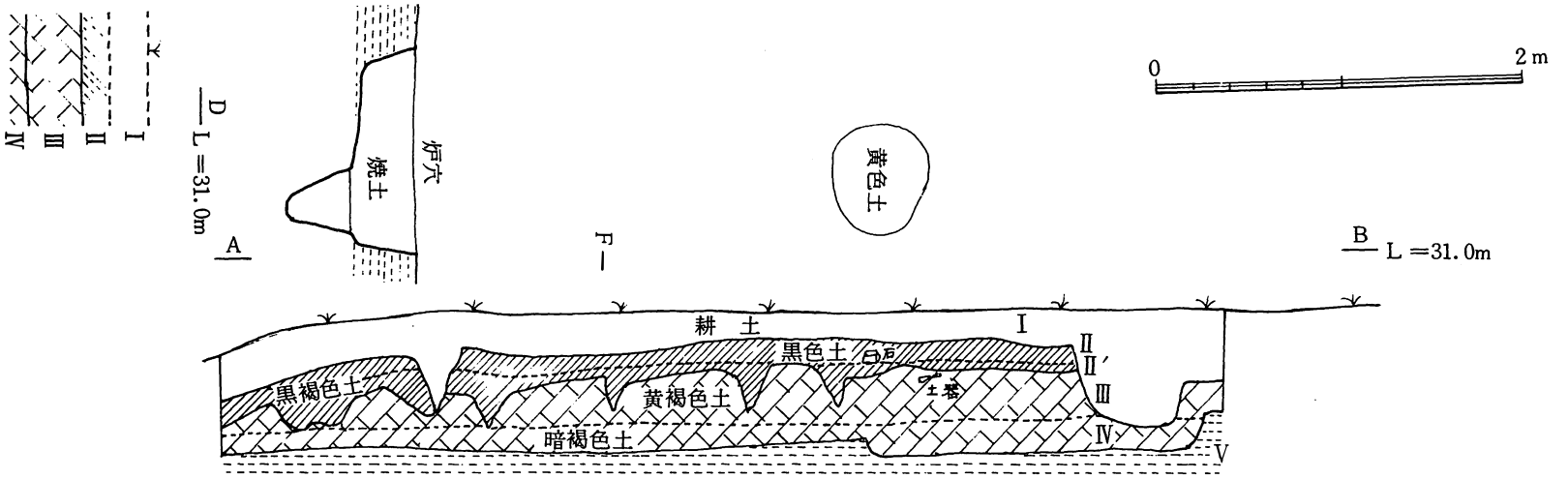
炉穴周辺の出土遺物

石器１点と土器２点が発見されている。石器は第12図ST－1の礫器で、河原石の一端を叩打調整し、刃をつけている。14×7.5×6.5cmで、厚く鈍重な感じのする石器である。原礫面を残し、プレ縄文的石器の技法を強く残している。石質はチャート、No.28の西南約２ｍ、第Ⅲ層下部から出土した。第12図ST－2は表採の石器で、石質に違い（シャールスタイン）があるが、同類の石器とみられる。櫛島遺跡では第Ⅳ層よりシャールスタイン製[注2]の礫器が出土している。

土器の２点は第７図のJ－2とJ－3である。J－2は細片で、文様等を充分観察しにくいが、地文に撚り糸文または縄文が施文されている。その上をさらに沈線文が横走する薄手で、暗褐色の土器である。地表下66cm、黒土（Ⅱ層）下30cm　第Ⅳ層出土である。



第5図　炉穴とその周辺


0
2m
I
II
III
IV
D
L=31.0m
A
焼土
炉穴
F
黄色土
B
L=31.0m
耕土
I
黒色土
白石
II
II'
III
IV
V
黒褐色土
黄褐色土
土器
暗褐色土

J—3もJ—2の近くから発見された。地文に撚り糸文を網目状に絡ませ、その上を数条の沈線が旋転する。黄褐色のこの土器は、地表下約70cmから出土した。この土器は様式的に、塞ノ神式土器であることが考えられる。

炉穴の年代

炉穴の年代を直接知る手掛かりはない。しかし、隣接の地域の同一層から二点の土器が出土したことは先述のとおりである。そこで遺構（炉穴）と遺物（土器）の間に、関連性を求めることも可能なことであろう。

本遺跡出土の縄文土器（第７図～第11図）

第７図～第11図までに図示して73点の土器は、本遺跡出土の主要な縄文土器である。その概要を説明すれば次のとおりである。

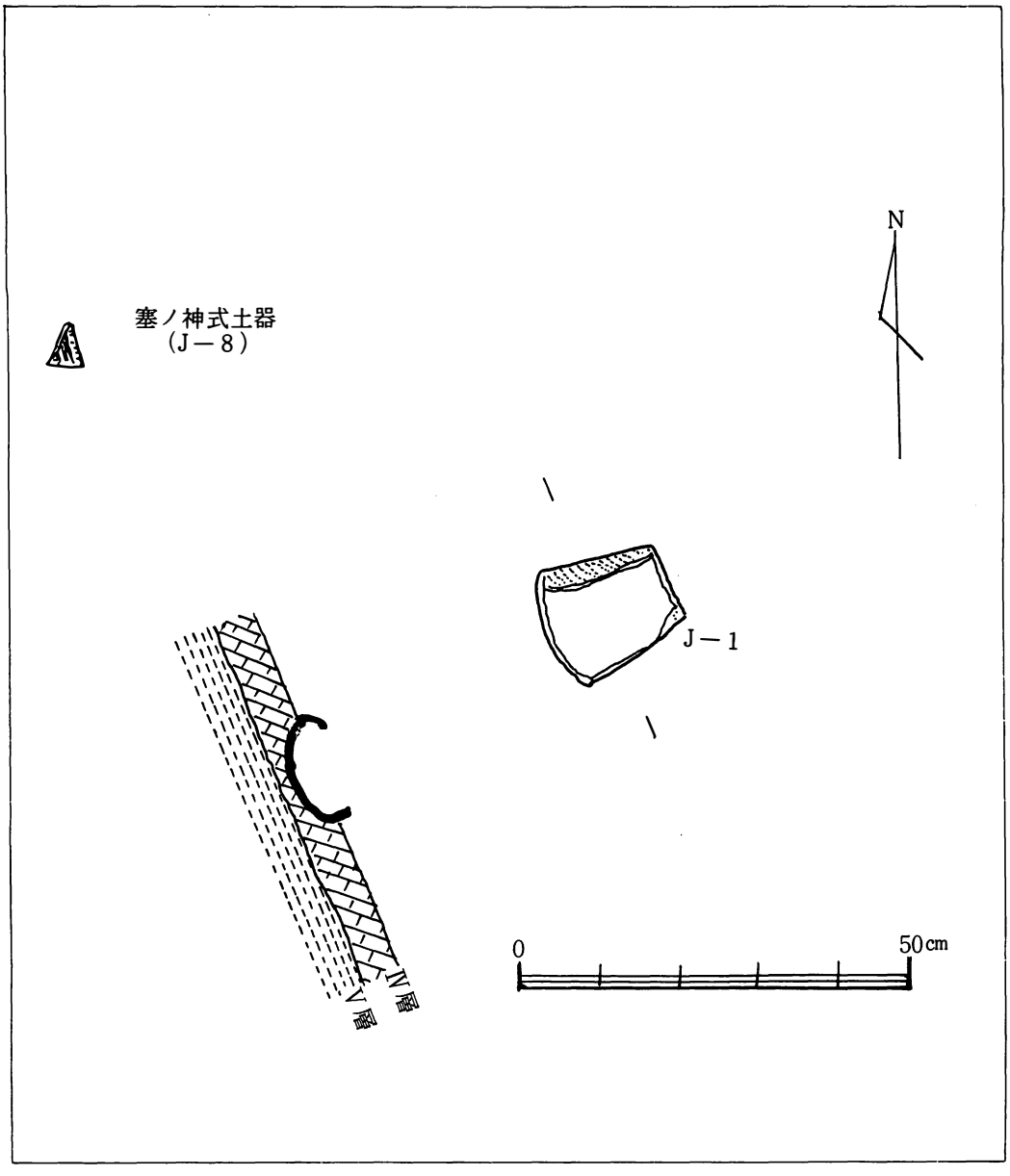
撚り糸文土器　J—1がそれで、甕棺群の西側より出土し、第６図のような出土状態が知れる。土器は横になって埋没していて、第Ⅳ層から出土した。また、同一層の近くからJ—8が出土している。この土器は口縁の一部を欠失しているが、ほぼ完形に近い。底部は平底で緩く外反しながら立ち上がり、口縁になりさらに開く。底より上６cmのあたりまで無文、その上に撚り糸文を施す。薄手の繊維土器で、底径11.5cm、推定高13cmの小形の土器である。この種の土器片は２号甕棺の周辺からも出土している。

塞ノ神式土器　J—3～15は塞ノ神式土器とみられるもので、J—3を除き、No.21～No.22の甕棺群の周辺から出土したものである。このうちJ—4～７は同一個体の破片とみられ、地文に網目状の撚り糸文を、その上に沈線文、連点文を施している。J—8は口縁部の破片で、口唇部に刻み目を押圧している。これはJ—4～７と同一個体の可能性がある。

J—12～14は同一個体とみられる。地文に目の詰まった撚り糸文、その上に沈線文による折線文様が施されている。J—11もこれらと同一個体の可能性がある。

J—9は口縁部で、連点文を２段、その下に二条の沈線、さらにその下に連点文、沈線文をめぐらせている。連点文は拓影のごとく三角形をなして、J—4などの円形の沈線文と大きな違いがある。J—5は口縁の屈曲部の破片で、沈線文が横または斜めにめぐる。破片の状況から小形の土器とみられる。J—10は縄文を地文にした胴部の破片である。外面は粗く横に引きかいだ擦過痕がある。

擦り消し縄文系土器[注3]　擦り消し縄文、貝殻擬縄文の各土器、なかには縄文を省略したものもある。第８図J—16～32、第９図J—33～48、第10図J—49～57、J—60、J—63がこれに相当する。この中で貝殻擬縄文は16～22で23～32、34、38～54、56、60、63は擦り消し縄文、その他には専ら沈線を用い、貝殻擬縄文や擦り消し縄文の手法がみえない。53、63を除き器形は深鉢形で頸部が締まり、口縁が波状になるものが多い。J—20、21、27～34、36、37は口縁部で、29の口



第6図　　撚り糸文土器出土状態

縁は波状口縁の頂端に近い部位である。J—22、35はこれと違った器形が考えられる。J—60は底部で、屈曲部にわずかに文様が知れる。少し上げ底気味の底はよく磨研されている。J—53の屈曲部の膨らみの状態から注口土器になる可能性が強い。またJ—63は破片の状態から高坏ではないかと考えられる。

以上の擦り消し縄文系の各土器は、従来の九州の縄文土器の編年的位置ずけとして、縄文後期とされているものである。

黒色磨研土器　J－58、61、69、73は器面の調整の具合からこれに入る。69は波状に口縁部がうねり、一部に段をなしている。鉢形の器形とみられる。73は小形の土器で黒川式に観念されているものである。これらの土器は一応縄文晩期のものとみられる。

その他の縄文土器　J－59、62、64～68、70～72を一括して取り上げる。59は鉢形土器の高台で、刺突連点文をめぐらし、沈線をあしらい文様を構成している。この種の高台は縄文後期の深鉢にしばしばみるところである。62は口縁部に矢状の文様を構成する。64～68はそれぞれ粗いタッチの器面調整で、64の口縁の肥厚、67には突帯があり、特徴的な器形を形づくっている。これらの土器は縄文後期から晩期の土器である。70は網目文土器である。この種の土器は布痕土器と共に土器製作過程時に必然的に押圧されるもので、かつて鏡山猛氏により組織痕土器[注4]として問題提起したものである。これは縄文晩期のものである。71、72は土器底部で、比較的粗雑な作りで、粗製土器の底かとみられる。

本遺跡出土石器（第12図、第13図）

第12図と13図は沈目立山遺跡発見の石器である。このうち出土層位の明確なのは、すでに述べた炉穴周辺発見の礫器（ST－1）で、大部分は甕棺周辺または採集資料である。破砕された甕棺14号と一緒にST－3、4およびST－7が、８号棺からST－9が発見され、ST－10は、４号棺と集石遺構の周辺にそれぞれ分離して発見された。その他の石器は採集によるものである。このうちST－8は滑石製石鍋の転用による石錘で、歴史時代のものであることは明らかである。甕棺と一緒に出土した各石器は、周辺に縄文の遺物が出土することから、攪乱による混入とみられるのでST－8を除いてここに取り上げることにする。

ST－2はシャールスタイン製の礫器。刃部は交互剝離、原礫面を多く残している。櫛島遺跡の調査例やST－1から考えて、縄文早期のものとみられる。ST－3は蛤刃の磨製石斧で、上部が折損している。石質は蛇紋岩。ST－4は打製石斧、長さ12.5cm、幅4.5cmで短冊状をしている。石質は粗粒砂岩である。ST－5、６はスクレーパーで、刃部に調整が施されている。サヌカイト質の石器である。ST－7は石錘で、薄手の川砂利に両端を加工して石器としている。またこの石器は、6.7cm×5.2cm×1.3cmの砂岩を原石としている。ST－9は打製の石斧で、劈開面から切損している。断面は楕円形の頁岩質の石器である。ST－10は石皿の破片とみられる。全面磨耗し、とくに両面は凹んでいる。この石質は赤褐色の軟質砂岩である。

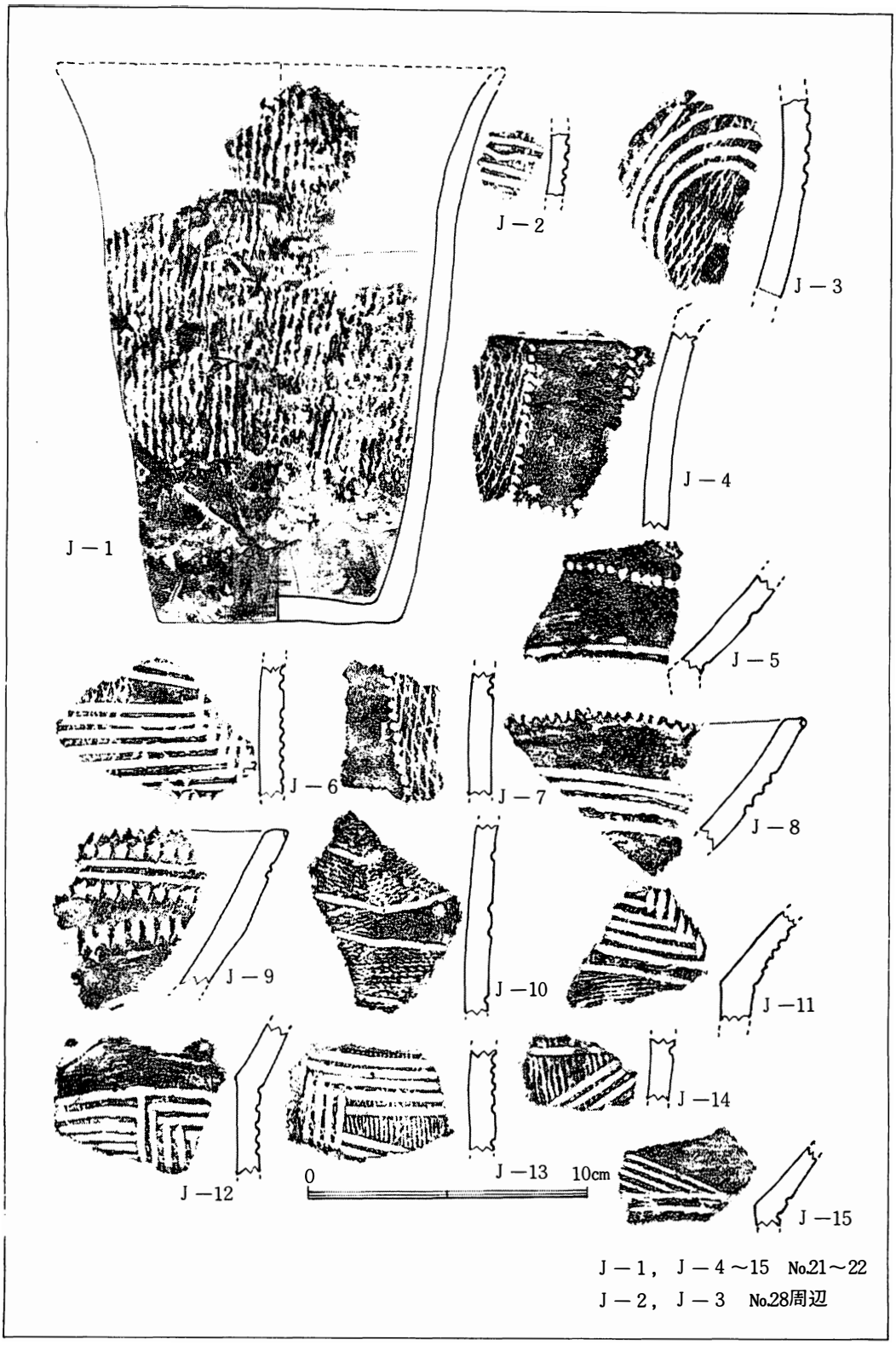
注１　熊本県文化調査財報告第18集「櫛島遺跡」214頁「黄色土について」熊本県教育委員会　1975

注２　熊本県文化財調査報告　第18集「櫛島遺跡」　第42図１～４

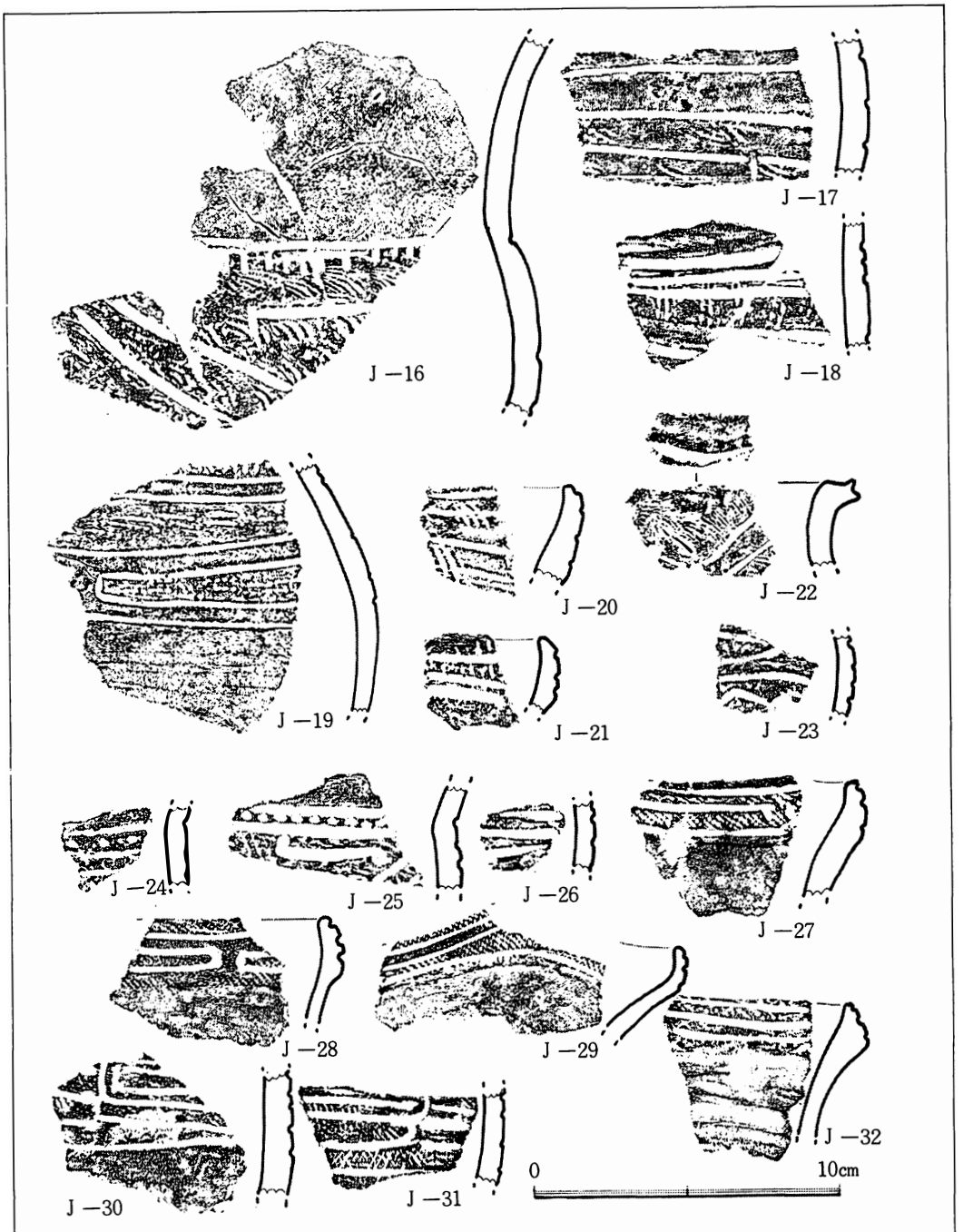
注３　同類の土器は沈目奥野遺跡からも出土している。

「沈目奥野遺跡」　沈目奥野遺跡調査団　1975

注４　鏡山猛「原生期の織布」　史淵第84輯

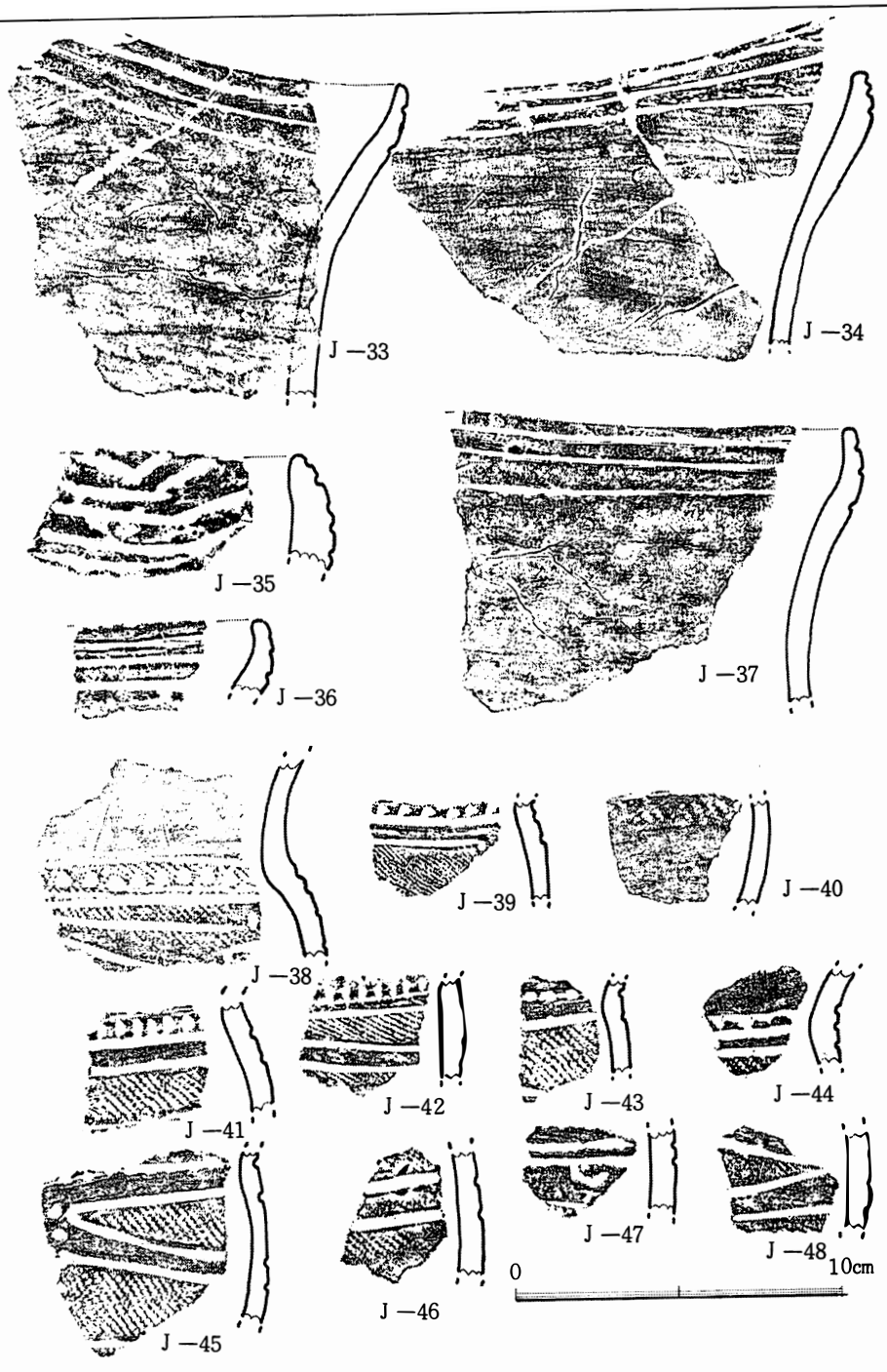


第７図　沈目立山遺跡出土　縄文土器１



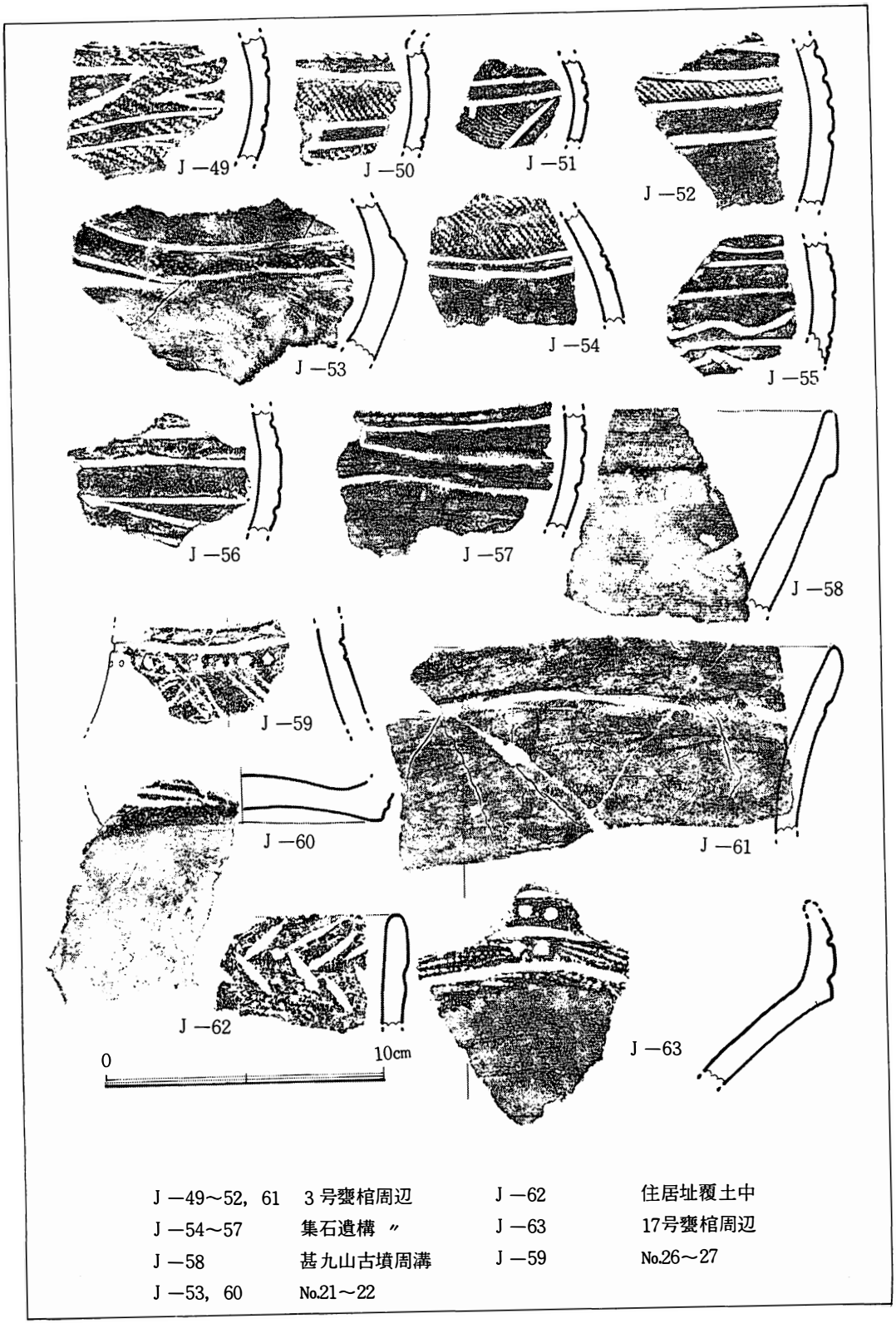
J —16, J —28	3 号甕棺周辺	J —23, 24	住居址覆土中
J —17	1 号〃 周辺	J —22, 26, 32	No.21～22
J —18, 20, 27, 29	集石遺構周辺	J —21	No.22～23
J —19, 25	2 号甕棺周辺	J —30, 31	No.23～24

第 8 図　沈目立山遺跡出土　縄文土器 2



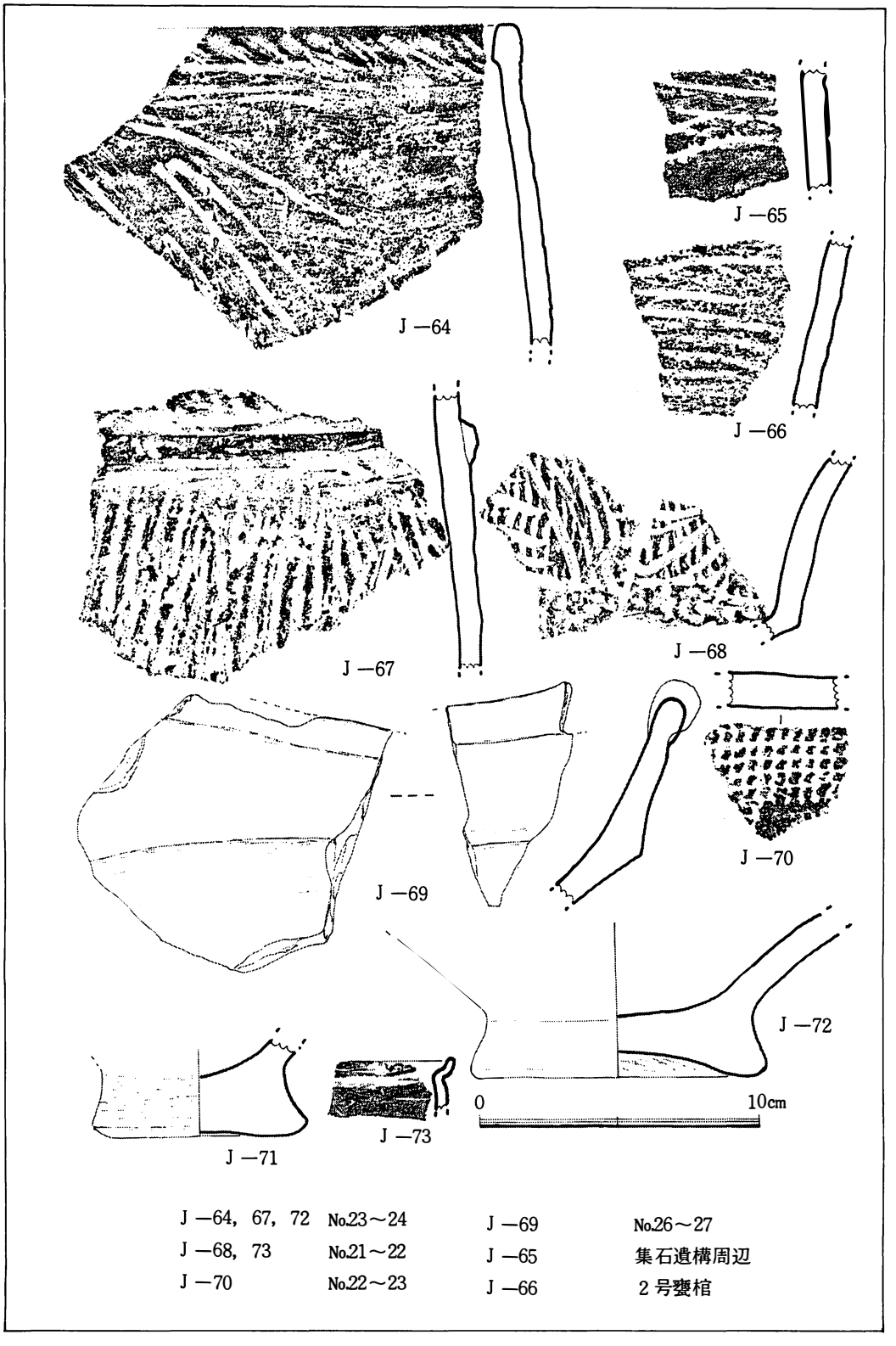
J —33　　2号甕棺
J —34, 36, 37, 39, 41, 48　No.21～22
J —35, 43　集石遺構周辺
J —38, 47　1号甕棺横
J —40, 44　2号　〃
J —42, 45　3号　〃

第9図　沈目立山遺跡出土　縄文土器3



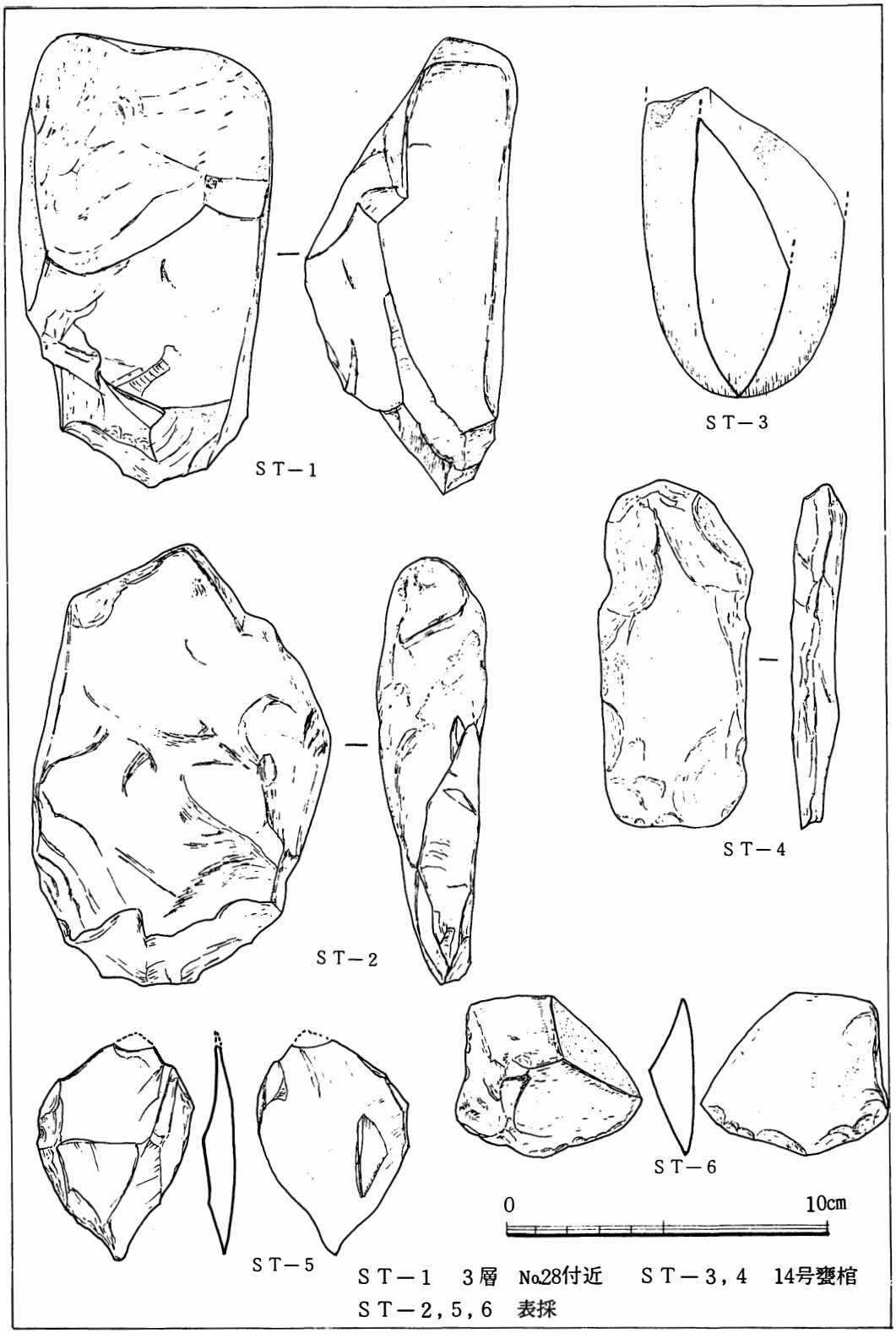
J —49～52，61	3号甕棺周辺	J —62	住居址覆土中
J —54～57	集石遺構 〃	J —63	17号甕棺周辺
J —58	甚九山古墳周溝	J —59	No.26～27
J —53，60	No.21～22		

第10図　沈目立山遺跡出土　縄文土器 4

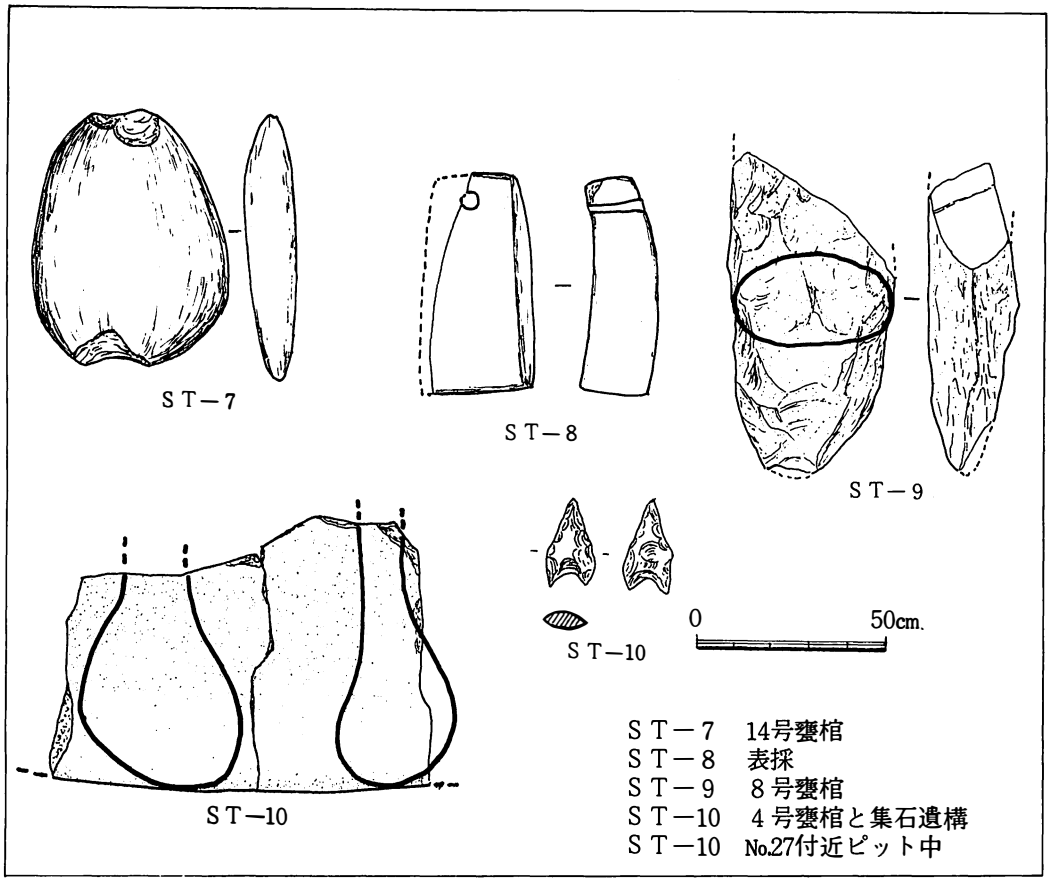


J —64, 67, 72	No.23～24	J —69	No.26～27
J —68, 73	No.21～22	J —65	集石遺構周辺
J —70	No.22～23	J —66	2号甕棺

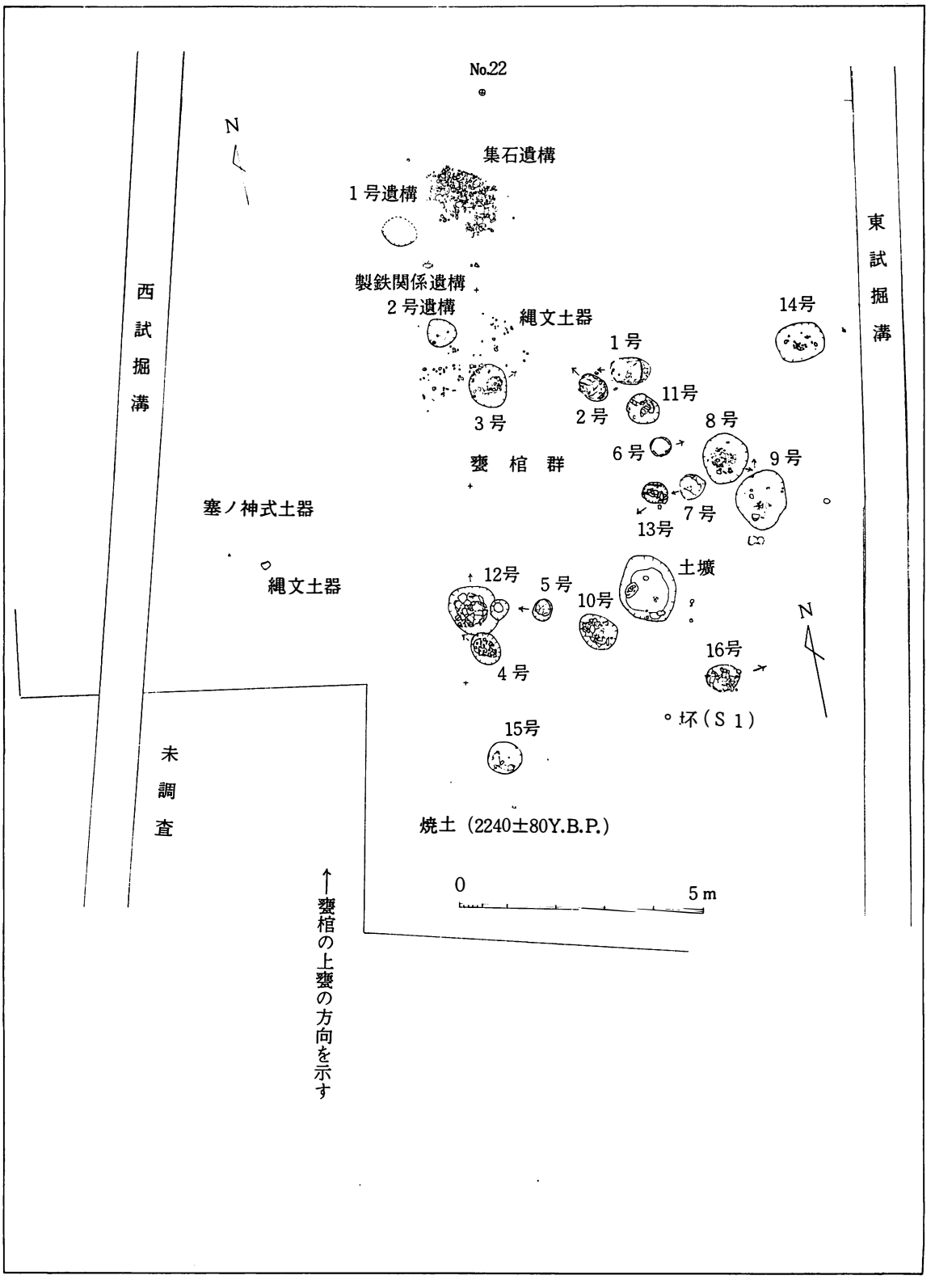
第11図　沈目立山遺跡出土　縄文土器 5



第12図　沈目立山遺跡出土　石器 1



第13図　沈目立山遺跡出土　石器 2



第14図　沈目立山遺跡　甕棺分布図1

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構として、甕棺墓と住居址が発見された。甕棺墓を一つの群として捉えることができたことは一つの収穫である。

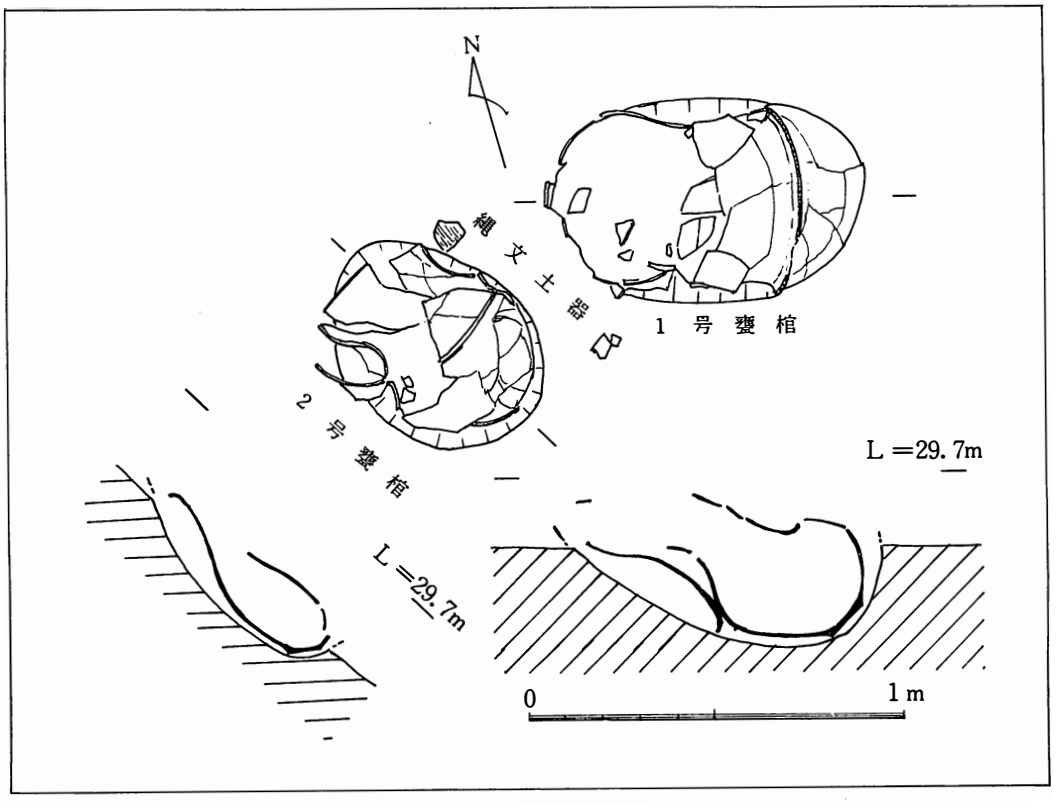
甕棺群（第14図）

甕棺はNo.21の北側一帯から発見された。周辺の状態から、甕棺群が全掘されたものと思われる。甕棺は１号棺より16号棺まで都合16基であった。縄文、弥生、そして歴史時代の遺跡が重複し、ことに戦時中、飛行場建設により上面を削去されたのは破壊を決定的にした。

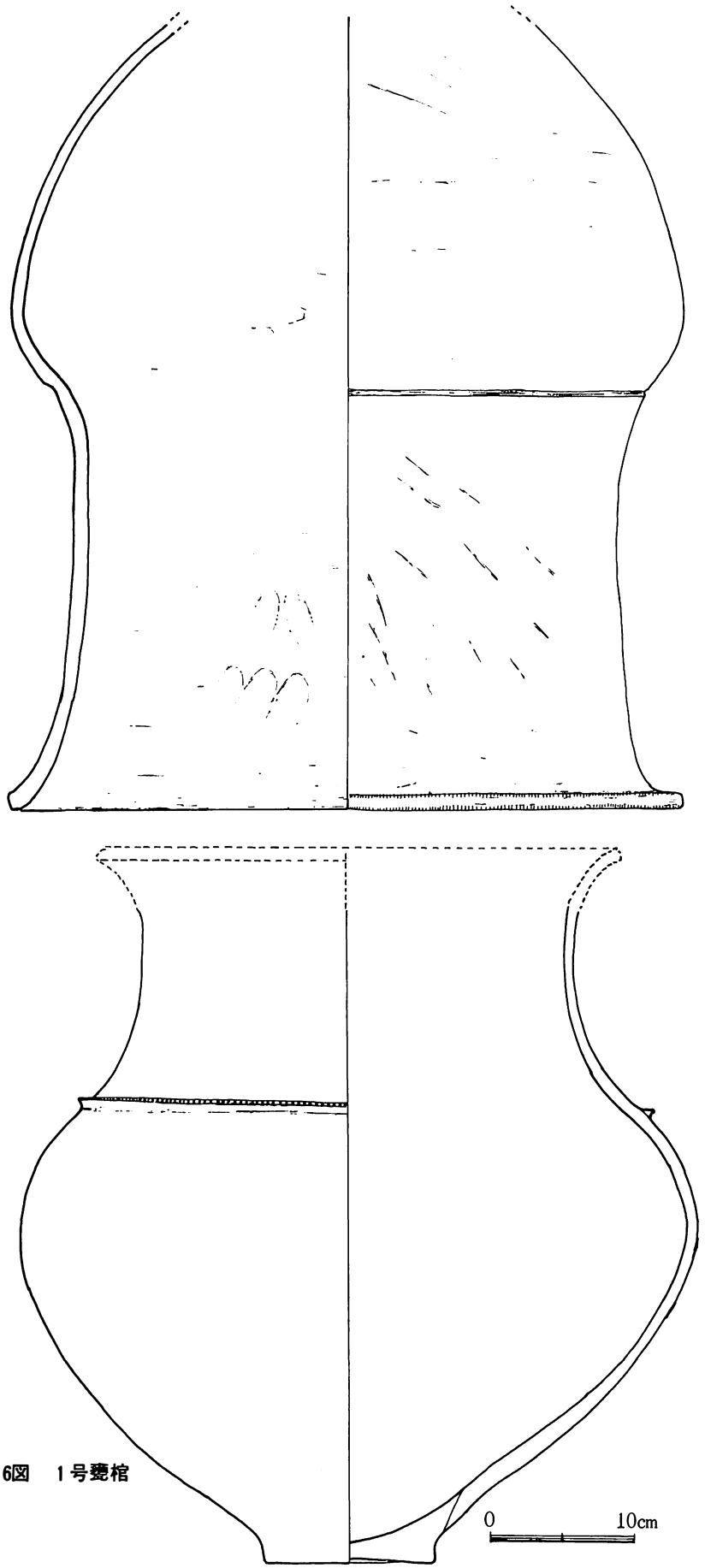
１号甕棺（第15・16図）

甕棺群中一番保存がよかった。棺は東西方向に埋没し、上甕の底部などは削去されていた。

上甕の口縁部はわずかに外反し、その端末に刻み目をつけている。頸は幾分締り、肩に沈線一条をめぐらせている。焼成良好、器面は赤味を帯びよく磨研されている。口縁径46.6cm、推定高61cmである。この甕は様式的に北九州の金海式に近いが、これより様式的には古い様相を示している。



第15図　１・２号甕棺出土状態

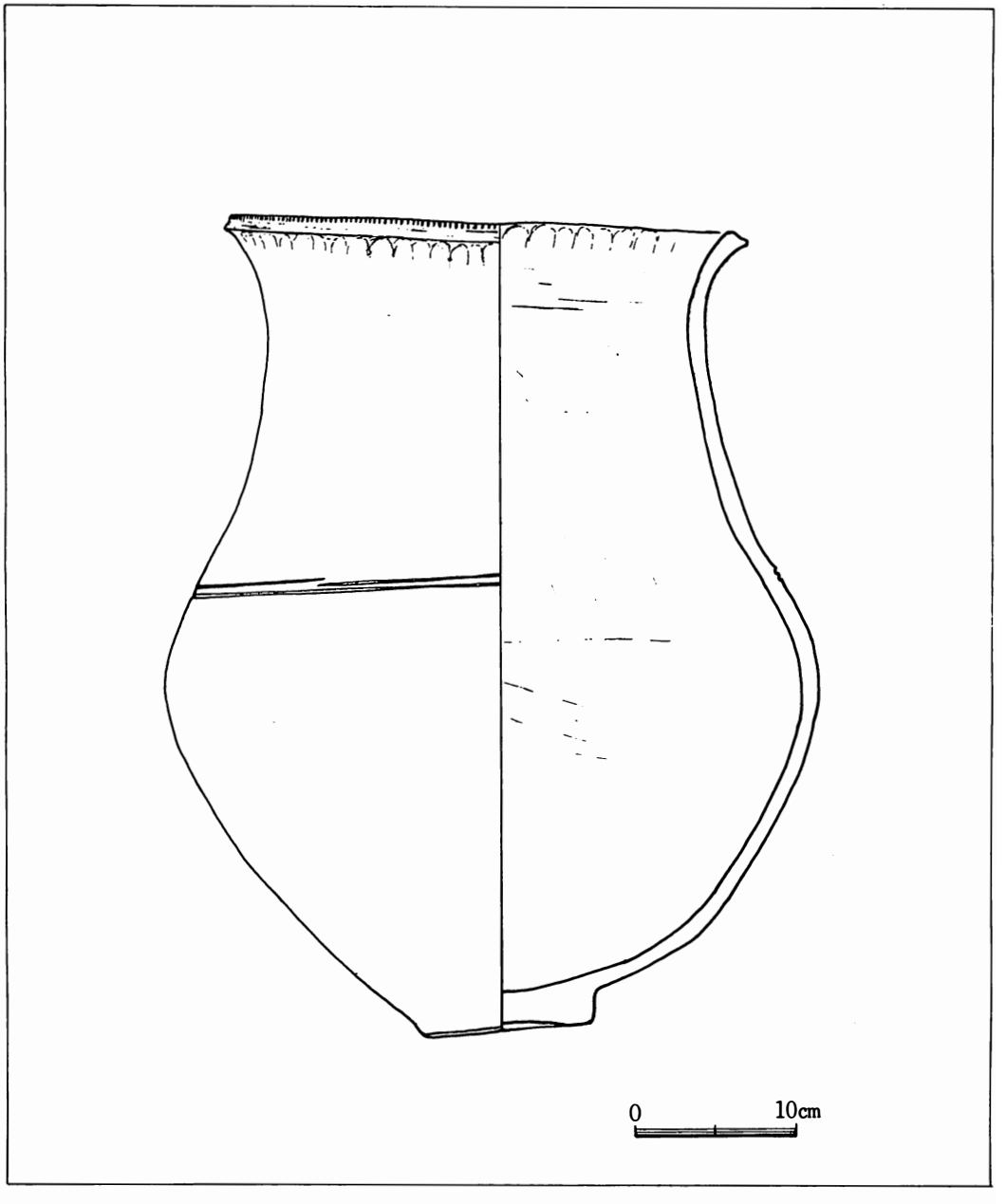


第16図　1号甕棺

下甕は、埋葬時上甕と重ね合わせるために、口縁部を欠ち欠いている。上甕より幾分古い様相を示す土器である。頚より肩にかけて、なだらかに屈曲、移行部に一条の突帯がある。突帯は断面三角形をなし、上端に刻み目を付している。底部は、その剝離の状態から接合の仕方がわかる。即ち、円板状の底に外から貼り付け、胴部へ立ち上がって行く。胴径47cm、現高46cmである。

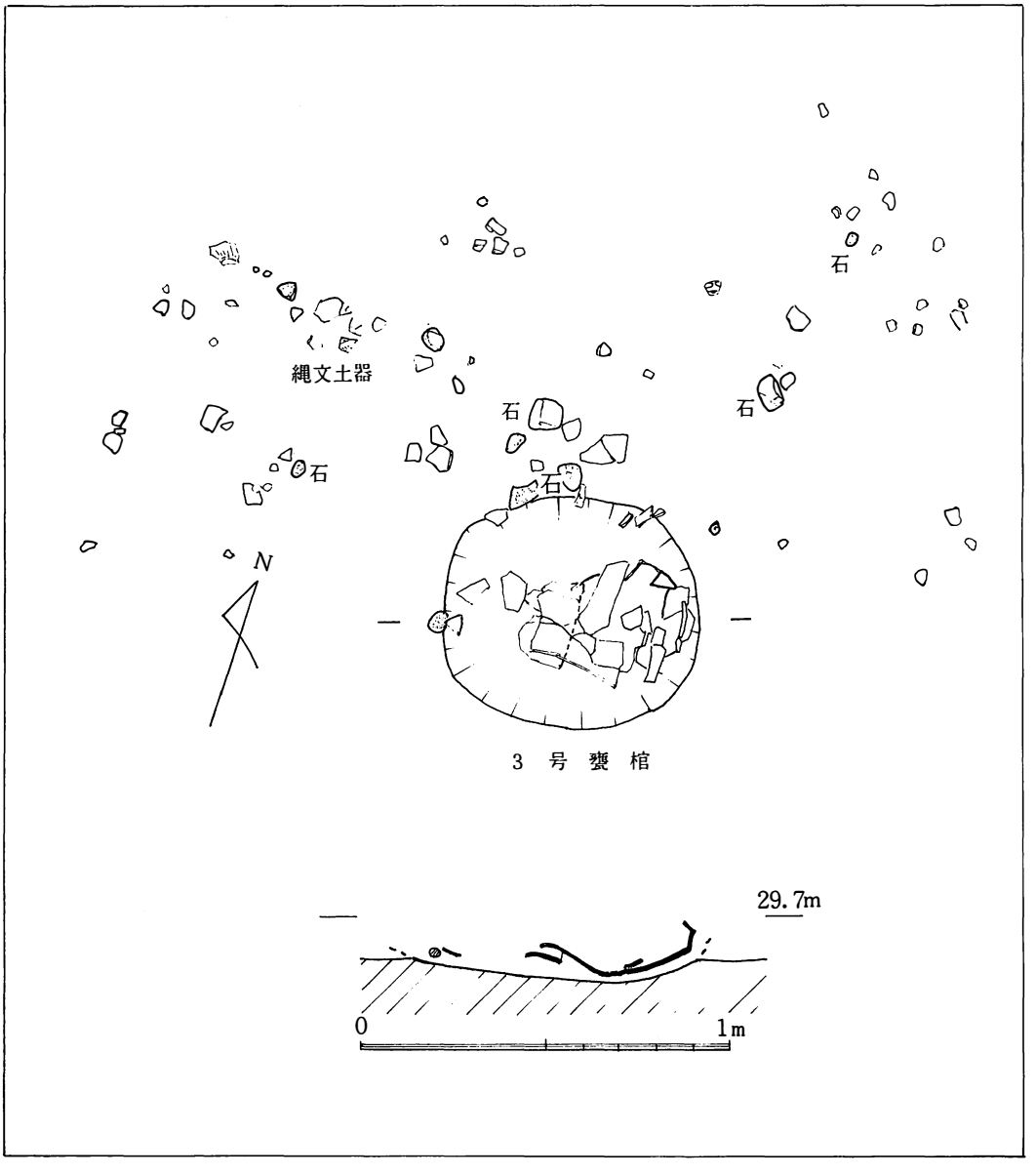
2号甕棺（第15図・第17図）

1号棺の西に接するようにして出土した。甕が1個しか発見されていないところから、単甕で

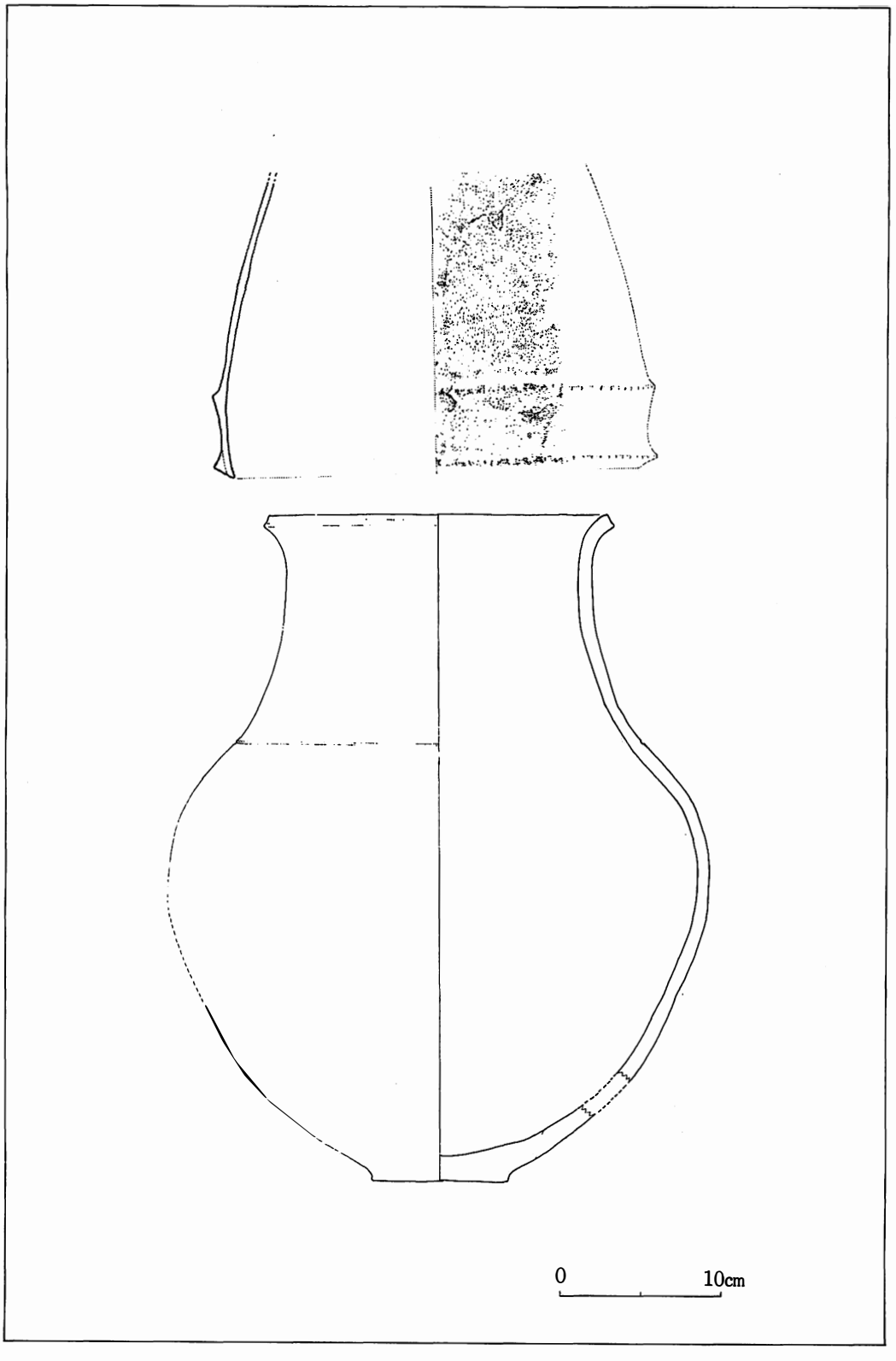


第17図　　2号甕棺

あったことも考えられる。壺形で、土器の歪みが大きい。口縁部は幾分膨らみ、上面が中凹み気味である。端末に劾み目を付し、その状態は1号棺と異なり、上端を一条めぐるのみである。頚部は1号棺上甕に似て、締りが少ない。肩部に二条の沈線がめぐる。底は幾分上り気味である。口縁部径32.6cm、高さ50.9cm、胴部以下に煤が多量に付着しているのは、棺の葬法に原因するかもしれない。



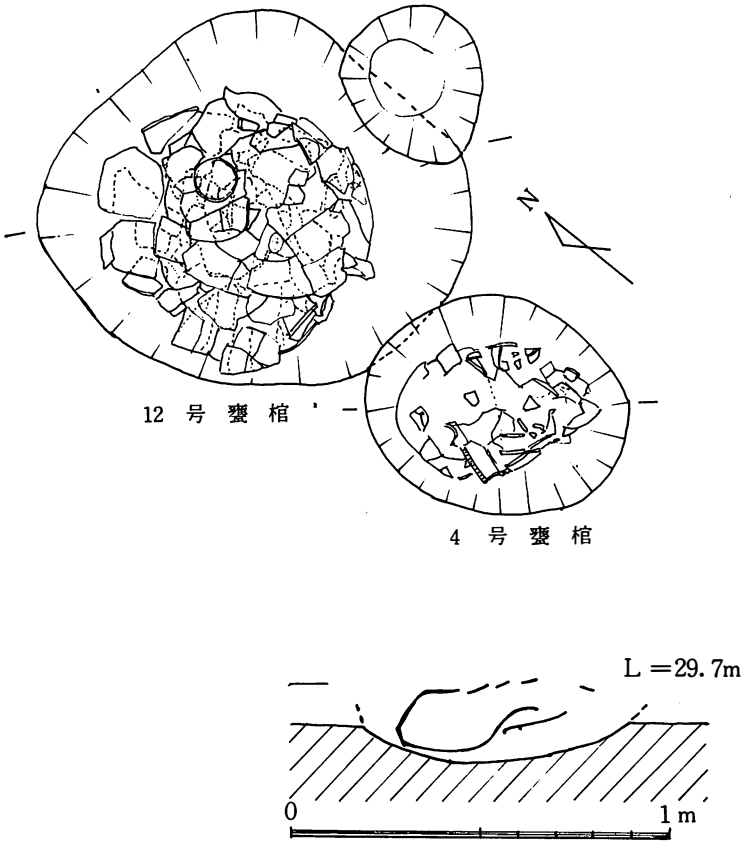
第18図　3号甕棺とその周辺遺物出土状態



第19図　　３号甕棺

3号甕棺（第18図・第19図）

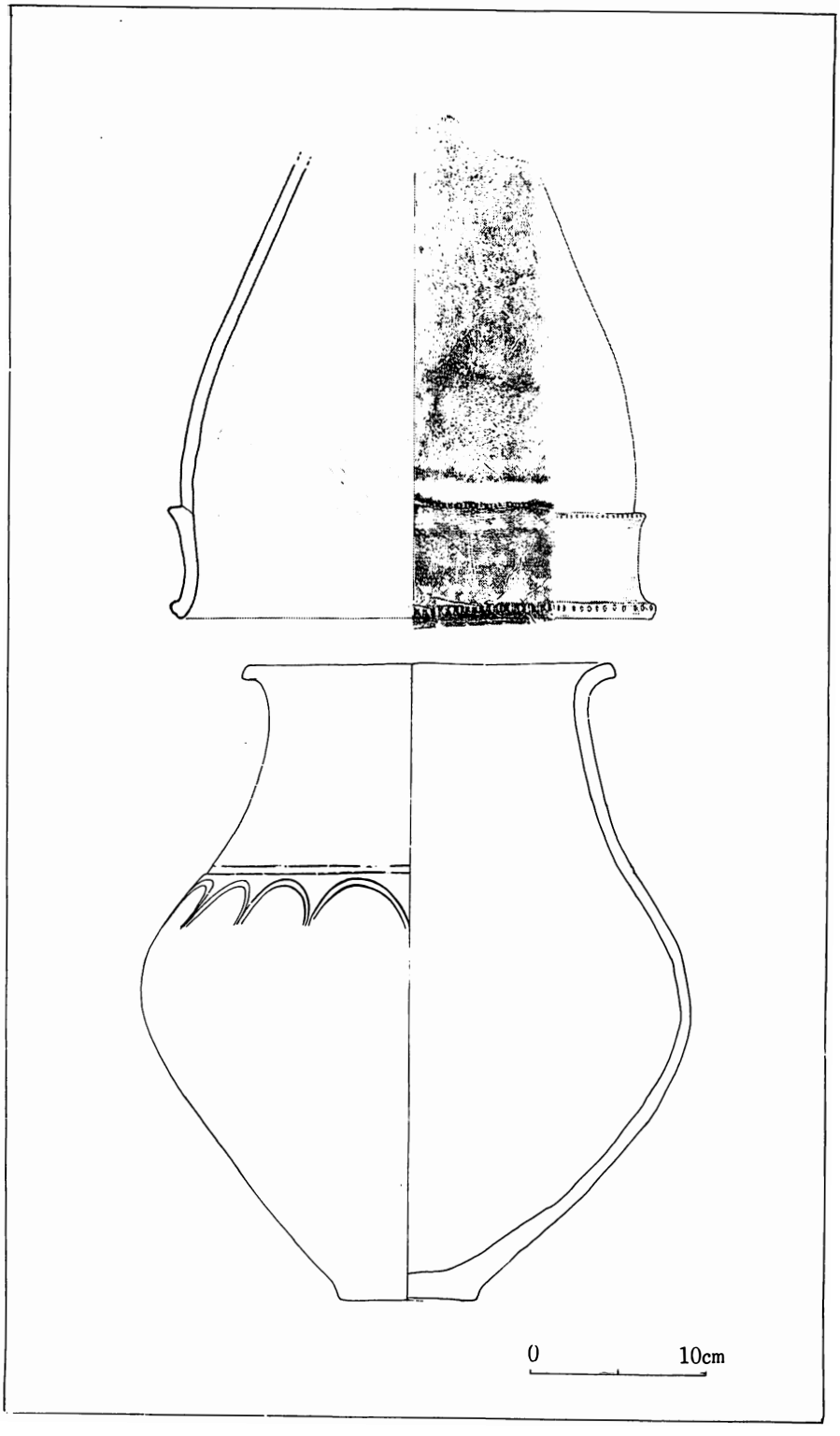
この甕棺は最も北の外れから出土した。壺と甕の合口で、東西方向に埋没していた。上面の破砕は著しい。周辺には縄文土器が散乱し、縄文後期の生活面であることを示していた。



第20図　4・12号甕棺出土状態

上甕は特徴的である。すなわち口縁上端は尖り気味、口縁に接して一条、それより4.5cm下がって、さらに一条の突帯がめぐる。突帯は鈍く、断面は三角形をなす。図示による復元は口縁径25cmである。

下甕は幾分長めの壺で、補修により上下完全には接合しなかった。口縁は2号棺と似ているが、刻み目がない。肩に一条の沈線、底は円盤貼り付けである。口縁部径21cm、推定高40.8cm、最大胴径33.4cmである



第21図　4号甕棺

4号甕棺（第20図・第21図）

12号棺に接するようにして、その南側より発見された。切り合いの状態から、12号より後の埋葬とみられるが攪乱がはげしく明瞭でない。壺と甕の組み合わせで、合口棺を構成していた。下甕の壺は比較的遺存がよかったが、土圧のためつぶれていた。

上甕は二条の突帯をもった焼成良好の甕で、口縁は緩く外に向って開く。突帯は鈍く張り出し、上に刻み目を付す。下段の突帯のあたりで緩く張り出しており、粘土接合の状態が特徴的である。すなわち、接合部を外へ張り出し、その頂端を突帯とし、その上に刻み目を付している。粘土の貼り付けによる突帯が一般的であるのに対して、この下段の突帯に特徴がみられる。全体の約2分の1残っていて、口縁部径約27cmで器面に煤が付着している。下甕はほぼ完形に近い壺である。口縁部は緩く外反し、胴部にかけてなだらかな曲線をなす。胴への移行部に二条の平行沈線文、その下に二重の弧文を描く。重弧文の総数12、最大胴径はほぼ中位にある。器高35.8cm、口縁部径20.7cmで全体に均整のとれた壺で、器面のよく磨研された淡褐色の土器である。

5号甕棺（第22図）

4号棺の北東約1mのあたりから5号棺が出土した。この棺は上面がカットされ、下面にわずかにへばりついた程度で、単棺か合口棺かは不明である。

5号棺はほぼ東西に向き、口縁部を西向きに埋納されていた。棺体は壺で、明褐色の器面は荒れている。図示による胴径36cm、底径8cm、器面には煤が付いている。

6号甕棺（第23図・第24図）

6号棺は11号棺と13号棺に挟まれたかたちで出土した。6号棺の遺存の状態は悪く、上面はカットされ、かろうじて下甕の一部を調査した。甕は単甕、合口、そのいずれか明確でない。

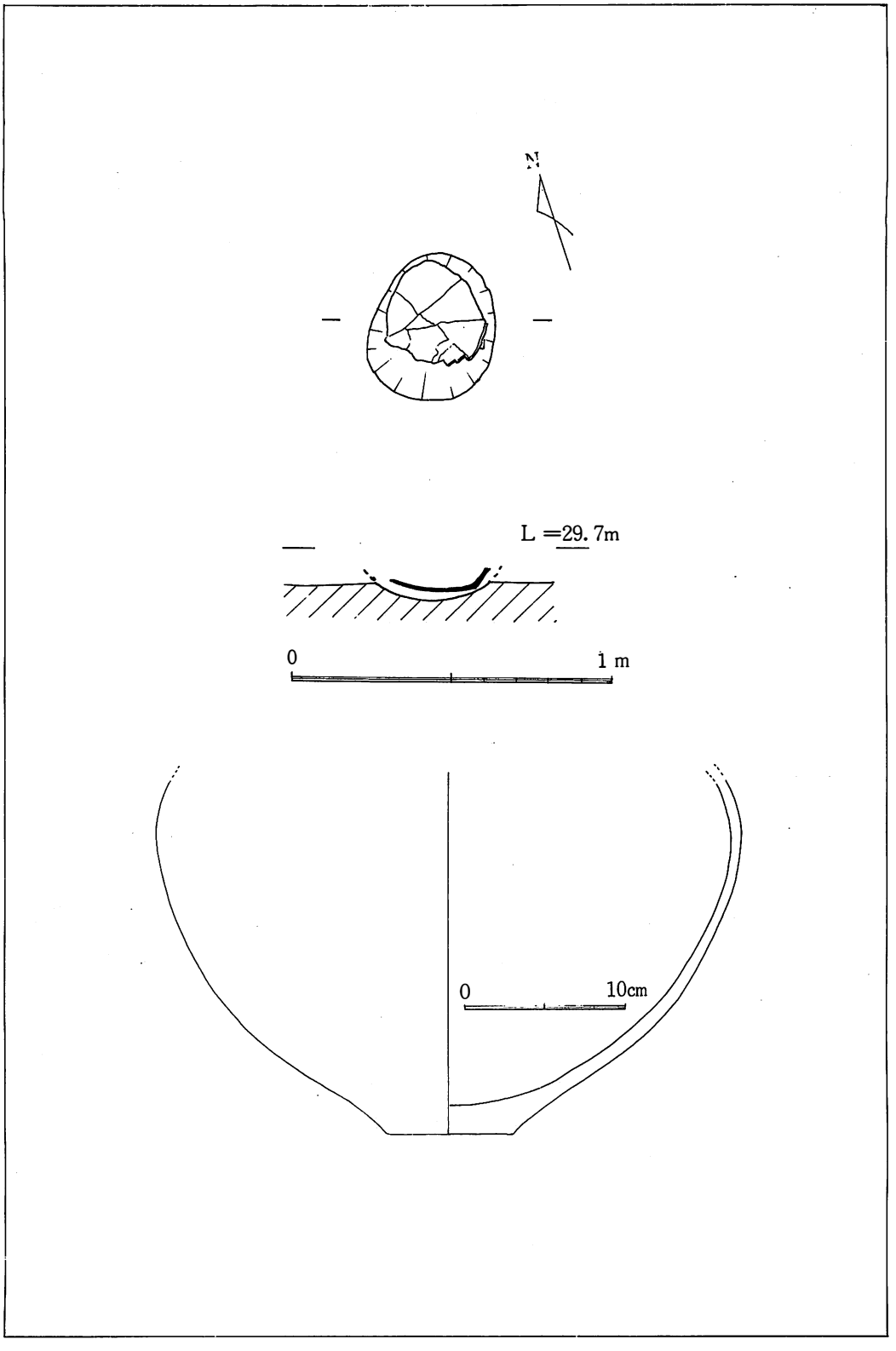
6号棺は壺で、全体の器形に歪みがみられる。この壺は肩に沈線がなく、緩く段がつくことが特徴で、器形の上から4号棺下甕と同様、この甕棺群中、様式的古さを残している。図示による最大胴径38cm。

7号甕棺（第23図・第24図）

この棺は発見時から注目をひいた。口縁部の二条一組の四条の突帯は、確かに変っていて、我々の観念に余りない器形であるに相違ない。甕本体の保存は比較的よい。しかし、これが元々単棺であるかについては明らかでなかった。

この甕棺の印象づけるものとして副葬品がある。甕内に埋没した土をスライスしながら掘り進める。棺底が近くなる。いよいよ慎重に、細部の土塊に注意して掘った。あわや棺底に達するあたりから一個の玉が発見された。丸玉でこの甕棺群で初の副葬品であった。

弥生前期の甕棺に小形壺の副葬された例は、益城町八反田遺跡にあるが、玉類の調査例は少なく大津町無田原遺跡についでの発見である。



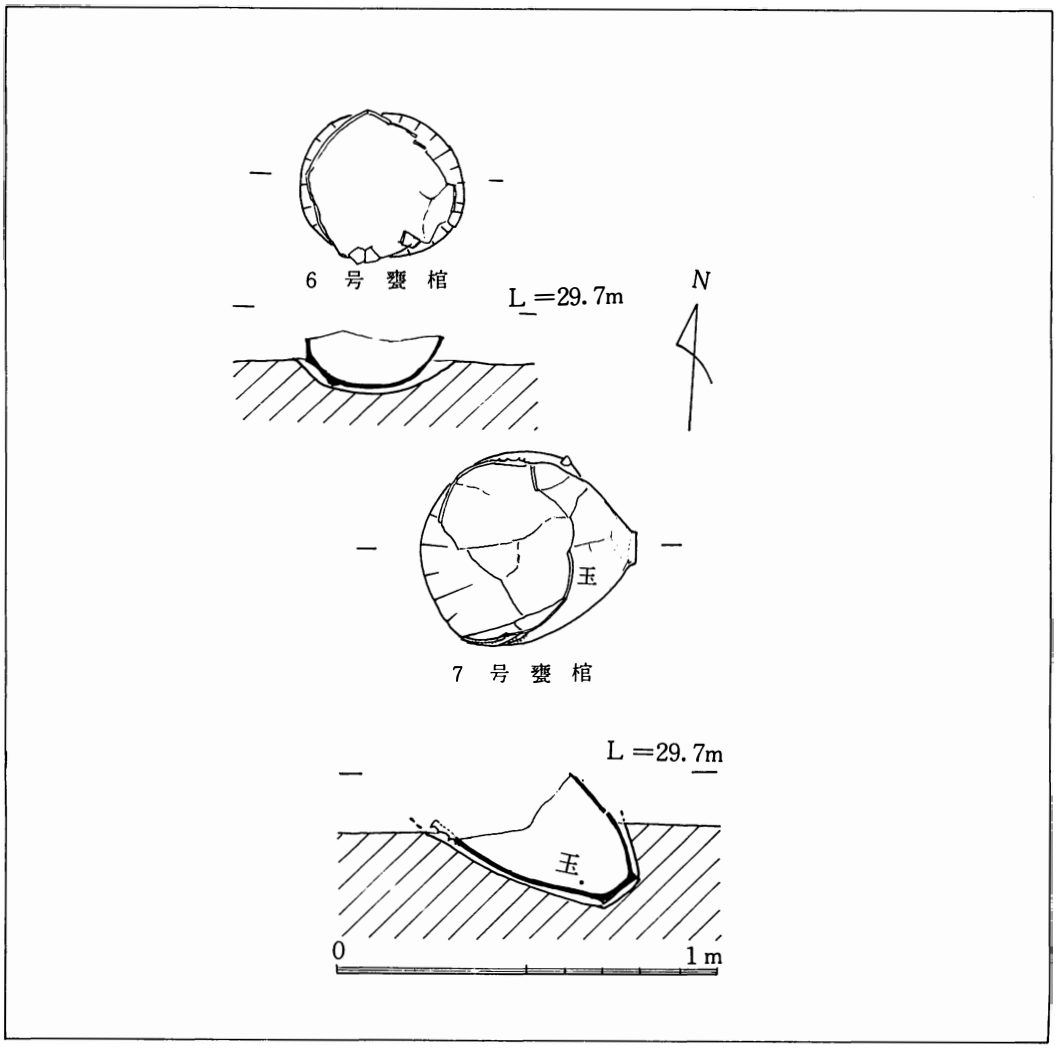
第22図　　５号甕棺とその出土状態

甕の突帯は四条、口縁下に二条一組になってめぐらしている。突帯は貼り付けで、その上にはそれぞれ刻み目を付している。口縁部内側や底部は指頭による押圧、整形されている。胴の張りはほとんどない。底は厚く、平底で前期の土器の特徴を示している。この甕はほぼ完形で煤が器面を覆っていた。口縁部径48cm、高さ47.7cmである。

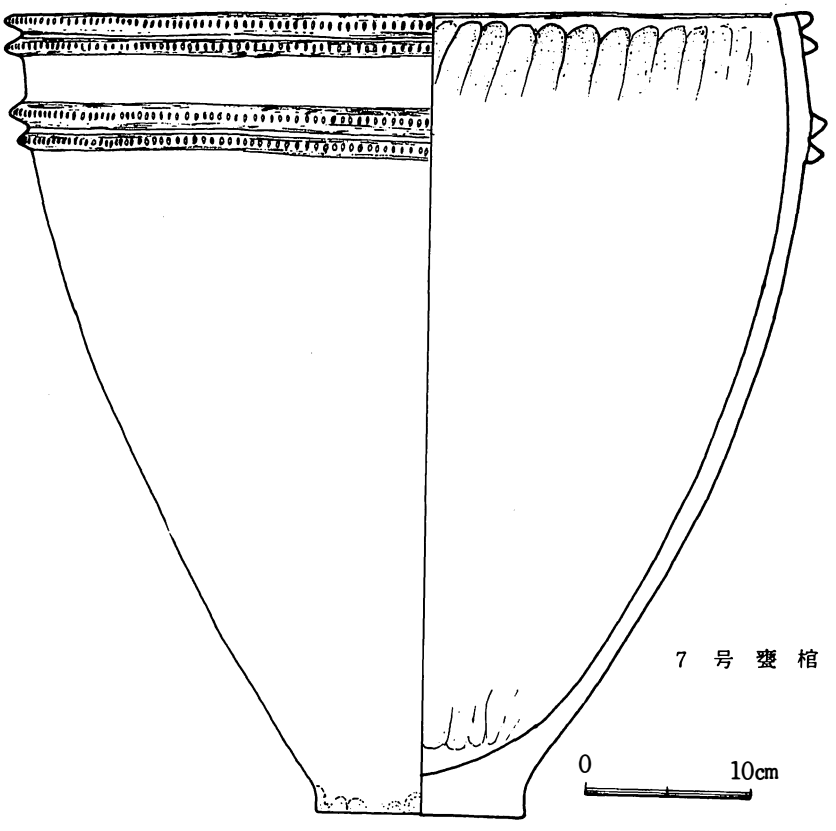
副葬品（玉）は一個発見された。丸玉で径11.5～12mm、厚さ7.5mm、穿孔は幾分片寄り、径4.2mmの孔が穿たれている。石製（めのう）のこの玉は全面よく磨耗し、古式の様相を止めている。

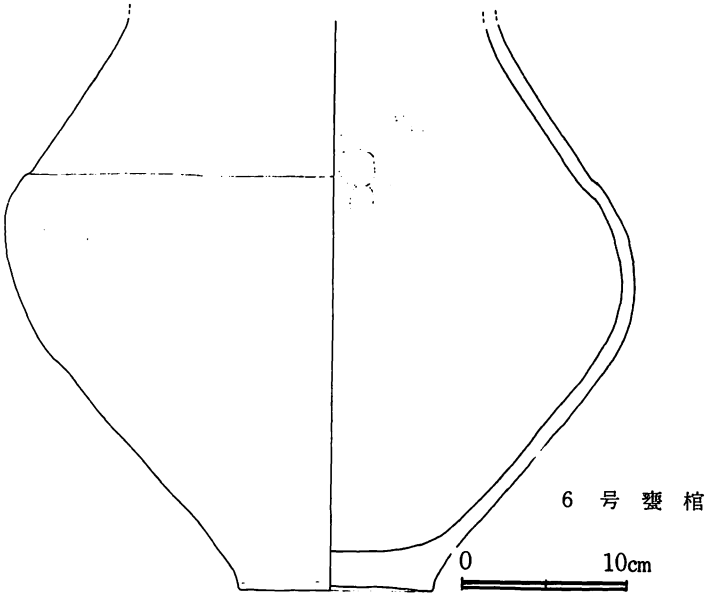
8号甕棺（第25図・第26図）

7号棺の北東に接するようにして8号棺が発見された。棺の向きが7号棺が西向きであったのに対して、8号棺は東向きである。この棺の保存は悪く、攪乱破壊され、破片が入り乱れて



第23図　　6・7号甕棺の出土状態

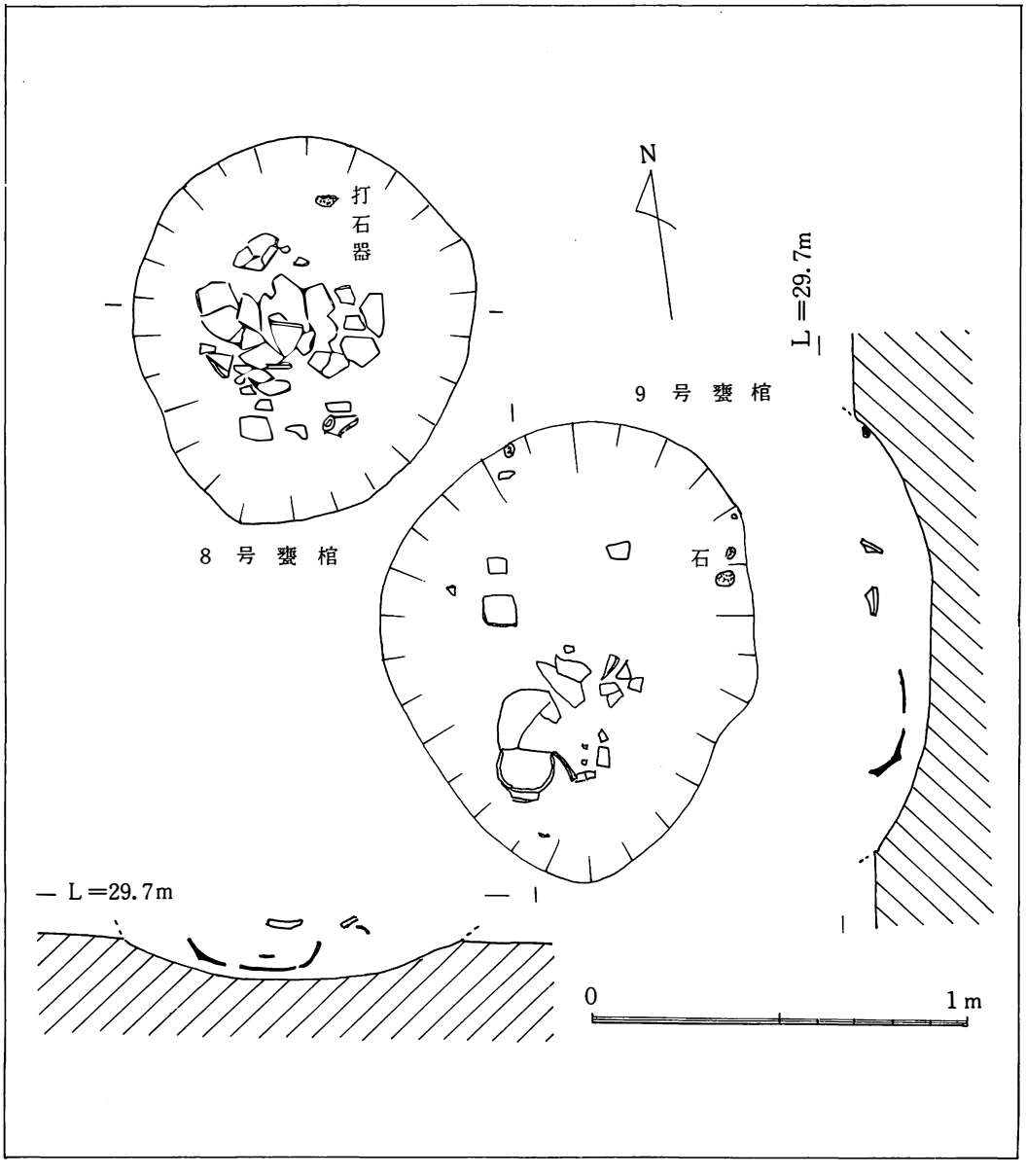




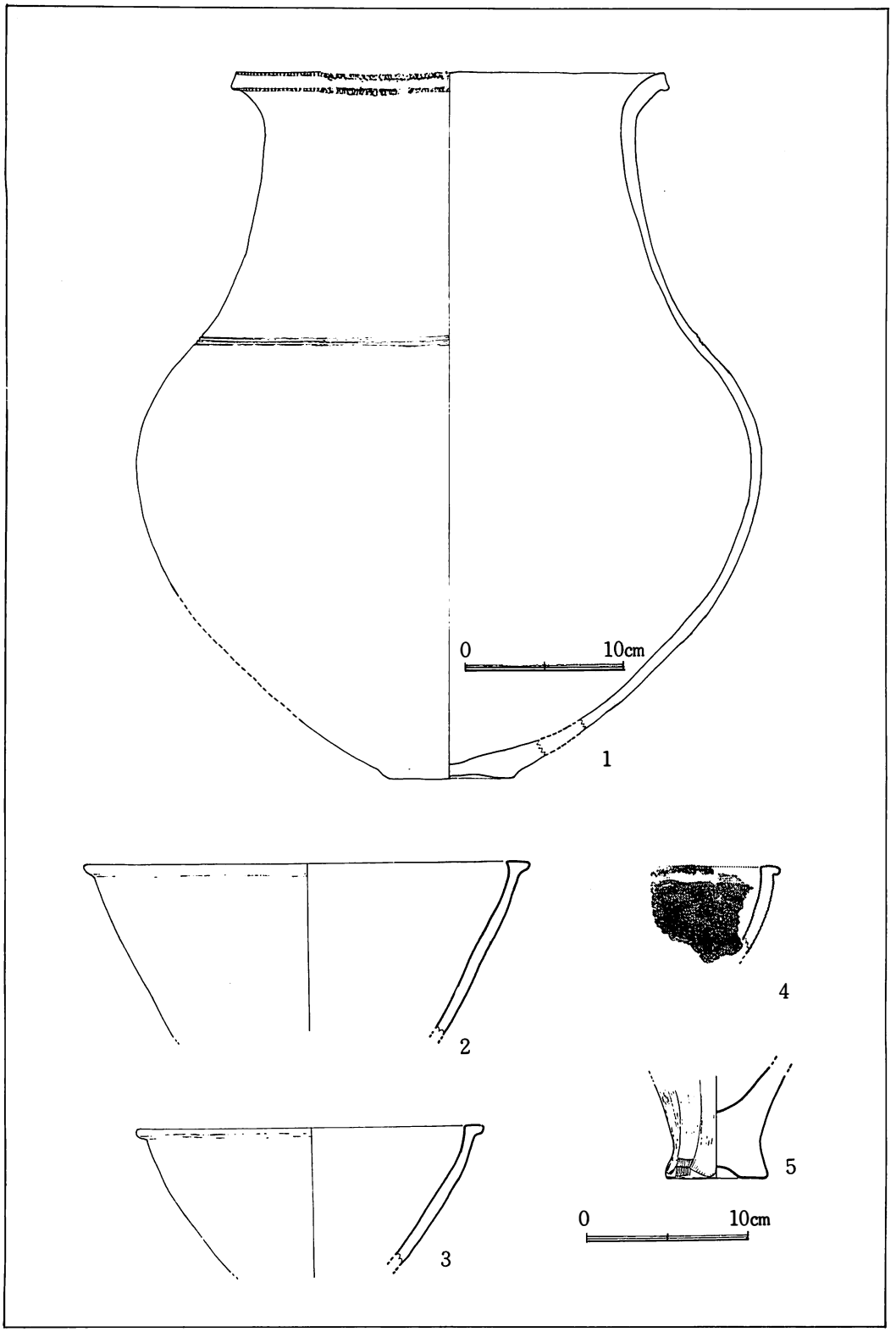
第24図　　6・号甕棺

いた。棺体の壺は底に接していたが、上甕の状態は明確でない。別図のごとく、壺のほか、鉢、甕の底および打製石斧が出土した。

８号棺の棺体をなすものは壺で、口縁から底部まで完全には復元できないが、ほぼ全容を知ることができる。口縁部は急に屈曲する。口縁端末は平らで、幾分中くぼみ状であり、その上に刻み目を付している。その状態は１号棺の上棺の口縁に似ている。頚から胴部にかけてなだらかにカーブする。肩には沈線三条、段はない。胴は膨らみをみせ、底は幾分上げ底気味である。この土器の胴部以下に煤が付着している。口縁径26.8cm、図示による復元高43cmである。



第25図　８・９号甕棺出土状態



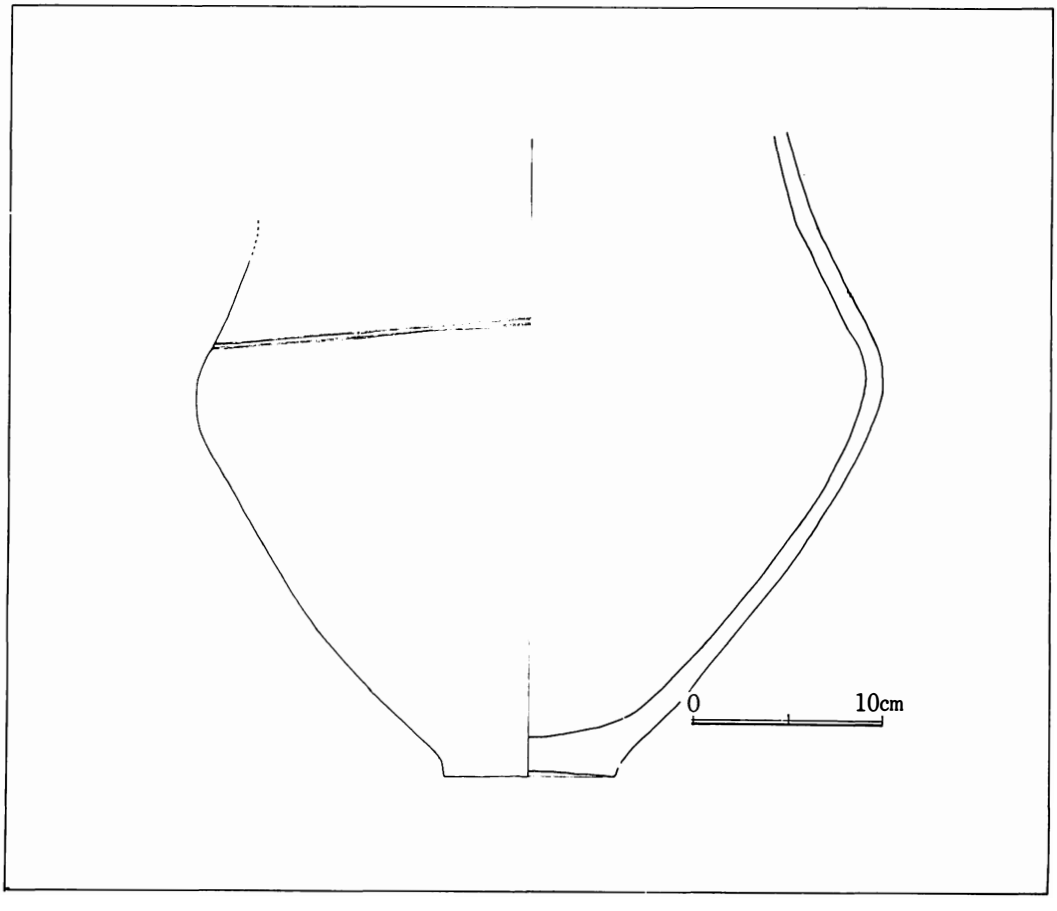
第26図　　８号甕棺と一括出土土器

石斧については別(27～28頁)に述べた。第26図2～5の土器片は、一括して出土したものである。2と3はいずれも破片で、器形、整形に類似点が多く、同一個体の可能性があるが、破片より図示復元してみた。いずれも鉢形で、2の口縁部は上面平担、幾分内側に張り出し気味である。器面は平滑、煤が付着している。元々8号棺の上甕であったとも考えられる。5は甕の底部で、幾分上げ底気味。器面は篦により均整されている。これは様式的に新しく、弥生中期とみられる。

9号甕棺（第25図・第27図）

9号棺は8号棺の南に接するようにして発見された。棺は1基あったことは確実だが、その攪乱がはなはだしく、破片が上下に散っていた。棺は北向きにして底が発見されたが、動いていることも考えられる。

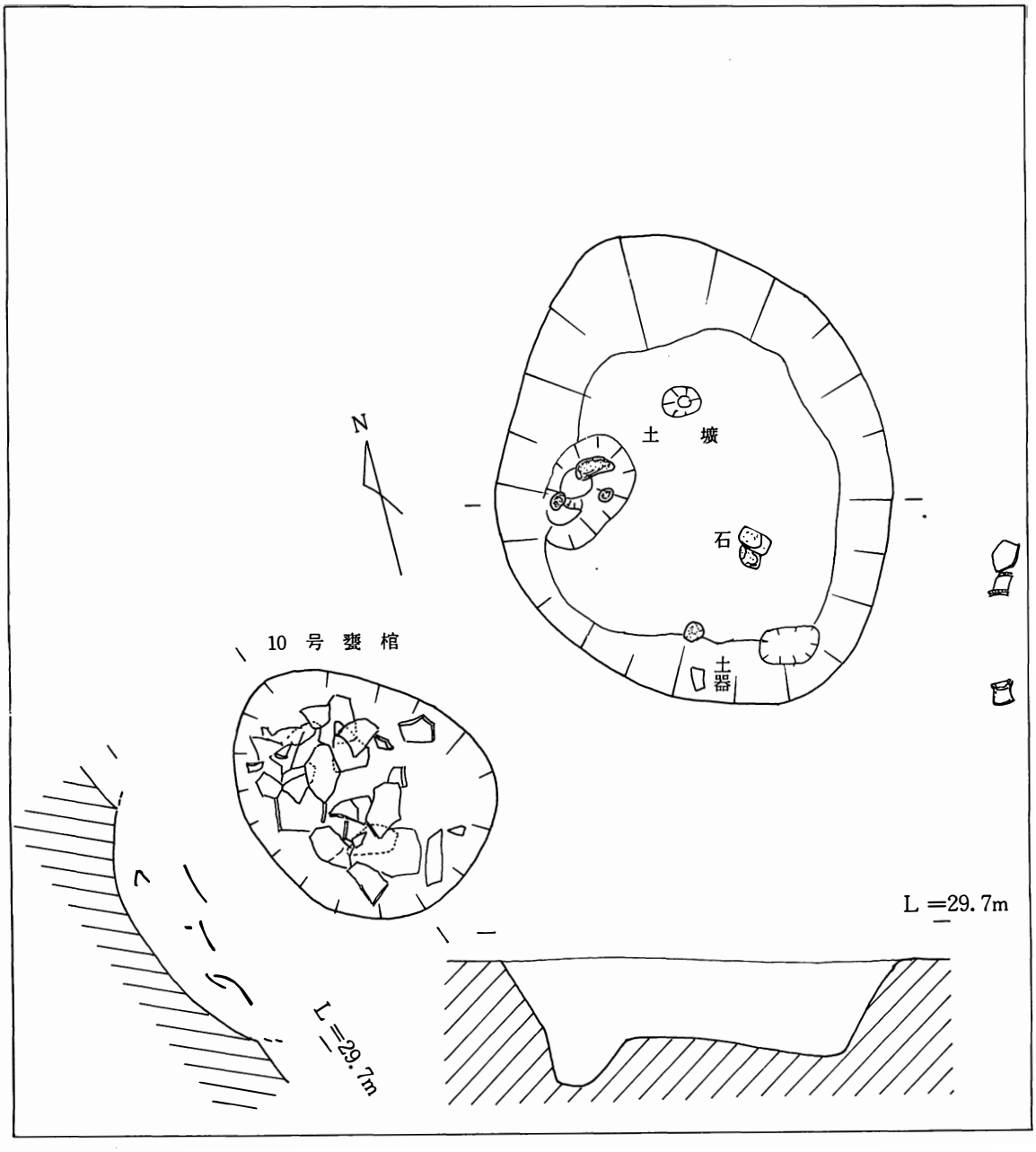
接合復元により、棺体は壺であることが確認された。この壺は歪み、焼成良好、内面は器面が剝離している。また肩部には沈線一条をめぐらせている。図示による胴径約36.4cm、底径9.2cmである。



第27図　　9号甕棺

10号甕棺（第28図・第29図）

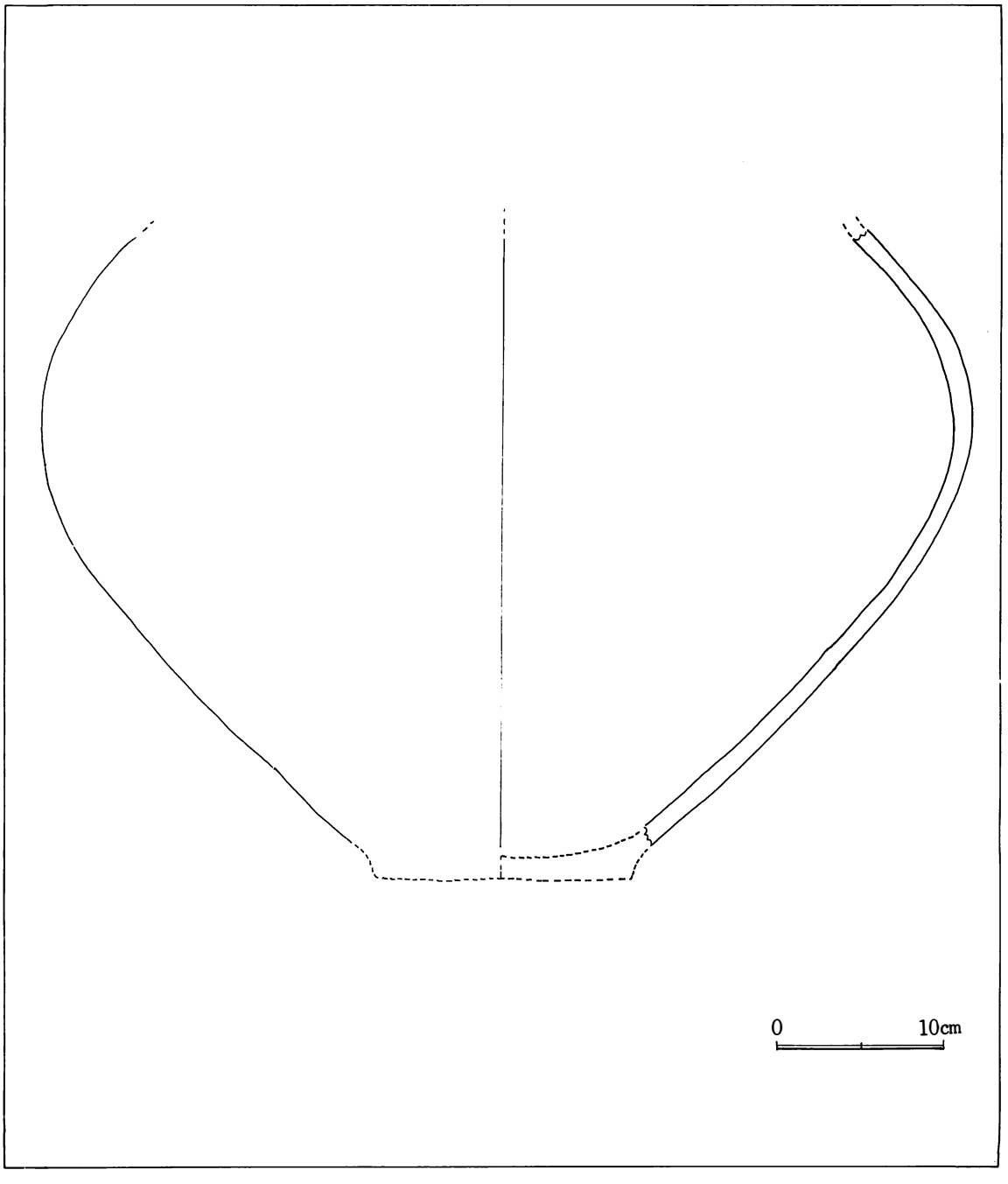
10号棺は５号棺の西より出土した。この棺も攪乱が激しく、破砕され、底部は散逸して発見することができなかった。



第28図　　10号甕棺と土壙

棺は壺形をなし、淡黄褐色をした大形の壺である。焼成良好、器面はよく磨研されている。胴径56cm、底、頸は欠失していて定かでない。

10号棺の東側に土壙が発見された。中から石、土器片が発見された。土器の中には須恵器の破片もあり、時期的に新しいものであることが知れる。機能、性格については明確でない。

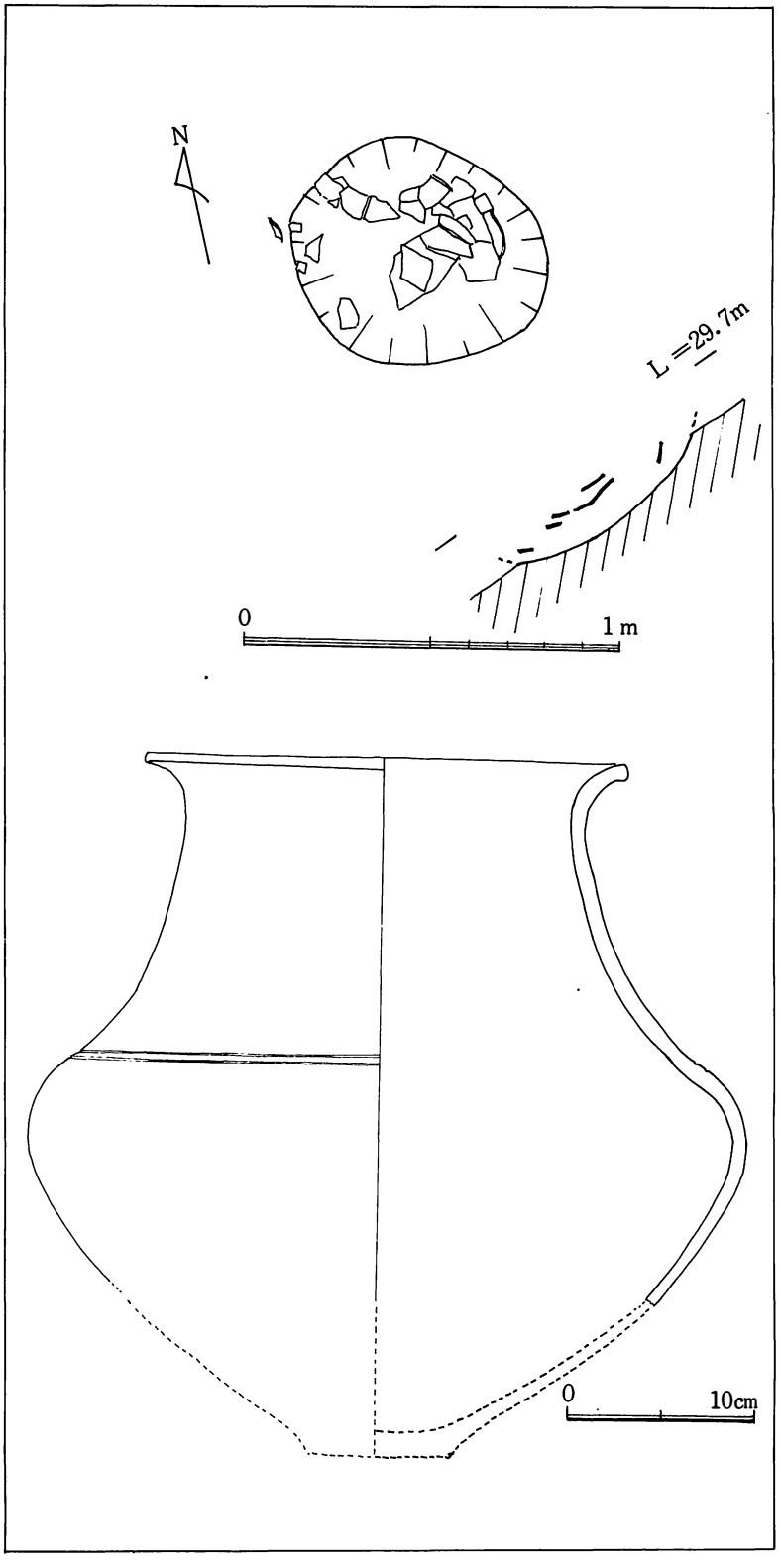


第29図　10号甕棺

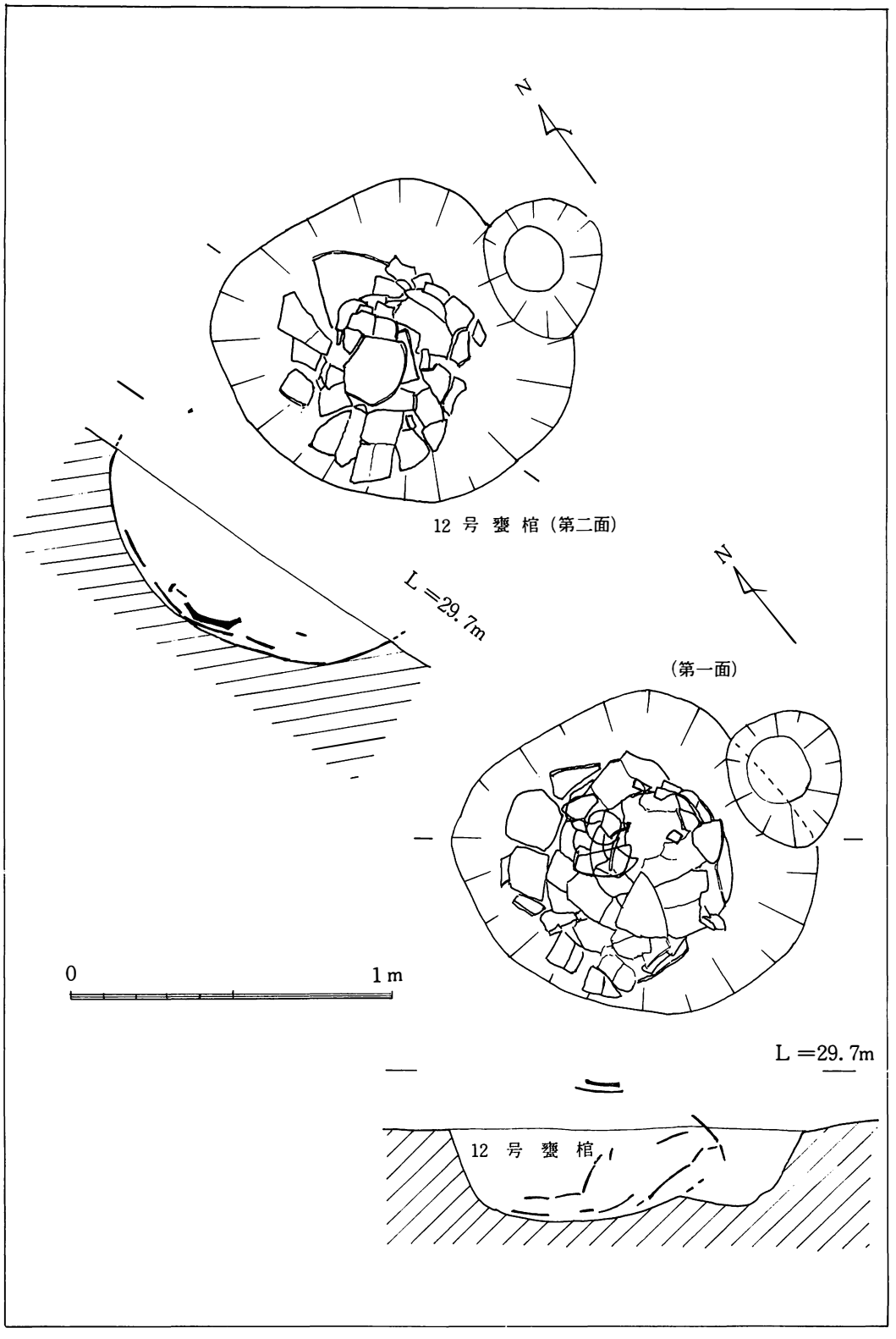
11号甕棺（第30図）

1号棺と6号棺とに挟まれた位置より発見された。土器片が入り組み、破砕攪乱のほどが窺える。しかし、ここに一基の甕棺があったことに間違いない。それは素直な印象である。

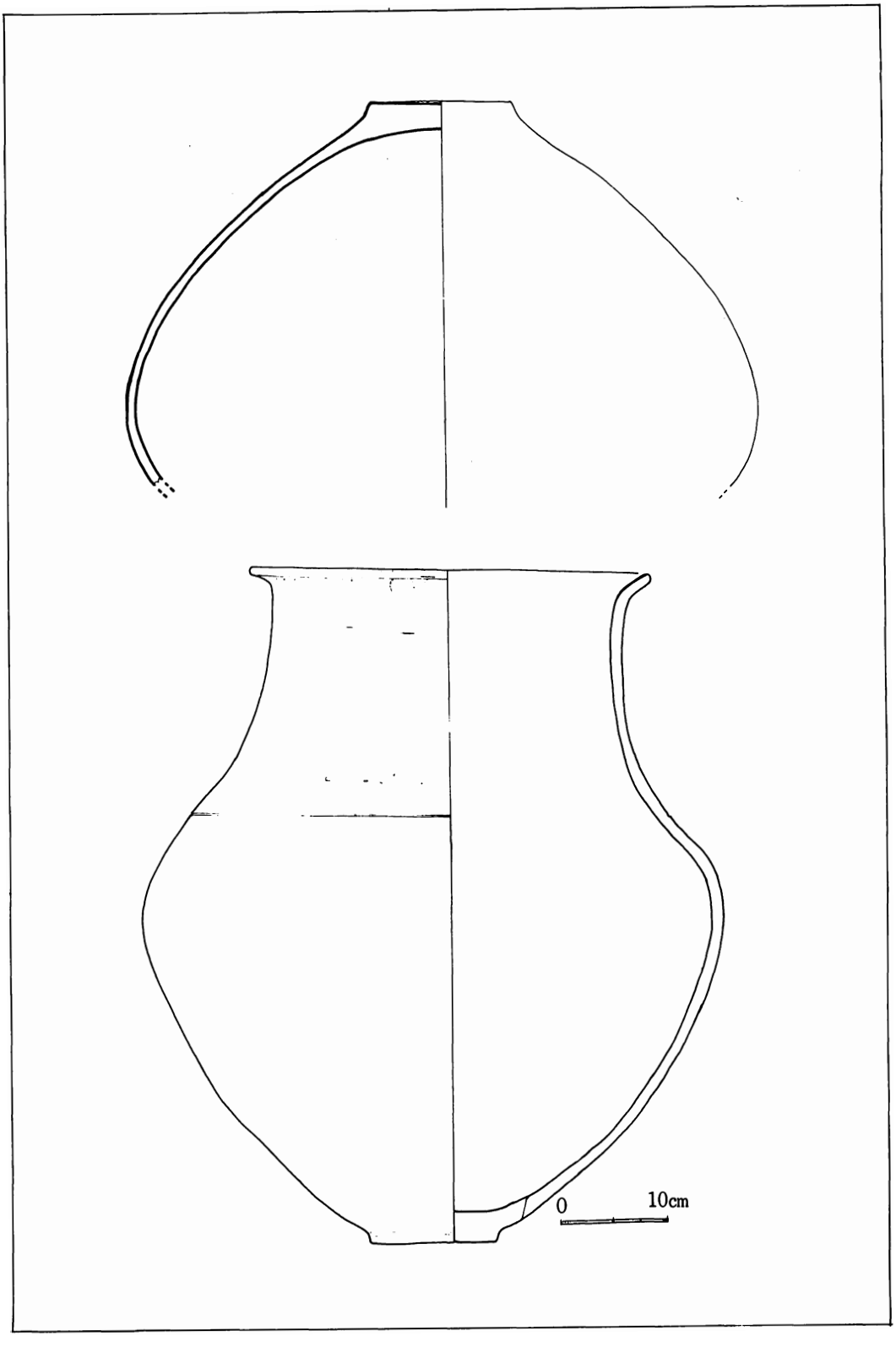
棺は第30図のごとく、底を欠失したかたちで壺を復元することができた。以下図によって説明を加えれば、棺体は壺形土器で底部を失っている。口縁部は急に反転、外反する。肩部に沈線二条、胴部が他の土器に比べて膨らみがなく、圧縮された形をしている。口縁部径25.3cm、最大胴径38.3cmである。



第30図　11号甕棺とその出土状態



第31図　12号甕棺の出土状態



第32図　12号甕棺

12号甕棺（第31図・第32図）

12号棺は４号棺に北接する形で発見された。12号棺の発見されるに先立ち、その上面には別個の甕の破片があった。図のように、直上に壺（底）の破片があり、調査時、これを一つの甕棺墓ではないかと考え調査を進めたが、攪乱などにより他より移行したものと判断し、別に処理することにした。

12号棺は他の棺に比し、深く埋没していたこともあって、甕の遺存は比較的よかった。しかし、出土時には土圧等により破砕されており、図のような状態を示していた。底が元の位置を示していたとみれば、甕棺は口縁を北にして埋納されたものとみられる。

甕棺は図のように壺形土器２個の組み合わせによる合口棺であったものとみられる。下甕は破片を接合し、ほぼ完形に復元することができた。壺は多少の歪みがあるが、全体によく磨研され均整のとれた土器である。口縁は外反し、頂端は丸い。頚部は緩くカーブし、肩に一条の沈線がめぐり、胴部は膨らみ、膨らみをもちながら底にいたる。底は剝離の状態から図のような接合の状況が知れる。口縁部径36.6㎝、胴径54.3㎝、高さ62.6㎝である。器面には煤が付着しており、底部は灼け赤変していた。

上甕は残りがよくない。その状況から口縁をかぎとり、下甕に覆い被せていたものと思われる。器面はよく磨研され、平滑に仕上げられていた。最大胴径59.2㎝である。

13号甕棺（第33図・第34図）

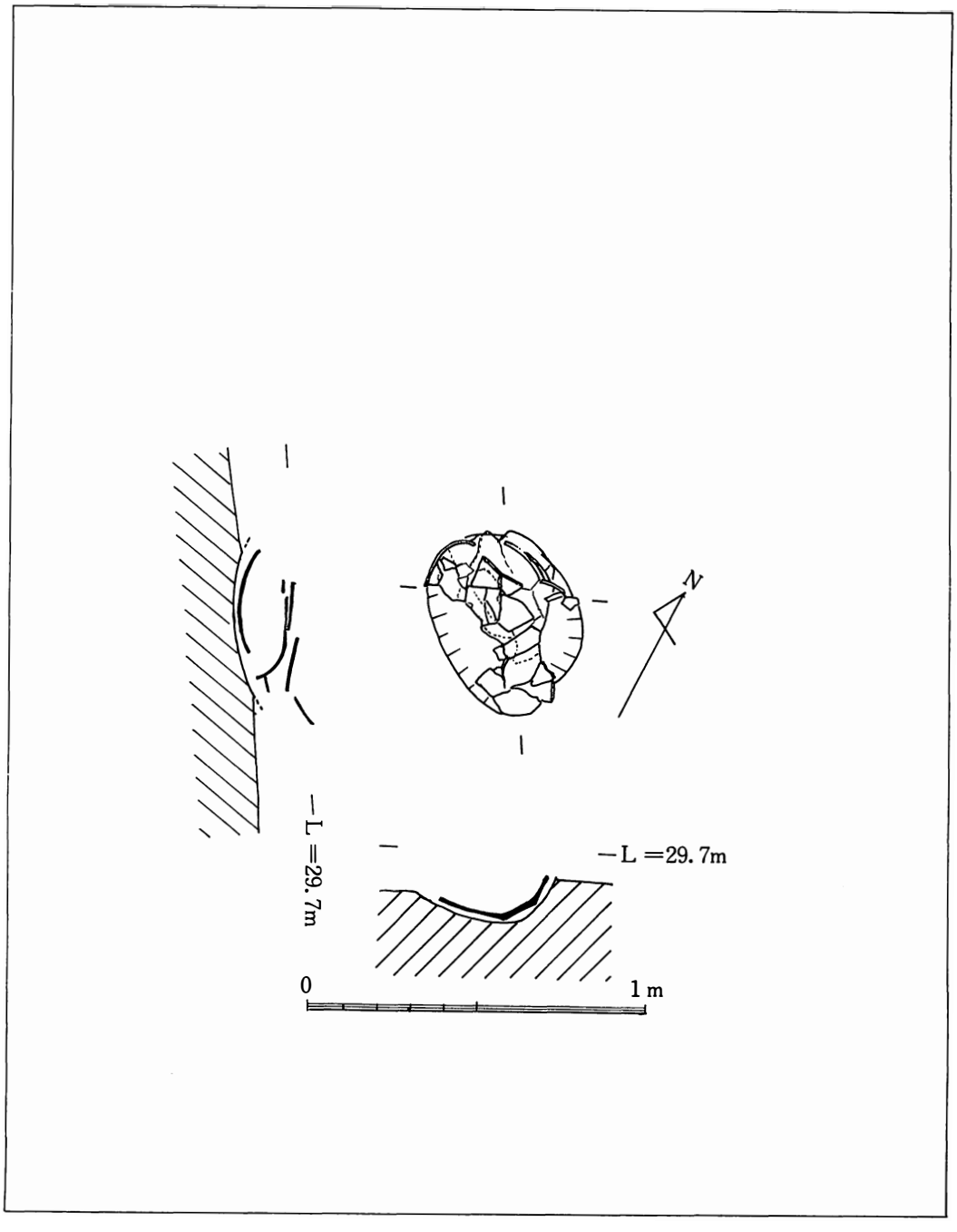
13号棺は７号棺の南より出土したが、その遺存状態はあまりよくなかった。他の各甕棺と同様破砕され、折り重なるようにして出土した。下甕（壺）は壙底に接し、埋納時の状態を示していた。甕棺の向きは７号棺と同じく、南向きに埋納されていた。

甕棺群の取り上げを終わり、その後墓域の全域を掘り下げた。その際13号棺の近くから小壺の破片が出土した。図により位置を確かめると、小壺は13号棺の東に接していることが判明した。この小壺が副葬品であるかどうかについては明確でない。

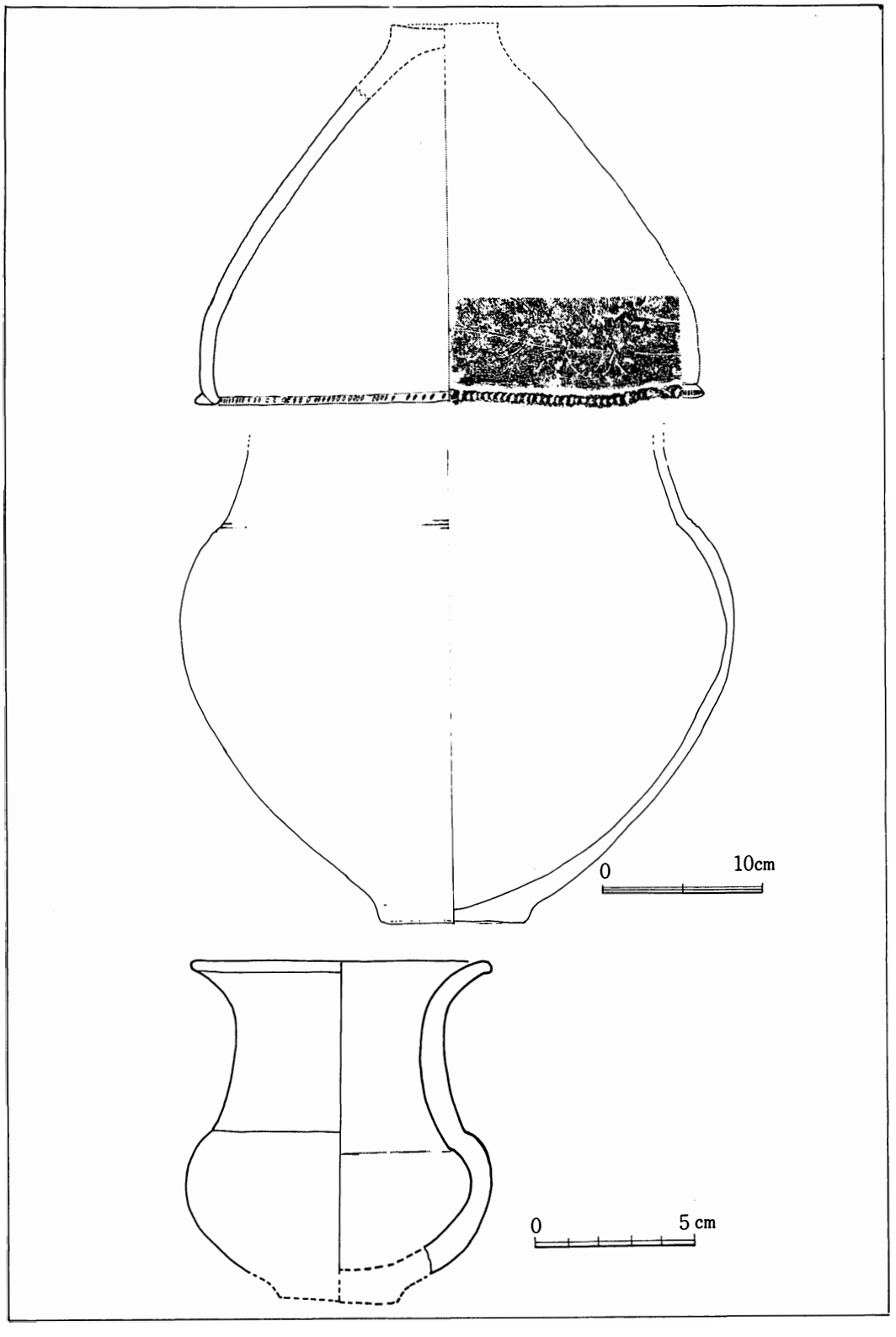
13号棺の下甕は壺で、口縁部は欠失（あるいは意図的にかぎとったことが考えられる）していた。頚はなだらかなカーブを描き、肩に三条の沈線がめぐっている。器面は平滑、褐色で焼成はあまりよくない。内面には棺特有の器面の剝離がみられる。底径9.5㎝、最大胴径35㎝である。

上甕ははなはだ特徴的な土器で、他に類例をみない。底が失われ、全容が定かでないがほぼ器形を窺うことはできる。この甕は比較的浅く、鉢に近い。口縁部には突帯一条、その上に刻み目がめぐる。また、口縁部は内弯気味で、その上にも刻み目をめぐらせている。さらに、この土器を特徴づけるものとして、口縁下の施文がある。文様は二重弧文と沈線を組み合わせたもので、この時期の壺の文様と同一モチーフである。この文様は左にめぐるに従い簡略化され、やがて消滅する。文様は器体の４分の１ほどまわる。口縁径32㎝、推定高23㎝である。この甕の内外面には濃密な煤が付着しており、文様も土器水洗いにより発見されたほどであった。

小壺について説明したい。この壺は調査により全体の５分の１ほどの破片が残っていた。図示による復元は別図のとおりで、口縁部は外反し先は丸い。肩には明瞭な段があり、その他、文様はない。器面は磨研、仕上げ良好。図示によれば口縁径9.5cm、推定高10.6cmとなる。



第33図　13号甕棺の出土状態



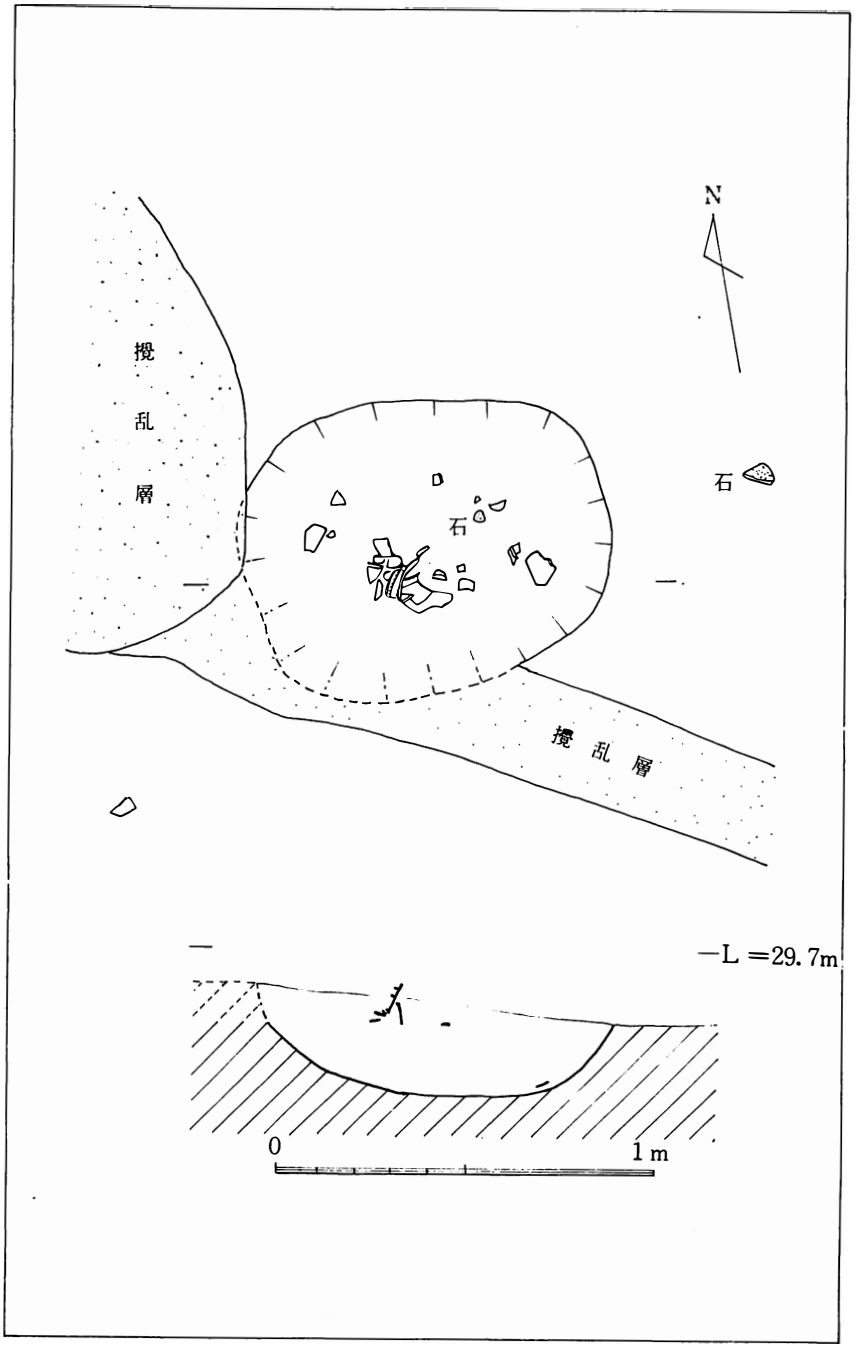
第34図　13号甕棺と小壺

14号甕棺（第35図・第36図）

この甕棺は一つだけ離れて、甕棺群の東北端から発見された。攪乱が激しく、甕棺の残りも悪かった。この状態から、この甕棺は一基だけであったことが認められよう。

墓壙（攪乱を受けている）から発見された土器は、別図のように3個体ある。甕は口縁部に突帯三条をもつ特徴的なもので、7号棺に近い。恐らく、14号棺の本体であったものとみられる。突帯は口縁上端に一条、口縁より5cm下がって二条がめぐっている。突帯は貼り付けで、突帯上を刻み目がめぐっている。口縁部径約30cmを計る。

甕の底部破片が一個出土している。底は厚く、幾分上げ底気味で、外面は箆均しによる整形痕がある。これは様式的に新しく、弥生中期初頭とみら



第35図　14号甕棺の出土状態

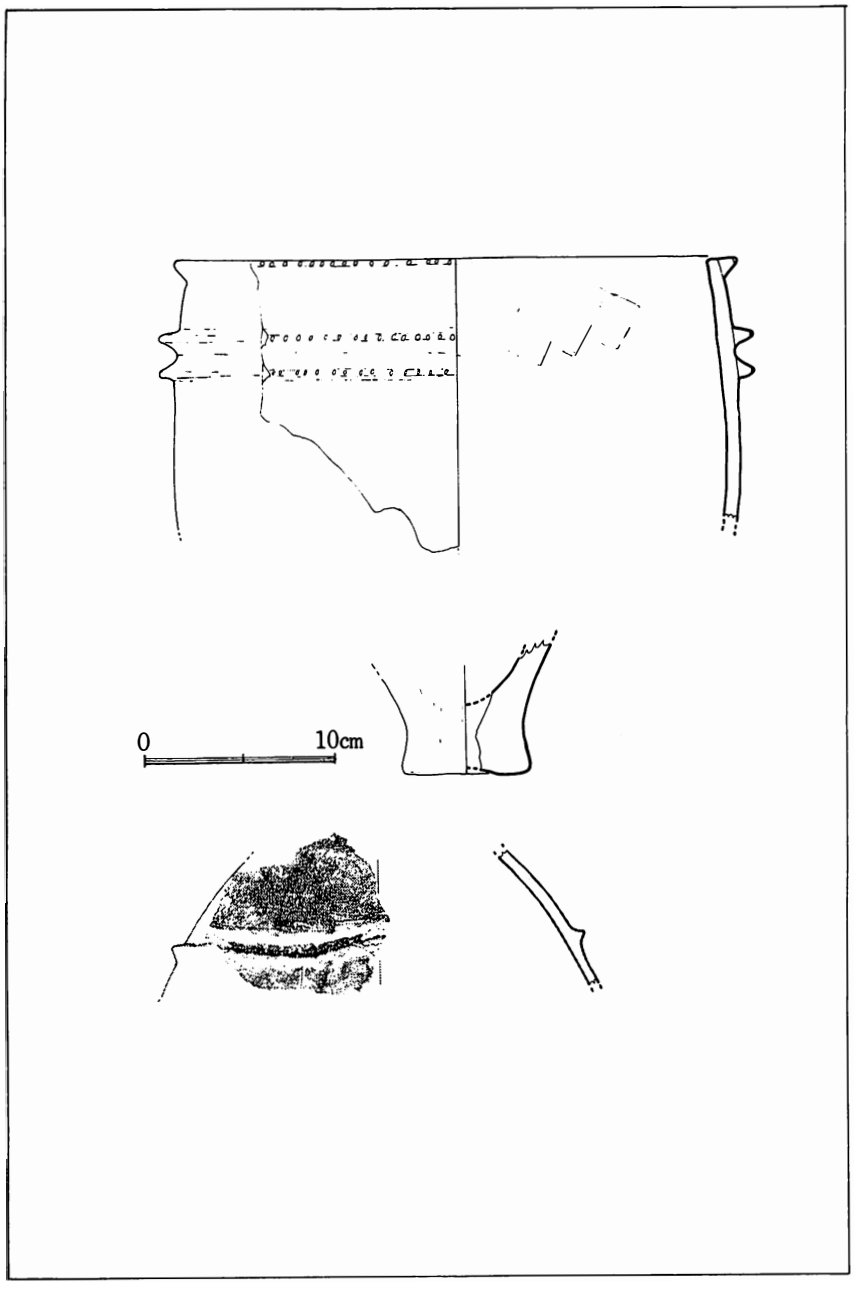
れる。

他の一個は壺の肩から胴部にかけての破片で、肩に突帯一条がある。破片のため器形の全容が明確でないが、形態的に頸部の傾きが他の壺と趣を異にしている。

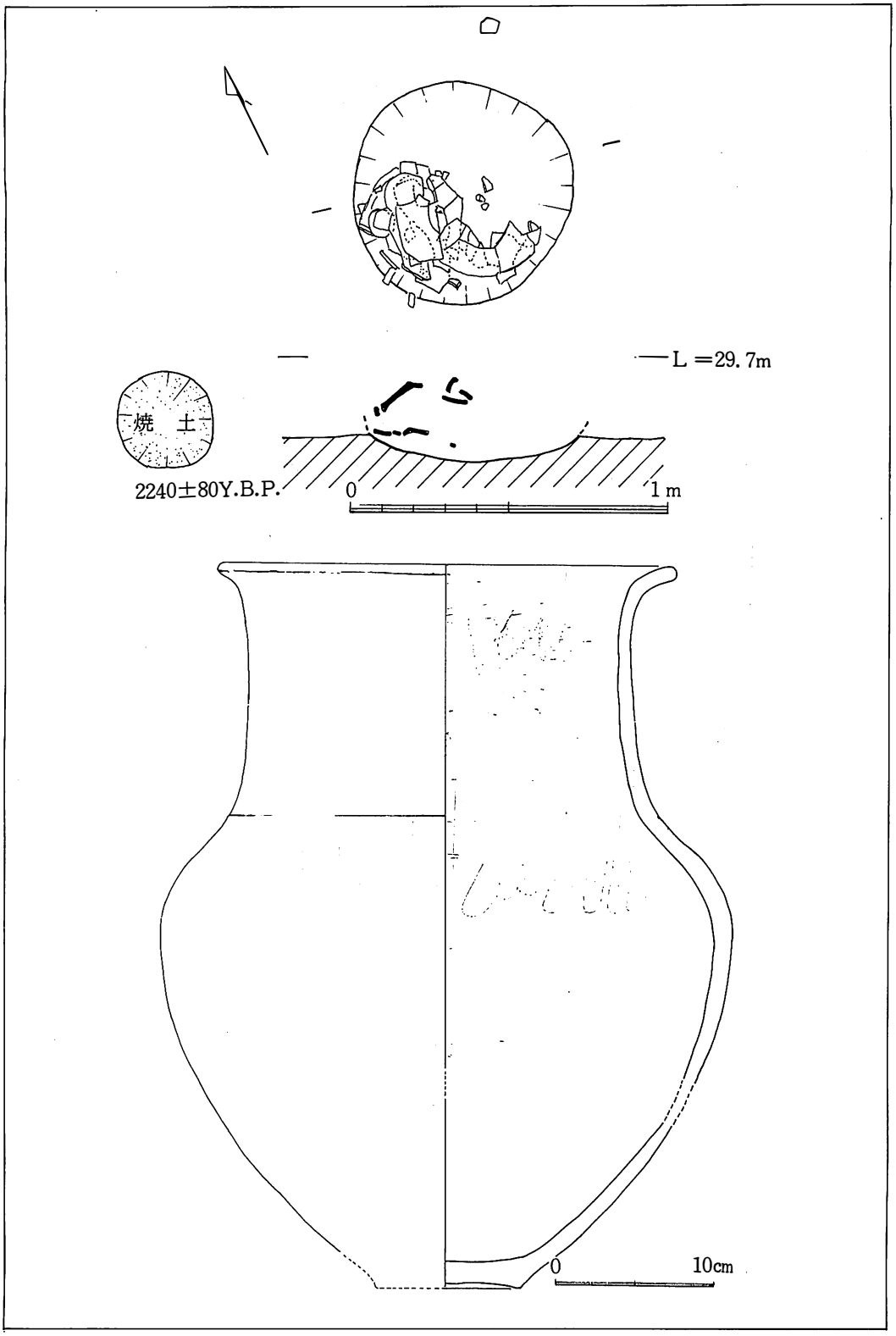
15号甕棺（第37図）

15号棺は、本遺跡の甕棺群の最南端より発見された。隣接の遺構として北２ｍの位置に４号棺が、また、西約１ｍ離れて焼土と木炭が出土した。この焼土は約50cm位の拡がりをみせ、発見の状態から甕棺の埋葬儀礼と関連することも考えられる。そこで木炭を採集、年代考定の参考試料としてC^{14}の測定をした。

15号棺は以上のような関係位置にあったが、その出土状態は良好でなかった。図のように反転攪乱され、はなはだしくは底部が上向きの状態で出



第36図　14号甕棺



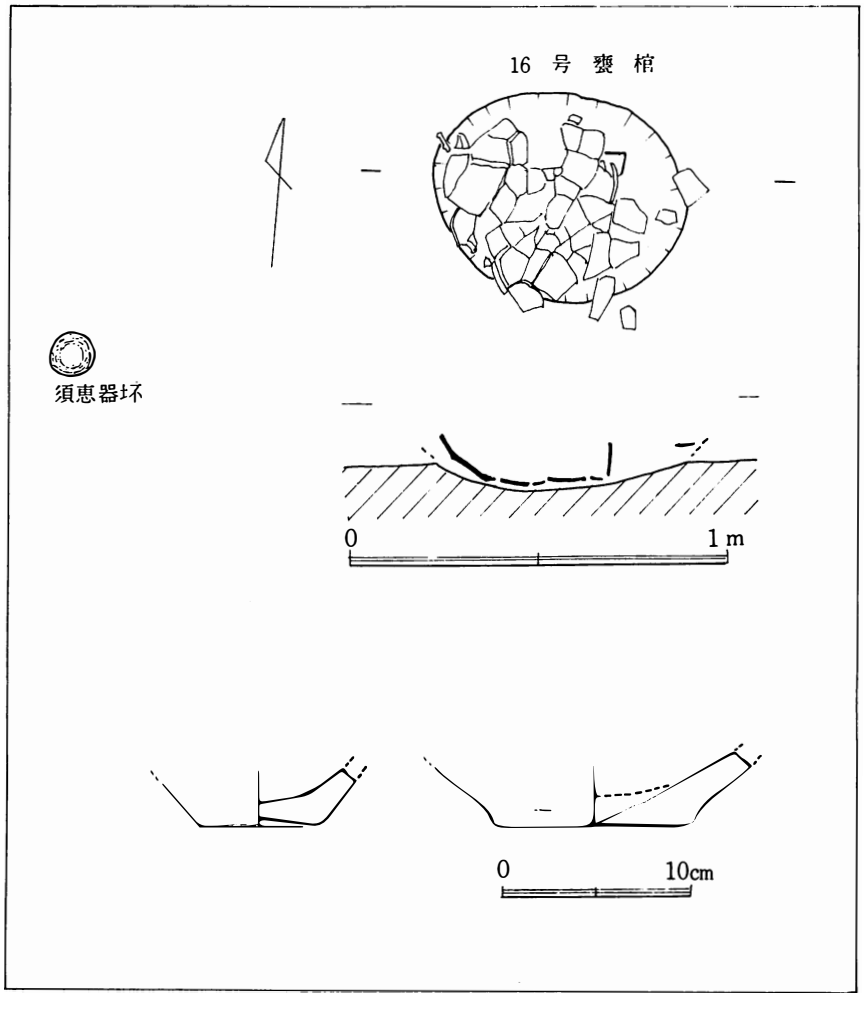
第37図　15号甕棺とその出土状態

土した。

15号棺は底部と胴部より上が完全に接合しなかったが、別図のごとく図示復元することができた。口縁部は緩く外反し、頸の立ち上がりは比較的急である。肩部に沈線一条、胴部は丸くなだらかな線を描きながら底部にいたる。底部は上げ底気味である。器面は篦磨きによる整形手法を多用し、内面には指による撫で仕上げがみられる。口縁径28.5cm、最大胴径36cm、復元による器高45.2cmを計る。

16号甕棺（第38図・第39図）

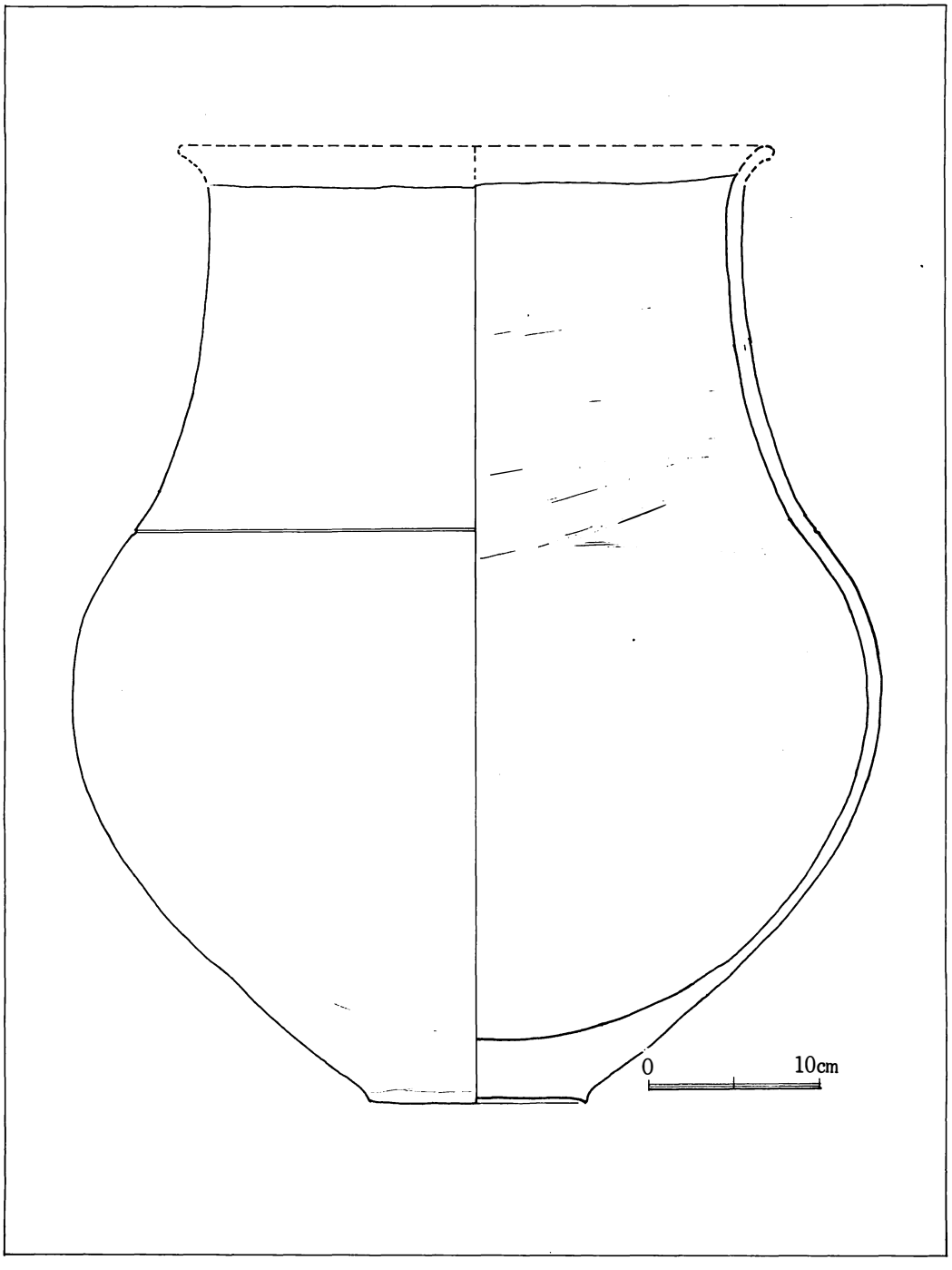
16号棺は甕棺群の東南域から出土した。この甕棺は破砕散乱し、保存状態は必ずしもよくなかった。しかし、下甕の底面は壙底に接していて、埋葬時の状態を示していた。この棺の攪乱の中に若干の他の甕の底部が発見された。上甕の状態は明確でないが、下甕の口縁かぎとりの模様から、合口甕であったものと考えられる。



第38図　16号甕棺の出土状態

棺体は口縁部の外反する部位から欠失し、甕の全容は明らかでない。欠かれたあたりから、わずかに外反するものとみられる。これは上甕を装着する都合上、意図的に破砕されたことが推定される。肩は比較的立っていて、肩部に沈線一条があり、よくこの時期の特徴を示している。胴部以下

はよく残り、底はかなり厚い（3.5cm）。土器の焼成良好。器面は篦磨きされている。現器高55cm、口縁径推定23.6cm、最大胴径47.0cmである。



第39図　16号甕棺

その他の弥生式土器（第40図～第43図）

沈目立山遺跡から前記16基の甕棺のほか、幾多の土器が出土した。土器は従来の観念に従えば弥生前期が大部分で、ついで中期の土器が若干出土している。No.21～No.22のあたりから甕棺群が発見されたがこの地域の甕棺発掘にしたがい周辺からも出土した。第40図と第41図はそれで、なかには本来甕棺であったものが破壊され、周囲に散乱したものもあることが考えられる。17・18は13号甕棺のところから、9号棺の南から19が、4号棺の付近から20～22が、15号棺の東付近から23が、また4号棺と15号棺の間から24、3号棺の南付近から26が出土した。また、28～30は16号棺の北から一括出土した。25の底部破片は12号棺の直上から出土し、調査時甕棺が重復して埋まっているのではないかとして注目した。しかし、25をその状態から1基として取り扱わなかった。27は甚九郎山古墳周溝内より出土したもので、元々甕棺群のあたりにあったのが、周溝に埋没したものとみられる。

No.22～No.23の間は、甕棺地域についで多く出土した。それは一つに、甕棺地域に隣接しているという位置的関係にもよろう。31のごとく肩部に施文した大型の破片が出土したが、これは別の意味があろう。31～39はこの地域出土の土器片である。

No.23～No.24から40～44の土器片が出土した。このうち40・43は住居址とみられるところから出土した。

この他、45・46は2号溝より、47はNo.27～No.28、48はNo.28の付近からそれぞれ出土した。

壺形土器　1・2・16・19・25・31・37・40・42・44は壺形土器の各部位で、中にはかなり特徴的な破片もある。1、42の肩部には刻み目のある突帯一条がある。この壺は1号棺の下甕に近い。2は口縁部端末の部分で、刻み目が端末上下をめぐる。同類の施文手法を持つものに1号棺上甕と2号棺があるが、これは別個体である。31は肩部に斜線の組み合わせにより、網目状文様が、その上下をそれぞれ二条の沈線で仕切っている。37も胴部から肩への破片で、三条の平行沈線、その下に二重または三重の弧文がめぐる。弧文は破線からなっていて、普通の重弧文と異なっている。40は肩部に四条の沈線文がめぐり、その下に重弧文をめぐらすもので、破片の一部に文様の一部がのぞいている。

その他底部の14・16・25・44の各土器があるが、いずれも弥生前期とみられる。

甕形土器　3・4・6～18・20～24・26～30・32～36・38・39・41・45～47の各土器は甕形土器である。これらの土器片は、いくつかの類型に分ることができる。3・21・32～34は口縁が緩く外反し、肥厚せず、端末に刻み目を付すタイプである。これは北九州で如意形口縁と呼称されている土器の変化形態とみられ、器面は平滑に仕上げられ、突帯は口縁下に一、二条つくものとみられる。ついで4・6～13・17・20・27・30・35・36・39は口縁部が肥厚し、断面が三角形をなすもので、突帯上は刻み目をめぐらせている。突帯は口縁下に一、二条あるものとみられ、器面には条痕などがみられず、いずれも平滑に仕上げられている。6～13は上面が平

坦になり、弥生の中期への移行形を示している。なかでも９～12は刻み目も粗く、中期的なものとみられる。41の口縁断面はこの遺跡の中では特殊で、外への膨らみがない。また、15は形態の上から前期の底部とみられる。22・24は口縁が肥厚し、明らかに中期に位置づけられるもので、刻みの施文技法にも前期の各土器と違っている。26は底部の破片であるが、幾分上げ底になり、24などの底と組み合っても不自然でない。45～47は口縁上面がしゃくれ、熊本で呼称されている黒髪式土器の範疇に入るものとみられる。この各土器の口縁下には突帯ないし沈線はみられない。29の土器片は、弥生中期の底部で厚く、底は幾分上がり気味、外面に篦均しのあとがみえる。

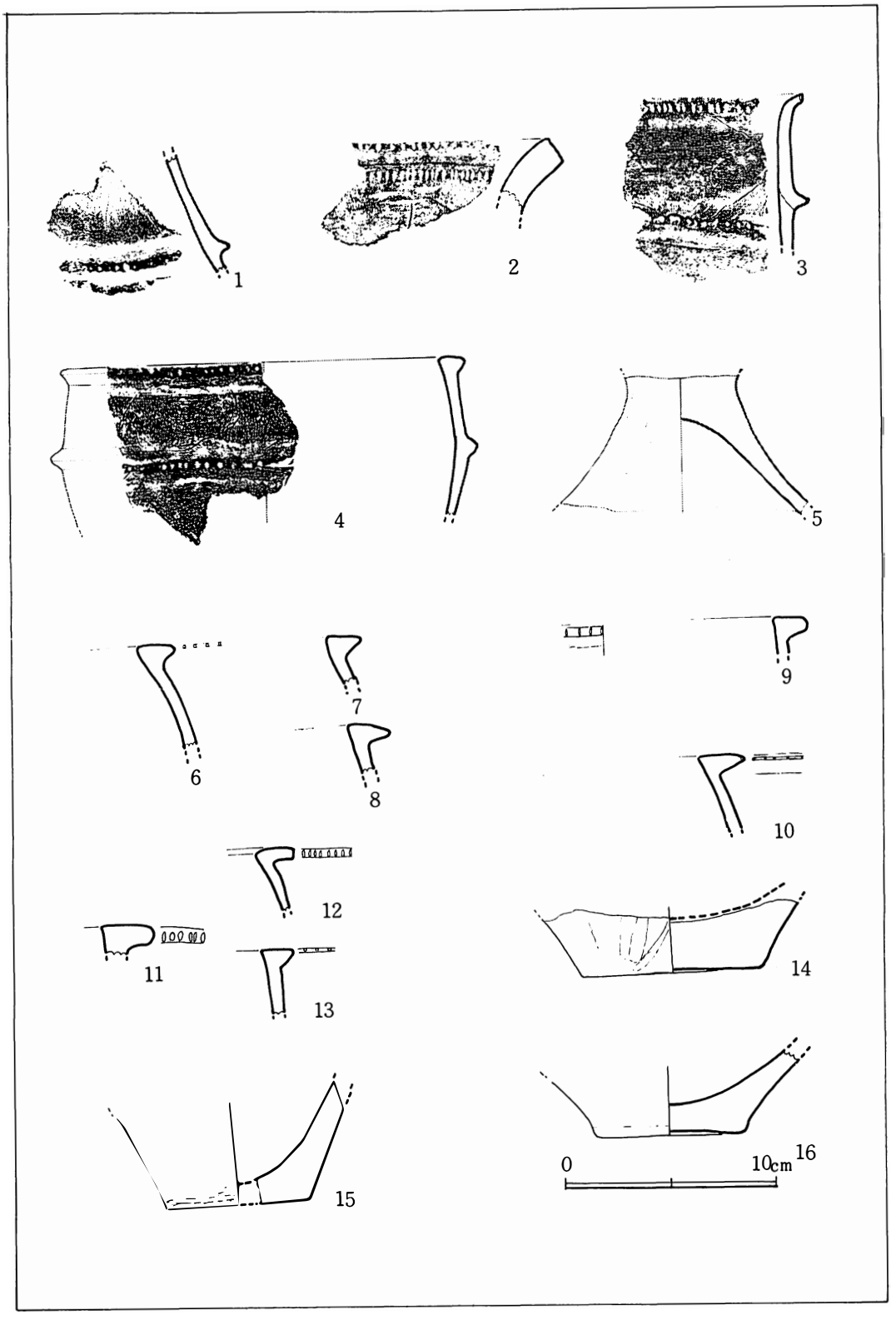
蓋形土器　５は蓋形土器で、両端が欠げている。器面は平滑、篦均らしにより磨研されている。弥生前期のもの。

高坏形土器　48は高坏の口縁部で、43も高坏ではないかとみられる。48は口縁の状態からして中期のものとみてよかろう。43は細片で、甕の破片ではないかとも考えられたが、高坏の坏と脚の接合部ではないかとみられる。

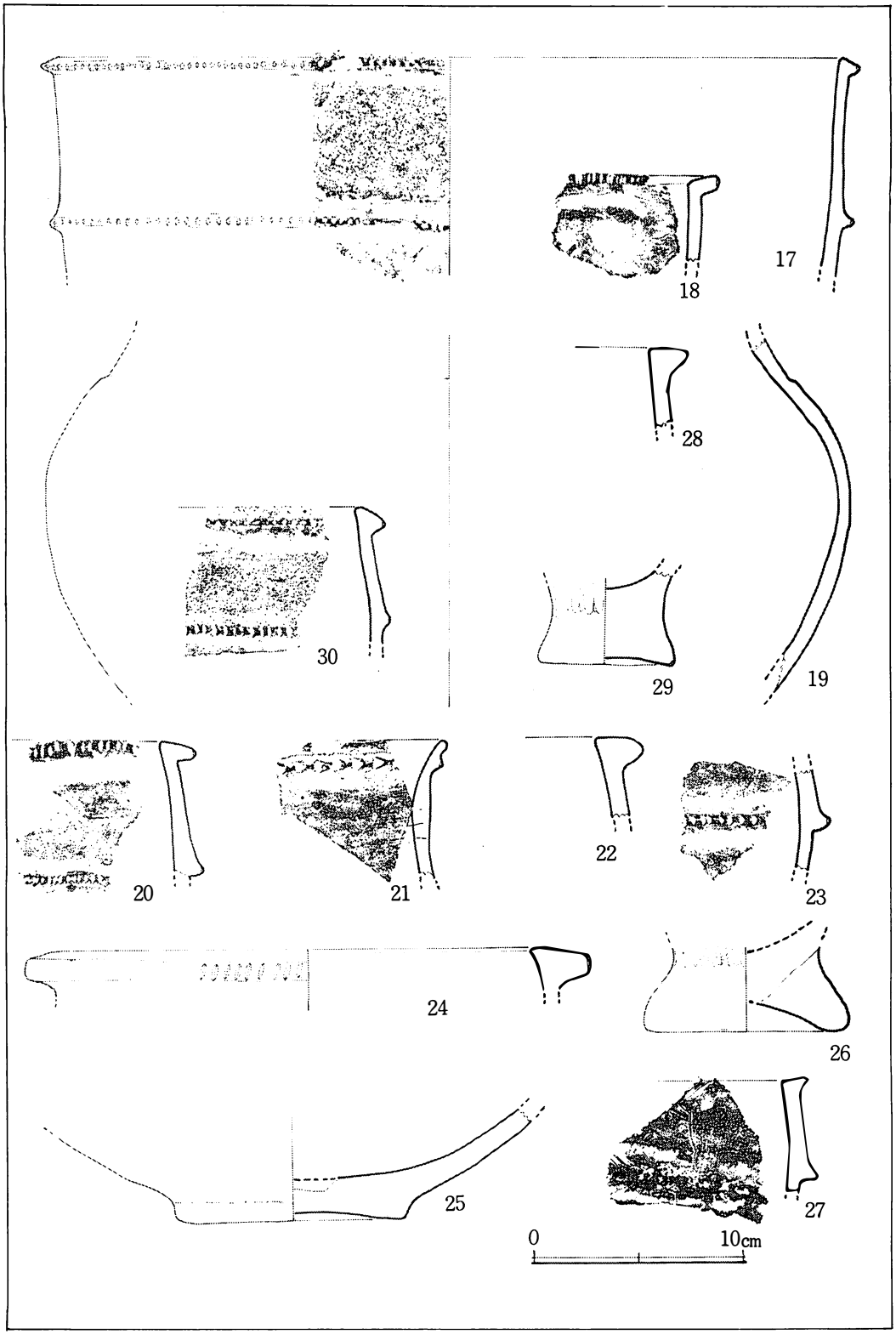
住居址（第44図）

No.23の北東部から楕円形プランの竪穴が発見された。長軸が西南から東北へ向き、4m×2.3m、西の部分は新しい（歴史時代）遺構により壊されていて、床面の拡がりはあいまいであった。竪穴の掘り込みは約10cmほど確認されたが、これが元々のものであったかどうか疑わしく、新しい遺構の重復により削られたことも考えられる。竪穴内の床面は締り、住居址として使用されたことが考えられる。住居内には５個のピットがあり、そのうち最も西側のピット（径55cm、深さ１m15cm）は時期の違ったもので、上側に焼土と木炭が、中から須恵器の破片が発見された。住居址の床面近くから、第42図40・43の土器片が出土した。

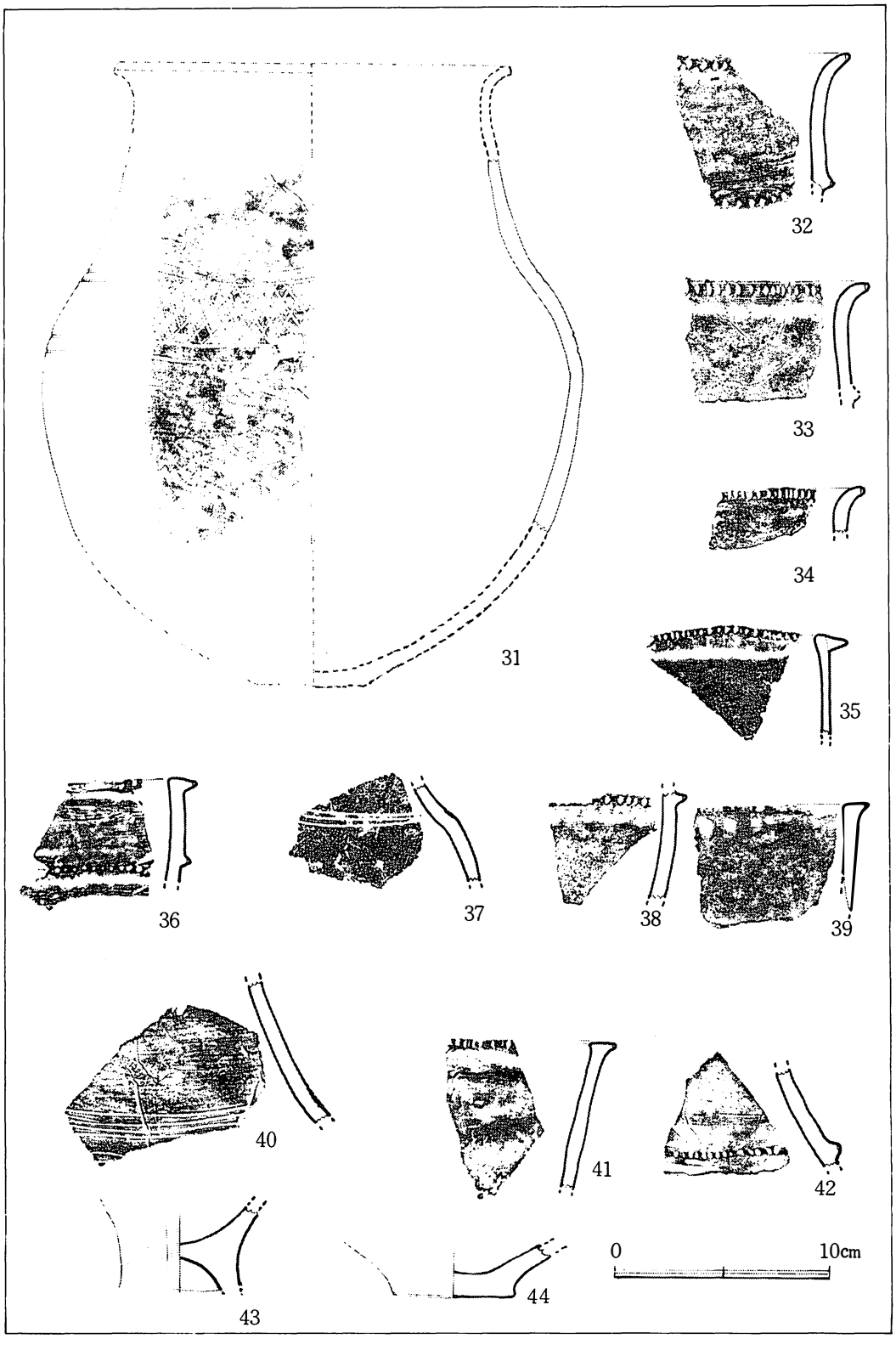
この住居址は新しい時期（須恵器）の遺構が重複しており、必ずしもすっきりした形ではなかった。また、住居址そのものも弥生前期の遺構であるとするには多少の疑念もないではないが、南20数mのあたりに墓地(甕棺群）がある。住居址周辺（No.21～No.23）で発見される弥生前期の土器片は、甕棺と異なり、日用の什器とみられるものが多い。このような事由からも、この遺構が弥生前期の住居址である可能性が強い。



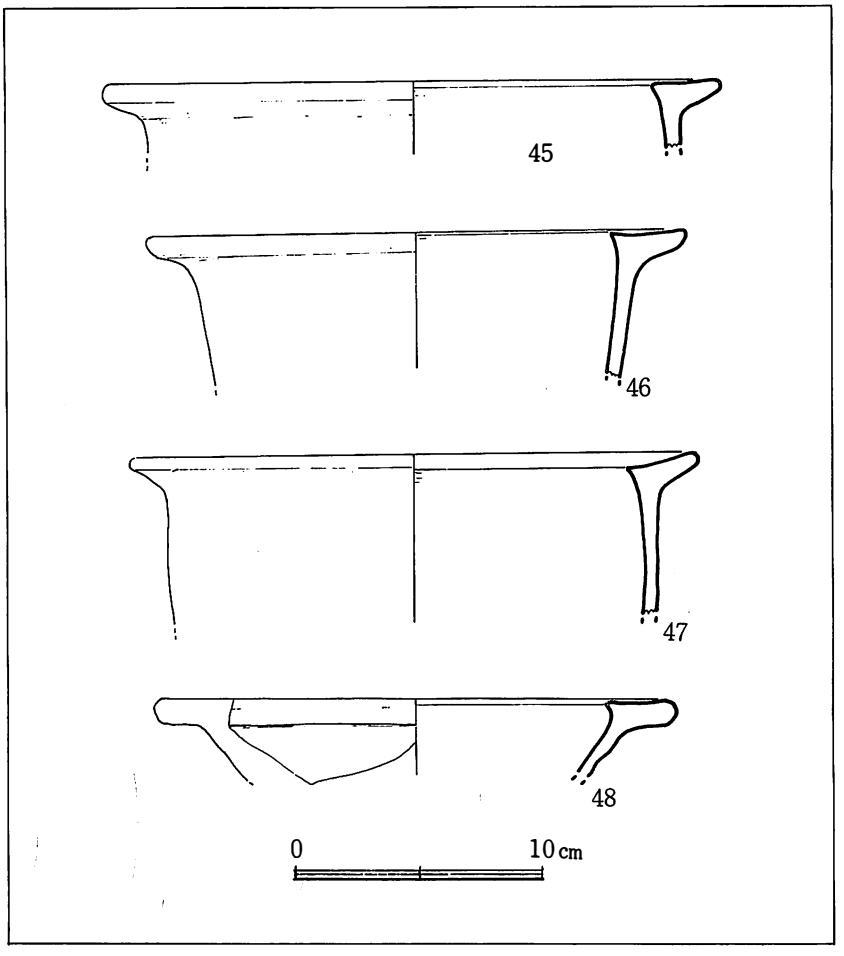
第40図　　沈目立山遺跡出土　弥生式土器 1



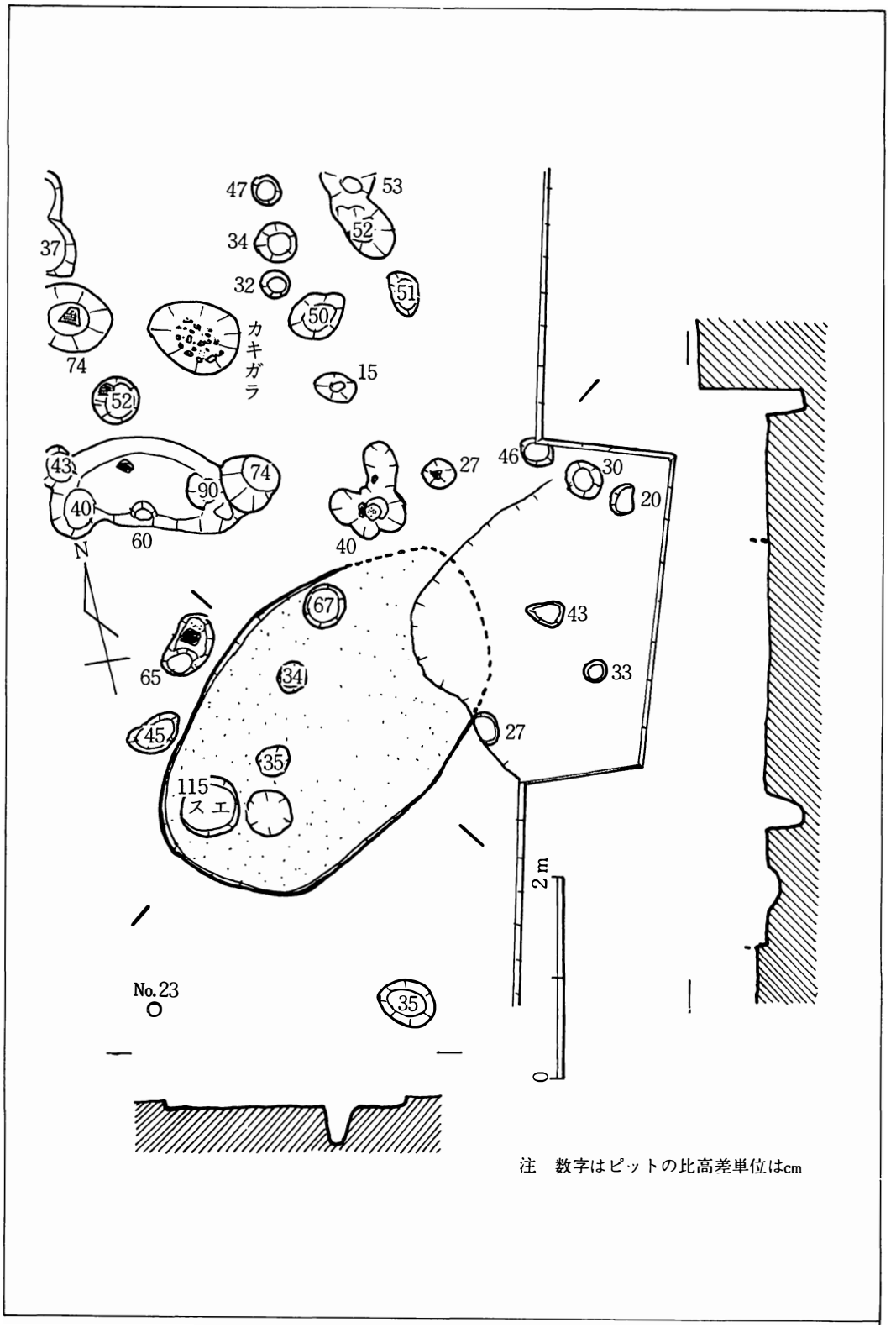
第41図　　沈目立山遺跡出土　弥生式土器２



第42図　　沈目立山遺跡出土　弥生式土器３



第43図　　沈目立山遺跡出土　弥生式土器4

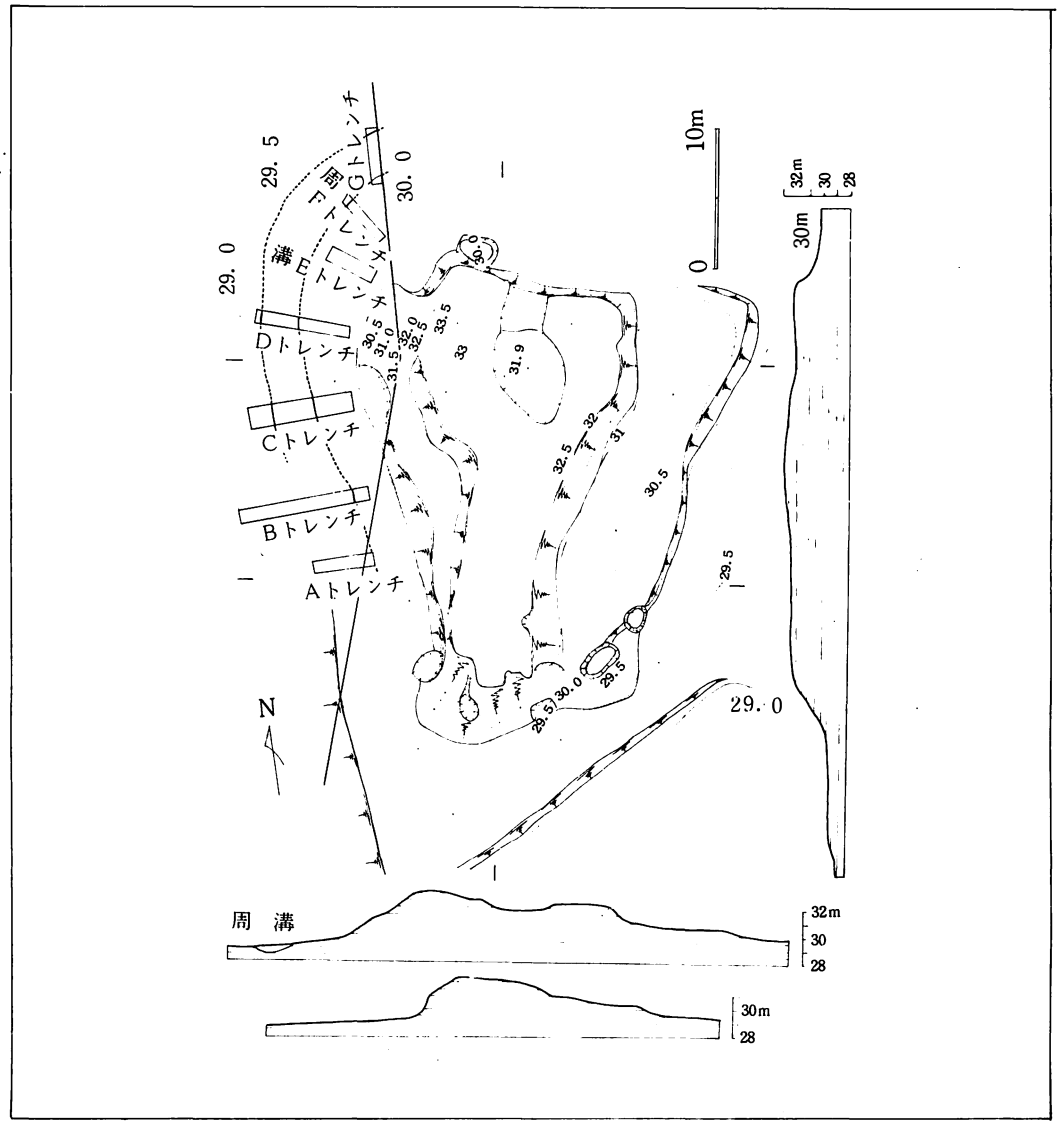


第44図　　住居址とその周辺

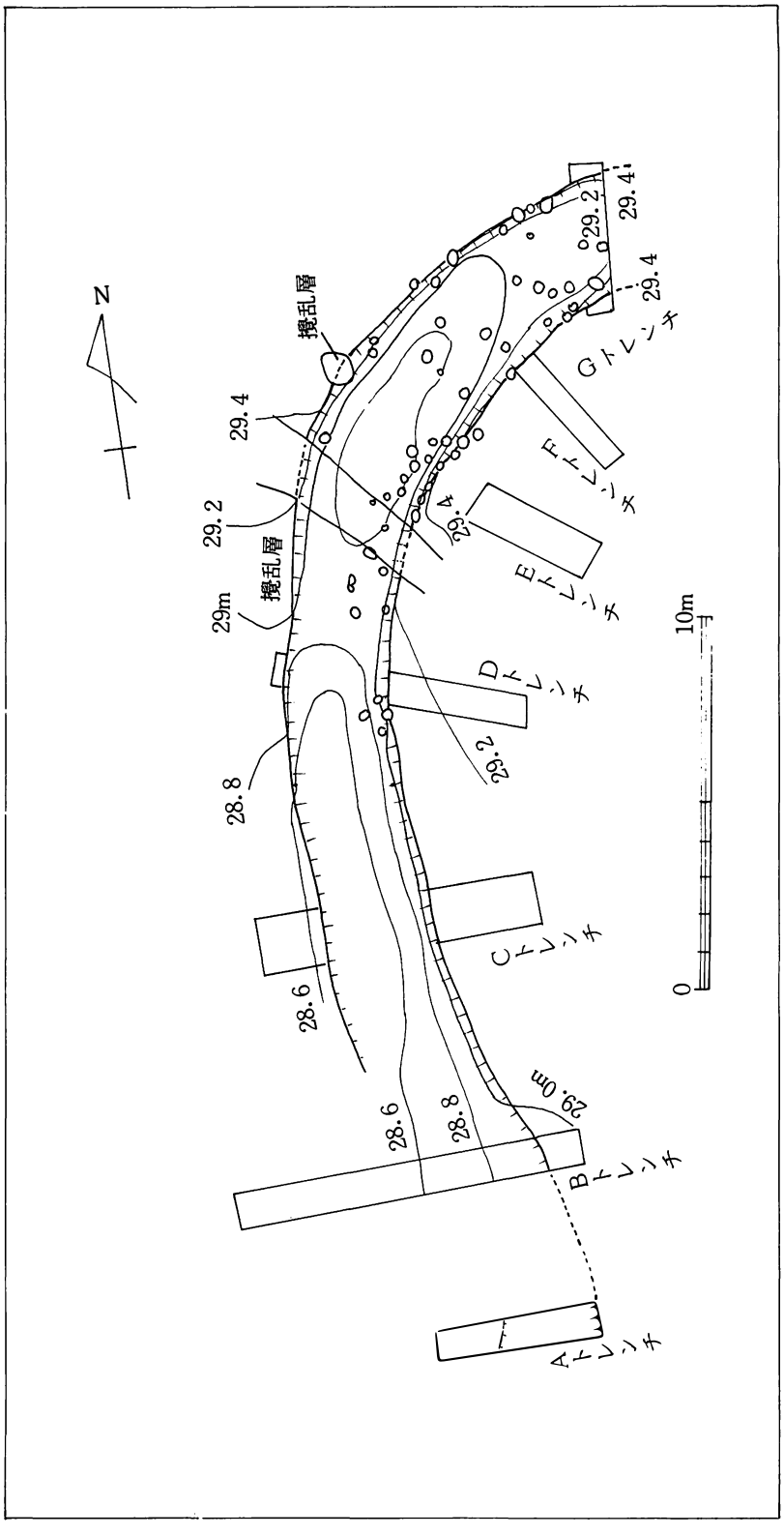
(3) 古墳時代

今回の調査で遺構・遺物は発見されなかったが、この地域にはすでに知られている甚九郎山古墳がある。この古墳は昭和33年に主体部が発掘され、その際装飾古墳であることが判明した。その調査記録は、この地域の町史「城南町史」の中に集録されている。今回、県道改良工事が古墳の肩をかすめる形で計画設計され、古墳周溝部がカットされる可能性が出てきた。そこでカットされる部分について発掘することになった。

甚九郎山古墳（第45図～第47図）
注



第45図　甚九郎山古墳　実測図



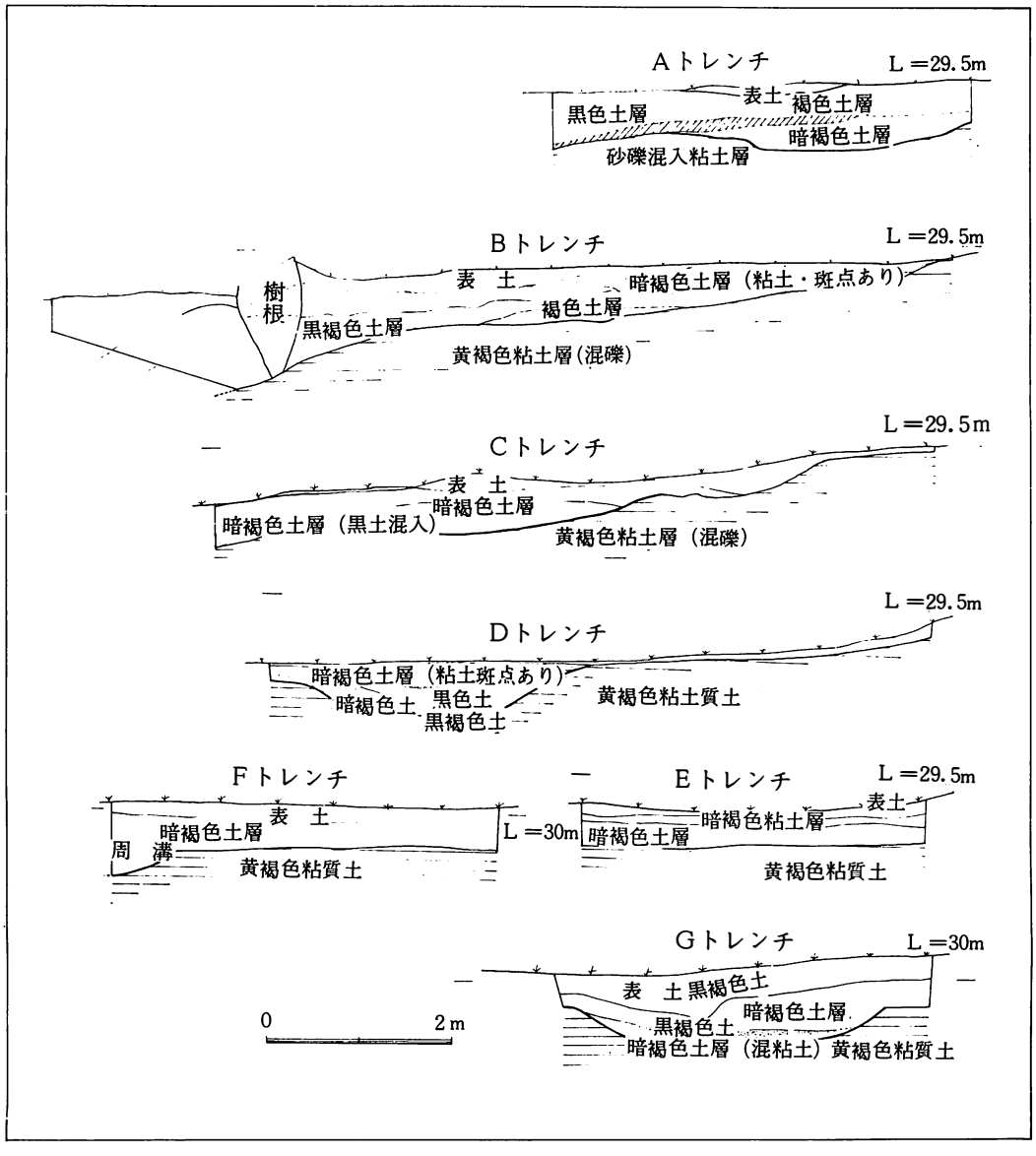
第46図　甚九郎山古墳　周溝1

甚九郎山古墳については、昭和33年3月発掘調査が実施されている。その概要を「城南町史」より抄出すれば、次のとおりである。

古墳は戦時中陸軍航空隊による防空濠、その他による変形があり、ことに後円部に築かれた監視哨の構築は、石室の基底面に達していた。その構築の際、鉄刀、須恵器、鹿皮などが発見され、それは考古学者の故小林久雄氏らも実見したが、今では遺物は散逸している。古墳の主軸はほぼ南北に向き、計測値は全長36.9m、後円部径21m、前方部幅15m、後円部高さ4.5m、前方部高4mで、葺石・湟は認められなかった。石室の中で原位置を保って

いるのは、玄室南側の切石（173×50cm）の側壁のみであった。残った床面より、玄室平面形を奥行約３ｍ40cm、幅約２ｍが復元された。古墳の開口方向は、主軸の方向に対して約77°Ｅ、床面は現在の墳丘の基底より79cm低い。石室の長軸は東西で、南17°に羨門があった。また出土遺物は、須恵器の小片、鉄の小片が羨門近くで発見されている。

以上は甚九郎山古墳調査（昭和33年）の概要であるが、報告はさらに「同石（側壁）の上縁より約３cmと11cmのところに、一条の沈刻細線が横走する。この帯状の区画内には、うすく鉄丹が塗彩され、そのやや左よりに図形不明の赤色の文様がある。さらに細線下にほぼ等間隔に白・青の三個の装飾が認められる。そのうち左端は、径５cm余の白地の円形であるが他の二個の青色の形状は不明



第47図　甚九郎山古墳　周溝２

である。また北側壁の一部と認められる一石にも、同趣の装飾が認められる。」として、石室内の装飾文の状況が記されている。

そこで、今回の調査では古墳の周溝を確認するために、A～Gの七条のトレンチを設定した。それによると、第47図に図示したごとく「周溝」の存在することが確実になり、なかでもDトレンチには鮮明な姿で観察された。周溝内の土の堆積の状態もレンズ状に層をなし、新しい撹乱はなかった。周溝の落ち込みは必ずしも明確でなく、墳丘側でC、Dトレンチのように、地山の上に数cmの表土をのせているだけのところもあった。このことは恐らく開墾などにより、削平されたものと思われ、現況が直ちに墳丘の立ち上がりを示してはいない。

試掘溝により周溝が確認されたので、溝を全掘することにした。第46図は溝の全容である。現況で溝幅3～4.8m、前方部になるに従い溝の形があいまいで、漸次消滅する。このことは一に地形上の制約、全体図にみるごとく西南部が急傾していることによろう。溝は緩いU字形の断面をなし、地表までの深さはCトレンチ64cm、Dトレンチ56cm、Gトレンチ92cmであった。溝底はほぼ平坦で、幾分南側が低くなるようである。溝を掘り、精査した結果、点々と小ピット群が発見された。ピットは黒い土が落ち込み、少なくとも新しい撹乱とは考えられず、周溝と同時代のものとみられる。

周溝の発掘により少量の遺物が出土した。しかし、いずれも新しい時期の流入で、古墳に伴ったものではなかった。遺物の出土層位も溝底より一つ上の暗褐色土層で、中から土師片（高台付)、フイゴの羽口片や弥生式土器（前期）が出土した。これらの遺物は北側の甕棺群のあたりから運ばれ、あるいは流入したものとみられる。この中には近世の遺物はみられず、遺物の状態から平安期頃の堆積と考えられる。このことは、平安期頃までの周溝状態を推知する資料となる。

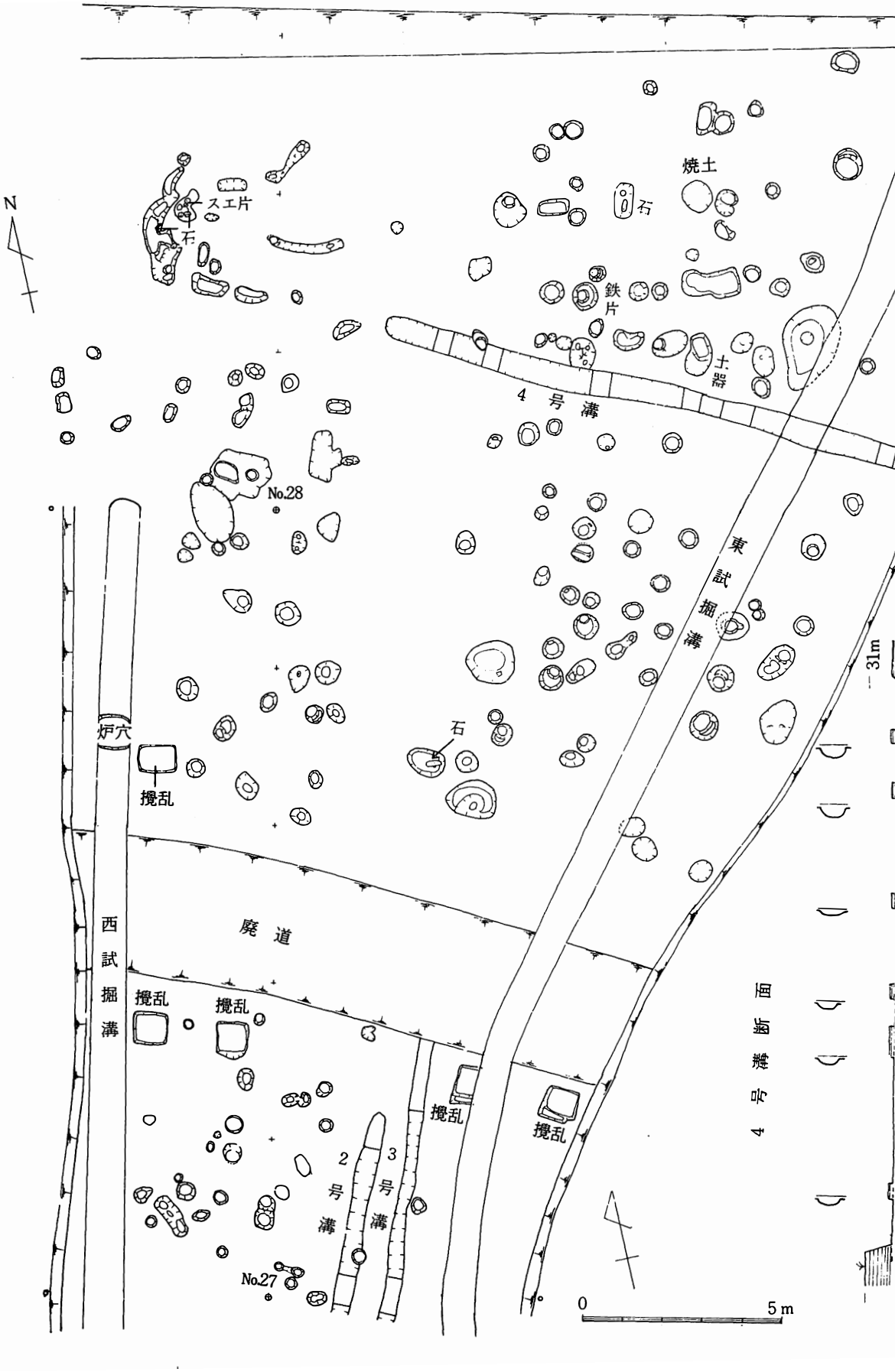
先に略述したごとく、昭和33年の調査の結果、墳丘36.9m、後円部径21m、前方部幅15mが計測されている。今回の調査により古墳の西側発掘の結果、古墳は周溝をめぐらすことが確実になった。そこで、さらに未掘部分の周溝の調査をすることになれば、以上の数値は大きく変更されることが余儀なくされるだろう。20年の径庭を経て、周溝部を調査する機会を得た。長年の年月の間には地形の変貌、墳丘が変容しているが、将来周溝の全掘をすることになれば、甚九郎古墳のかなりの部分が明らかになるものと思われる。

注．甚九郎山古墳の名称の由来について調べてみた。それは、城南町下宮地在住の旧家甲斐氏の先々代、甚九郎氏に由ることが知れた。戦前この一帯は、甲斐家の持ち山であった。

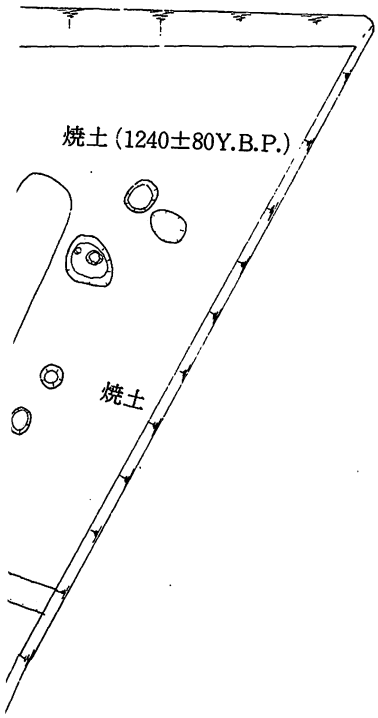
古墳時代の遺物

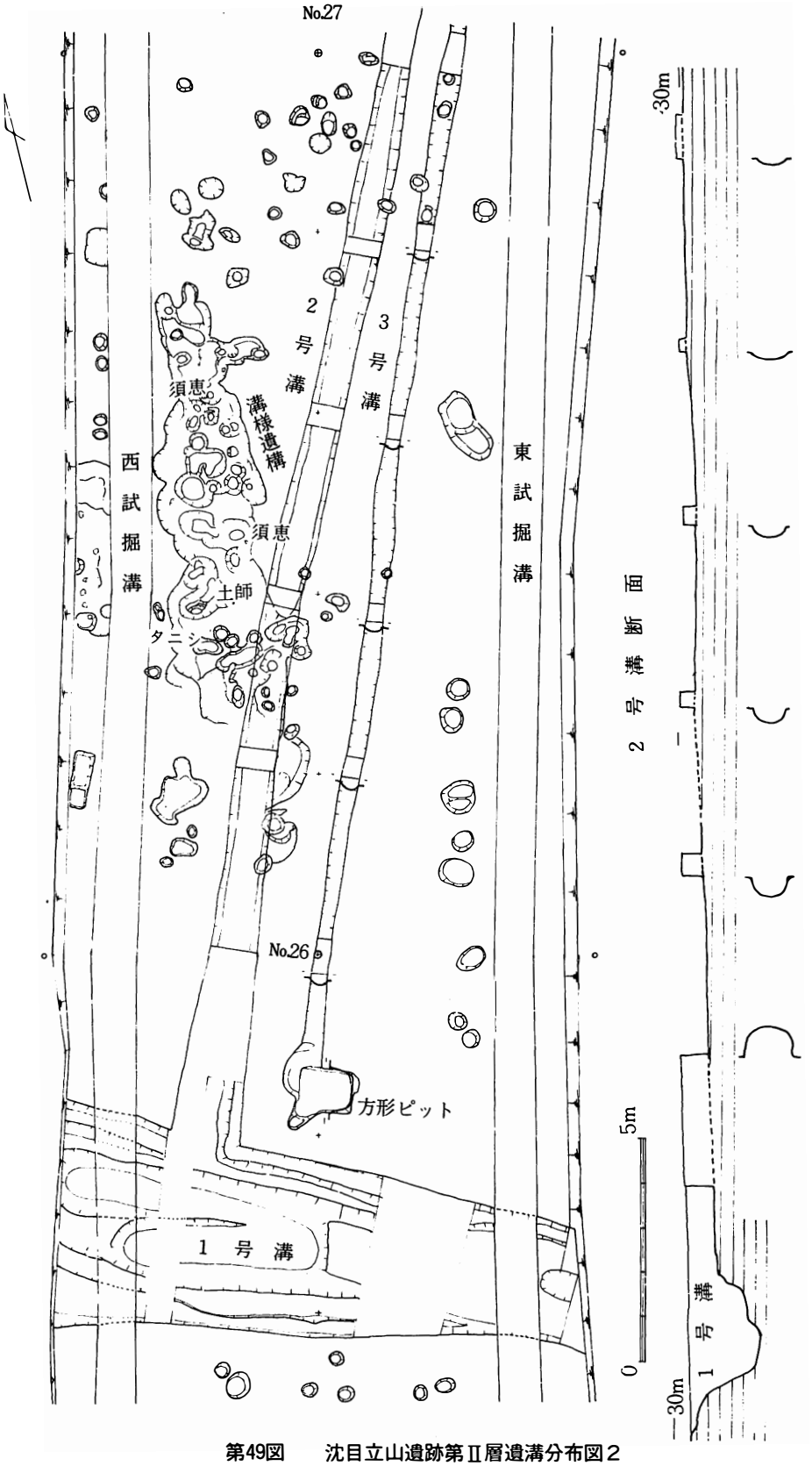
広域な面積の発掘により多量の遺物が出土した。しかし、確実に古墳期に属するとみられる遺物は極めて少なく、さきに調査報告された「沈目」「沈目奥野」とは大きく遺跡の性格を異にし

ている。第54図Ｓ１はその少ない例で、甕棺群の発掘過程に16号棺の南西１ｍのあたりから出土した坏である。口縁径10.8cm、高さ４cmで一部欠失しているがほぼ完形である。底が幾分上がり気味、窯印のひつかきがある。つばのあたりに焼成時の灰かぶりがみられ（立ち上がりの部位には灰かぶりなし）、このことは蓋をかぶせ、伏せた形で土器を焼いたものとみられる。

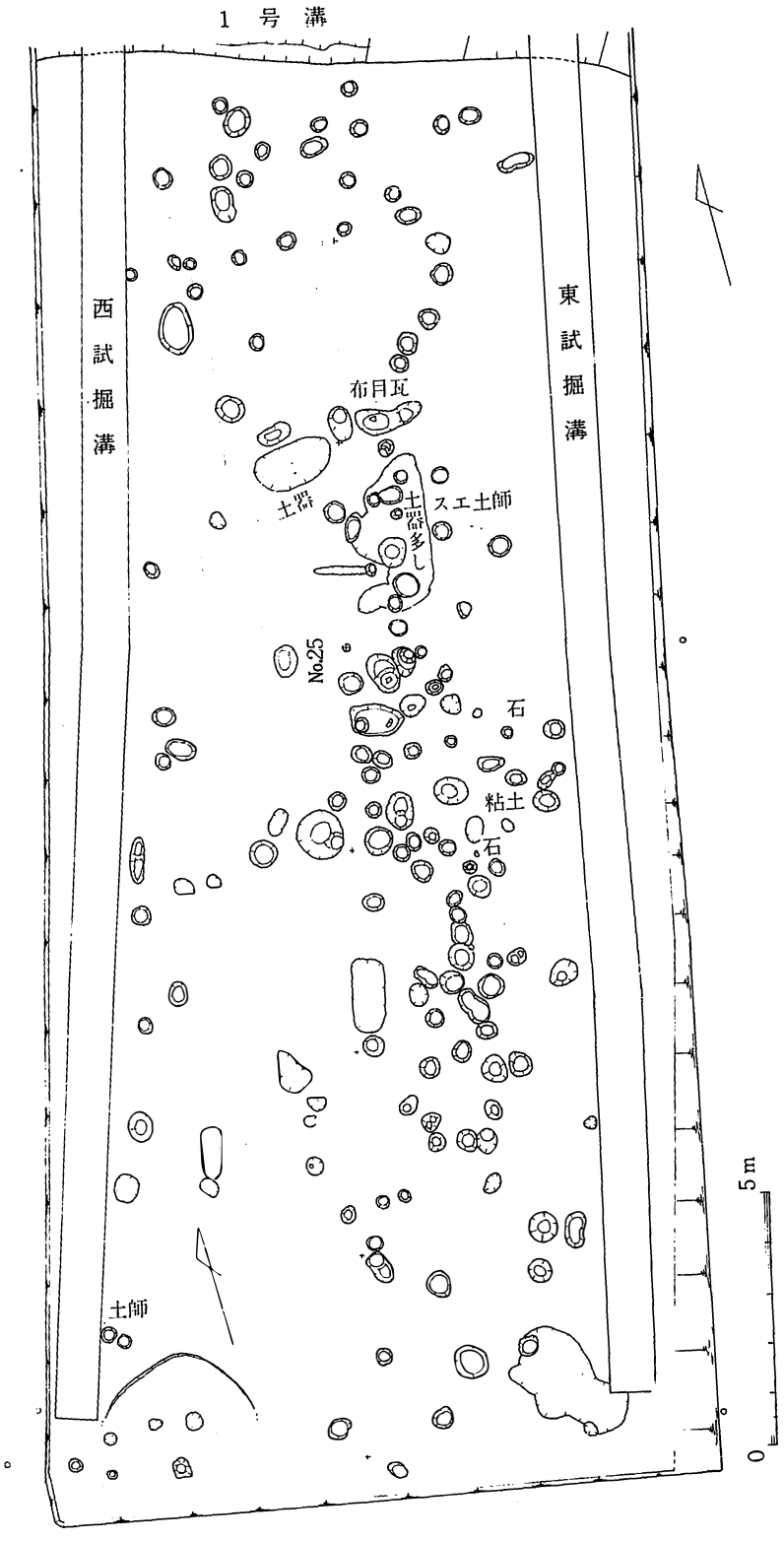


第48図　沈目立山遺跡第Ⅱ層遺構分布図１

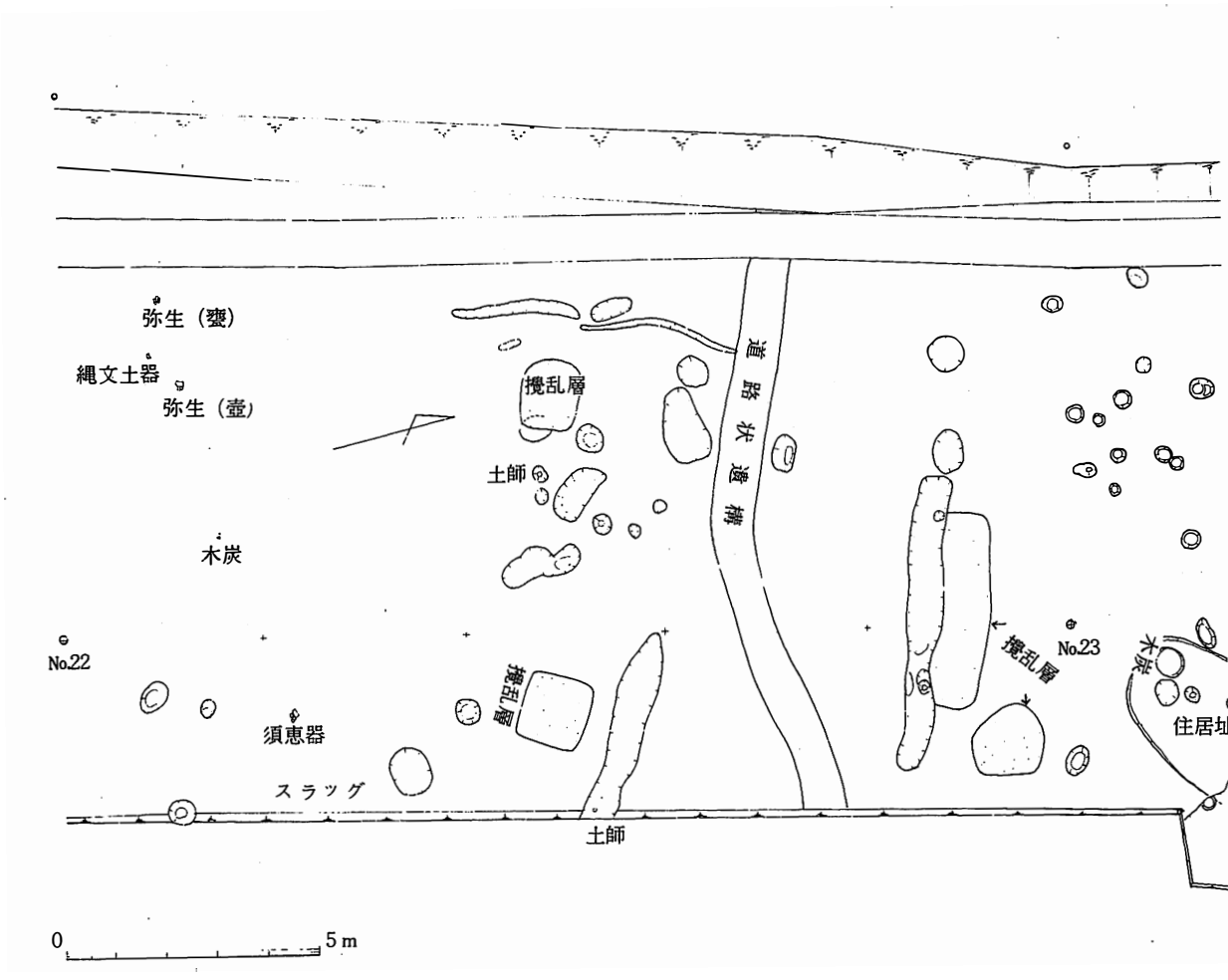

焼土（1240±80Y.B.P.）
焼土



第49図　沈目立山遺跡第Ⅱ層遺溝分布図２



第50図　沈目立山遺跡第Ⅱ遺構分布図3　No.24



第51図　沈目立山遺跡第Ⅱ遺構分布図４

土師（甕）
須恵土師
土師
石
土師
石
石
土師
石
スエ
スエ
石
土師
石
貝
土師
石
木炭
縄文（底）
須恵器（S15）
No.24

(4) 歴史時代

本遺跡は縄文時代より、弥生・古墳、そして古代あるいは中世にわたる複合遺跡である。発掘は外見的観察より遥かに予想を超え、予想以上の広域にわたる大遺跡で、中でも古代に属する遺構・遺物が多かった。遺構として捉えることが出来たものに溝(4条)、溝様遺構、道路様遺構、製鉄関連遺構、それに多数のピット群および焼土が発見された。出土遺物はほぼ全域にわたって歴史時代(ことに古代)の須恵器、土師器が出土した。以下これらの遺構・遺物について説明をする。

溝（第48図・第49図）

1号溝（第52図）

No.25とNo.26の中間あたりに発見された。これは試掘の際、位置等についてあらかじめ確かめられており、北より漸次発掘区をひろげ、初年度調査の終り頃（昭和51年3月）調査を完了したものである。それによると、溝はほぼ東西にむかって走る。溝幅は西ほど広くなり、西端で4m70cm、東端2m50cmである。溝は中央部が一段と深くなり、下底部は粘土質の不透水層を深く掘り込んでいた。東側は現地表より90cm、東端より漸傾するなかで5m50cmのあたりで急落、40cm程の段落ちとなり1m80cm位の深さになる。溝底は平坦面をつくって西に延び、約1m80cm位で二股に分れる。南側の溝底は4m30cmほど、一方北側の溝底は6mほどに延びる。この状態から1号溝は「水溜め」ではないか、というような想定もでてくる。

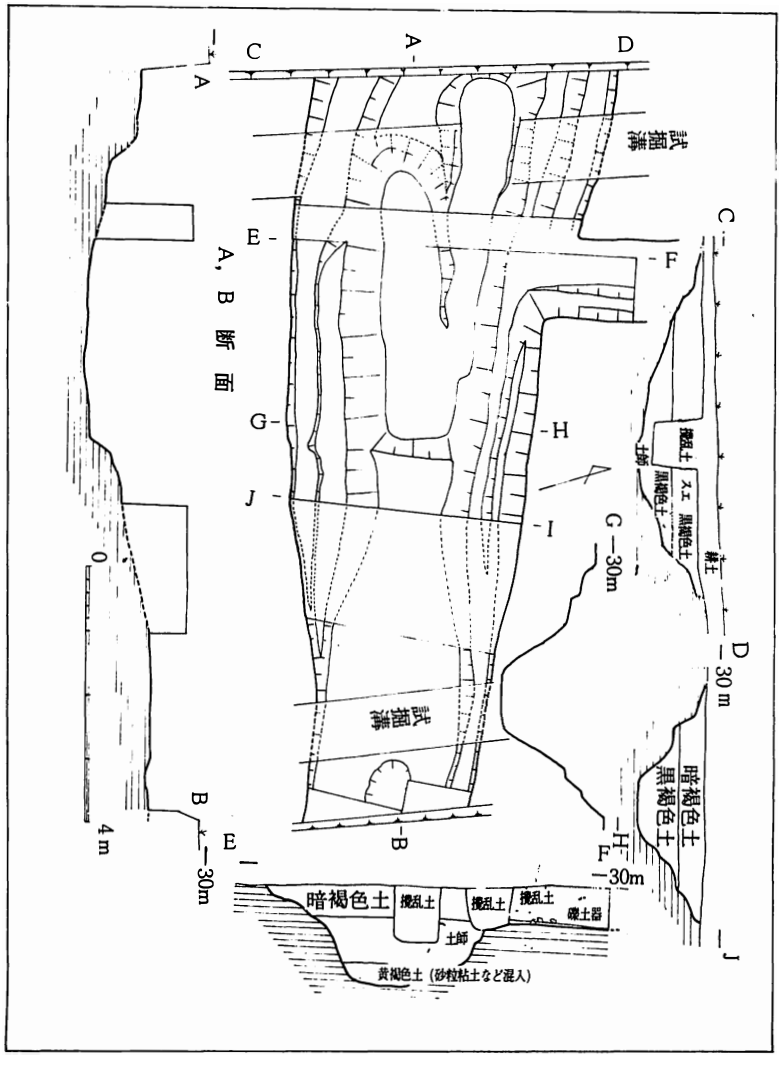
溝断面はA－Bの縦方向の断面のほか、C－D、E－F、I－Jの横断面の観察につとめた。C－Dは道路敷の端にあたるため、地表より、溝の土層の堆積の状態が観察される。それによるとI層は20～30cm、現代の耕作土である。図のように部分的に深い掘り込みがある。それは、甘藷とか里芋の貯蔵用の窖としたものとみられる。Ⅱ層は黒褐色土層で、約50cmの層厚を示し、なかには須恵器片などの遺物がみられた。このⅡ層は場所により多少の色調の違いはあるが、E－F断面のように暗褐色になる部位もある。Ⅲ層も黒褐色、これはⅡ層よりいく分濃色で、断面の北よりでは分離困難である。この層にも土師器などの破片がみられた。溝の落ち込みは、この地域の第Ⅱ層として取扱った黒土層からである。それが黒土層のどの部位か、上部かそれとも中位かについては観察により見分けることは困難であった。

1号溝には、これと直交する形で北より2号溝が流入する。溝中の層積の状態と、2号溝との関係を知る手掛りを得るために幅50cmの畦を残した。E－F断面はそれで、層序についてはC－D断面と変りない。図のように溝の交会点に攪乱があり、土層の観察の障害になるが、それは目障り程度で、大きな障害とはならなかった。2号溝の溝底には礫および土器片が沈積している。2号溝中の土層はⅡ層の土壌が大部分で、1号溝のⅡ層と本質的に変りなく、同じ性

格の土層とみられる。Ⅱ層とⅢ層との界面は、水流による溝埋没を示すものであろう。この状態から１号溝と２号溝は、ほぼ同時期に機能を果したものとみられる。Ｅ－Ｆ断面によれば、Ⅳ層目の堆積土がみられる。この土層には特徴があり、Ⅲ層の土層より色調が明るく、黄褐色土で充満している。層中の土壌を具さに検すれば、砂粒と粘土が混入している。これは明らかに濠底などの堆積土にみられる現象で、ある時期に水が溜っていたことを示している。それは間接的に１号溝の性格、機能を示すものとして注目される。

溝は横断面にみられるように、態様として逆梯形をしている。底面は幅１ｍ前後、約55度の角度で立上がる。途中２段の段がつく。このようにして犬行り状のステップのつく溝は、古代中世の溝にしばしば見られるもので、溝の掘り方と関係があるのかもしれない。

溝の機能について、水溜めではないかと考えられるのであるが、後述するように、この地域は古代の集落址とみられる。住居地域には必然的に「水」を必要とする。台地上の生活址、生活用水を何処かに求めねばならない。湧水、水流は台地の下端の水田面まで下らねばならない。比高差はゆうに20mある。台地上に井戸跡は発見されていない。また粘土層の下は砂礫層(この地域では)でこれを掘り抜き、20m余の井戸を掘ることは古代の井戸掘り技術では困難であろう。そこで、このように溝をめぐらし、湛水施設をもうけ、生活用水を求めたとして



第52図　１号溝（水溜め）実測図

も不思議ではなかろう。斉藤林次氏も文化課によせられた「地質調査報告」の中で、１号溝を「天水を貯溜して利用していたのではあるまいか」と推定しておられる。

２号溝（第49図）

この溝は北より南に向って流れ、やがて１号溝に合流吸収される。溝は直線状にはしり、その長さ30mを計る。溝幅は50cm～１mで、南になるにしたがい広くなる。溝断面はU字形、北より南になるにしたがい低くなり、水流が１号溝に流れ込めるようになっている。溝中から土器片が多量に出土したが、細片が主であった。上面から陶片が数片発見されたが、大部分は土師・須恵器の類であった。溝中の堆積土は黒褐色で、１号溝のⅡ層に対比される。ここでも溝の落ち込みは、同色に近い第Ⅱ層の黒色土からである。時期的に１・２号溝は、同時と考えられる。

３号溝（第40図）

この溝は２号溝と平行し、東側を東西に走る。溝は２号溝より幅狭で、幅30～40cmである。溝断面はU字形で浅い。溝底は比較的平坦で、高低差は少なく、水溝として利用したとなれば、水が北流するのか、それとも南流するのか判然としない。３号溝の南端には70cm×１mの掘り込みがあり、一段と深まり、あたかも吸水孔の如き状態を呈している。溝中には少量の遺物が流入して散発的に発見された。３号溝は発掘時の感じとして、２号溝より若干新しいのではないかとみられた。

４号溝（第48図）

この溝は２・３号溝と異なり、流れの方向を東西にとり、西より東流し調査区域外に及ぶ。溝幅約70cm、溝断面U字形で形態的に２号溝と同じである。ほぼ直線状に走る４号溝は、約14m50cmの範囲を発掘することが出来た。溝の堆積土は第Ⅱ層の黒色土に近く、黒色土のある面から掘り込まれている。溝の周辺から多数の柱穴（あるいは柱列）が発見されている。溝の機能もこれら集落構成と関連する排水、あるいは２号溝のように集水的機能をもつものとみられる。

溝は１～４の都合４条が発見された。その機能については、この一帯にある住居、集落の排水、集水、さらに「水溜め」としての意図が考えられる。溝の時期については、その掘り込みの状態から、また、溝中の出土遺物からして古代～中世初のものと考えられる。

道路様遺構（第51図）

道路計画線のNo.22とNo.23の間、正確にはNo.22＋13mのあたりに東西に走る道路様遺構が発見された。これは調査の初期、表土剝ぎの段階で異状が認められ、作業員の中から〝どうもおかしい〟と注意を喚起された。それによると、幅１mほど堅く踏み固められた面がある。子細に観察すれば、それが帯状に続き東西の調査域外に延びる。何だろう、その状態を検討した結果

「**古代の道**」ではないかということになった。

道幅は90cm前後、道路予定線の中央あたりで「く」の字形にゆるくカーブする。路面は平坦で、踏み締まり、その固まりは20cmほど下まで達し、かなりの期間使用されたことが考えられる。この道路様遺構の時期を直接物語り、年代を示すものは発見されなかった。ただ、この出土状況、層位の関係から少なくとも近世以降ではない。おそらく古代に属することが考えられた。

道は家と家、集落と集落を結ぶ。果してこの道がどの部位にあるのか、前述の溝同様、社会構成上の一つの機能的な面も考慮に入れる必要があろう。

最近県内では、道路とみられる遺構が各地に発見されつつある。隣接の沈目奥野遺跡、そして益城町古閑南遺跡、あるいは熊本市渡鹿住宅遺跡、大江青葉遺跡などがそれで、これらの各遺跡で発見された遺構は、いずれも古代に属していた。調査事例[注1]の増加は、今後の集落研究に指向性を与えるものとして注目される。

溝様遺構（第49図）

No.26とNo.27の間、２号溝の西側一帯から溝様の掘り込みが現われた。この表現が必ずしも適切ではないが、ここでは溝様遺構として取扱っておく。

この遺構はNo.26＋15mの西側あたりから、入り組みながら南へひろがる。幅約２m、長さ10m余のひろがりをみせる。その間、南にいたって２号溝と重複、２号溝との時間的先後関係を示していた。２号溝の埋没土と溝様遺構の埋没土は、いずれも相似た土壌であるため辨別は困難であったが、充分注意すると溝断面から剝離し、２号溝より溝様遺構が古いことが確認された。

溝様遺構の特徴として、その中にさらに掘り込みがあり、大小のピットが発見されたことである。ピットの中には、確かに柱穴ではないかとみられるものもあり、奇妙な遺構として取り扱いに窮するほどであった。

この遺構の中から土器片が散発的に発見された。須恵器・土師器・黒色土器の破片で、この中の出土物の底部に「墨書銘」のあるものもあった。(墨書銘については稿を新たにし、別項に述べる。)この遺構は異様である。発掘を続けるうち、２号溝に近づくあたり貝殻があらわれる。ピット中に、ただこのピットにだけ貝殻が詰っていた。貝殻は「タニシ」で、他の貝類は含まれてなかった。タニシは総量にして10ℓ ほど出土した。専門家による調査の結果、タニシはすべて**オオタニシ**であり、現在でもこの付近に生息しているとのことである。

この溝様遺構の発見、発掘は初年度調査の終わり頃、３月中旬であった。時あたかも年度末、第２年度調査がいつ始められるともしらない。予算措置など次々と事務手続き、調査以前の処理が必要である。一梅雨放置すれば、火山灰の常として壊れること必定。そこで取急いだため、

充分の調査が出来なかった。

ピット群および土壙（第48図～第51図）

ピット群はほぼ全域から発見された。中でも道路様遺構の北より、現県道のある今次新設道路の交会点までの180ｍの間には全域からみられた。これらのピットは、４号溝周辺、１号溝の南から№24の間、中でも№25の周辺、それに№24～№25の間周辺には濃密な分布をみせ、ある規則的な配列を感じさせる状態であった。

４号溝の周辺は桑園で、中でも、桑の間作に栽植された牛蒡の耕作による攪乱が激しかった。そこで、本来あったピットが破壊消滅していることが考えられる。また、４号溝と現県道との間に、３箇所から径50cm位の拡がりをもつ焼土が発見されている。これはおそらく、この面が生活面であることを示している。これらのことも考え合わせれば、ここに建物があっても不思議ではない。４号溝の両側にあるピットは一定の配列を示し、掘り込みもしっかりしていて、柱穴、掘立ての建物があったと考えられる。４号溝の西外れ、即ち調査区域の西北端には不正円形細長のピットがある。この中には、人頭大で不揃いの石が多数詰っていた。石質もチャート砂岩などの川石で、どういう遺構か明確でない。

№27付近にも柱穴の配列がみられるようであるが、№25周辺の柱穴群は注目される。遺物の出土も少なくない。中には布目瓦まである。ピットの状況から瓦葺きの建造物は考え難いが、掘立ての建物があったとみてよかろう。ピット（柱穴）が輻奏していて、遺構（建物）のプランをおさえることは困難で、充分発掘の結果を生かしきれない憾みは免れない。№25南東側の粘土のひろがりは住居と関連ありそうである。

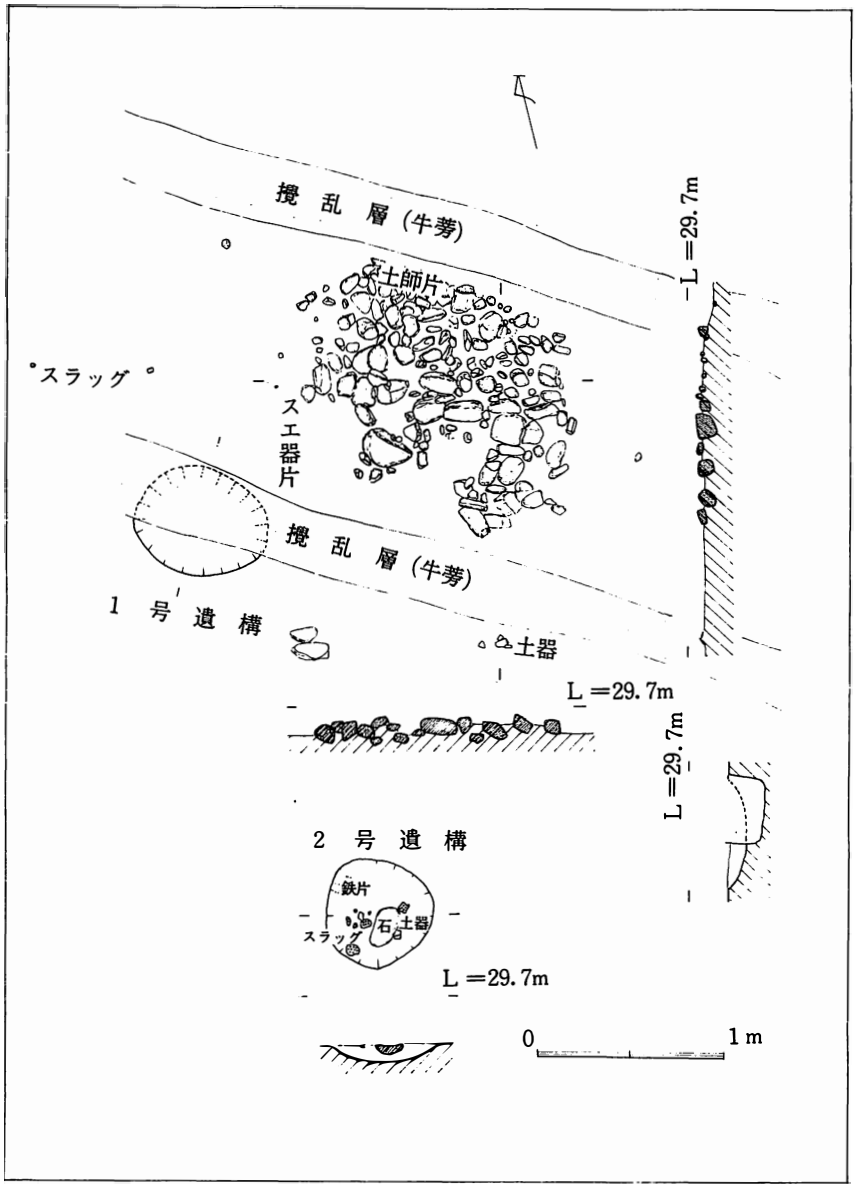
№24の北西は、現に使用している農道のために発掘することが出来なかった。ここに半円形の小溝がみられる。この小溝の内側は、あたかも踏み固められたかのようで、地面の凹凸が激しかった。これも１つの、何等かの遺構とみられる。

№22～№24には多数のピットが発見された。ピットは大小、形状に違いがあるが、中には確かに柱穴とみられるものもある。古代の土器，土師・須恵器の出土も多い。北側の農道寄りの付近には、東西に浅い溝状のものが走る。これを決める決定的なものは出て来ないが、何らかの遺構であることには違いない。№23と№24の一帯は西側トレンチ試掘の際、トレンチ観察の結果、黒土層の落ち込みがあり、これは溝ではないかと注意していた地点である。結果的に別図のようであるが、日時に追われた調査では充分に検討する余裕はない。ピット中には遺物も多い。土器のほか、自然礫とみられるものもある。自然礫といえども、目的をもち、何らかに利用したに違いない。道路予定線の中軸線の№23＋６ｍのあたりに再び貝が現われた。さきの溝様遺構のピット中にはタニシが詰っていたが、ここではカキ殻である。当初小貝塚として、慎重を期した。貝はピット中に詰っていて、総量にして約15ℓ の貝殻が出土した。この中に土

器などは含まれず、その殆どが**マガキ**で占められ、ごく少量の**アゲマキ**が混入していた。2号溝西側の溝様遺構中のピット発見のタニシとは、貝の種類が大きく異なっていた。

No.23の北東部から堅穴が発見され、それが弥生前期の住居址であろうと考えられるが、その一部、東側は新しい遺構が重複している。この面は、踏み固められていて、少量の木炭片も散布していた。

以上のようにNo.23とNo.24の間から多数のピットが発見され、生活の痕跡である焼土・木炭、そして土器片および貝殻が発見された。ピット、この中には柱穴と思われるものも多数ある。柱穴が入り組んでいて、その配列から確かに建物があったと思われるが、その構成は明確にし得なかった。



第53図　製鉄関連遺構実測図

その他甕棺群の中、13号棺の南から土壙（第28図）が発見された。形は径1m×1m10cm位の不正円形の土壙で、底面は平坦面をつくる。深さは25cm前後、壙底には3個のピットがある。土壙中から礫と少量の土器片が出土した。土器片には土

師器や須恵器のほか甕棺（弥生）片があった。甕棺は周辺が甕棺地帯であるため、その破片が混入したものとみられる。この土壙は当初甕棺群と関連あるのではないか、とも考えたが、土師器等の混入から古代に属するものとみられる。

製鉄関連遺構（第53図）

No.22の南、３号甕棺の北あたりに集石遺構と炉址状の掘り込みがある。炉址状の掘り込みは２箇所にわたってあり、スラッグなどの出土状態から製鉄関連遺構とみられる。

集石遺構（第53図）

１ｍ×1.5ｍの範囲に大小の礫を敷きつめた遺構が発見された。礫も20cm前後の大きさのものから、５cm前後のものまで大小様々で、ほぼ一面に敷きつめ、上面は平坦面をつくっていた。３号甕棺周辺には縄文土器が散乱していて、この遺構の時期等について疑問もあった。礫は一定の意図をもち敷きつめられている。この様な縄文から古代にわたる複合遺跡では、その時期すら定かでない。礫はいずれも川原石で、近くの浜戸川からでも採集使用したのであろう。覆土を取り除いて、漸次礫面が露わになる。子細に礫の間を掃除していく。そこから土師の細片が挾まっていて、この遺物は、時間的に集石遺構と近い時期のものであろうと推定した。土師片は細片であるが、その状態から歴史時代、平安期のものとみられる。

この集石遺構の性格、機能を直接物語るものはない。しかし、周辺からスラッグ、炉址状の掘り込みが２箇所に亘って発見されている。遺跡は古く縄文から弥生と、あるいは古墳期、古代とその消長、隆替が激しい。遺構の保存も充分でなく、時にはその一部をもって判断を迫られる。そこで、この集石遺構をスラッグなどともからませて、製鉄関連遺構として処理した。

炉址状遺構（第53図）

都合２箇所あり、一基は集石遺構の西１ｍのあたりに、他の一基はその南２ｍのあたりから発見された。便宜的に北の遺構を１号、南の遺構を２号として取扱うことにする。

１号遺構の北半は牛蒡栽植による攪乱のため消滅して、僅かに南半分が残っていた。その残存部と、２号遺構の形体からして、円形に近いプランをしていたものとみられる。径70cm位、椀状の浅い掘り込みで、残りの深さは中央部で10cmであった。この中にはスラッグなど直接、製鉄・鍛冶に関係ある遺物は出土しなかったが、埋土・形体からして２号遺構と同様なものとみられる。

２号遺構は上面削平されている可能性はあるにしても、完好な残りをしていた。遺構は径60cm弱の不正円形プランをしていた。中から大小のスラッグが発見され、それは大きいもので径４～５cmで、あまり大形のものはない。また近くに平石が据っていて、あるいは金敷きではないかとも考えたが、厚みが５cm位で、これにそぐわないように思えた。石はもともと、川石であったせいもあって表面が磨耗している。スラッグには、いわゆる「**ノロ**」と称されるものも

ある。この掘り込みの中には鉄片、さらに鉄が熔融凝固した不定形のスラッグがある。埋土中には木炭片も混入している。また、北西側には鉄片が剝離した粉末状のものがあり、これはおそらく、鍛冶場の鍛鉄に付随して派生したものとみられる。

製鉄関連の遺物として、スラッグとフイゴの羽口がある。スラッグは1号遺構の北1mのあたりに1点、集石遺構の北北東8m、すなわち、No.22＋4mの東端から1点出土している。また、フイゴの羽口は小片で、炉体の接続する部分が甚九郎山古墳の西周溝より出土した。2号遺構中のフイゴの羽口も小片で、ノロの付着している状態から炉体側の部分とみられる。

炉址状の遺構はその状態から、まず製鉄関係の遺構とみて誤りあるまい。しかし、製鉄といっても、いわゆる製鉄、精錬、鉄の加工といくつかの工程がある。この遺構は鉄片、スラッグの状態から鍛冶場とみられる。炉体、あるいはそれのどの部分が残ったのか明らかでないが、スラッグ・フイゴの羽口の破砕散乱の状態から、上面を後世削平を受けていることが考えられる。

製鉄関係遺構の時期については一つの手掛かりがある。それは2号遺構出土の黒色土の黒色土器で、内面だけ黒色研磨されている。この土器は、その形態から平安中頃のものとみられる。

出土遺物（第55図～第66図）

沈目立山遺跡の発掘により多量の遺物が出土した。弥生の甕棺群を除き歴史時代の遺物として、土師・須恵・黒色土器が主で、総量にしてペール缶6～7坏分ある。大部分が破片であるため、その主要なものを図示した。

須恵器（S1～S45）

坏形土器　S1～S14、S24～S26およびS27～S40は坏形土器とみられる。このうちS2～S7まで蓋で、他は身、すなわち体部である。

蓋には径14～15cmの小形(S6・S7)の蓋と、径16～17cm位の大形（S2～S5）の蓋がある。天井部などは器面が屈曲していて、全体的に器形のシャープさはない。口縁端末は身受けの部分は繰込み、身の口縁が合わさる形になっている。頂部に鈕（つまみ）がある。鈕は径2.2cmくらい、完好なS2・S4の2例から判断すれば、宝珠形をなすものはない。

坏の身には大きく2種類がある。すなわち、底部に高台を付すS8～S14、S22～S26と単に平底をなすS27～S40である。前者は底に貼り付けの圏台をもつのがあるが、比較的浅目のS8（器高5.1cm、口径16cm）、S10（器高4.5cm、口径13cm）、S11（器高4.1cm、口径12.9cm）と、口径に対して器高の高いS24（器高7cm、口径14cm）がある。これら各坏は底面の起伏が多く、つくりは良くない。

S27～S40は平底の坏で、いずれも口縁径13cm未満のものである。また、器高も4cm未満で規格化された感がある。底部はいく分起伏するものもあり、篦切りの際の起伏とみられる。底

より身への立上がりの屈曲は丸味を帯びることが多く、口縁端末が外に少しはねるものがある。これは口縁部調整に際して、水引きにより整形したものである。Ｓ１については古墳期のものとみられるので、別項に取上げた。

甕形土器　いくつかの形態の違ったものが出土した。Ｓ15～Ｓ18およびＳ44がそれで、いずれも破片である。Ｓ15はNo.24の農道南側のピットから一括出土した。同一個体の破片が多量あるが接合しない。この土器は大形で、口縁径41cm、頸部は大きく外反し、口縁近くで急に立上がり直上する。その部位に粗い波状文が施されている。立上がりの部位が急に薄くなるのも特徴である。口縁上面は肥厚し、平坦となる。頸部以下胴部にかけて、整形のため叩打痕があり、外面は格子状に、内面は青海波状文が押圧されている。焼成良好、青味を帯びた褐色のこの土器は、一見して古さを感じさせる。しかし、出土状態からして時代は下がり、平安期頃のものとみられる。類似品は熊本市大江青葉遺跡から出土している。

Ｓ16はNo.22～23、Ｓ17は溝様遺構から[注2]、Ｓ18は３号溝南端の方形ピットから出土した。また、Ｓ44は１号溝中より出土したものである。口縁径はＳ16が14.1cm、Ｓ17が11.2cm、Ｓ18が18.5cmを計る。それぞれの口縁部の形が異なり、Ｓ16は「く」の字形に屈曲、Ｓ17は直口、Ｓ18はＳ16に近く、またＳ44もこれに近い。これらの各甕は焼成が悪く、灰白色、叩打痕も不鮮明なものが多い。

瓶子形土器　Ｓ19～Ｓ23は瓶子形をなすものとみられる。口縁部は欠失するが、頸部は窄まり、瓶子状を呈するものとみられる。Ｓ19はNo.24～25のピット中から、Ｓ20、Ｓ21は溝様遺構から、Ｓ22はNo.26～No.27、またＳ23はNo.22～No.23から出土した。Ｓ22、Ｓ23は底部で、わずかに高台がつく。胴部はわずかに開きながら直線上に延び、Ｓ19、Ｓ20の如くは最大径のあたりで屈曲、肩部をつくる。肩は耳付き（Ｓ20）となる。破片のため明らかでないが、２～４個の複数付くものとみられる。

壺形土器　Ｓ41とＳ45は壺である。Ｓ41はNo.28～28＋60mから、Ｓ45はNo.28付近の東側から出土した。Ｓ41は焼成良好で須恵本来の青黒い色調をしている。まるい胴、肩部にかすかな二条の沈線がある。Ｓ45は短頸壺である。灰白色、焼成やや不良、胴部にロクロの目が粗く残る。口縁部径12.5cm。

盤形土器　Ｓ42、Ｓ43はいずれも盤形土器で、両者ともNo.23～No.24付近のピット中から出土した。いずれも焼成良好、内面に灰かぶりがあり、口縁部を上向きに焼いたことが知れる。口縁径21cm、13.4cmをそれぞれ計る。

布目瓦（第58図）

図のように総数７片出土している。包含層は第２層で、注目されたが遺構としては確認されなかった。１はNo.23～No.24、２・７はNo.27～No.28、３～６はNo.25～No.26からそれぞれ出土した。このうち、３～６はピット中から出土したもので、このことから後世農耕時などに持ち込まれ

たものでないことは明らかである。4は丸瓦、その他は平瓦である。いずれも布目圧痕があるが、1・5は撚り糸の叩打痕、7は格子目があり、4・3は叩き目が消されている。5は瓦の歪みが大きく、しかも薄い。7も瓦全体が薄く、粗雑な造りである。

これらの瓦が、どういう意図をもったものか、それは当然建造物を想定しなければならないが、明確に瓦葺きを想定する遺構は検出されなかった。県下各地から散発的に布目瓦を出土する遺跡も多い。布目瓦片は、隣接の沈目遺跡[注3]からも数点出土している。

土師器（第59図～第63図）

H1～H59まで図示した。このうちH42～H59は器面に赤色顔料で塗彩したものである。

甕（H1～H8）　この種の土器は各区から出土している。H1、H3はNo.28～No.28+60mから、H2はNo.22～No.23、H4は1号溝、H5はNo.26～No.27、H6、H8はNo.27～No.28、H7はNo.21～No.22からそれぞれ出土したものである。これらの甕はいずれも、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁上端がまるくなる。器の外面は刷毛目調整文が、内面は「削り」痕が上下、または斜めにみられる。口縁部は内外面を横撫でにより仕上げている。口縁部径はそれぞれH1が27cm、H2が26.2cm、H3が27cm、H4が25.2cm、H5が21.2cmを計る。

土鍋（H9～H14）　完好なものはない。他の各遺跡などの出土遺物からみて、浅い甕形の土器で、おそらく土鍋とみられる。H9・H11は3号溝、H10はNo.28～No.28+60m、H12は3号溝南端の方形ピットから、H13はNo.23～No.24、H14はNo.21～No.22からそれぞれ出土した。器面調整、整形の大要において甕形土器と変わらない。口縁の屈曲が甕に比べて傾きが急で、その関係もあって胴部が口縁に比して小さくなる。口縁径はH9が28.7cm、H10は比較的小さく25.4cm、H11は27.2cm、H12は29cm、H13は27.6cmと測定される。

竈形土器（H15～H18）　約3個体分出土した。H15はNo.23～No.24で、H16は3号溝南のピット、H17・H18はNo.23～No.24の農道傍から出土した。H15はH17と同一個体の可能性がある。県内ではこの時期の完形品にめぐまれないが、秋永遺跡から古墳時代の完好な遺物が出土しているので、破片からもほぼその部位が推定出来る。H15は竈の焚き口の「つば」の部分にあたる。粗豪なつくりであるが焼成良好、淡褐色の土製品。H16は竈の接地面の部位の破片と思われる。外面に粘土紐の巻き上げの状態が観察され、粘土紐の幅は約1cm位である。また、内側には横に粘土を削りとったあとが濃厚に残る。H17は竈の本体をなす甕や土鍋をかける部位で、上端は肥厚し、内側に厚い張り出しがある。また、上端は平らで、接地部へむかって末広がりになる。器体の厚さは約1cmである。器面は外面上位を箆状の、中位以下は櫛状のもので縦に均らしている。また、器面は比較的平滑である。内面は上下方向に胎土を削り、均らされている。この土製品は焼成良好、褐色をしている。上部の大きさは径約19cmである。H18は甕形土器の接地部の破片で、器面の内外共平滑、そこには削り、刷毛目がみえない。

甑形土器（H19）　H19は甑形土器の底の一部とみられる。No.28～No.28+60mのあたりから

出土したもので、底部に穴があけられている。細片のため子細について定かでないが、内側には斜めの削りあとがみえる。

H20は**把手**で、器形が甕か、あるいは甑かにつけられるものと思われる。この把手は三角形をしていて、上方に折りまげられている。この種の把手は甚だ特徴的で、県内では目下のところ他に出土例をみていない。これは形態的に、奈良県平城京などにある三角形の把手と同類とみられる。H20はH19と同一ピットから出土した。

椀形土器（H21～H33・H35）椀と坏とはあいまいで、比較的深手のものを城とした。これはいずれも高台付で、底に低い圏台がつく。H21はNo.26～No.27のピット中から、H22はNo.27～No.28、H23はNo.22～No.23、H24はNo.25～No.26のピット中から、H25・H28はNo.28～No.28＋60cm、H26・H27はNo.22～No.23、H29は2号溝、H30は3号溝南端の方形ピット、H31・H32はNo.23～No.24からそれぞれ出土した。高台はいずれも貼付けで、H21・H29・H31は比較的高く、H26～H30・H23・H32は低い造りである。体部は丸味をもち、口縁部が直上するもの（H21）と、いく分外に屈曲するもの（H22・H24・H25・H32）がある。口縁端末も肥厚気味のものと、尖り気味のものとがみられる。それぞれの測定値は別表のとおりであるが、底径6～7cm、口縁径11～12cm、高さ5～7cm位である。

坏形土器（H34・H36～H41、H45～H59）　これには若干の高台付のものと、平底ないし丸底に近いものとがある。後者には器面に赤色顔料で塗彩したものがある。H34は椀形土器に近く、器形が低いつくりなので、これと分類し坏とした。形態的に椀と大きな違いはない。H36～H41は平底で、体部は丸みを持ちながら口縁部にいたる。また、口縁部上端はまるい。口縁径11～12cm、器高3.5cm、底径5～8cm位である。

丹塗り土器（H42～H59）　土師器の中で器面を赤色顔料で塗彩したものがある。本遺跡からこの種の土器片が多数出土した。H42～H59がそれで、内外面とも丹塗りされている。H42 H50・H52・H57はNo.28～No.28＋60cmから出土したもので、このうちH57はピット中発見である。H43・H55は溝様遺構から、H44はNo.25～No.26から出土した。H45・H49・H58はNo.22～No.23から、H46は4号溝中から、また、H47・H56はNo.21～No.22から出土した。さらにH48・H53・H54はNo.27～No.28から、H59は甚九郎山古墳周溝中から出土したものである。

H42～H44はいずれも高台を付すもので、このうちH42はとくに高い高台を付す。破片のため全容が明らかでないが、坏または盤状をなすものとみられる。

H45～H59は坏で、底部はおおむね平底で、中には丸底に近いものもある。器形の上から器面に丹塗りしないものと変りないが、H45にみるように口縁部がいく分外反りになるものがある。この種の器形変化は、他のものに比して後出のものと認識されているようであるが、この遺跡で、それを確認するには至らなかった。

黒色土器（HK1～HK34）　図示したように本遺跡から多量の黒色土器が出土した。ここか

ら出土したのは、いわゆる内黒のもので、外面の口縁部近くが黒色になるタイプ、すなわち、畿内で「黒色土器A」として分類されているものである。出土資料を検する限り、黒色土器Bは発見[注4]されなかった。この種の土器の中には墨書土器3点があるが、それは別に項目を設け、他の1点と共に紹介する。

出土資料は完好なものが少なく、多くは破片で器形の定かでないものも多い。しかし、図示により復元すれば、椀形の土器が多く、皿形のものが若干ある。出土地点も他の土師器と同様ほぼ全域にわたり、HK1・HK2は甚九郎山古墳周溝より、HK8・HK14・HK16はNo.21～No.22から、HK23はNo.22～No.23から、HK3・HK11～HK13・HK17はNo.23～No.24からまたHK10・HK22・HK25はNo.24～No.25から、HK4・HK24・HK28はNo.25～No.26から、HK7はNo.26～No.27から、HK26・HK30・HK32はNo.27～No.28から、HK5・HK9・HK18・HK19・HK21・HK27 HK31はNo.28～No.28+60cmから出土した。このうちピット中から出土したものとして、HK3・HK10・HK12・HK13・HK17・HK21・HK22・HK24・HK25・HK28・HK30がある。またさらに2号溝中よりHK6とHK29が、溝様遺構からHK15が、4号溝よりHK20が、HK33・HK34は製鉄関連遺構とみられる2号遺構からスラッグと共に出土した。

HK1～HK5はほぼ同形の椀形土器で、低い高台、まるくふくらむ体部、口縁部がいく分外にはねる特徴をもっている。HK6は体部がさらにまるみを帯び、その特徴が強調されている。底径の小さいHK8・HK15・HK16・HK19・HK20もあるが、中にはHK11・HK12のように高台の著るしく高いものもある。HK24は口縁径16.7cmに達する大形の椀で、平底のHK28も大形の椀が推定される。HK33・HK34は高台付の椀であるが、他のものとかなりの相違がみられる。底部は内弯気味底から体部、口縁にかけて弓なりに弯曲し、口縁部になるにしたがい薄くなる。口縁部は一旦薄くなり、いく分外反りしながら僅かにふくらむ。

HK30～HK32は器が浅く、皿形のもので底を欠失している。体部はまるみがなく、直線状に口縁部にいたる。器面には多少のうねりがあり、口縁上端はまるみを帯びる。

瓦質土器および青磁（第57図）　本遺跡から瓦質土器と青磁片が出土した。瓦質土器の一つは大形の鉢、火舎ではないかとみられるもので、No.22～No.23から発見された。口縁部がいく分外へはり出し、4.5cm下って一条の突帯がめぐる。口縁下には文様が押捺施文され、文様は中央に径5mmの円、そして5方向に放射状に伸び、その先端が鈎の手になっている。この火舎は内外面に煤が付着している。他の一つの土器は擂り鉢とみられる土器である。これはNo.25～No.26のピット中より発見され、焼きは硬質、内面には6線単位の線がある。青磁片は、1号溝の比較的浅いところから出土した。碗の小片であるが、舶載の南宗青磁である。

釘（第66図）　昭和50年度調査に際して、No.27付近の黒色土の上の斑点まじりの層より出土した。この斑点まじりの層は、火山灰地域の表土下にしばしばみられる層序であるが、熊本市弓削町運動公園造成に伴う発掘調査で同類の層より釘を出土している。ここでも同様で、図のよ

うな鉄製角釘が出土した。３点あるが、１つは完好で、他の２点は折損している。釘の頭は一側がふくらみ、頭部直下で約５㎜角位で、漸次細くなっている。釘の先から$\frac{1}{3}$あたりで曲っているが、全長6.8㎝である。この釘は層序の上から中世のものと考えられる。

墨書土器（第66図１～４）　都合４点出土した。このうち３点は内壁の黒い黒色土器で、そのなかで２点は高台付の椀、他の１点は皿である。残りの１点は土師質の素地のままである。１は４号溝中から発見され、２は№22～№23から、また、３・４は２号溝西側の溝様遺構から出土した。

１は黒色土器（Ａ）の底部である。外壁には粗いロクロ痕を残している。底部には器体成形後、高台をやや外開きに貼りつけてある。内面は箆状のもので丹念に磨研し、炭素粒を吸着させてあり、漆黒色で強い滑沢をもつ。

外底に墨書があり、２字あって下の１字は「**丸**」である。手慣れた書きぶりで、筆の運びもスムーズである。文字は器底の中央にくるように書かれており、もともと３字であった可能性が強い。運筆もやや丁寧で、落書きのようには見えない。字義はこの器の定位置を示すか、所属を示すものであろう。

２は無台の皿の底部である。やや堅牢なつくりで、内黒の黒色土器である。内壁に軽く磨研し燻蒸してあるが、炭素の吸着は少ない。外壁には手慣れがあり、油沢様の照りがみられる。底部裏面には墨書があり、きちんとした運筆であるが読みとれない。

３も内黒の土師器の底部である。貼付高台のはずれた痕があり、もともと高台付椀である。器面に滑沢がないのは、内壁の磨研が「１」ほど入念でないためであろう。外壁に墨書があり、「**太**」のようであるが、読みは確実でない。また運筆は粗略である。

４は薄手の椀の一部らしい。ロクロのひきはなしのままで、磨研も燻しもない。外壁に墨書があるが読めない。書き方はなぐり書き風の書体である。

以上４点、いずれも小片であって正確に復元形を得難いが、畿内をはじめ、最近各地から出土している内黒土師器（黒色土器Ａ）の出土例から推測すれば、平安時代中葉に属するものである。１は他のものより残存状態がよく、これをみると腰の張りに比較的後出の様相がある。他の資料も同時代とすれば10世紀頃とするのが妥当であろうか。また、墨書銘の書体や癖は平安時代のどの時期にあてても、とりたてて異和感は抱かせない。

なお、墨書土器について、隣接の沈目遺跡[注5]からも出土している。この土器は２点あり、いずれも内黒の土師器で、それぞれ「東」「介」ではないかと調査者は読んでいる。

歴史時代とみられる遺構・遺物は広域にわたり発見された。溝・道路様遺構などがあり、多数のピット群とあわせて古代の集落址とみられた。遺物も多数発見され、図示したように須恵器・土師器そして黒色土器、また布目瓦まである。黒色土器の中に３点、土師器に１点の墨書銘土器がある。これらの遺物は大部分が組合わさり、使用されたものとみられる。C14の測定

結果1240±80Y.B.Pという数値、これはいく分古く出たようであるが、1240という測定値をそのまま生かせば、それはA.D 710年、すなわち奈良時代ということになる。しかし、土器などの様相からして、主潮は平安期とみて誤りなさそうである。

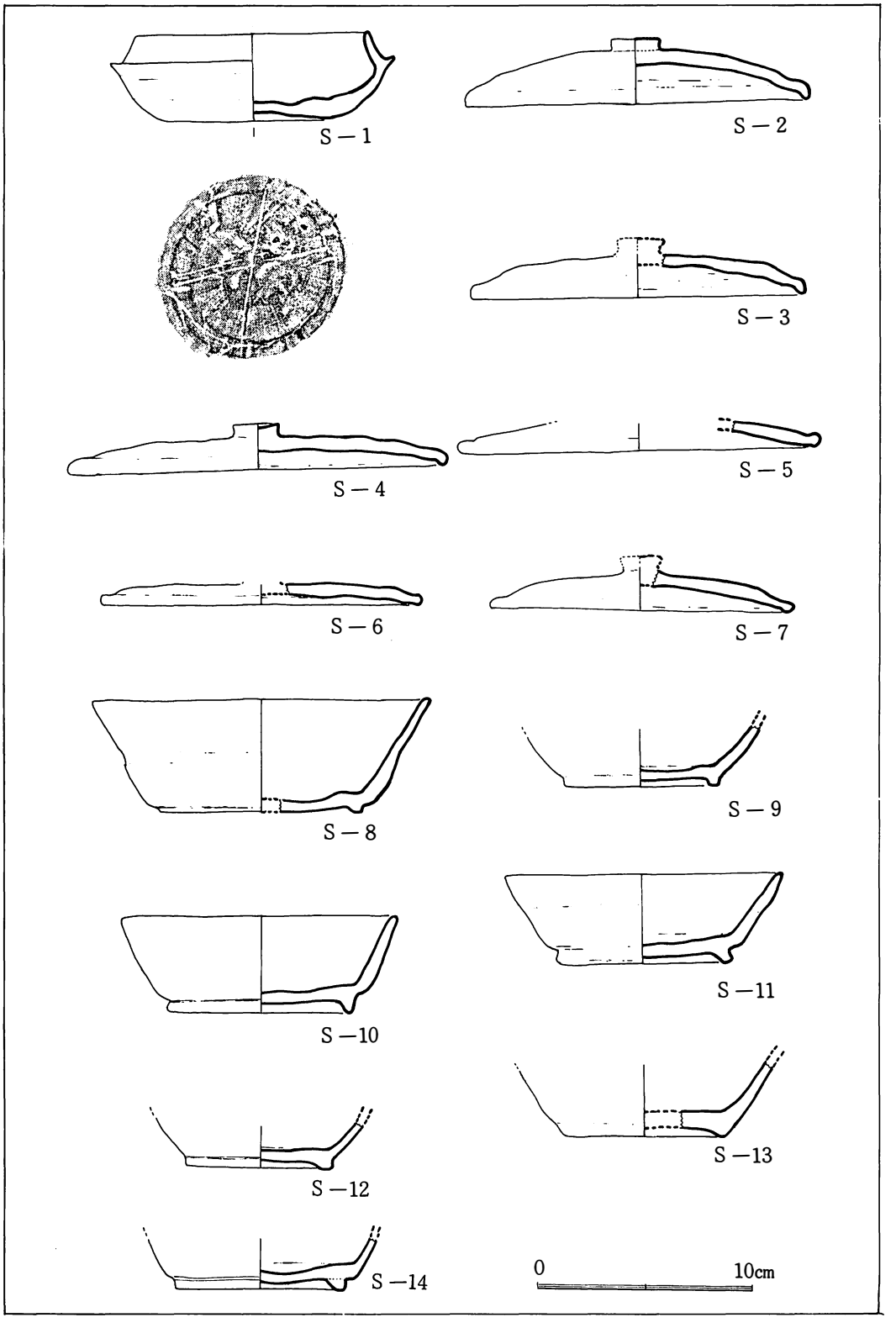
注1　「大江青葉遺跡」

2　注1に同じ

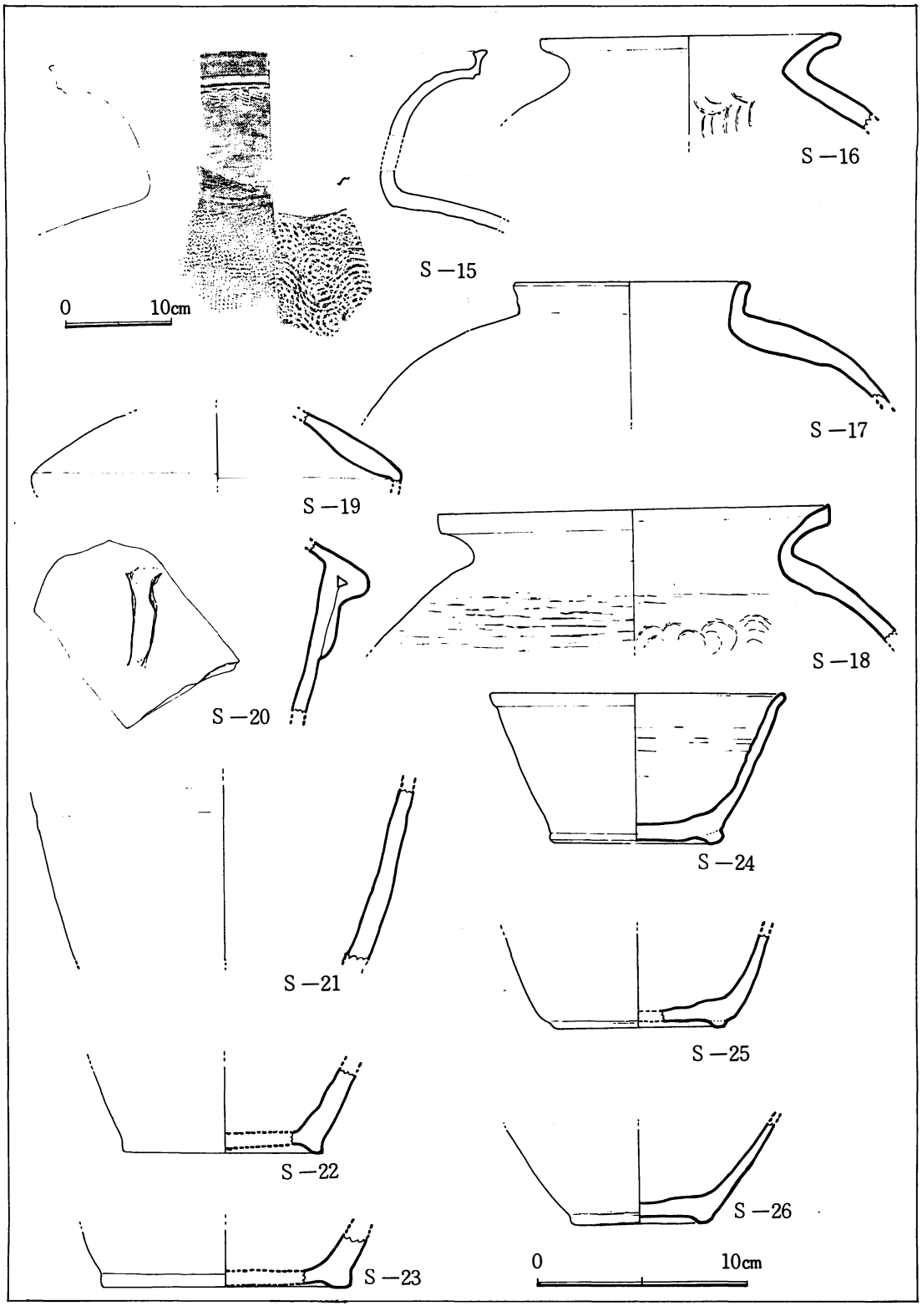
3　「沈目」　熊本県文化財調査報告第13集　熊本県教育委員会　1974

4　「日本の考古学Ⅵ」　河出書房　昭和42年　この中に田中琢氏の論考あり。

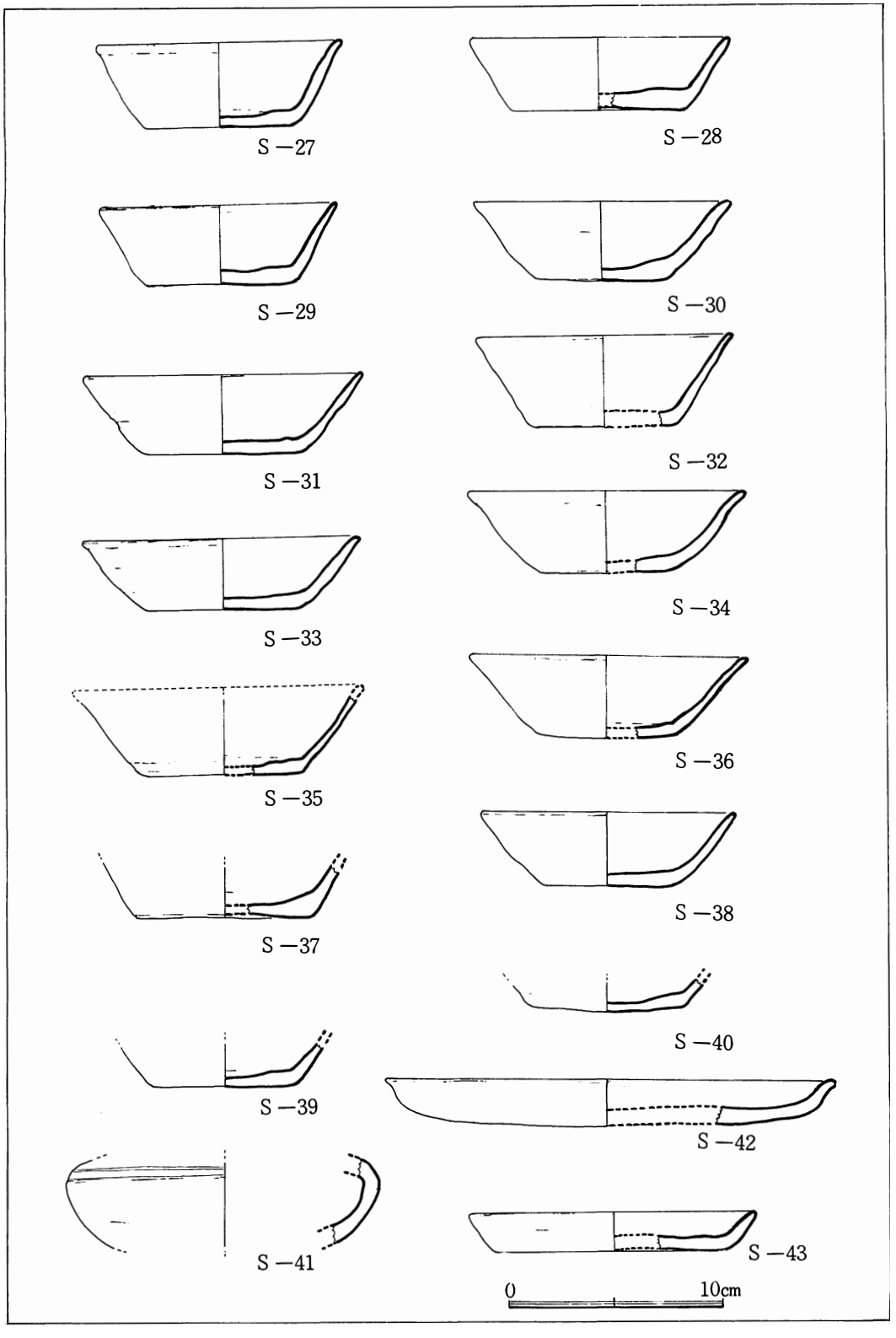
5　注3に同じ　同報告80頁および図版54



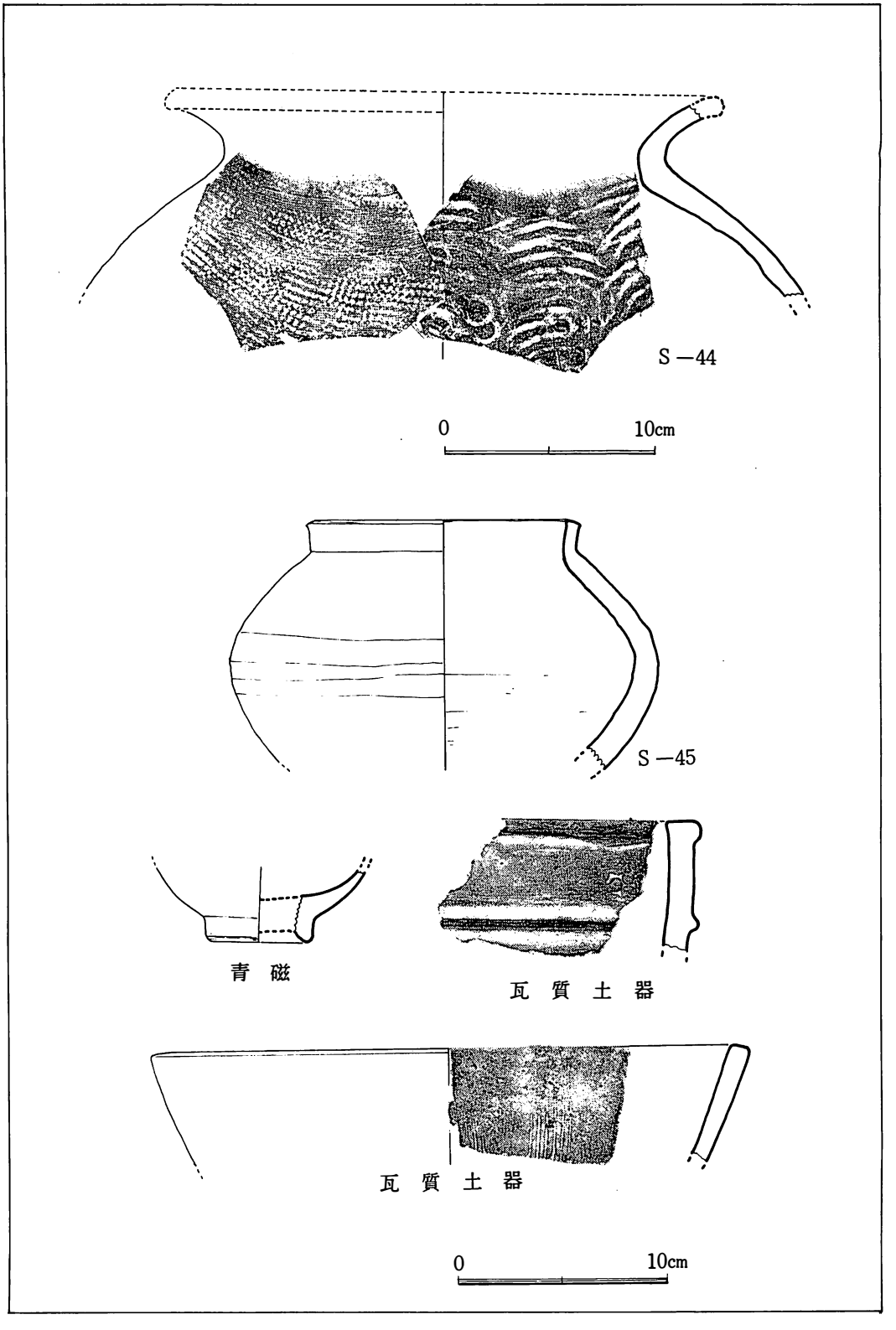
第54図　沈目立山遺跡出土　須恵器１



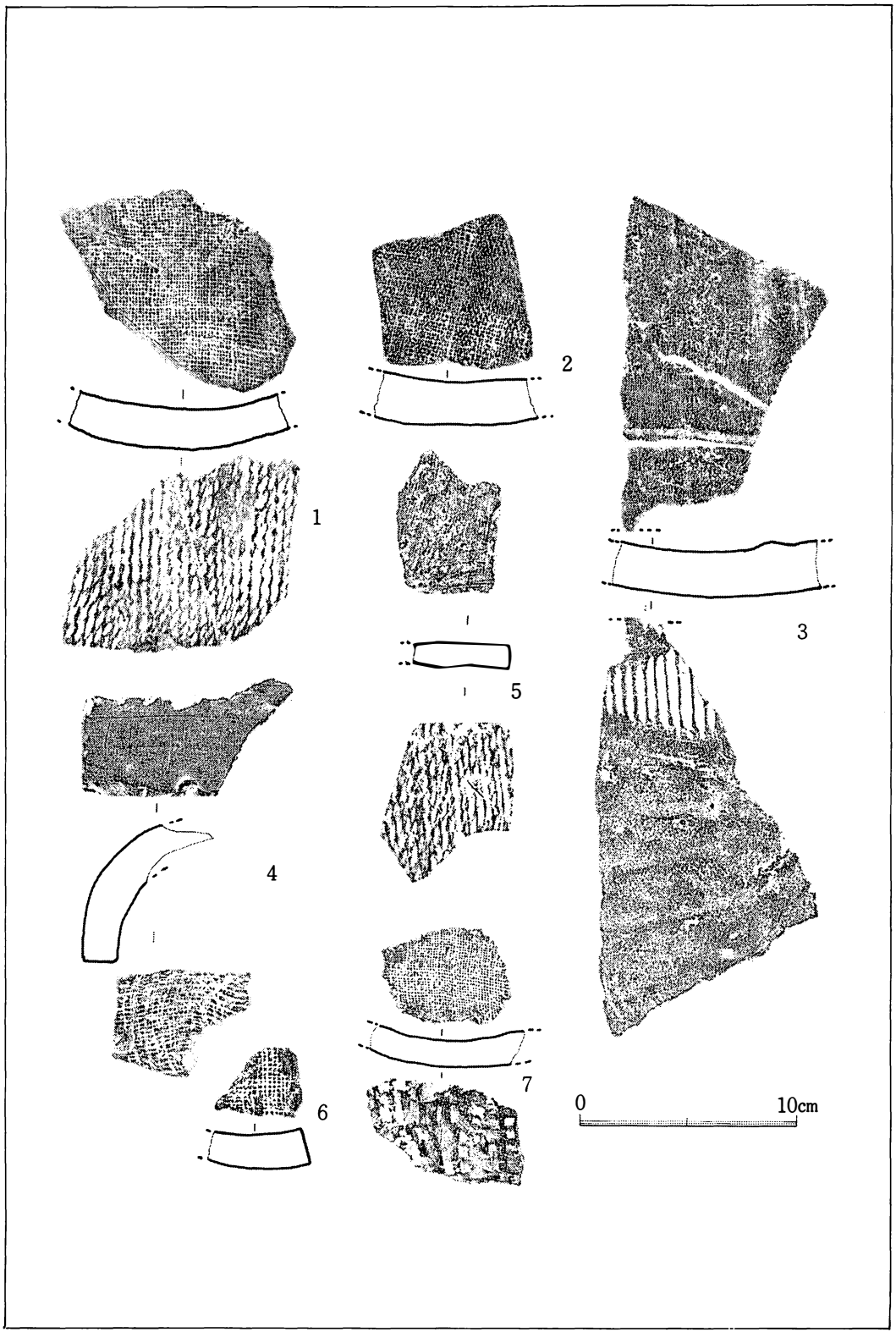
第55図　沈目立山遺跡出土　須恵器２



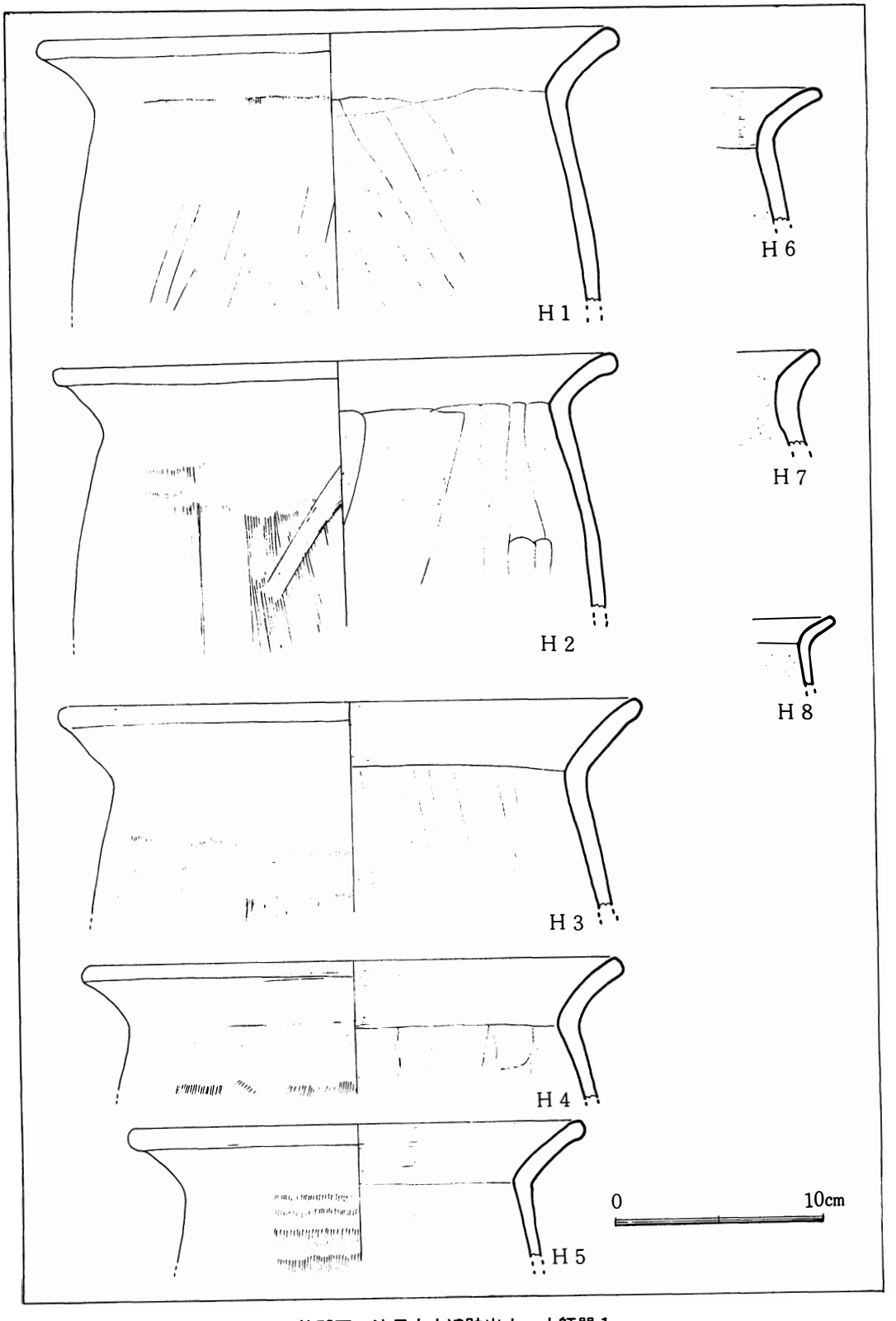
第56図　沈目立山遺跡出土　須恵器３



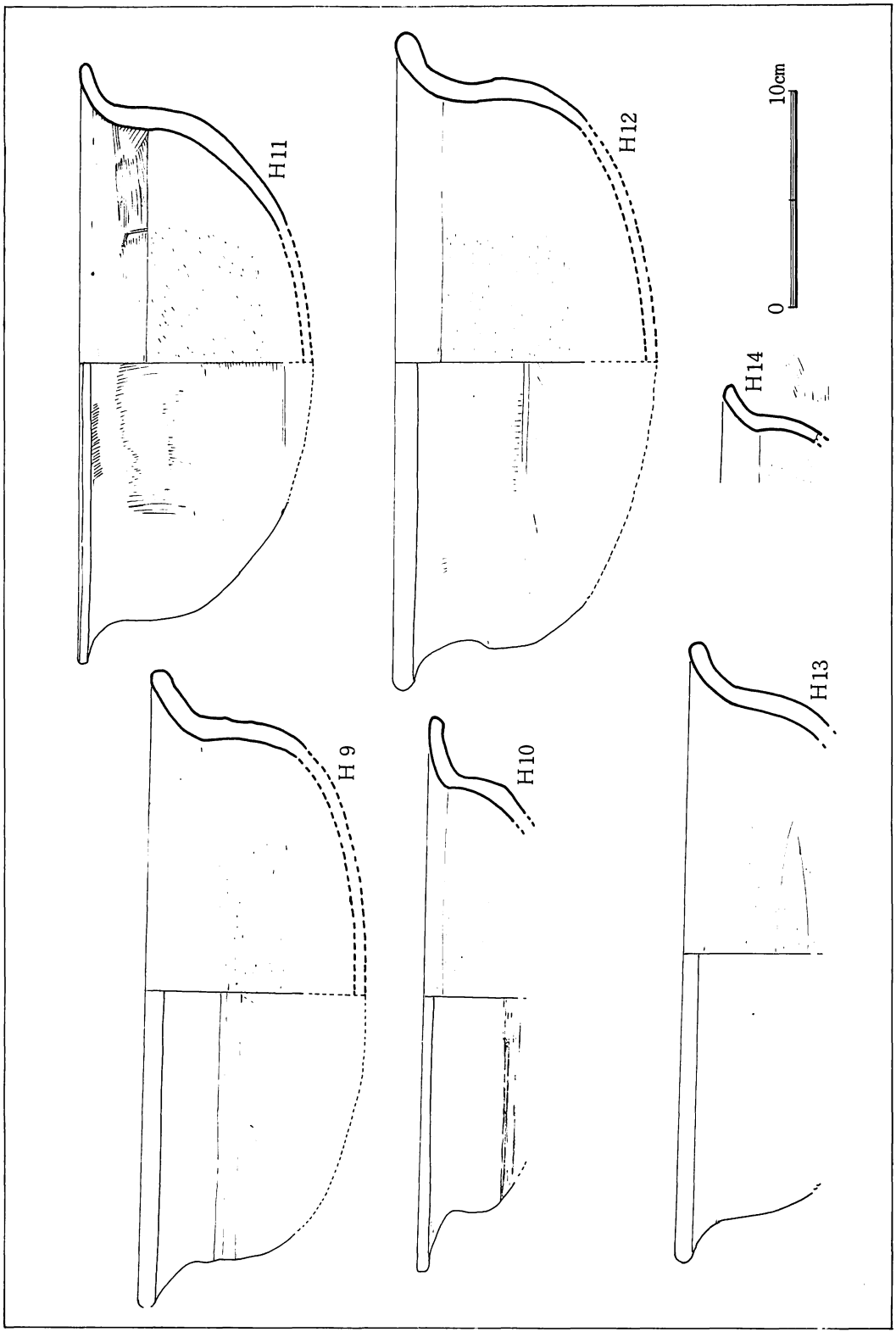
第57図　沈目立山遺跡出土　須恵器４　他



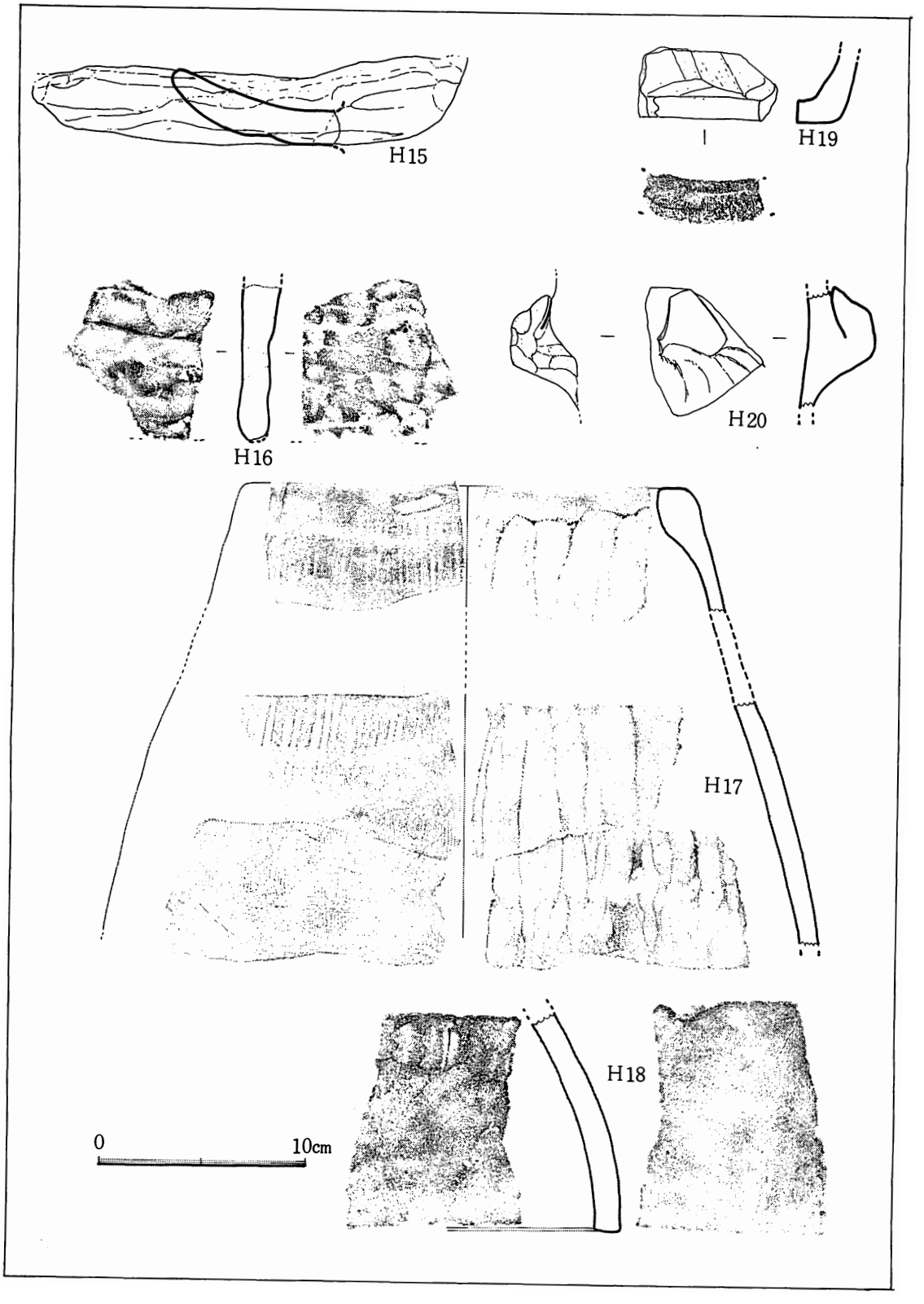
第58図　沈目立山遺跡出土　布目瓦



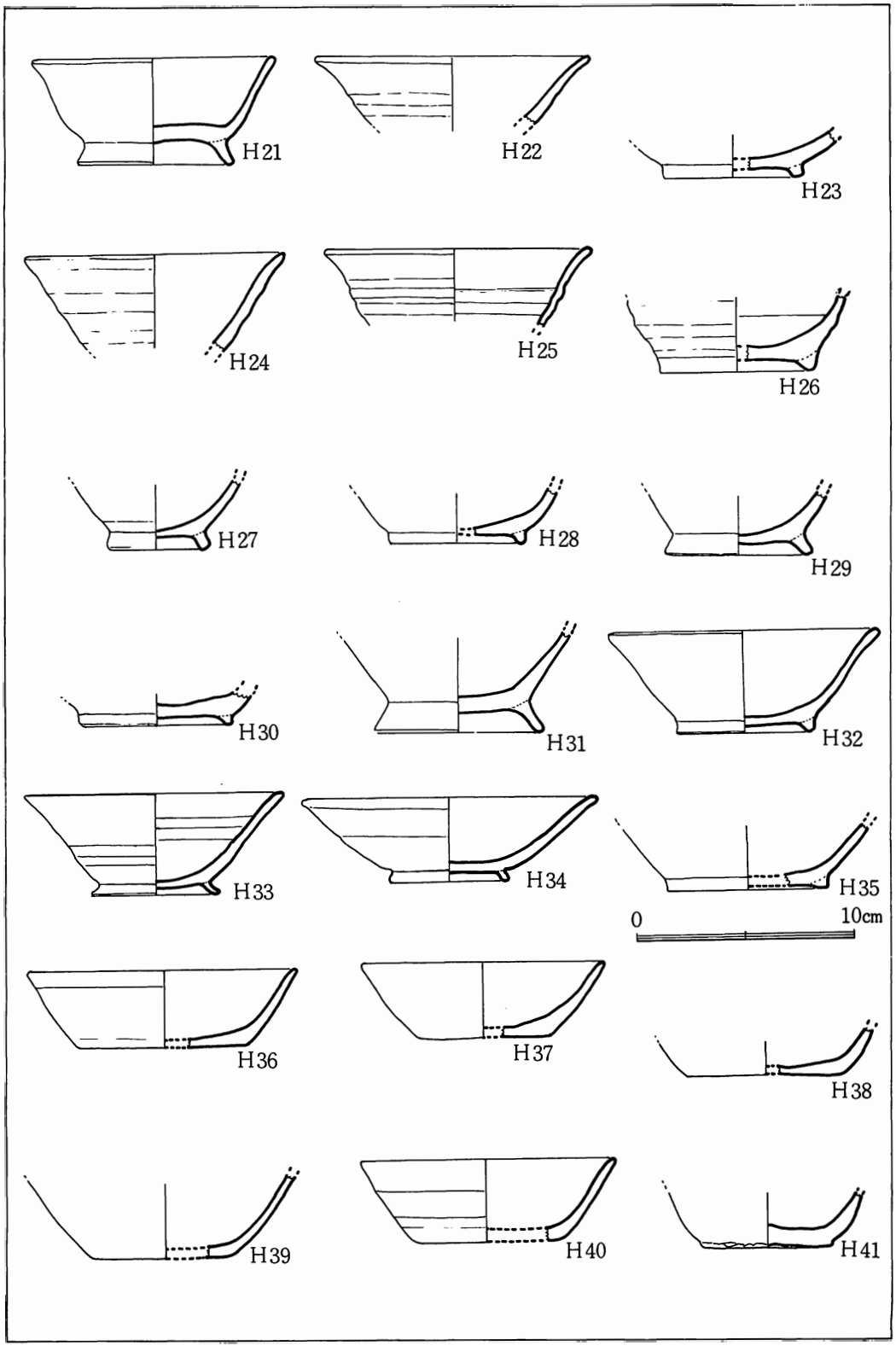
第59図　沈目立山遺跡出土　土師器 1



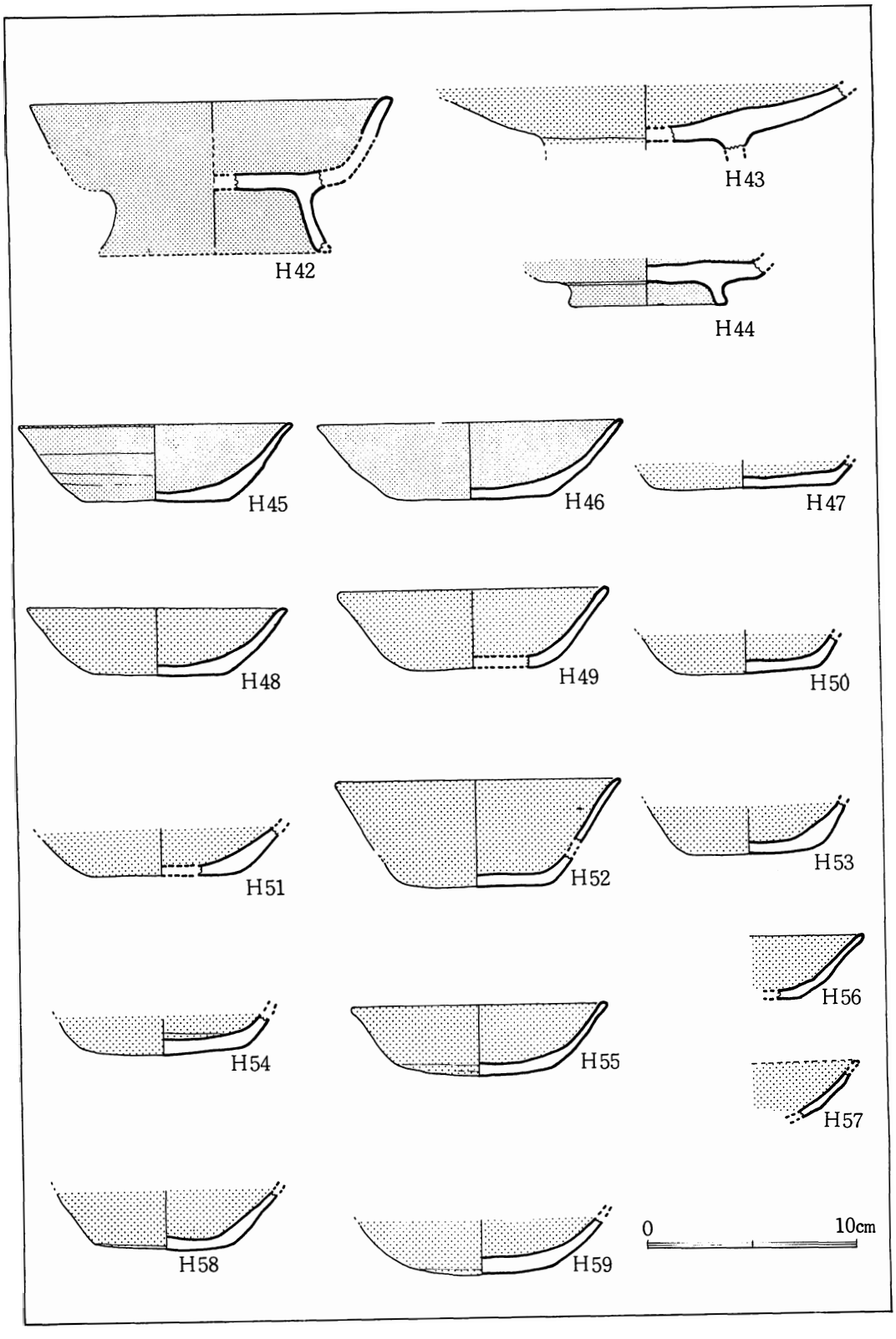
第60図　沈目立山遺跡出土　土師器２



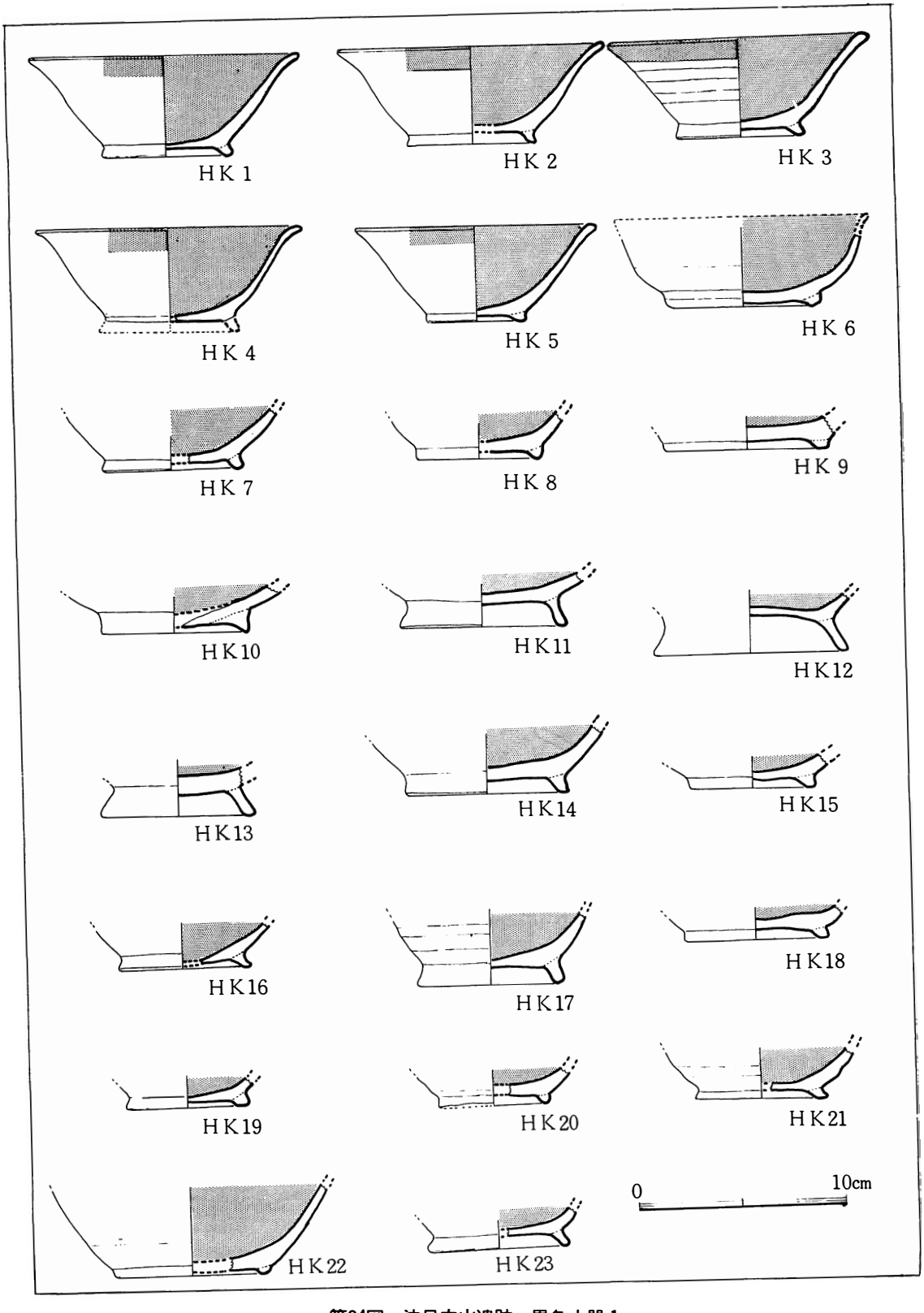
第61図　沈目立山遺跡　土師器３



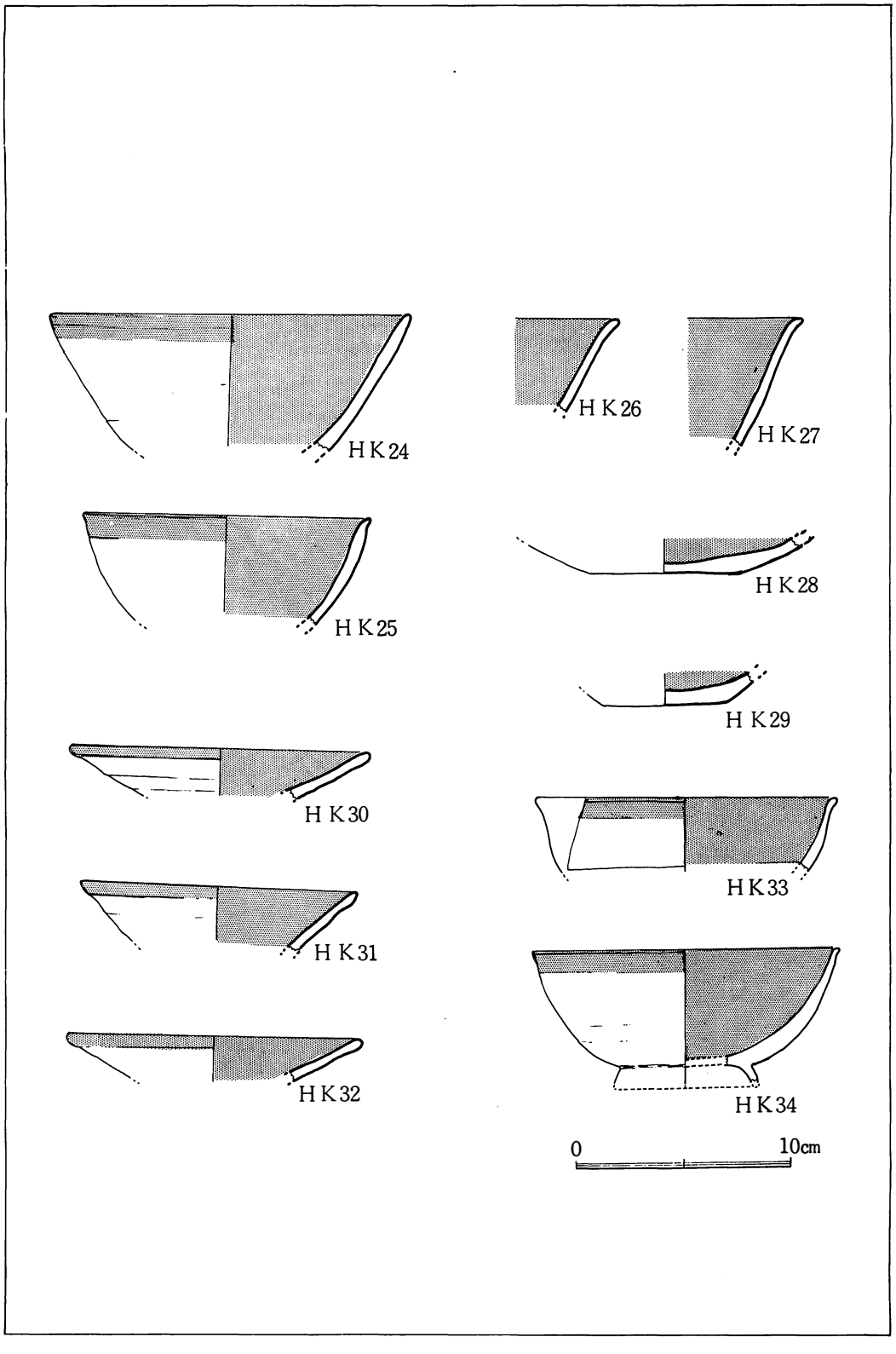
第62図　沈目立山遺跡　土師器４



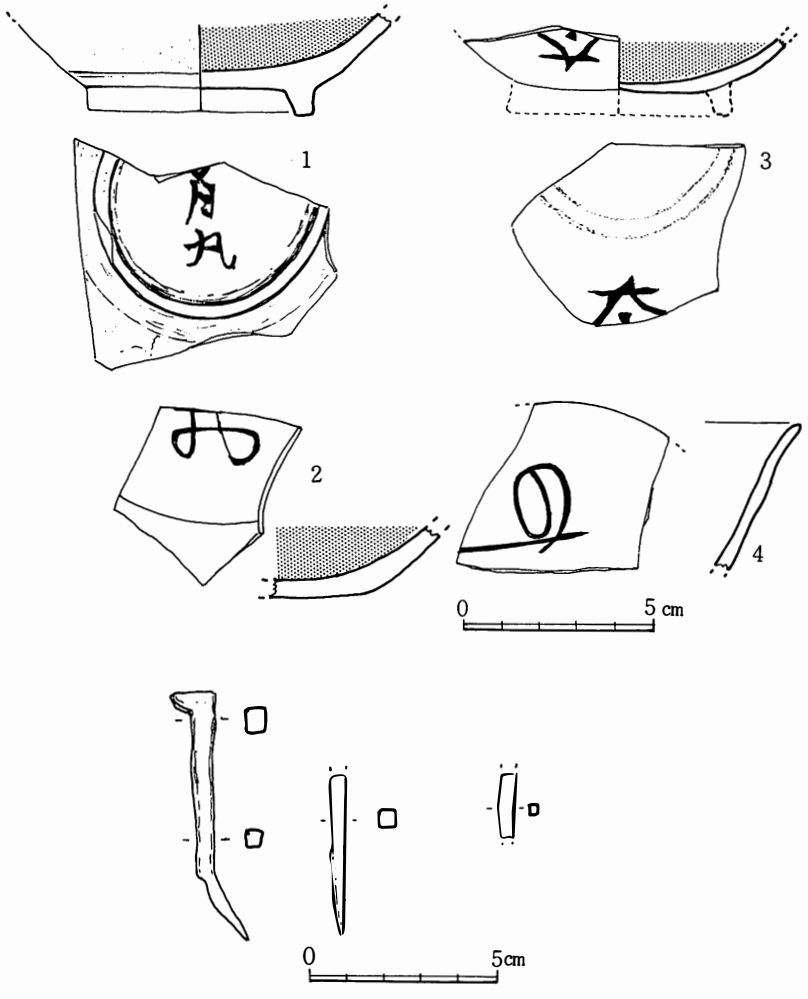
第63図　沈目立山遺跡　丹塗り土師器



第64図　沈目立山遺跡　黒色土器 1



第65図　沈目立山遺跡　黒色土器２



第66図　沈目立山遺跡　　墨書土器と鉄釘

(5) C14による年代測定について

本遺跡から土器などのほか、焼土、それに伴なった木炭を採集することが出来た。そこで型式学的、あるいは相対的年代を推定するほか、資料の科学的処理により年代を測定することにした。一つはC14による方法と、他の一つは熱残留磁気による年代測定である。後者は「炉穴」とC14により年代測定の試料を採集した同一地点（N－2720）を選んだ。これは大阪大学基礎工学部超高圧実験室の中島正志氏らに依頼した。これは目下整理中である。

本遺跡で採集した試料はいずれも木炭で、このほど２点の結果が明らかになった。それによると

N－2719　沈目立山１　2240±80Y.B.P.（2180±80Y.B.P.）

N－2720　沈目立山２　1240±80Y.B.P.（1200±75Y.B.P.）

である。このN－2719、即ち沈目立山１としたものは15号甕棺横の焼土である。これは調査者の実感として、その埋没状況から甕棺の埋納に関連をもつのではないか、そういう心積りで木炭を採集した。そしたら、あたら推測にたよらず、甕棺（弥生前期）の年代についての傍証が得られるということである。またN－2720、即ち沈目立山２についても同様で、４号溝の北側の焼土から採集したものである。これは周辺出土の、土師器、須恵器および黒色土器Ａについてのデーターを期待した。沈目立山２の東側の焼土より出土した木炭を、沈目立山３として処理した。年代的に沈目立山２と近いことが考えられる。

ついでながら隣接の沈目遺跡のC14測定結果を報告する。これはすでに1974年「沈目」熊本県文化財調査報告第13集として公刊された遺跡で、住居址出土の木炭を試料としたもので、古式土師器を伴っていた。

N－2062　沈目　1720±80Y.B.P.（1670±80Y.B.P.）

これは古式土師器の年代を考える上に興味あるデーターである。（緒方）

Ⅲ　調査の成果と展望

沈目立山遺跡の発掘により、この調査対象地域のほぼ全域にわたり、縄文時代、弥生時代、古墳時代および歴史時代の各期にわたる遺構・遺物が発見された。この発見の状況、個々の遺構・遺物については前章で述べたとおりである。そこで、これらの調査結果を集約し、問題点を探り出し、展望を述べたい。

縄文時代

この期に属するものに炉穴がある。**炉穴**は№28付近から発見されたが、その時期を直接示すような遺物は出土しなかった。しかし、炉穴の周辺の第Ⅳ層から土器片が、また第Ⅲ層下面から礫器が出土した。この状態はあたかも、上益城郡益城町櫛島遺跡の炉穴発見と似ている。櫛島では炉穴と円筒形条痕文土器、塞ノ神式土器および石器（石鏃・石匙・礫器）の組み合わせがみられた。沈目立山遺跡でも、これと相似た状況で、土器・礫器の組み合わせが考えられる。塞ノ神式土器は甕棺群（№21～№22付近）の周辺から相当量出土した。ここでは第Ⅳ層から、第７図のように平底撚り糸文の繊維土器（ＪＩ）と塞ノ神式土器が共伴出土した。玉名郡菊水町諏訪原遺跡でも炉穴から円筒形条痕文土器が出土した。炉穴と円筒形条痕文土器が密接な関連性が考えられる中で、沈目立山遺跡では調査範囲の中で円筒形条痕文土器は一片も出土しなかった。この点注目される事実である。

以上のような各遺跡で炉穴のあらわれる時期には大きな違いはないものとみられる。櫛島遺跡のC^{14} による年代は、１号炉穴の**9410±125Y.B.P.** ２号炉穴の**9320±185Y.B.P.** と２点の試料による近似値が出ている。出土層位、状況等から沈目立山遺跡の炉穴も、この年代に近いことが考えられる。

さらに一つ考えられることは、個々の遺跡によって遺物の組み合わせが違うのではないのか。時には塞ノ神式土器が単独で出土することもあろうが、これが円筒形条痕文土器と組み合わせる（櫛島）こともあり、また他の遺跡では、これに斜行縄文が組み合わさる（御船町干無田）ことがある。このことが時期的相違であるとする可能性は絶無ではないが、各遺跡、地域による組み合わせの違うことも考えてよかろう。

縄文土器の編年的研究は、主として文様、形態の相違による分類が多用され、様式毎に形式分類されている。様式概念そのものは一つの抽象概念であるが、一般に美術史等に用いられる概念で、その考古学的援用とみられる。遺跡・遺構における遺物の組み合わせは、一般に遺物の時間的平行関係として捉えることが出来る。従来、縄文土器の形式分類するにいたり、異なった形式（様式）の土器を時間的先後関係として捉えられることが多い。しかし、各遺跡にお

ける状況を具さに検する時、単純に先後関係とのみ理解することは困難で、地域的・社会的集団の相違とも理解することが出来よう。このことは今後さらに、各遺跡での検証を迫られる課題である。

本遺跡における炉穴の出土状態、さらに、塞ノ神式土器発見の有様は第5図および図版3のとおりである。その出土層位が第Ⅳ層、地表から70～80cmと非常に深い。この層位は特殊な場合を除き、通常の農耕で攪拌されない層位である。県内では塞ノ神式土器を出土する遺跡が約24箇所発見されている。これらの各遺跡での出土量は概して少ないが、本遺跡等における出土層位を勘案すれば、そのことが必ずしも遺跡の一般的状況を示していない。このようなことから、県内各地には一般に知られている以上の、良好な塞ノ神式土器包含遺跡があることが推察される。

縄文後期とみられる擦り消し縄文、貝殻擬縄文は甕棺、ことに3号棺の周辺から多数出土した。この地域には、弥生期の甕棺墓などとも重なり、縄文の遺構を探査することが出来なかった。調査に時間をかけ、好期に調査すれば遺構も発見出来たと思われる。

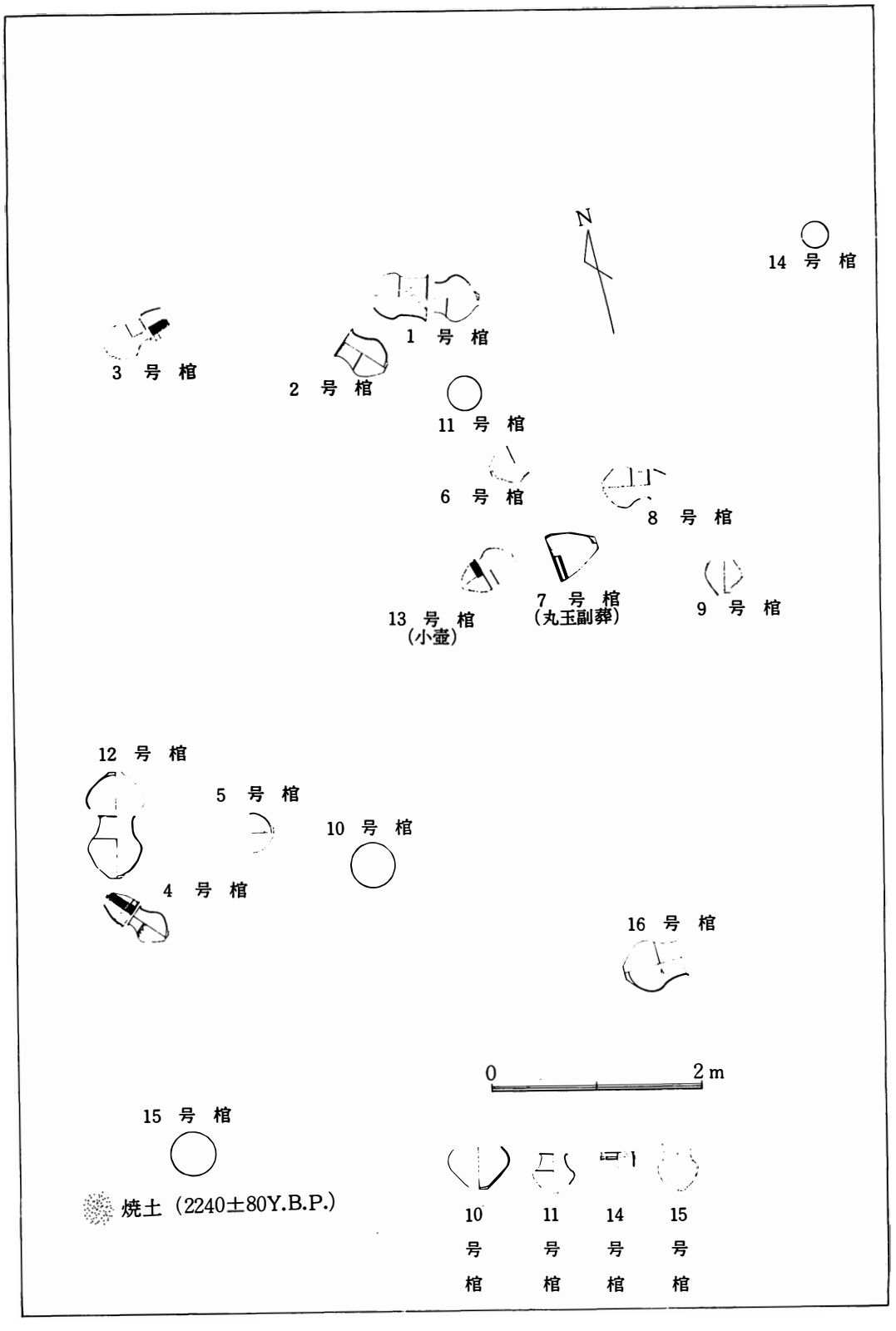
弥生時代

この地域に弥生式土器の出土することは知られていなかった。試掘により初めて、No.21付近から弥生前期の土器片が発見され注意をひいた。期待に違わず、次々と甕棺が発見され、全墓域をカバーするかたちで調査することが出来たのは幸いである。

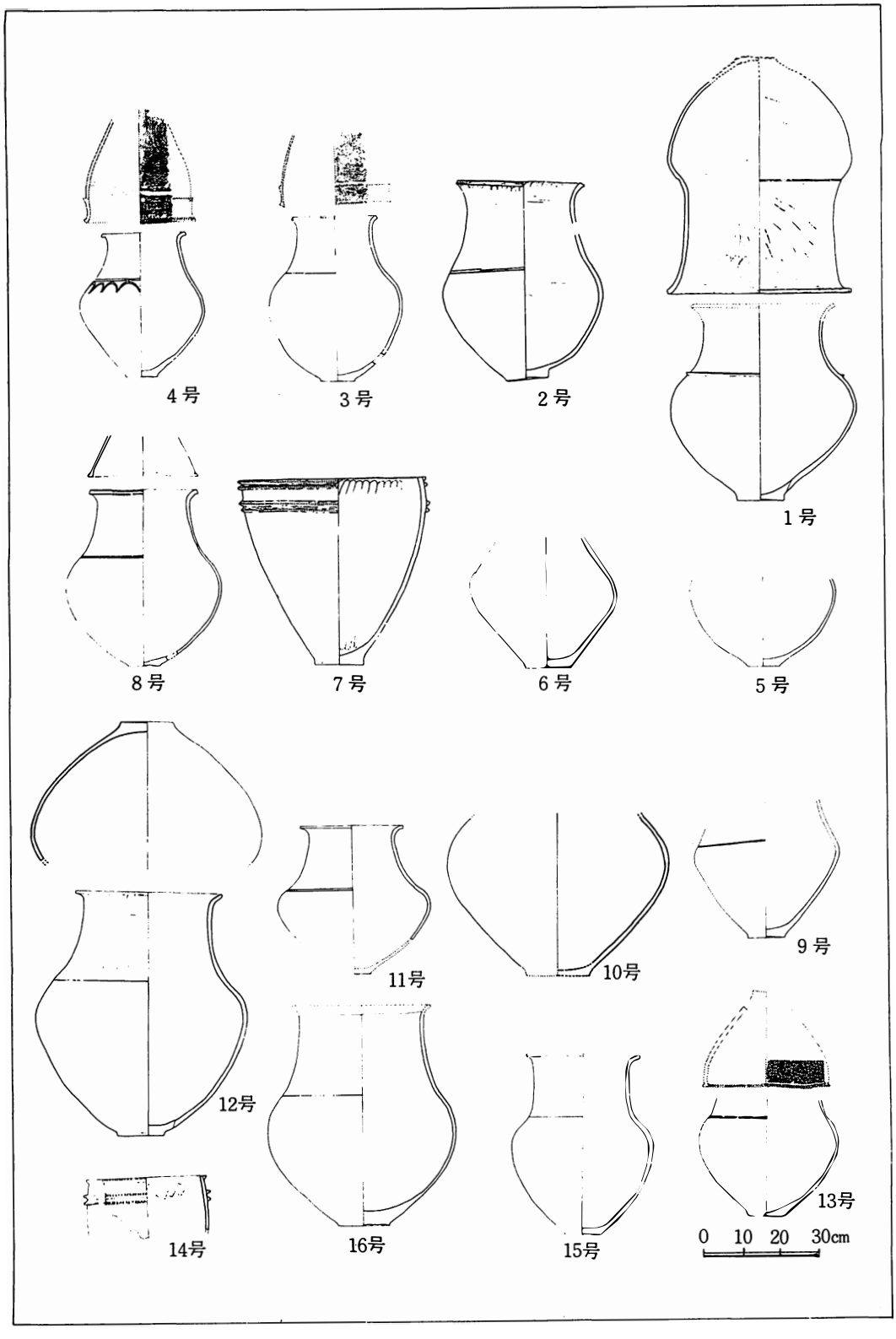
甕棺の大部分は極めて保存が悪く、破砕された甕棺はかろうじて存在の確認をしたものも少なくなかった。また、棺内に人骨はおろか、その残欠すら発見出来なかった。しかし、その出土状態から、また他の諸出土例からしてこれらを甕棺墓とみることが出来よう。調査範囲に土壙墓その他の墓制はみえない。総数16基の甕棺が確認されたが、甕棺には大小の違いがあり、成人墓、小児墓かについては明らかでなかった。整理の結果、1・7・10・12・16の各号は大形で、他の各号は小形の甕棺であった。

甕棺の分布状況（第67図）は、東西7.5m、南北8mの範囲におさまり、中央に4m四方の空間を残し馬蹄形状にひろがっていた。3号棺と12号棺の間はあき、群の西側が開いている。中央約4m四方の空隙が何を意味するのか、出土状態から明らかにすることができなかった。

甕棺の下甕の**開口方向**は必ずしも一定しない。甕の保存が悪く、的確にその向きを調査することは出来なかったが、底の状態等から主軸の方向を推定すれば以下のとおりである。北を向くものに、2号・5号・9号があり、また北西を向くものには4号棺がある。東を向くものが最も多く、3号・13号・7号・16号および12号の5基が数えられる。西に向って開口するものには1号・6号そして8号の各甕棺があった。11号・14号・10号・15号の各甕棺は破壊が激しく、その向きさえつかめなかった。



第67図　沈目立山遺跡　甕棺分布図 2



第68図　沈目立山遺跡　甕棺集成

この地域、とくにNo.21～No.23から出土した弥生式土器片の中には古い様相を示すものもある。甕形土器の口縁がゆるやかに外反し、口唇部に突帯のない第40図３や第41図32～34は様式的に古く、弥生前期でも古期に属すものとみられる。しかし、甕棺の中にこれに類するものは１基もなく、16基のいずれもが新しい様相を示している。各壺の形態を見ても、口縁上端が単純にはねるもの（４・11・12・15)、上端がいく分肥厚し、それに刻み目のあるもの（１号上・２・８)、同じく刻み目のないもの（３)、肩に突帯のあるもの（１号下)、段をもつもの（６）があり、また、沈線をもつもの（１号上・２・３・４・８・９・11・12・13・15・16）などの各甕棺がある。また、４号棺には平行沈線の下に二重の弧文を描いている。頸の直立するものに１号上甕が、またその傾向が2･15などに認められる。そこで北九州で板付１式として観念され、位置づけられている甕が、たとえば仮に、前期末とみられる金海式へと漸移移行するとした場合、その遷移過程を沈目立山の甕棺の中に求めるとすれば、４号棺下甕、11号棺、６号棺により古い様相が認められ、１号棺、中でもその上甕、２号棺および15号棺により新しい様相を見出すことが出来る。甕形土器については完好な資料が少なく、３号上、４号上、７号および13号上甕（実は鉢）および14号棺はその少ない資料である。これらの各甕形土器はそれぞれが個性的で、直接比較対照にならない。このうち、７号・14号棺は大分県の下城式や、別記（第72図）の加勢川河底出土資料に近い。

以上の各甕棺は、土器形態の形態変化の割に、**沈目立山期**として捉えられるこれらの甕棺群の年代幅は、小さいものとみられる。ある社会集団がここに墓地を定め、逐次この数は増して行く。それはやがて甕棺群となる。これが墓域として意識しあった形で墓地が形成されると思われるが、第67図の状態から方向性、規則性を見出すことは困難のようである。13号棺横の小壺片は、それが八反田遺跡[注1]でみるように副葬品であるとするきめ手はない。７号棺の玉出土は特徴的であるが、集団の中の特異墓とすることが出来るか類例の増加を期待するほかない。前期の甕棺からの玉出土例として県内では、大津町無田原遺跡[注2]や熊本市小島町御坊山[注3]の例があるが、詳細はその報告を俟ちたい。

沈目立山遺跡出土の甕棺の中には**煤**の付着したものがある。煮沸形態の甕形土器の煤は一般に、それが日用什器[注4]の転用と理解されている。しかし、この遺跡出土の甕棺には、壺形土器で器面に煤を帯びたものがある。それはどう理解したらよいか、一つの興味ある材料である。

甕で煤を帯ぶものに４号上・７号・13号上があり、壺で煤が付着したものに２号・５号・８号および12号下の各棺がある。この二次的に受けた火は単に、それが日用什器の転用とみれないものである。15号甕棺西側の焼土、それは暗示的で、それによるC^{14}の測定値の**2240±80Y B.P.**の数値は示唆的である。この火が、あるいは古代人の葬送儀礼・習俗と結びつかないだろうか。弥生中期の黒髪式甕棺には、その殆どに煤の付着がみられる。これもあるいは地域的伝統の継承として理解されるかもしれない。

No.22付近の竪穴、それがこの甕棺に対置される住居址であるか、そのことは必ずしも明らかでない。一つの興味ある問題であるが、資料不足で今後に期すほかない。

古墳時代

甚九郎山古墳の周溝の発見は一つの収穫である。周溝中から直接古墳に結びつく遺物、埴輪、土器などは発見されなかった。周溝中の多数の掘り込みは今後の問題をなげかけるかもしれない。ここでは周溝の機能に結びつくものか、それとも築成時に出来たものか判然としなかった。

遺物の上で古墳時代とみられるものに坏（第54図Ｓ１）がある。この坏は16号甕棺の西から単独に出土し、その関連遺構は出土しなかった。

歴史時代

歴史時代の遺構として溝をはじめ、多数のピット群が発見された。ピットの出現の状況は、掘り方をもった柱穴などもあることを考えて、掘立て柱、あるいは高床の住居を思わせるに充分である。熊本市大江渡鹿の熊本大学運動場では黒色土器Ａを伴った住居址が発見されている。ここでの住居址は竪穴で方形のプランをしており、壁面の一側中央に軟質砂岩製の竈をもっていた。沈目立山遺跡も黒色土器を対比する限り、大きな年代差を見出せない。そうした場合、同時に異なった形態の生活態様がみられることになる。

道路様遺構も部分的に発見されているが、将来広域の調査を実施し、それが機能のわかる状態で家から家、村から村へとの展望が開ければ幸いである。

調査により**製鉄関連遺構**として集石遺構と炉址状の遺構があった。炉址状の遺構から、鍛冶滓、鉄片、鉄粉およびフイゴ羽口の直接製鉄に結びつく遺物が発見されたが、中には黒色土器が混在していた。製鉄関連遺構で、直接年代を示すような例は少なく、その点確実に時代が判定される遺構として注目される。また遺構･遺物の状態から鉄加工、村鍛冶的なものとみられる。これが集落内に恒常的に存在するのか、また定期的、一時的に鉄加工したのかについては遺構から明らかでなかった。

この地域の調査により布目瓦や**墨書銘土器**の特殊な遺物が出土した。布目瓦の出土が直ちに瓦葺きの建物の存在を意味しないが、その出土層位が後世の攪乱でないことは注意を要する。調査によりほぼ全域にわたり土師器・須恵器の破片が出土した。土師器の中には墨書土器が４点あり、このうち３点は内黒の黒色土器Ａである。隣接の沈目遺跡出土の２点を合わせれば合計６点になり、このことは特異な現象として注目してよい。この中には「□□丸」と如何にも意味ありげで、これは所有を意味するのか、あるいは在所の「名」を意味するものとみられる。このように墨書銘土器が出土することは異常であるが、少なくともこの地域に文字を記録し、文字を解する人が居たのに違いない。土器はその形態から平安期とみられるが、一見僻遠の地

とみられる沈目立山遺跡の立地は何を意味するものであろうか。

そこで、関連が考えられることに**益城国府**の存在である。肥後の国府の所在は３箇所が考えられていて、それぞれ地名を冠し、託麻国府、益城国府、飽田国府と呼称されている。その年代的遷移過程を、松本雅明氏は益城→託麻→飽田の順に、木下良氏は託麻→益城→飽田と考定[注5][注6]し、年代等についても相違がある。益城国府の場所について、そのいずれもが城南町舞ノ原台地上を比定しているが、松本氏は比定の場所を沈目立山遺跡の東南約700～800mのあたりに求め、また木下氏は、松本氏が平安末～鎌倉初に一時、国府が置かれた可能性を想定する隈庄国府（城南町宮地）を考定している。[注7]

以上のような舞ノ原台地は、古代・中世にかけての重要な場所とみられ、この地域にそのような時代的背景を勘案すれば、沈目立山遺跡から墨書銘土器出土の意味が解されるかも知れない。

（緒方）

注１　上益城郡益城町大字小池の八反田、水田下の遺跡で筆者らが昭和42年調査

注２　菊池郡大津町矢護川無田原遺跡は県指定史跡で、無田原遺跡調査団が昭和49年調査

注３　熊本市遺跡調査会が調査

注４　甕棺、ことに弥生中期の黒髪式土器を使用したものには煮沸に使用されたとみられるものが、多く、その痕跡である煤は日用什器の転用とみられている。

注５　松本雅明編「城南町史」　熊本県城南町　昭和40年

注６　木下良「肥後国府の変遷について」古代文化　第27巻　昭和50年

注７　益城国府について木原武雄氏の熊本史学48号上載の「和名抄益城国府についての一考察」がある。これは和名抄などの記録上から託麻郡と解される益城町古閑地区に、益城国府を考定しているが無理である。「国府想定図」も現地の実測図の地割とかなりの相違をみせている。また益城町は戦後町村合併後の名称である。

表1　沈目立山遺跡出土　石器一覧

石器番号	形　態	石　質	重量(g)	備　考
ST 1	礫　器	チャート	900	No.28付近第Ⅲ層出土
ST 2	礫　器	シャールスタイン	578	No.22付近より採集
ST 3	磨製石斧	蛇紋岩	—	14号甕棺と出土．折損
ST 4	打製石斧	粗粒砂岩	139	14号甕棺と出土
ST 5	スクレーパー	サヌカイト	37.5	表　採
ST 6	スクレーパー	サヌカイト	29.8	表　採
ST 7	石　錘	砂　岩	73.8	14号甕棺と出土
ST 8	石　錘	滑　石	—	表採．折損
ST 9	打製石斧	頁　岩	—	8号甕棺と出土．折損
ST10	石　皿	軟質砂岩	—	4号甕棺、集石遺構と出土．折損
ST11	石　鏃	サヌカイト		No.27付近　ピット中

第2　沈目立山遺跡出土　甕棺一覧

甕棺番号	区別	器形	口縁径	底径	最大胴径	器高	甕棺の方向	埋納角度	備　考
1	上甕	壺	46.0cm	—cm	46.8cm	推定61.0cm			保存不良
	下甕	壺	—	12.0	47.3	現高46.0	N 74°W	45°	保存稍不良
2		壺	32.8	11.0	41.4	50.9	N 31°W	37°	保存稍不良．器形歪み 煤付着
3	上甕	甕	復元25.0	—	—	—			保存不良
	下甕	壺	21.0	8.6	33.4	推定40.8	N 72°E	10°	保存不良
4	上甕	甕	26.7	—	26.0	—			保存不良．煤付着
	下甕	壺	20.7	7.8	32.0	35.8	N 42°W	30°	完形
5		壺	—	8.0	36.0	—	N 72°W	71°	保存不良．煤付着
6		壺	—	11.8	38.0	—	N 89°E	41°	保存不良
7		甕	48.0	12.6	—	47.7	N 98°W	48°	完好．煤付着
8		壺	26.8	8.0	39.0	復元高43.0	N116°E	30°	保存不良．合口か・煤付着
9		壺	—	9.2	36.4	—	N 8°E	32°	保存不良
10		壺	—	—	56.0	—	—	—	保存不良
11		壺	25.3	—	38.3	—	—	—	保存不良

12	上甕	壺	—	13.4	59.2	59.2			保存不良
	下甕	壺	36.6	11.8	54.3	62.6	N 13°E	67°	完形．煤付着
13	上甕	甕	32.0	—		推定 23.0			保存不良．口縁下に文様あり．煤付着
	下甕	壺	—	9.5	35.0	—	N113°W	63°	保存不良
	小壺	壺	9.5	—	—	推定 10.6			保存不良．副葬品か
14		甕	推定 30.0	—	—	—	—	—	保存甚だ不良
15		壺	28.5	9.2	36.0	復元 45.2	—	—	保存不良
16		壺	推定 23.6	12.7	47.0	現高 47.0	N 86°E	48°	保存不良、合口か

表 3　沈目立山遺跡出土　須恵器一覧

No.	遺構（出土地点）	器形	法量（cm） 口径	底径	器高	備考
S 1	No. 21 ～ 22	坏	10.8	—	4.0	
S 2		蓋	16.0	—	—	
S 3	No.28～28+60m	〃	15.7	—	—	
S 4	集石遺構周辺	〃	17.8	—	—	
S 5	No. 27 ～ 28	〃	17.0	—	—	
S 6	No.28～28+60m ピット中	〃	15.0	—	—	
S 7	No. 25 ～ 26 ピット中	〃	14.2	—	—	
S 8	No.28～28+60m	坏	16.0	9.4	5.1	
S 9	No. 27 ～ 28	〃	—	7.2	—	
S 10	集石遺構周辺	〃	13.0	8.6	4.5	
S 11	3 号溝南端 方形ピット	〃	12.9	8.0	4.1	
S 12	No. 27 ～ 28	〃	—	6.8	—	
S 13	溝様遺構	〃	—	7.5	—	
S 14	No. 21 ～ 22	〃	—	8.0	—	
S 15	No. 23 ～ 24 ピット中	甕	41.0	—	—	
S 16	No. 22 ～ 23	〃	14.1	—	—	
S 17	溝様遺構	〃	11.2	—	—	
S 18	3 号溝南端 方形ピット	〃	18.5	—	—	
S 19	No. 24 ～ 25 ピット中	瓶子	—	—	—	
S 20	溝様遺構	〃	—	—	—	
S 21	〃	〃	—	—	—	

S 22	No. 26 ～ 27	〃	9.5	—	—	
S 23	No. 22 ～ 23	〃	12.8	—	—	
S 24	2 号 溝	坏	14.0	8.0	7.0	
S 25	No.28～28＋60m ピット中	〃	—	8.1	—	
S 26	No. 23 ～ 24 ピット中	〃	—	6.6	—	
S 27	2 号 溝	〃	11.5	7.0	3.9	
S 28	No. 25 ～ 26 ピット中	〃	12.1	8.1	3.4	
S 29	No. 27 ～ 28 ピット中	〃	11.0	7.0	3.6	
S 30	溝 様 遺 構	〃	12.0	6.1	3.6	
S 31	No. 27 ～ 28	〃	13.0	7.0	3.7	
S 32	No. 27 ～ 28	〃	12.0	6.9	4.2	
S 33	3 号溝南端 方形ピット	〃	12.9	7.2	3.3	
S 34	No. 22 ～ 23	〃	12.9	6.2	3.8	
S 35	2 号 溝	〃	—	7.4	—	
S 36	No.28～28＋60cm	〃	13.0	6.4	3.8	
S 37	溝 様 遺 構	〃	—	8.0	—	
S 38	No. 23 ～ 24 ピット中	〃	11.8	6.3	3.4	
S 39	No. 27 ～ 28	〃	—	6.6	—	
S 40	溝 様 遺 構	〃	—	7.4	—	
S 41	No.28～28＋60m	壺	—	—	—	
S 42	No. 23 ～ 24 ピット中	盤	21.0	—	2.1	
S 43	No. 23 ～ 24 ピット中	〃	13.4	11.0	1.8	
S 44	1 号 溝	甕	—	—	—	
S 45	No. 27 ～ 28	壺	12.5	—	—	

表4　沈目立山遺跡出土　土師器一覧

No.	出土地点（遺構）	器形	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
H 1	No.28～28＋60m N	甕	27.0	—	—	
H 2	No. 22 ～ 23 ピット中	〃	26.2	—	—	
H 3	No.28～28＋60m	〃	27.0	—	—	
H 4	1 号 溝	〃	25.2	—	—	
H 5	No. 26 ～ 27	〃	21.2	—	—	
H 6	No. 27 ～ 28	〃	—	—	—	
H 7	No. 21 ～ 22	〃	—	—	—	
H 8	No. 27 ～ 28	〃	—	—	—	
H 9	3 号 溝	土鍋	28.7	—	—	
H10	No.28～28＋60m	〃	25.4	—	—	
H11	3 号 溝	〃	27.2	—	—	
H12	3 号 溝 南	〃	29.0	—	—	
H13	No. 23 ～ 24	〃	27.6	—	—	
H14	No. 21 ～ 22	〃	—	—	—	
H15	No. 23 ～ 24	竈	—	—	—	
H16	3 号 溝 南	〃	—	—	—	
H17	No. 23 ～ 24	〃	—	—	—	上端径19.0cm
H18	〃	〃	—	—	—	
H19	No.28～28＋60m	甑	—	—	—	
H20	〃	〃？	—	—	—	把手
H21	No. 26 ～ 27 ピット中	埦	11.0	7.0	4.9	
H22	No. 27 ～ 28	〃	12.5	—	—	
H23	No. 22 ～ 23	〃	—	5.9	—	
H24	No. 25 ～ 26 ピット中	〃	11.8	—	—	
H25	No.28～28＋60m	〃	12.2	—	—	
H26	No. 22 ～ 23	〃	—	7.0	—	
H27	〃	〃	—	4.3	—	
H28	No.28～28＋60m	〃	—	6.1	—	
H29	2 号 溝	〃	—	6.4	—	

H30	3 号 溝 南	埦	—	6.7	—		
H31	No. 23 ～ 24	〃	—	7.7	—		
H32	〃	〃	12.0	6.0	5.7		
H33	〃 ピット中	〃	11.7	5.7	5.7		
H34	No.28～28+60m	坏	13.3	5.3	3.8		
H35	No. 24 ～ 25	埦	—	7.4	—		
H36	No. 27 ～ 28	坏	12.2	7.8	3.5		
H37	〃	〃	11.0	6.2	3.5		
H38	No. 25 ～ 26	〃	—	7.0	—		
H39	2 号 溝	〃	—	6.4	—		
H40	No.28～28+60m	〃	11.7	6.8	3.8		
H41	No. 26 ～ 27	〃	—	4.9	—		
H42	No.28～28+60m		17.0	—	—	脚付	丹塗
H43	溝 採 遺 構		—	—	—	〃	〃
H44	No. 25 ～ 26		—	7.3	—	〃	〃
H45	No. 22 ～ 23	坏	12.8	6.8	3.5	平底	〃
H46	4 号 溝	〃	14.3	7.6	3.6	〃	〃
H47	No. 21 ～ 22	〃	—	8.4	—	〃	〃
H48	No. 27 ～ 28 ピット中	〃	11.7	6.2	3.1	〃	〃
H49	No. 22 ～ 23	〃	12.5	7.2	6.8	〃	〃
H50	No.28～28+60m	〃	—	6.8	—	〃	〃
H51		〃	—	7.0	—	〃	〃
H52	No.28～28+60m	〃	13.4	7.2	—	〃	〃
H53	No. 27 ～ 28	〃	—	6.0	—	〃	〃
H54	〃	〃	—	7.5	—	〃	〃
H55	溝 様 遺 構	〃	7.0	7.5	3.3	〃	〃
H56	No. 21 ～ 22	〃	—	—	—	丹塗り	
H57	No.28～28+60m ピット中	〃	—	—	—	〃	
H58	No. 22 ～ 23	〃	—	6.0	—	平底	丹塗り
H59	甚九郎山古墳周溝	〃	—	7.0	—	〃	〃

表5　沈目立山遺跡出土　黒色土器一覧

No.	遺構（出土地点）	器形	法量（cm） 口径	底径	器高	備考
HK 1	甚九郎山古墳周溝	埦	13.1	5.8	4.8	内黒土器
HK 2	〃	〃	12.8	6.3	4.6	〃
HK 3	No. 23 ～ 24 ピット中	〃	12.4	5.8	4.8	〃
HK 4	No. 25 ～ 26	〃	12.8	—	—	〃
HK 5	No.28～28+60m	〃	11.4	4.8	4.5	〃
HK 6	2 号 溝	〃	—	6.7	—	〃
HK 7	No. 26 ～ 27		—	6.5	—	〃
HK 8	No. 21 ～ 22		—	5.9	—	〃
HK 9	No.28～28+60m		—	7.7	—	〃
HK10	No. 24 ～ 25 ピット中		—	7.0	—	〃
HK11	No. 23 ～ 24		—	8.0	—	〃
HK12	No. 23 ～ 24 ピット中		—	9.4	—	〃
HK13	〃		—	7.4	—	〃
HK14	No. 21 ～ 22		—	7.8	—	〃
HK15	溝様遺構		—	6.0	—	〃
HK16	No. 21 ～ 22		—	6.3	—	〃
HK17	No. 23 ～ 24 ピット中		—	7.0	—	〃
HK18	No.28～28+60m		—	6.8	—	〃
HK19	〃		—	5.8	—	〃
HK20	4 号 溝		—	5.3	—	〃
HK21	No.28～28+60m ピット中		—	6.3	—	〃
HK22	No. 24 ～ 25 ピット中	埦	—	7.4	—	〃
HK23	No. 22 ～ 23		—	6.7	—	〃
HK24	No. 25 ～ 26 ピット中	埦	16.7	—	—	〃
HK25	No. 24 ～ 25 ピット中	〃	13.4	—	—	〃
HK26	No. 27 ～ 28					〃
HK27	No.28～28+60m					〃
HK28	No. 25 ～ 26 ピット中			6.8		〃
HK29	2 号 溝			5.6		〃
HK30	No. 27 ～ 28 ピット中	皿		13.8		〃
HK31	No.28～28+60m	〃		12.8		〃
HK32	No. 27 ～ 28	〃		13.1		〃
HK33	製鉄関連 2号遺構	埦		13.8		〃
HK34	〃	〃		14.1		〃

付１　城南町沈目含土器層地質調査報告(中間報告)

斉　藤　林　次

緒　　言

昭和51年３月、筆者は教育庁の依頼を受け、当時、文化課で発掘作業中の（城南町沈目）現地を調査した。調査は今年度続行する予定である由、今回は中間報告にとどめる。

１．位置及び交通

調査地は城南町沈目部落の東500mの丘上の畑地にあり、県道改良工事の予定地である。

付近の地形は比高15m内外の段丘上にあり、道路よく、交通至便である。(第１図参照)

２．地　　質

調査地における地層の順序を新期のものから挙げると下のようである。

１）　耕作土　　0.25m

２）　含土器層　　0.25m　｝黒褐色土
　　黒褐色土　　0.70m

３）　褐色粘土質土　１～1.5m

４）　段丘礫層

～～～～～　不整合　～～～～～

基盤岩類

丘上の調査地にみられる地層は上記の(1)，(2)，(3)の地層で(4)の地層は調査地の南、段丘崖の頂上一帯に露出している。この礫層の礫は0.1m大のものが多く、厚さは3.0m～2.0m内外、基盤岩類を不整合に被っているものと推定される。

３．含土器層及び構築物

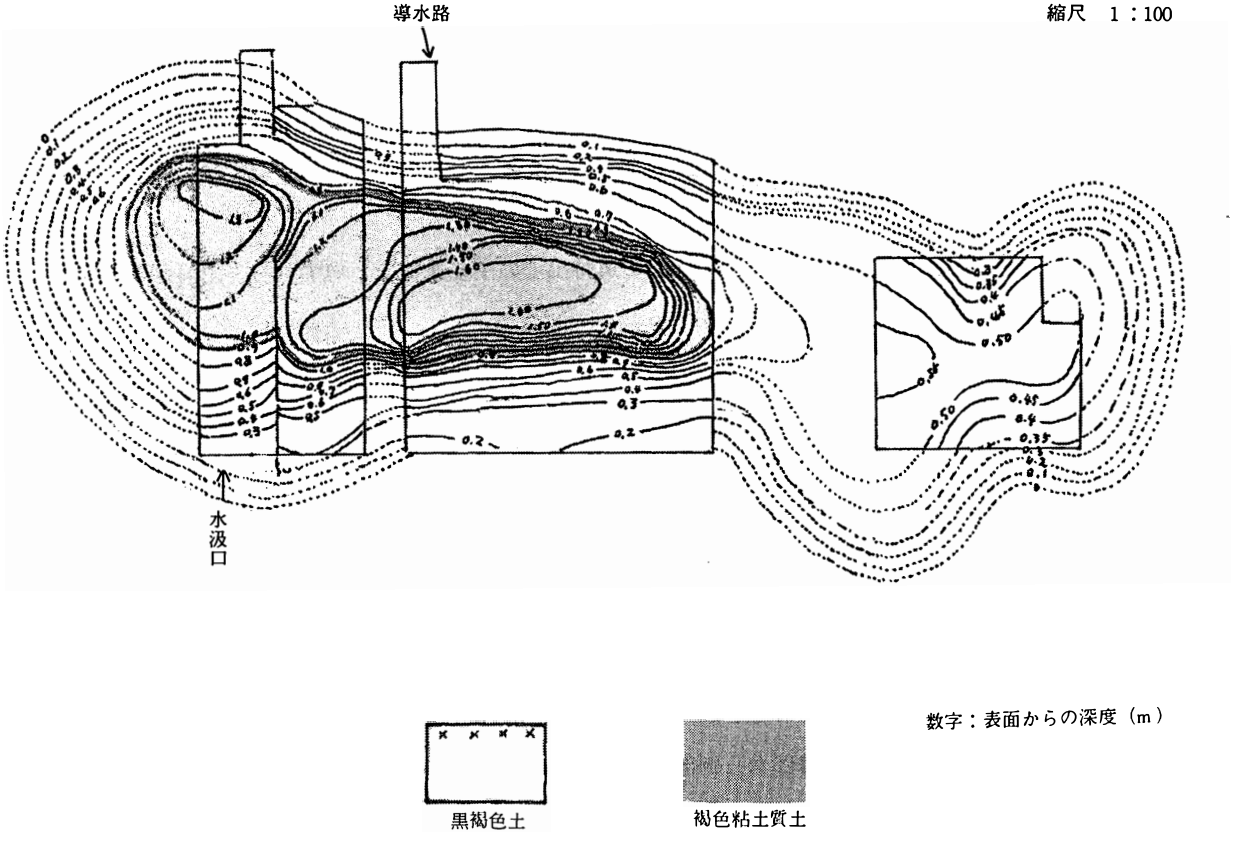
含土器層は、耕作土（地表下0.25m）から0.25mの深さ(地表下0.25～0.5m)の間にある。住居跡（柱跡）の東側に幅0.22～0.65mの深さ0.25～0.4mの溝があり、住居跡に沿って南に延び、溜池に終っている。(第69図参照)

溜池は東西に延びた矩形の外形で長さ15m幅平均５m、深さは東の辺縁部0.5m、中央部1.6m、西縁部で1.3mである。水汲口は南西端にあり、地表下1.0mに足場として少し平らな面があり、深さも1.2～1.3mと比較的急に深くなり、又褐色の粘土質土が0.9m以下に分布しているので、これを掘下げ貯水している。(褐色粘土質土は不透水層)

水汲口が南にあることは恐らく未調査であるが、現在調査地に隣接している地区に住居跡があったのではあるまいか、今後の調査に俟つ。

この住居跡の環境から丘上では飲料を求め難く、段丘を下り平地に行かぬと水が得られず、距離的に遠いので１部ではこの溜池で天水を貯溜して利用していたのではあるまいか。

（昭和51年３月）



第69図　溜池実測図

付２　甲佐町麻生原遺跡および八ツ割ドルメン群

緒　方　　勉

麻生原遺跡と**八ツ割ドルメン群**は、行政区分の上からいずれも熊本県上益城郡甲佐町に属し、緑川の左岸台地上に占地する。両遺跡とも弥生前期の遺跡であるが、一般にはあまり知られていない。この度、同一台地上、西北約5㎞の地点にある沈目立山遺跡では、弥生前期の甕棺群を発見、それを調査することが出来た。そこで、関連遺跡としての麻生原・八ツ割の両遺跡について紹介する。

麻生原遺跡は前述の如く、緑川左岸台地の辺縁部に立地する。麻生原地区には、集落の南はずれ近くに国指定の天然記念物「キンモクセイ」があり、お堂の横に所狭しと生い茂っている。この集落のはずれあたりから、坊分地区に通ずる農道ぞいの左手に神社の杜がみえる。この道沿い一帯が麻生原遺跡で、弥生式土器を主とした遺物を出土し、過去において縄文（阿高式）土器片も採集されている。

第70図（１～４）と第71図（５－15）はこの遺跡出土の主要遺物で、いずれも弥生前期の壺または甕である。以上、図によって説明する。

壺（１～４）　１は胴部以下欠失しているが、ほぼその全容を知ることが出来る。口縁部は直下で外反、肩はなだらかではあるが、胴部へかけての開きは大きい。肩に段があり、その上下に５線単位の平行沈線が３つに分けて描かれている。これに重弧文などの文様はない。口縁部径18㎝、最大胴径38.5㎝である。器面は黄褐色、焼成はあまりよくない。

２～４は肩部に重弧文をもつ壺で、土器片はいずれも小さい。２は３個の破片で、それから作図復元したものである。肩から胴部にかけて文様帯を構成するが、上下に３本単位の平行沈線文が描かれ、その間に、これも３本単位の弧文を描く。器面はよく精整磨研され、淡黄白色、焼成良好な土器である。３・４も２と同一基調の壺破片である。器面の色調は褐色である。

甕（５～15）　５～11は口縁部から胴部にかけての破片で、12～15は甕の底部である。口縁部の突帯の状態から５～８，10，９に分類される。

５～８は口縁部に二条の突帯がめぐるが、口縁部上端は平坦である。突帯上には刻み目があり、口縁部は窄まり最大胴幅は下位の突帯あたりにくる。口縁径は５が22㎝、６が18㎝、８で20㎝を図示により計測された。

10は北九州で如意形口縁といわれる形の口縁の土器である。口縁部に突帯を貼付けなどの所措をせず、そのまま立上がり外反する。これは北九州において板付１式として処理されるものに比べ、口縁部が肥大している。

９は形態的に10と５～８の中間形態を示すようで、口縁端末が肥厚しているが突帯は貼付け

ではない。下位の突帯で急折し、内側に傾くのはこの土器を特徴づけている。

12～15は甕の底部で、いずれも弥生前期の土器とみられる。底径８～10㎝、胴部への立上がりは急である。平底の端末が外へひろがる。なかでも12の底部にその特徴が象徴的にみられる。

以上は麻生原遺跡出土の、弥生前期土器の一括資料である。採集資料であるため、共伴関係に疑念はないでもないが、土器の形態からして共伴するものとみてよかろう。甕の多くは器面に煤をかぶり、内側に焦げ付きのあるもの、なかには器面が焼爛しているものもある。また、これらの甕は、径20㎝前後の日用什器としてふさわしいものが多い。さらにこの遺跡から磨製石斧等も出土していて、これらの状況から生活遺跡、住居址ではないかと考えられる。一般に弥生前期の生活立地は低湿地に占地することが多い。そのように考えれば、麻生原遺跡の立地は特徴的で、その生産基盤とともに興味をそそるものがある。

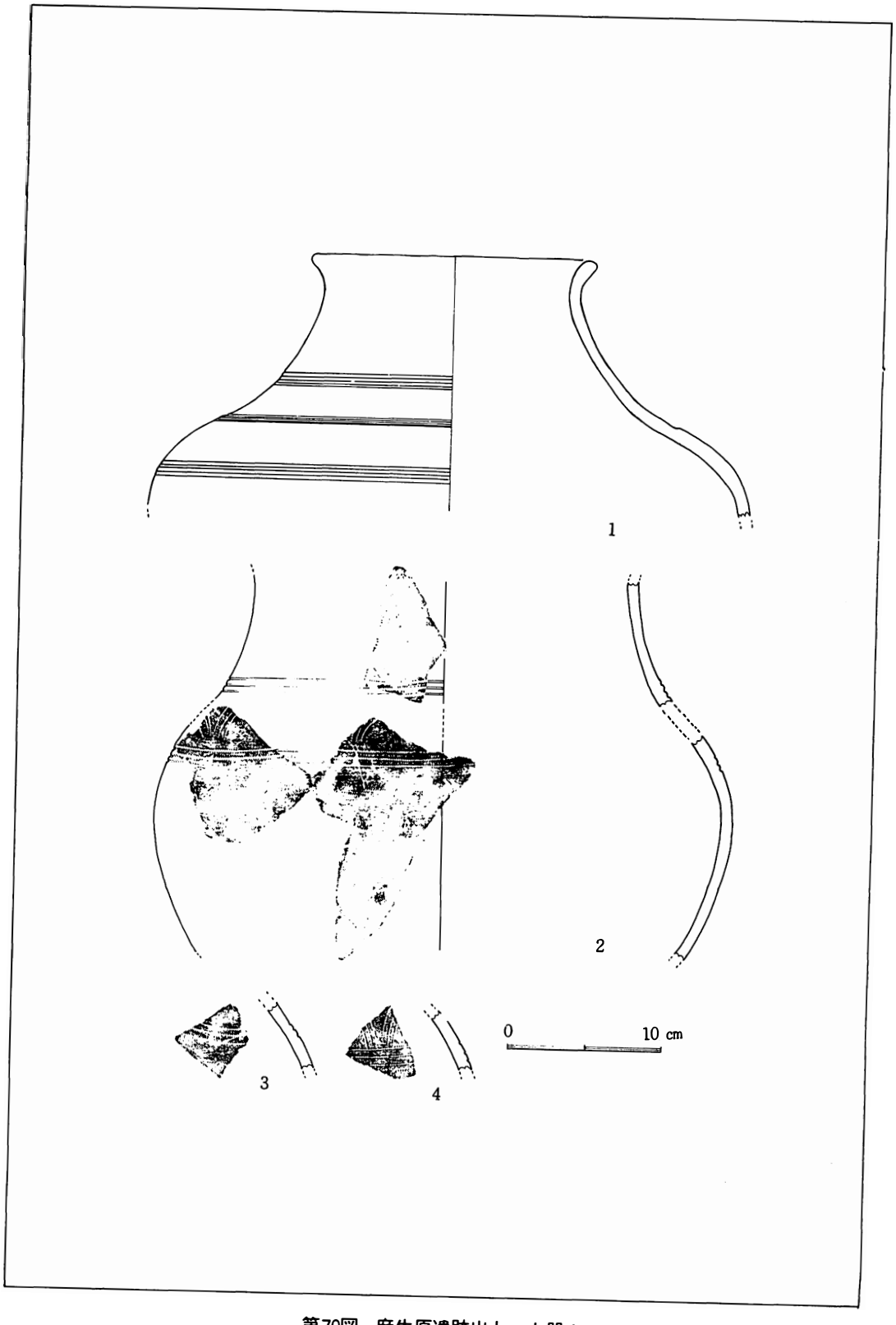
八ツ割ドルメン群は、麻生原遺跡の南約500mの台地上にある。台地でも辺縁部に近く、横に広がってドルメンが散在する。麻生原遺跡とは台地の両側で、視界がさえぎられ直視出来ない。ドルメンのあたりから南は開け、最近開田された水田面があり、さらに緑川を隔て甲佐岳の秀麗な姿をみることが出来る。

ドルメンは南北する農道両側に分布する。東側には３基、この中には高さ1.5m、径２m位の盛土をもったもの２基、他の１基は土手の中にみえかくれして、石をのぞかせている。農道の西側には畑地上下三段にわたり分布する。上段の畑の農道よりには、小盛土をもった土塚が余喘を保っている。ここには、もともと大きい盛土があったものとみられる。下の畑には農道よりの畦畔に、1.5m×70㎝位の石を放置してあった。これはおそらく、もとは畑の中にあったものとみられる。この畑の奥まったあたりに、それぞれの間をおいた４基の巨石が横たわっていた。これらの状態からドルメン群とみられ、各ドルメンもあるいは農道東側のように盛土があったことも考えられる。この周辺から土器片が採集されていて、小片ではあるが板付式の土器片とみられた。この下段の畑の都合５基の石は、昭和44～45年頃ブルドーザで押除けられ消滅した。奥まったあたりに４基のドルメンがあったが、その上に松林がある。この松林は100㎡位の畑であるが、この中にドルメンがある。この畑は庭園樹としての松と茶などがあるが、耕作者によると「畑に石があって普通の畑にならないので、木を植えた」ということであった。茂みを押し分けて畑を検べると確かに石が顔をのぞかせている。そして、樹林の中に３基ほど確かめ得た。

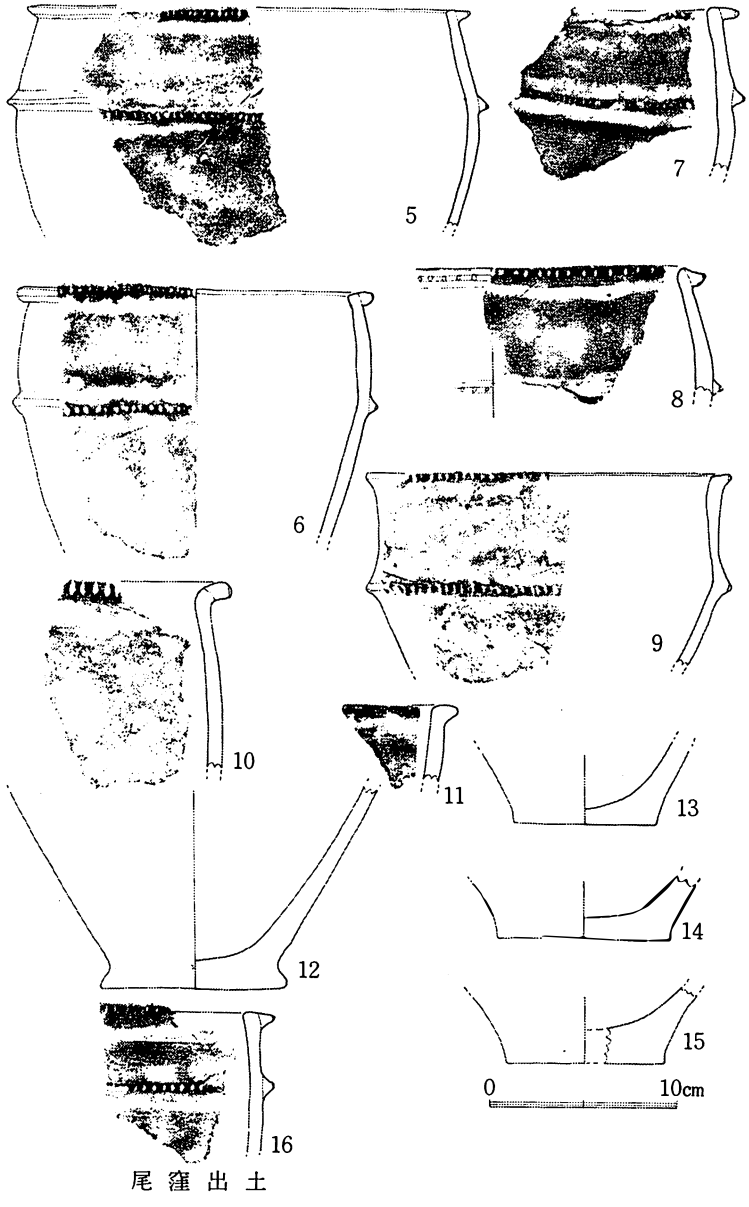
以上述べたように本遺跡では、少なくとも12基以上のドルメンがあり、またあった。そこで考えられることは、その位置的関係、土器形式の類似からして麻生原遺跡との関連性が認められる。かりに麻生原遺跡を弥生前期の生活址とし、八ツ割ドルメン群がその墓地であるとするならば、その時の村落、社会を構造的に捉える上で興味ある資料を提供することとなる。弥生前期の墓地が、**ドルメン群**を形成する集団（八ツ割）、地域、地点を異にして**甕棺群**を形成する

集団があるとすれば、これまた新たな問題点の指摘になろう。

八ツ割ドルメン群について付記すれば、昭和40年頃地元甲佐町教育委員会清村守氏（現社会教育課長）に案内してもらい、乙益重隆氏と現地を訪問したことがある。その際、現地出土の土器片を提示され、それは北九州における板付Ⅱ式に相当する土器とみた。ついでながら紹介すれば、隣町の中央町にドルメンとみられるものがある。それは、熊本県下益城郡中央町馬場の集落の東外れで、小字名は麻生平（あそうびら）（目印になるものに、最近隣接地に畜舎が出来ている）というところである。ここではかりに「**麻生平ドルメン**」としておこう。麻生平ドルメンは台地のヘリに占地し、都合２基が確認された。いずれも農道（ふみ分け道）の南側の桑園の中にあり、１つは畦畔上にある。１つの石材は真白の石灰岩（１m20×60cm位）で、この地域に本来存在しない材質の石でもある。このドルメンの時期については今のところ手掛かりはないが、周辺から弥生中期（古）の土器片が採集されている。



第70図　麻生原遺跡出土　土器1



第71図　麻生原遺跡出土　土器２

付３　熊本市御幸木部町加勢川河底遺跡

緒　方　　勉

加勢川河底遺跡は沈目立山遺跡の北々東６kmの地点にあり、行政区分の上から熊本市御幸木部町に属する。熊本市画図町下無田を加勢川堤防沿いに下がること約２km、左手に地元では八幡塚と称する茂みがある。この一帯が本遺跡で、河底から土器など採集される。またこの遺跡は地元の故大野秋さん、城南町の小林麟也氏らにより発見紹介された遺跡であるが、資料の一部が紹介されている程度で、一般にはあまり出土資料の内容が知られていない。しかし、本遺跡からこれまで多量の土器が採集されていて、地元の熊本大学・熊本市立博物館などに保管されている。これらの採集資料は量的に多く、中には弥生後期の重弧文土器もあるが、その大部分が弥生前期に属するものである。この中から主要なものを撰んで沈目立山遺跡の関連資料として遺物を紹介したい。[注1]

壺形土器（１－21）　口縁から底部まで接合する完好な土器に恵まれていないが、口縁部、頚部、底部の状態からおよその推定は可能である。１～４と15は口縁部で、弥生前期壺の特徴をよく示している。口縁端末は外に反転、なだらかな曲線を描きながら胴部にいたる。このうち４は口縁・頚部の立上がりの具合から新しい様相が見取られ、中期的なものへの移行形態であることを示している。14は頚部の破片で、上下に３本単位の沈線がめぐる。これも４と同様に新しさが感じられる。また15の口縁は、その端末が肥厚し面をなし、またさらに上面が中凹（くぼ）みになり、かすかに斜めの刻み目がある。これも様式的新しさが窺われ、沈目立山遺跡出土の甕棺に類似性がある。５～13は壺の肩部より胴部にかけての破片である。これらの各土器片には、沈線、段の前期土器の特徴が顕著にあらわれる。９～13は肩部に段のあるタイプで、13は段の下に２条の沈線がめぐっている。７には上端に３条の沈線がみえる。これは形態的に14と近いことが考えられる。５・６・８は肩部に弧文の文様を施文したものである。５は二重弧文、６は三重の弧文の上に３条単位の平行線文が、８は単に一条の弧文がみえる。この肩部に重弧文を施す壺は、斉藤山、麻生原および沈目山の各遺跡から出土している。また16～21は河底遺跡出土の壺底部である。それはよくこの時期の特徴を示している。

甕形土器　22～40は甕形土器の口縁部および底部の破片の図示である。22はこの遺跡を特徴づけるものとして、昭和30年乙益重隆氏により「日本考古学講座４」(河出書房刊)の中に図示されている。復元口径50cmに達する大形の土器で、口縁端末に１条、それより約10cm下がり２条の突帯がある。下の２条の突帯には刻み目がめぐる。口縁部の突帯は欠損しているが、もともと刻み目があったものとみられる。この土器が下城式（大分県）に対比されるように、上段の突帯から下段の突帯にかけて斜めの突帯がある。この土器は形態比較の上から沈目立山遺跡

の７号甕棺、14号甕棺にも類同性を求めることが出来る。23は22と同様大形の土器で、口縁部に２条の突帯がある。突帯上に刻み目のあるのが一般的である。24～28は口縁部の小片であるが、突帯の部位が異なっている。26・27は、突帯の位置が口縁部よりいく分下がっている。この種の土器は縄文的伝統の上にのるものとみられ、弥生前期でも古期に位置づけられるものである。28はいわゆる如意形口縁として呼称されるタイプで、これも古い形のものである。一般に様式変化の傾向として、突帯の細いものから大きいものへと時代上昇的思考が内存するようであるが、この遺跡では採集資料であるためその検証は出来ない。29は最近にわかに脚光を浴びた土器である。福岡市諸岡遺跡から多量に出土したところの、朝鮮系の無文土器に相当する。この遺跡から２点採集されていて[注2]、29はその１点である。口縁部は内に窄まり、端末の断面がまるくなる。粘土紐を外から接着、口縁部を整形仕上げている。また一つの特徴として、図にみるように、口縁のまるい部分を外からおさえていることである。図による復元口径は18cmをはかる。この無文土器は、採集資料の再検索により発見されたもので、その契機をなしたものが諸岡遺跡での遺物発見である。無文土器出土遺跡としては目下のところ九州の南限で、また同類の土器は同一水系の江津湖浚渫土中より数片採集されている。

30～40は甕形土器の底で、39・40を除き底が平坦である。器面は篦均らし、或は篦磨きで、弥生前期の土器の特徴を示している。39・40は底が上げ底気味、器面の調整にも新しさが窺われる。中期的なものへの移行形態として理解出来る。[注3]

本遺跡は現況では河底にある。そのために二次堆積ではないか、として遺跡そのものについて疑問視するむきもないではないが、私は大要において状況からプライマリーなものと考える。加勢川(江津湖)の流域には低湿地に占地する遺跡が多く、田迎町二石では水田下より弥生前期の甕形土器を出土し、また上江津湖・下江津湖湖底からも多量の土器類が浚渫により出土した。このことは、遺跡そのものについてその性格の検討を余儀なくされ、以前にも多少の問題点を指摘したことがある。[注4]

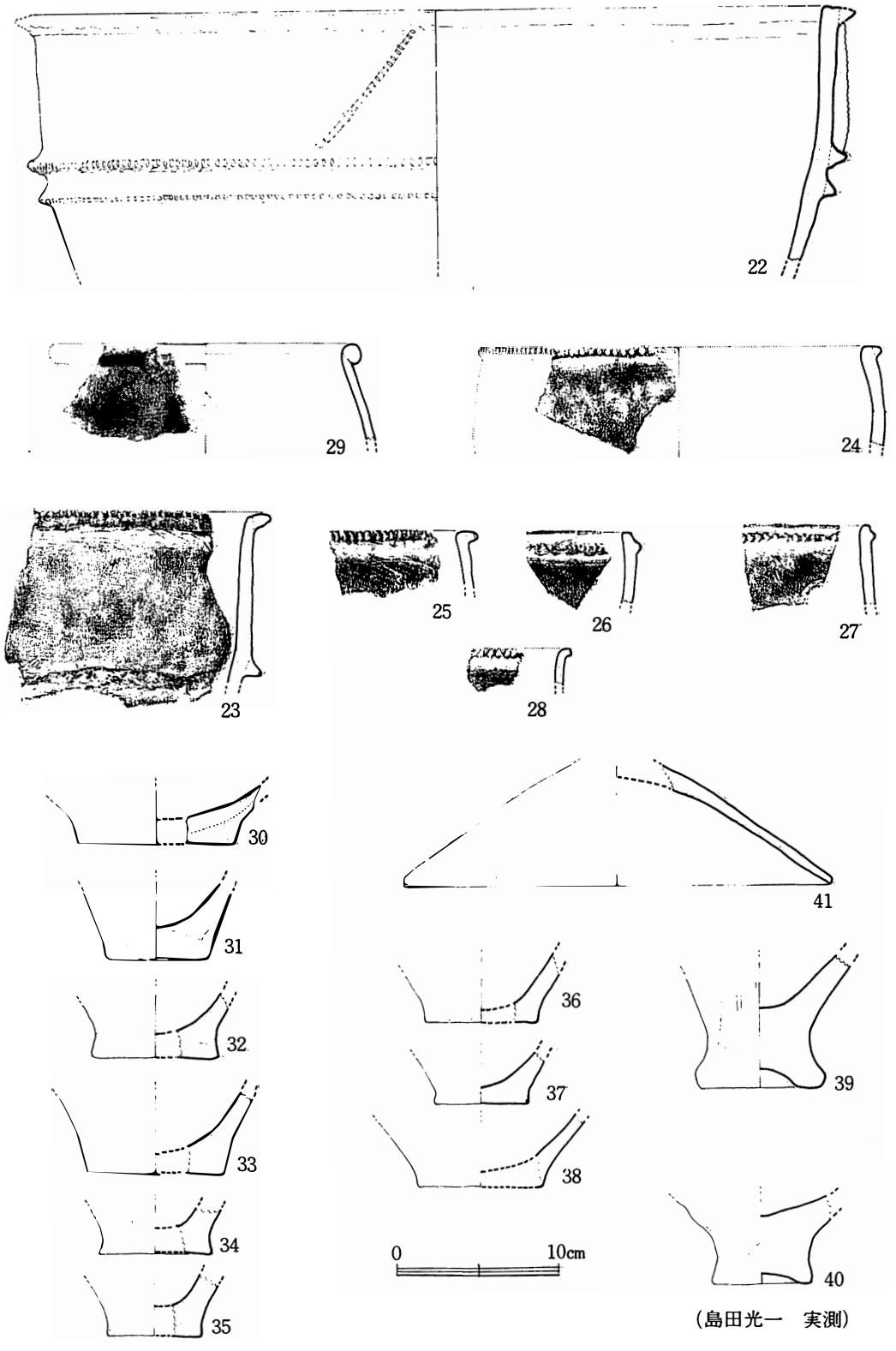
通常河川は、その自然的状態では平野部において三角洲を形成するものと思われる。上流からの土砂の流入堆積は平野部において奔放に流れ、時に応じて流路を変更したものと考えられる。河底遺跡のあるところの加勢川も、元々今の流路に固定されるには、政治的社会の成立を俟たねばならなかったことは想像に難くない。したがって流域住民の共同作業を必要とする河川の築堤は、おそらく古代を大きく遡ることはなかろう。

注１　三島格「熊本県緑川・加勢川発見の磨製石剣」　九州考古学　24　1965

注２　後藤直「弥生時代の竪穴と出土遺物」　板付周辺調査報告書　福岡市教育委員会　1975

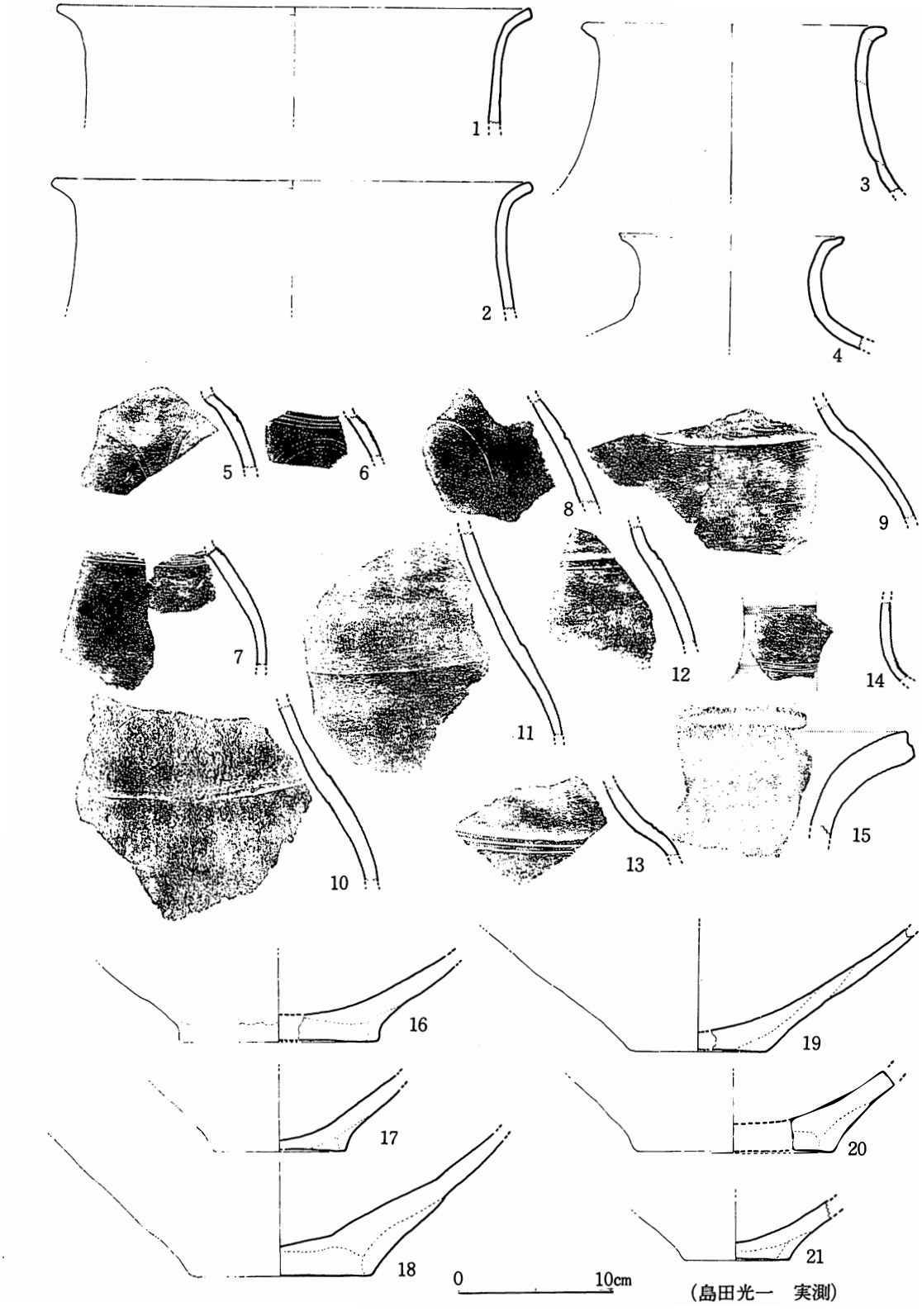
注３　福田正文君の採集資料中に数点の無文土器片がある。

注４　拙稿「江津塘について」　江津湖苗代津遺跡　熊本県教育委員会　1974



（島田光一　実測）

第72図　加勢川河底遺跡出土　土器1



第73図　加勢川河底遺跡出土　土器２

図　　版

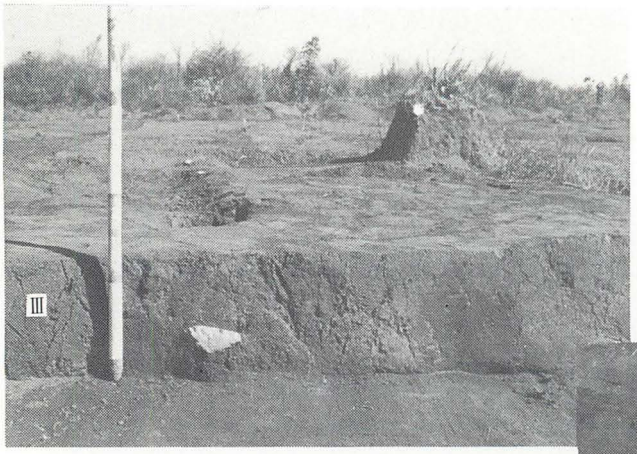
甚九郎山古墳

沈目立山遺跡調査風景

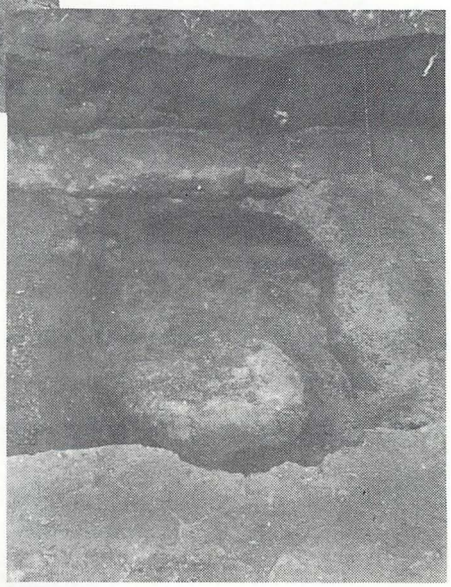
遺跡展望

沈目立山遺跡調査風景、遺跡展望

図版2



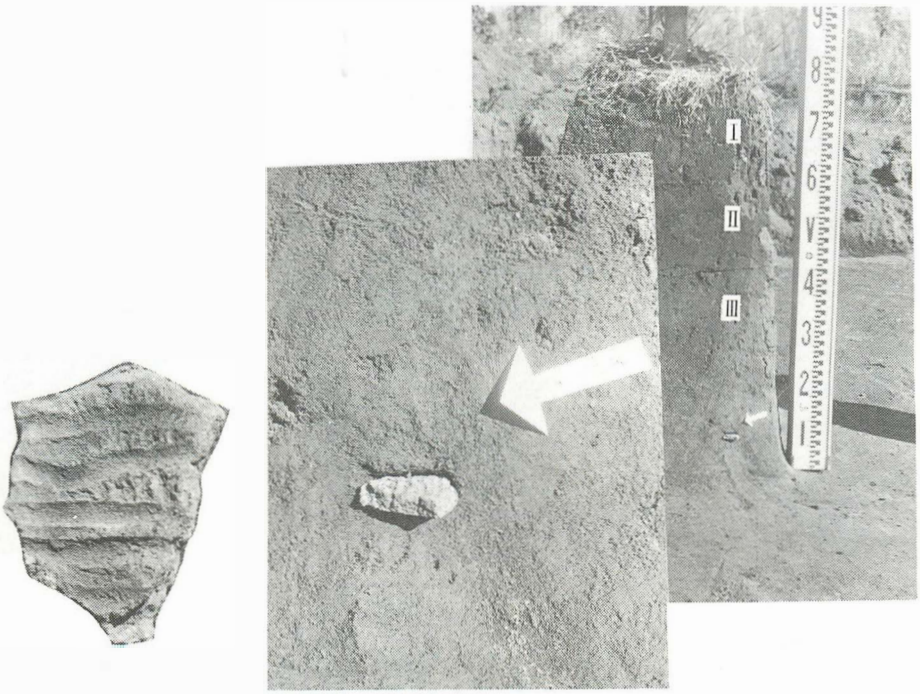
礫器出土状態



炉　穴

No.28付近の層序

炉穴とその周辺

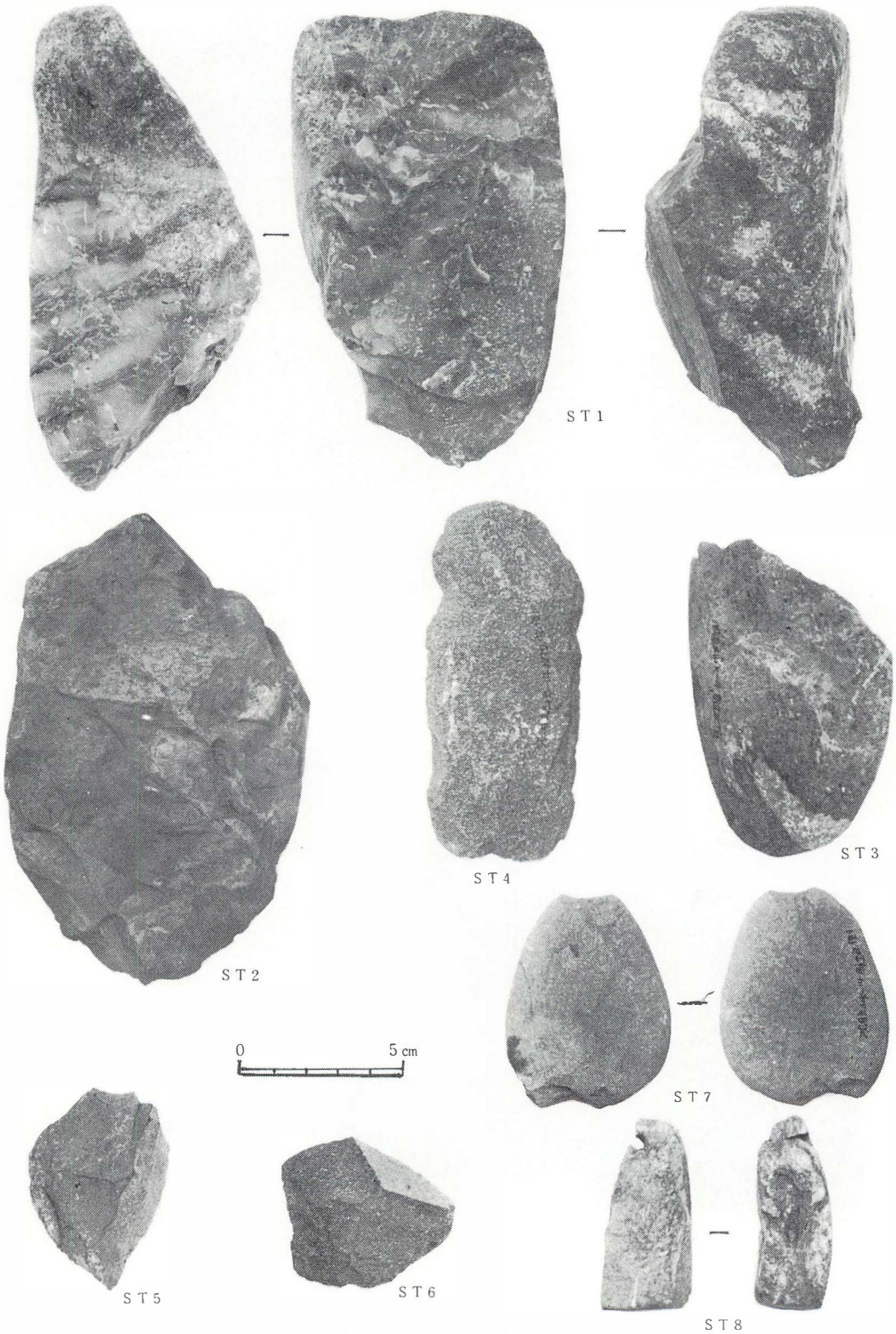


土器出土状態（No.28付近）と出土土器

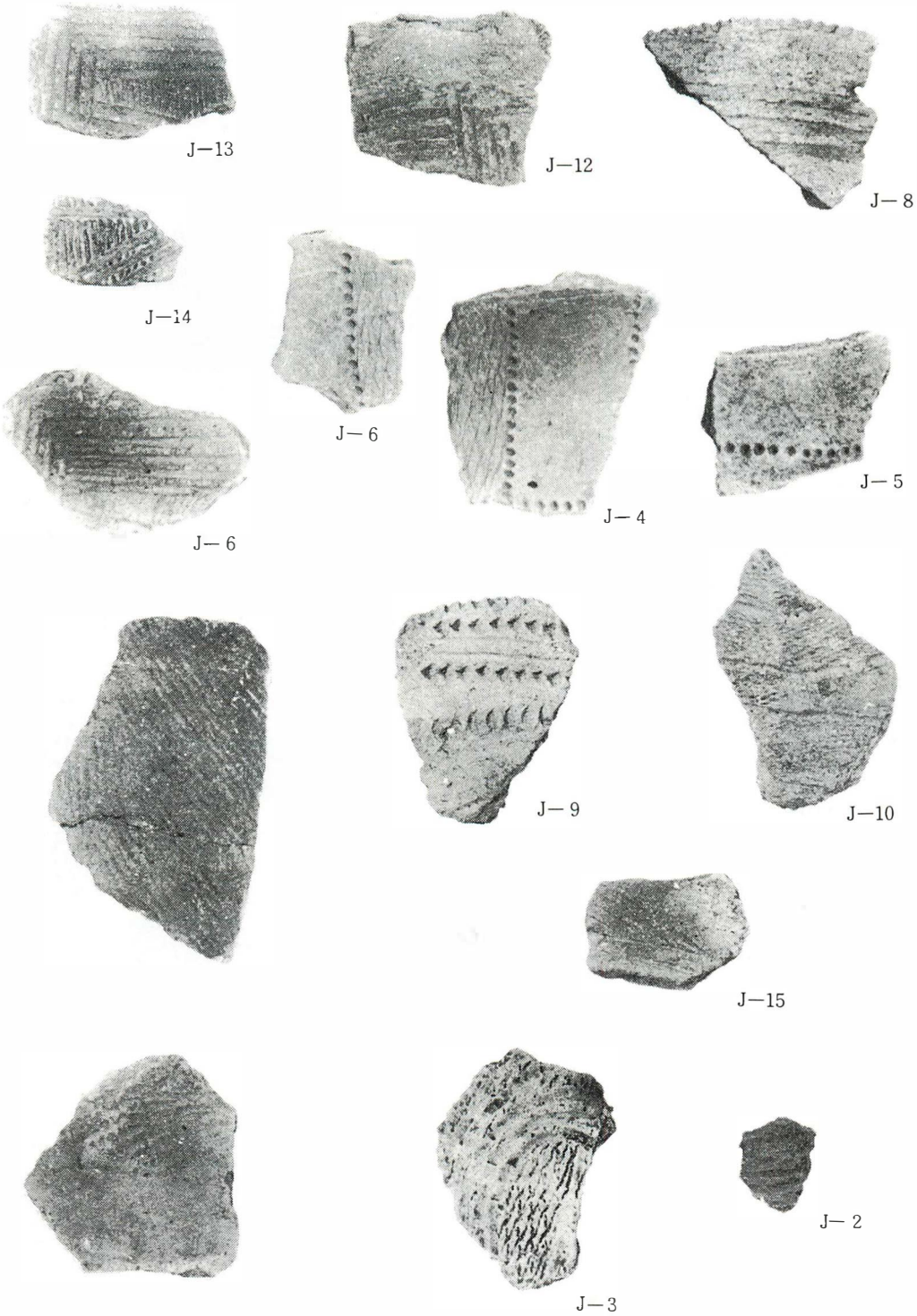
縄文土器とその出土状態

No.28付近の土器出土状態　　撚り糸縄文土器とその出土状態

図版4

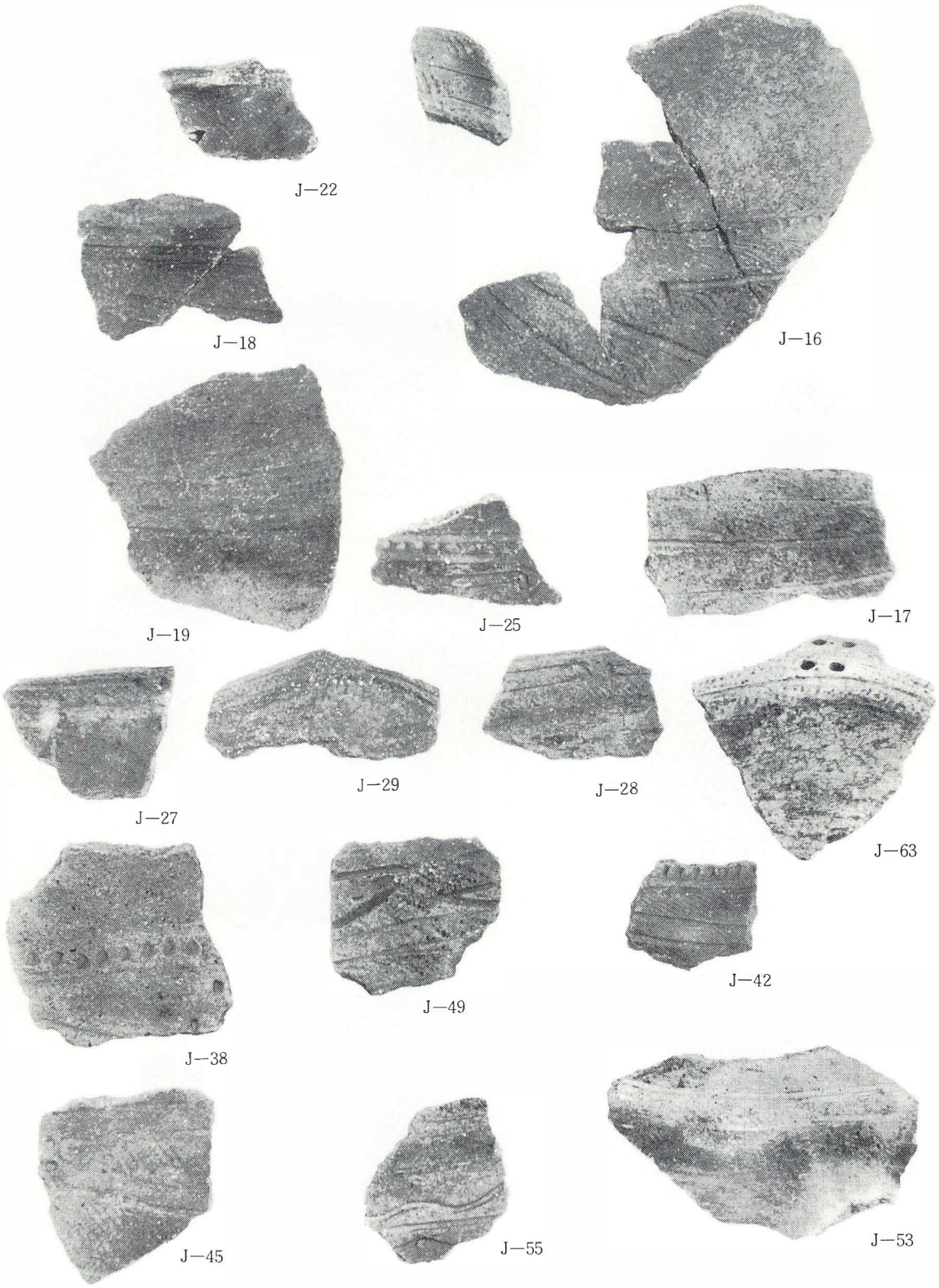


沈目立山遺跡　出土石器

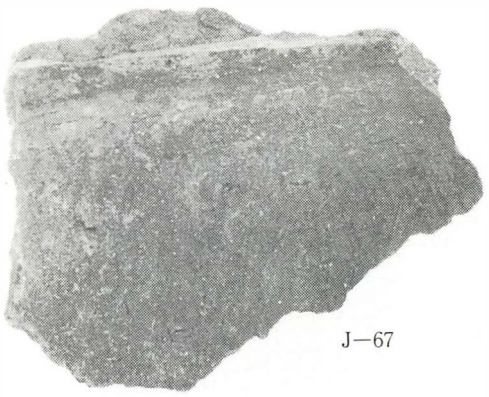


縄文土器　1　（塞ノ神式土器　他）

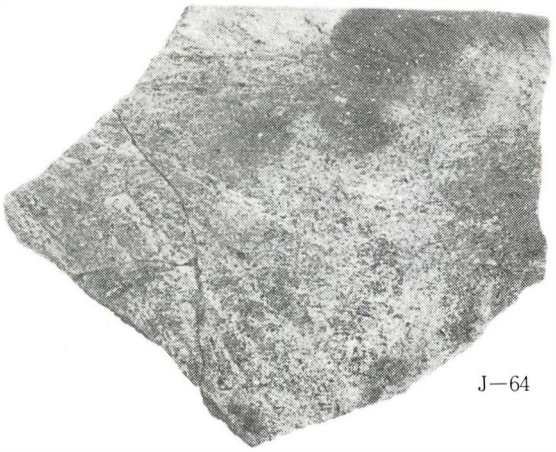
図版6



縄文土器　2（擦り消し縄文系）



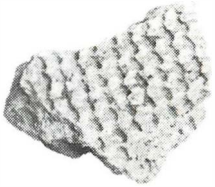
J—67



J—64

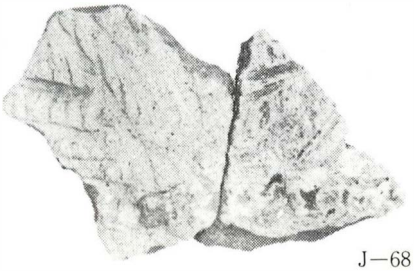
J—35

J—69



J—70

J—59

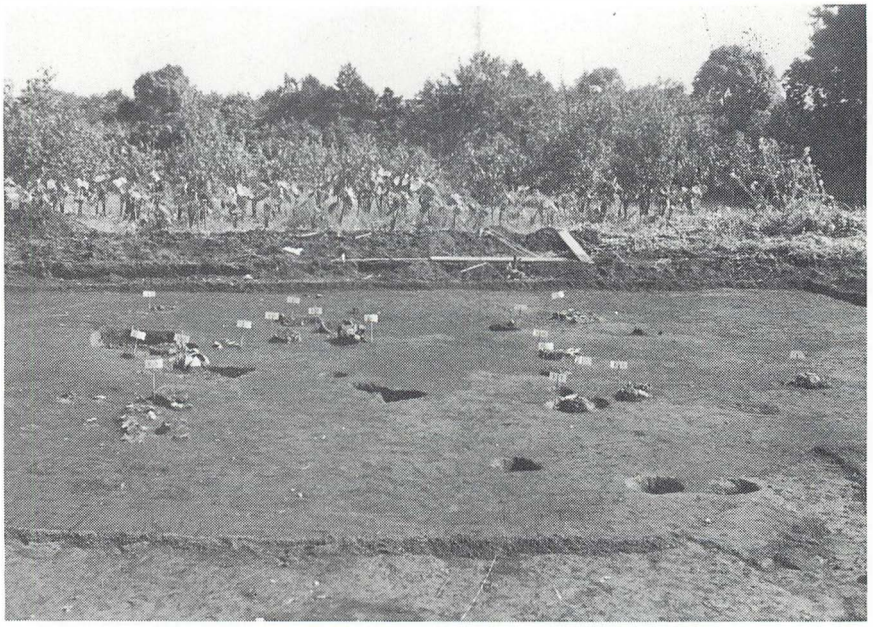


J—68

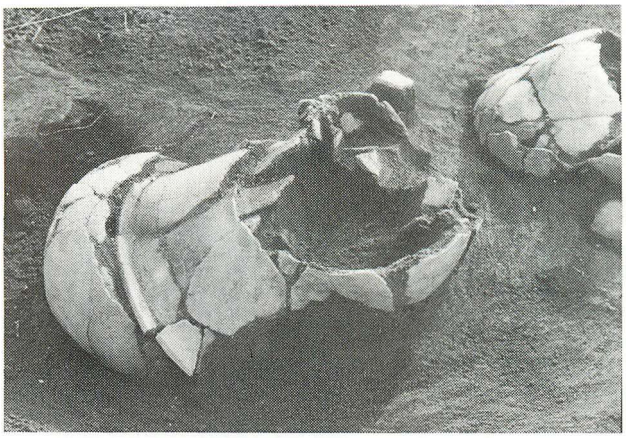
縄文土器　3　（各種）

図版8

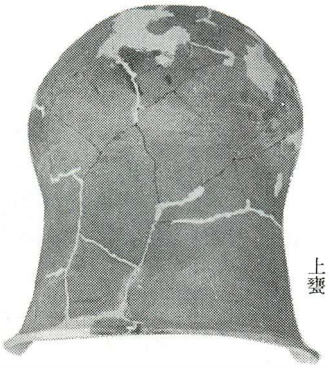
弥生甕棺群全景　西より

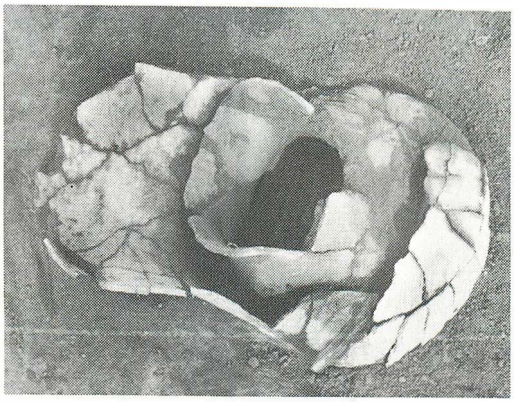


弥生甕棺群全景　東より



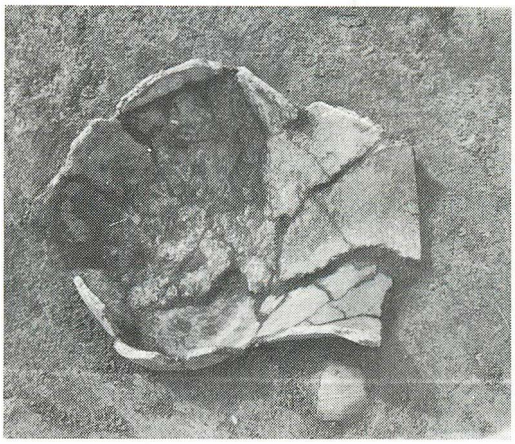
1号棺出土状態　1





1号棺出土状態　2

1　号　棺

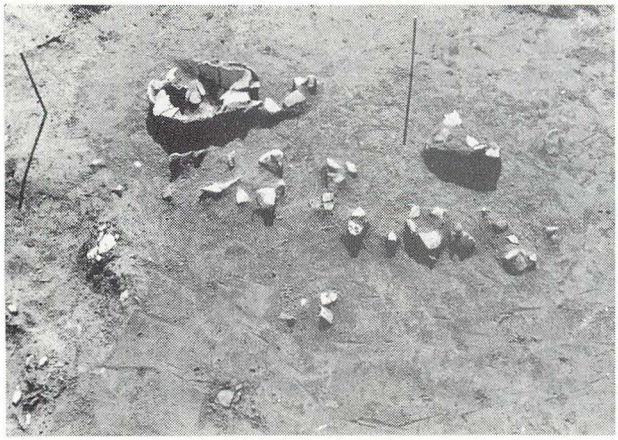


2号棺出土状態

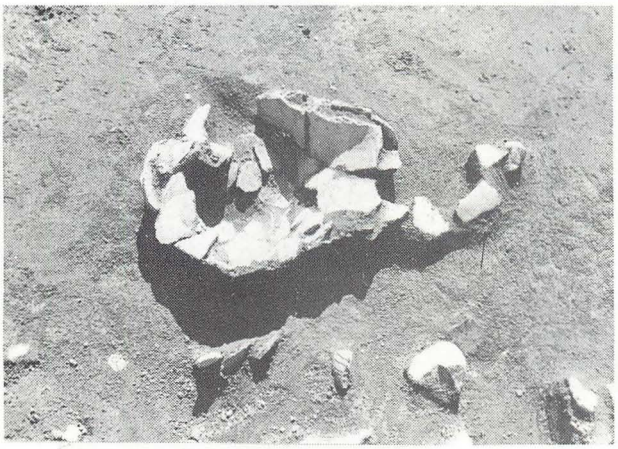
2　号　棺

1・2号棺とその出土状態

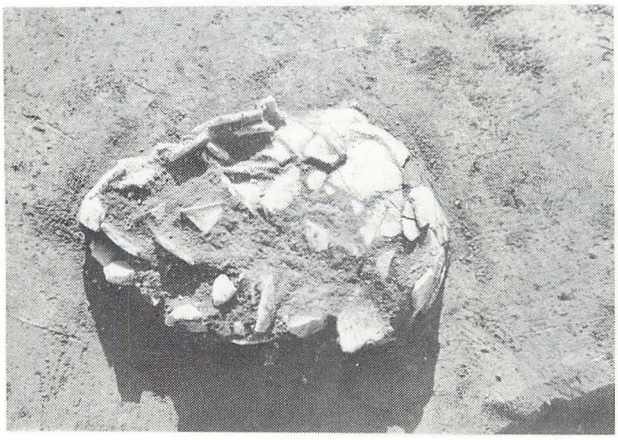
図版10



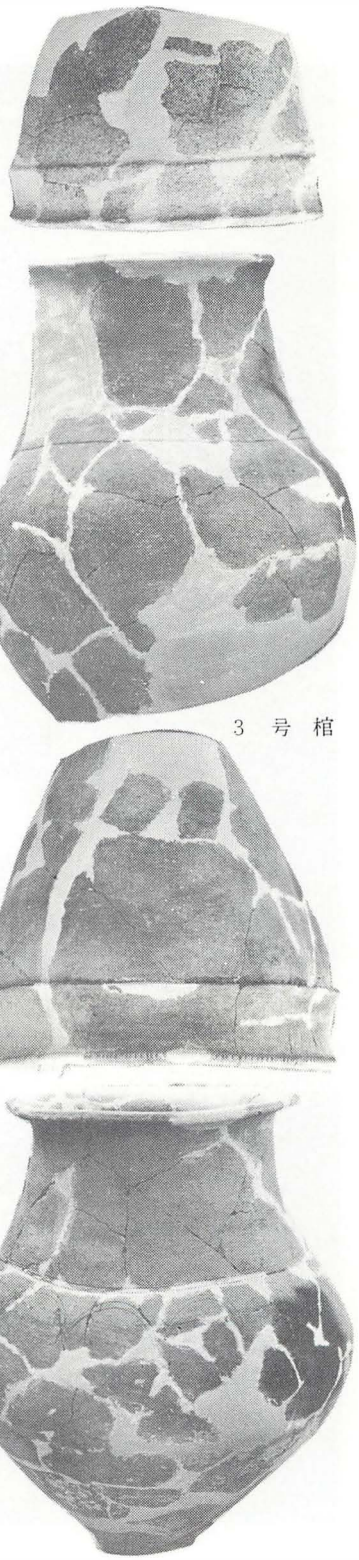
3号棺とその周辺（縄文土器）



3号棺出土状態



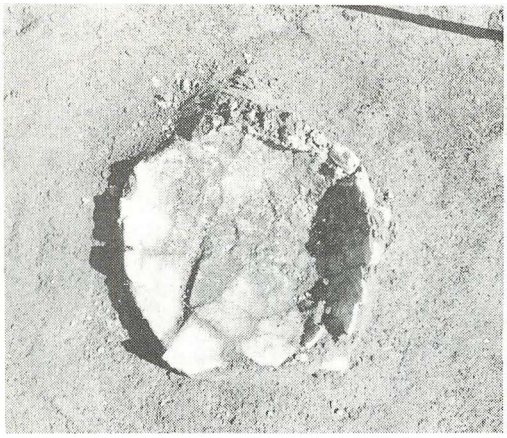
4号棺出土状態



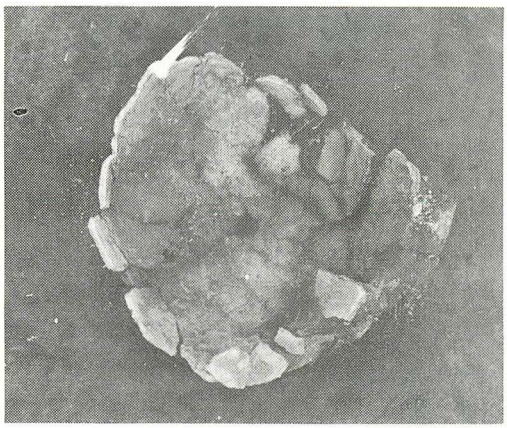
3　号　棺

4　号　棺

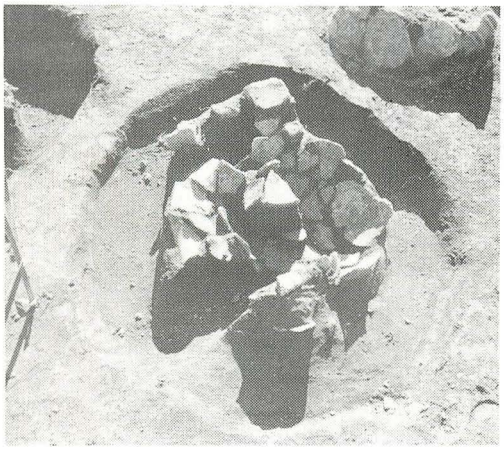
3・4号棺とその出土状態



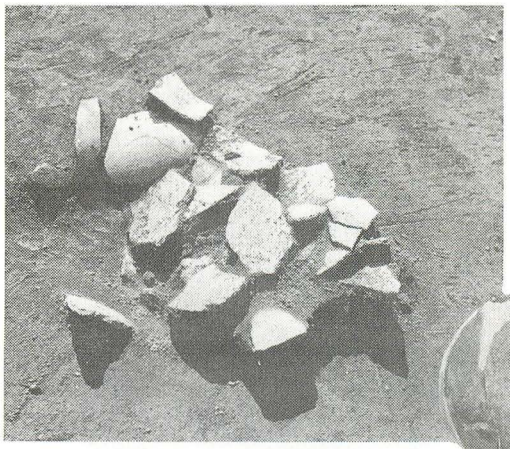
5号棺出土状態



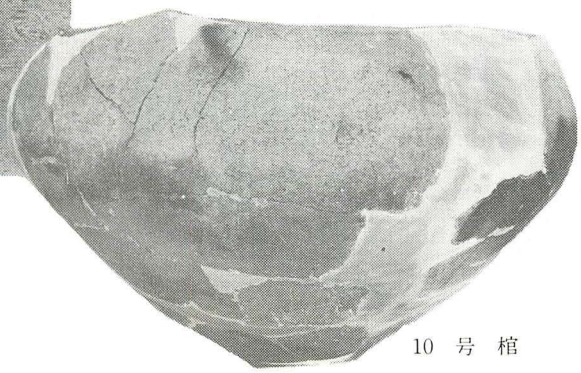
6号棺出土状態



8号棺出土状態



10号棺出土状態



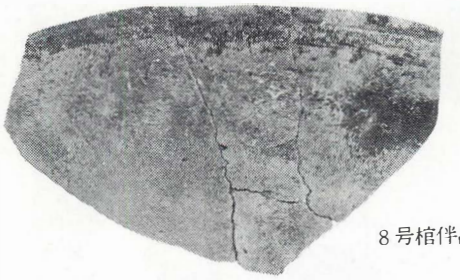
10　号　棺

10号棺と5・6・8・10号棺出土状態

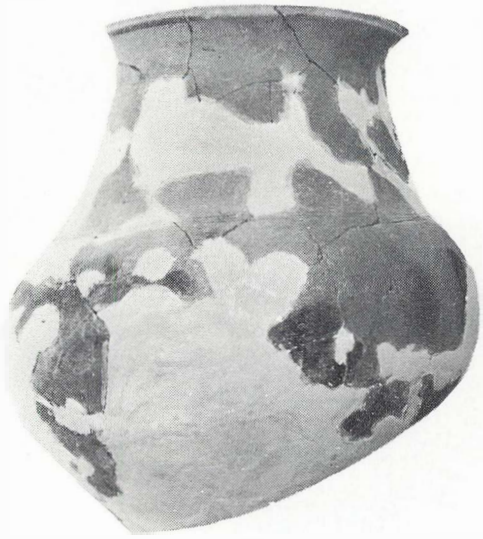
図版12

6　号

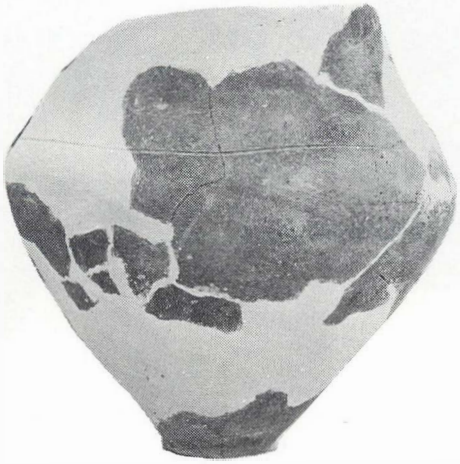
5　号　棺



8号棺伴出

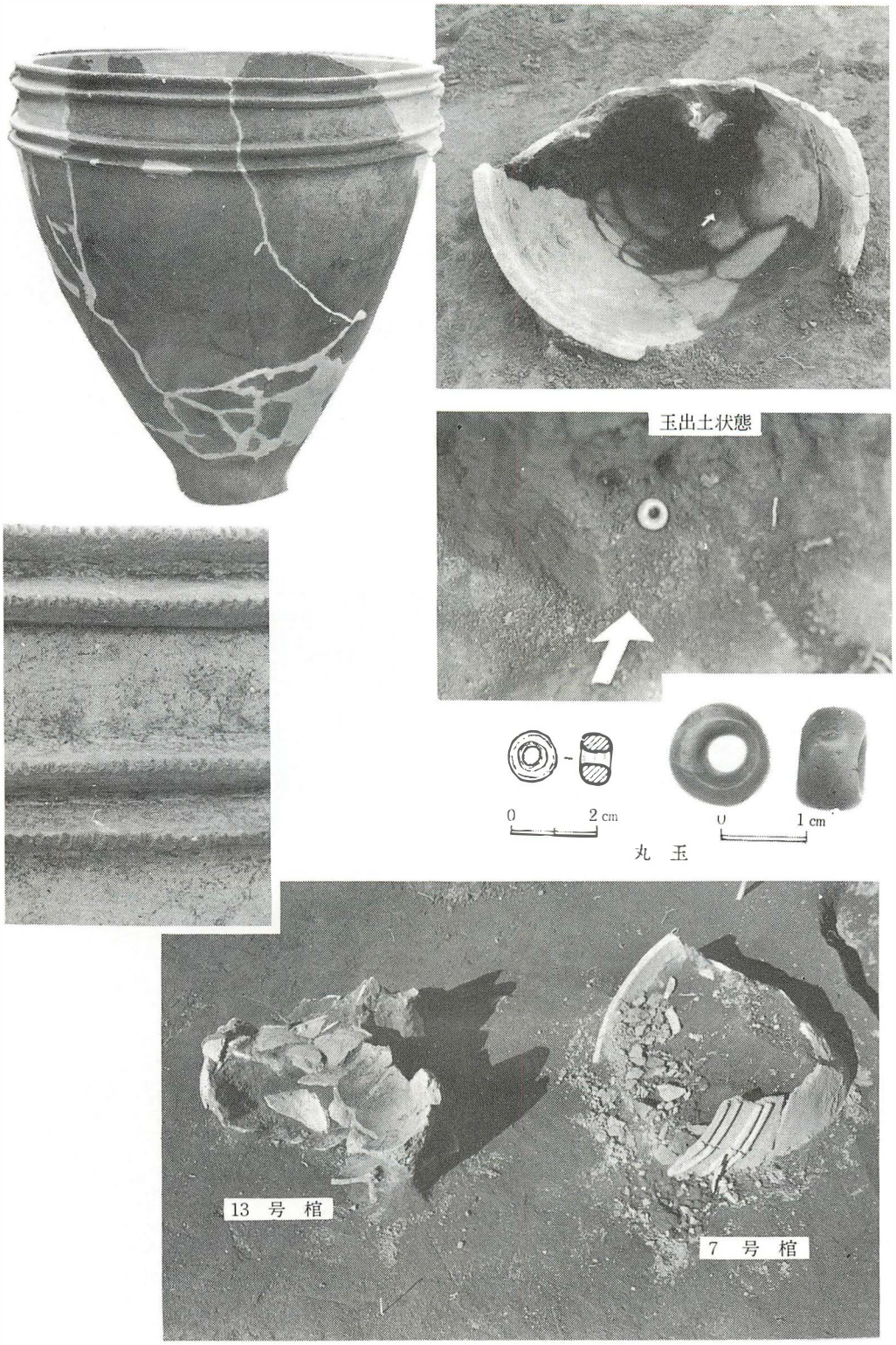


8　号　棺

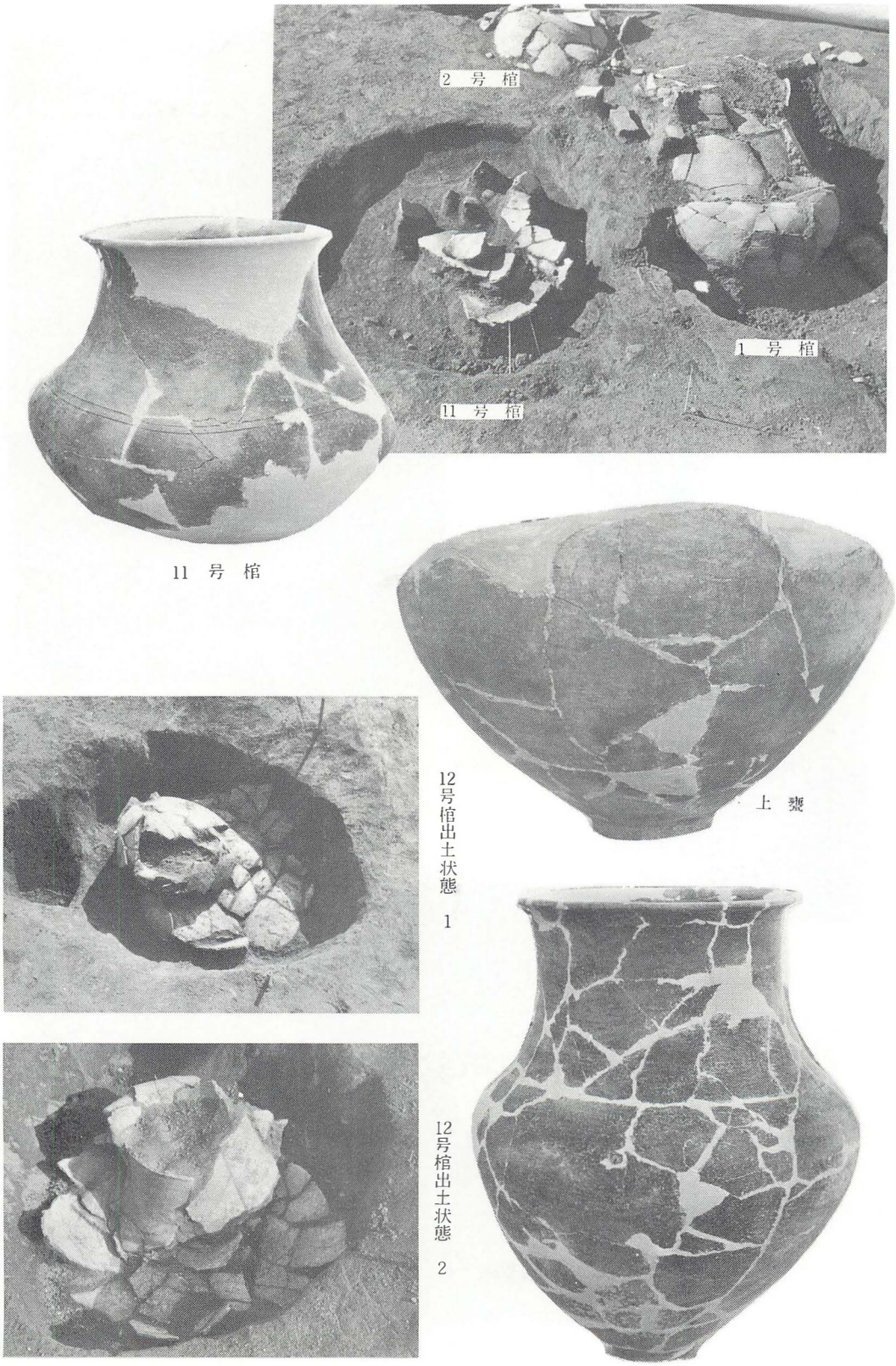


9　号　棺

5・6・7・8・9号棺

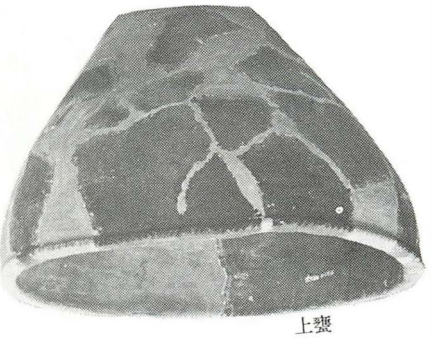


7号棺とその出土状態



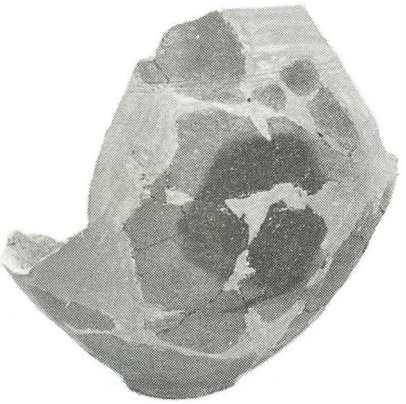
11・12号棺とその出土状態

上甕の口縁下の文様

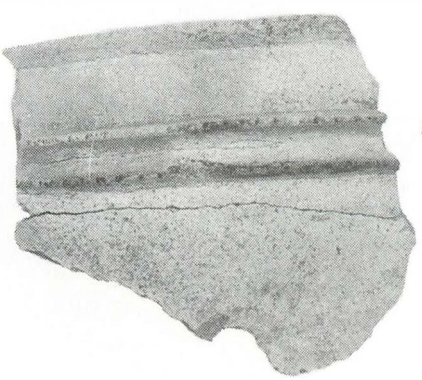


上甕

13号棺出土状態



13　号　棺　下甕



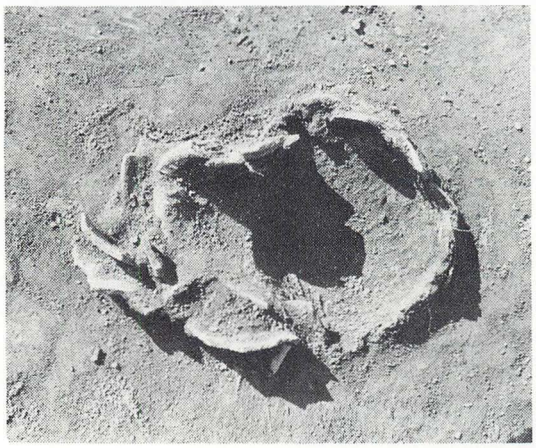
14　号　棺

13・14号棺と13号棺の出土状態

図版16

15号棺出土状態

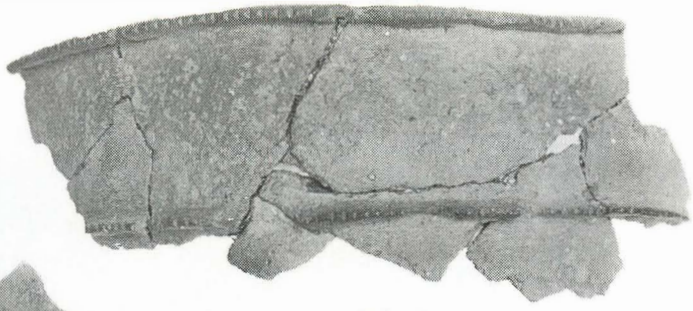
15 号 棺



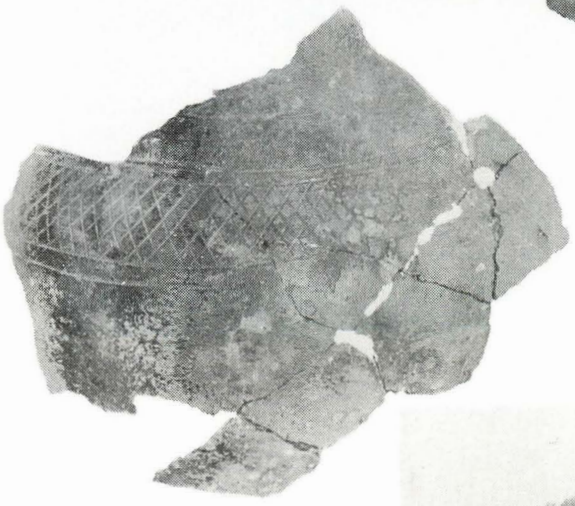
16号棺出土状態

16 号 棺

15・16号棺とその出土状態



13号棺　伴出



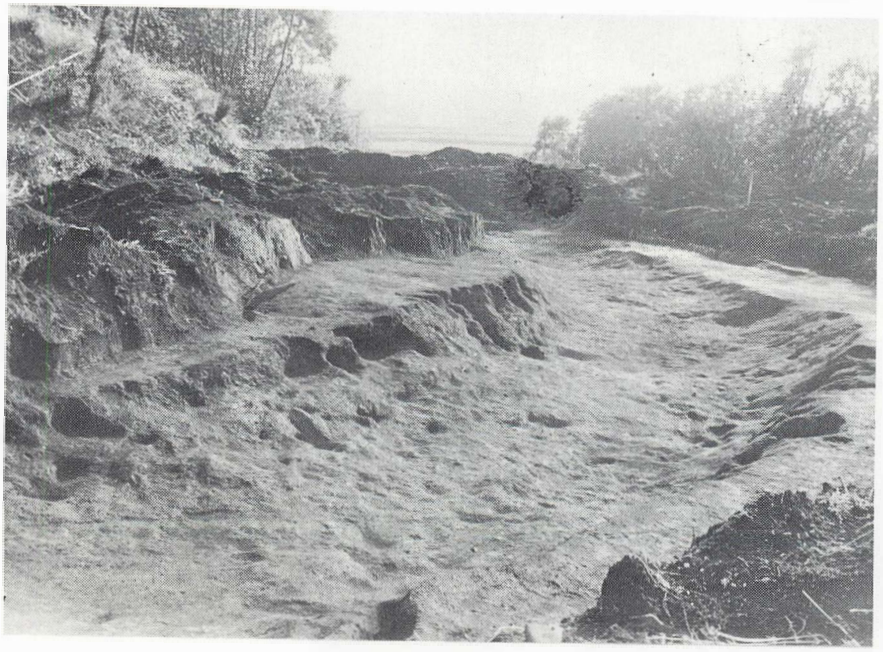
No.21～22出土

調査風景　北より

住居址　（南より）

住居址、弥生式土器　他

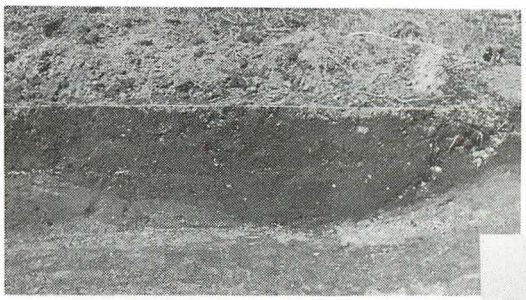
甚九郎山古墳　西より



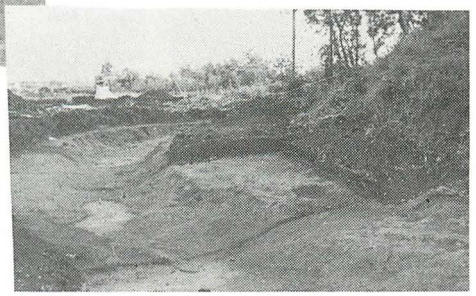
甚九郎山古墳　周溝　北より

甚九郎山古墳と周溝

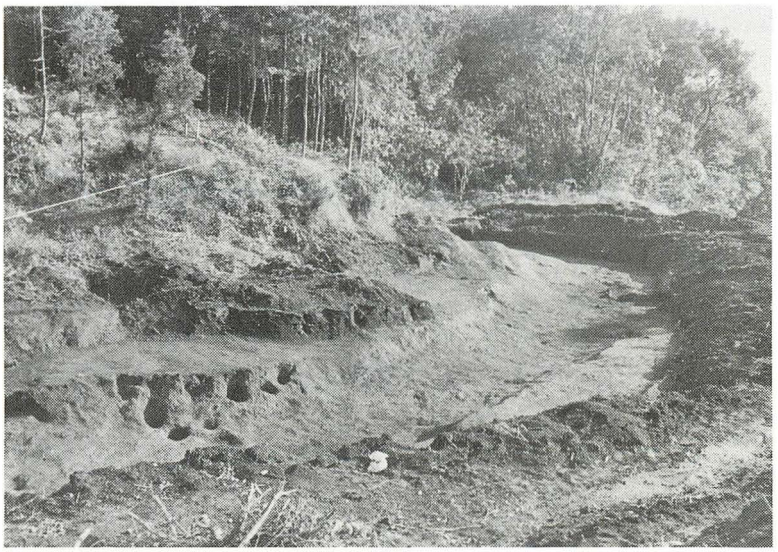
周溝　表土はぎ直後　墳頂より



周溝断面（Dトレンチ）

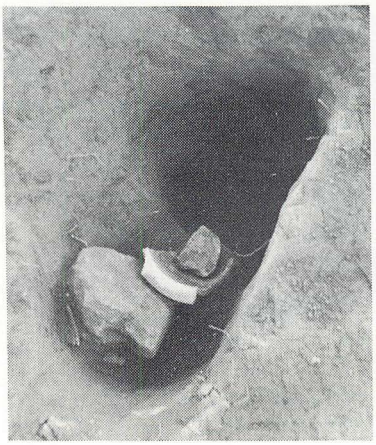


周溝　南より

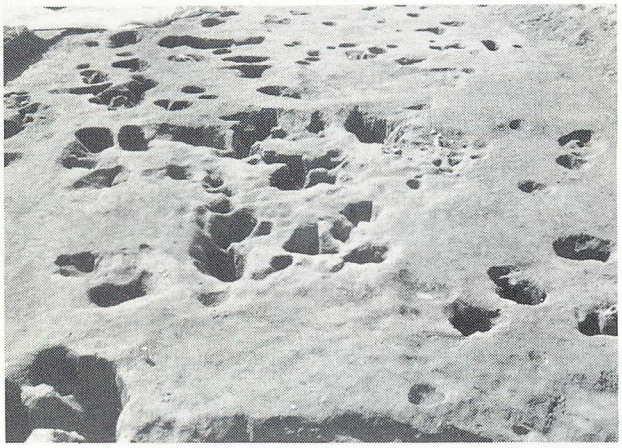


甚九郎山古墳周溝　北より

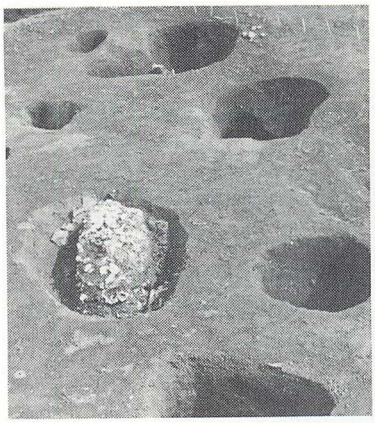
甚九郎古墳周溝



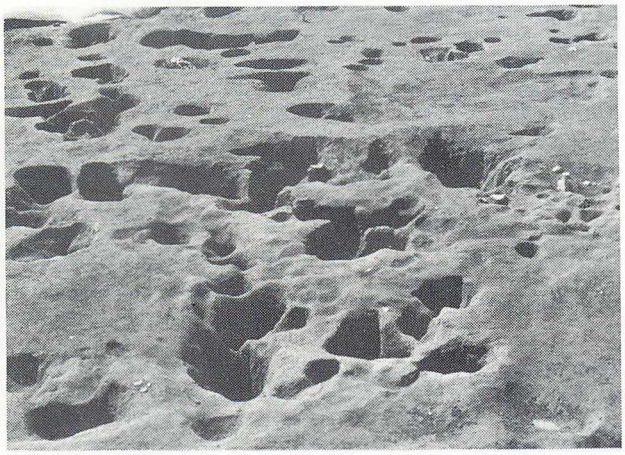
柱穴内の石と須恵器



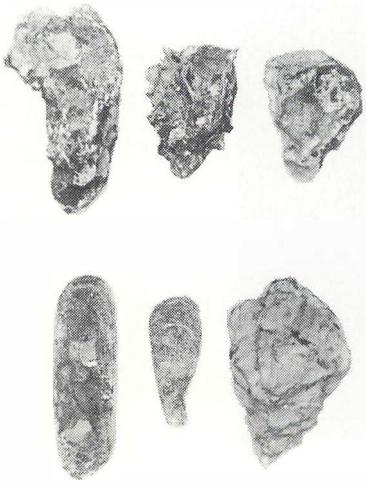
ピット群　No.24付近より南をみる



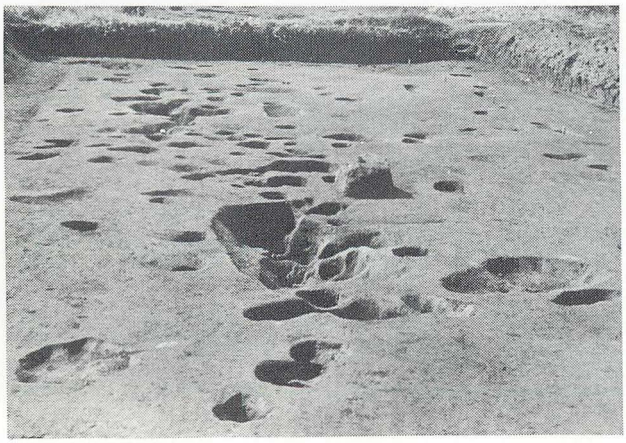
貝殻出土状態



同上部分

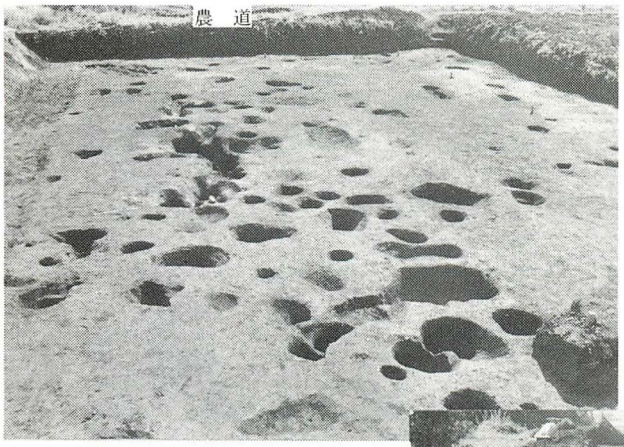


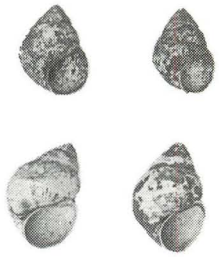
マガキとアゲマキ



ピット群　No.25付近　北より

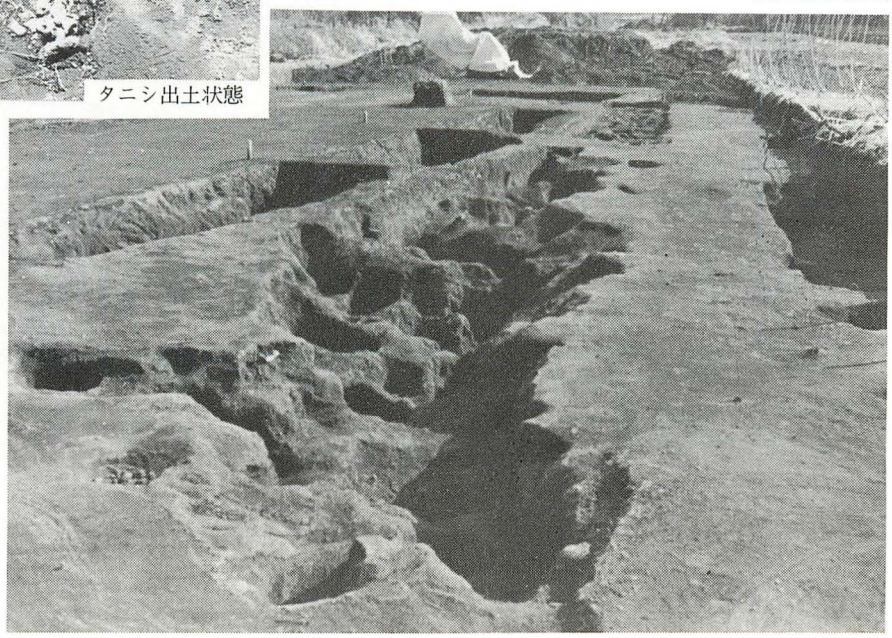
ピット群と出土貝類





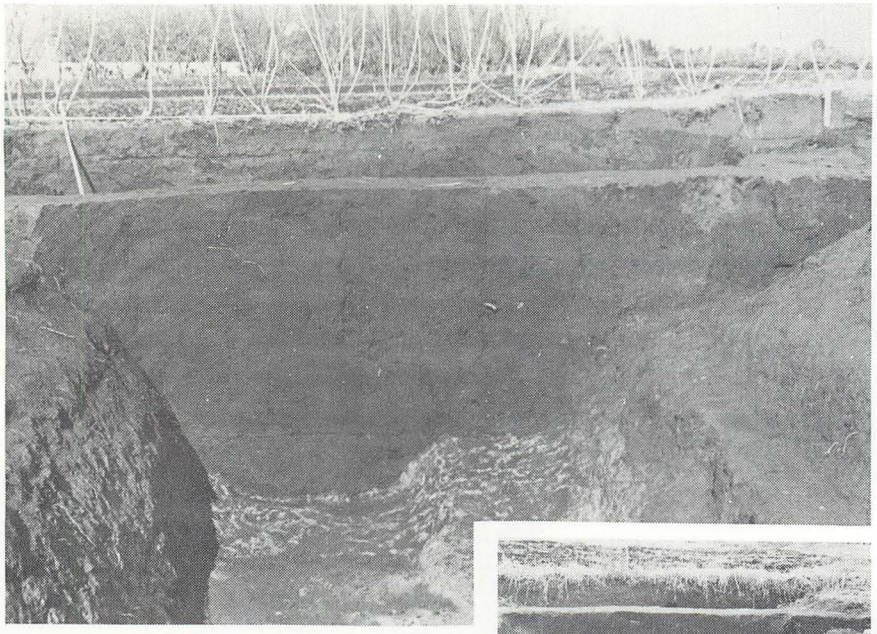
オオタニシ

タニシ出土状態



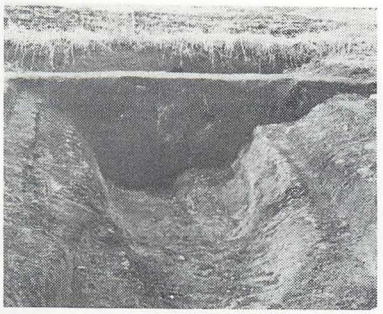
溝様遺構　　北より　　左は2号棺

溝様遺構，ピット群とタニシ



東より

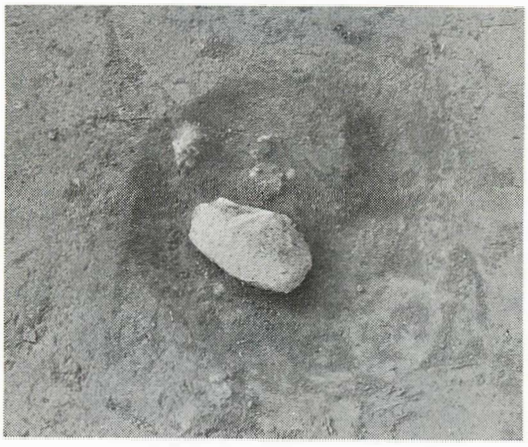
西より ▶



西より

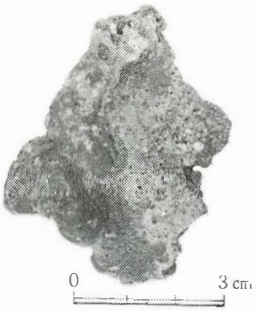
1 号 溝

集　石　遺　構

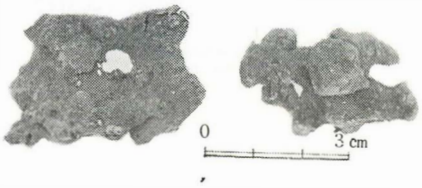


2　号　遺　構

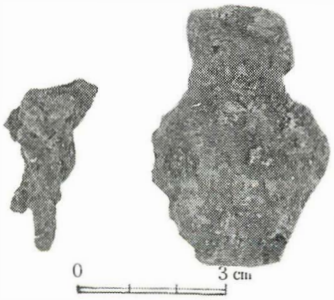
フイゴ羽口



スクラッグ



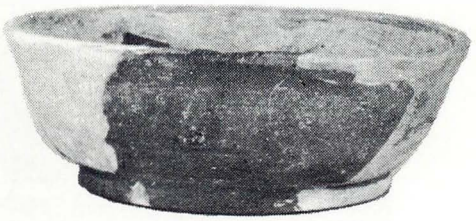
鉄　片



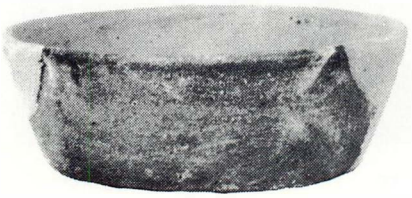
製鉄関連遺構

図版24

S 1

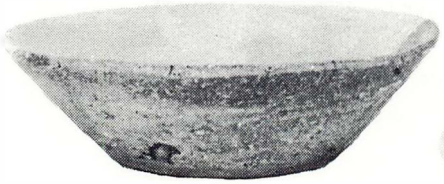


S 10



S 29

S 27



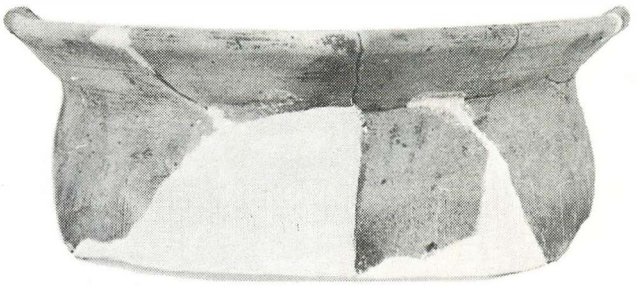
S 38

S 24

S 43

0 10cm

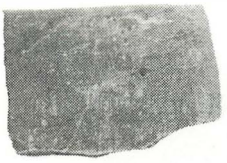
沈目立山遺跡出土　須恵器



甕　H 3

把　手　H20

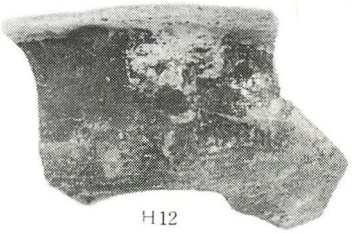
H15



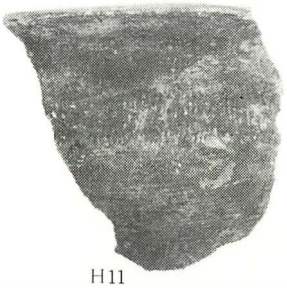
H16

H17

竈　形　土　器



H12



H11

土　鍋

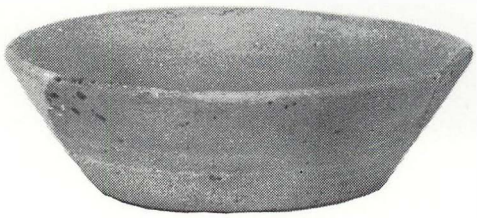
沈目立山遺跡出土　土師器

H21

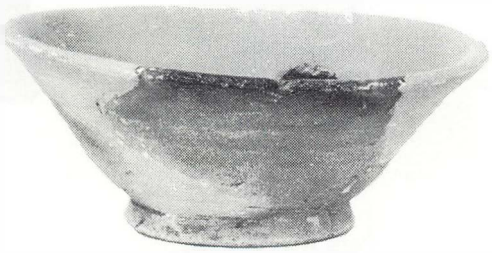
H55

H32

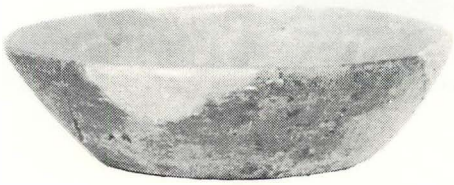
H33



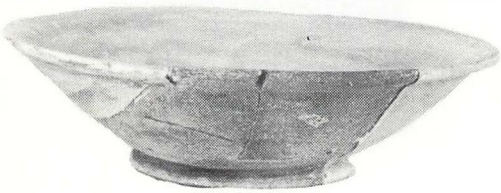
H31



H 3

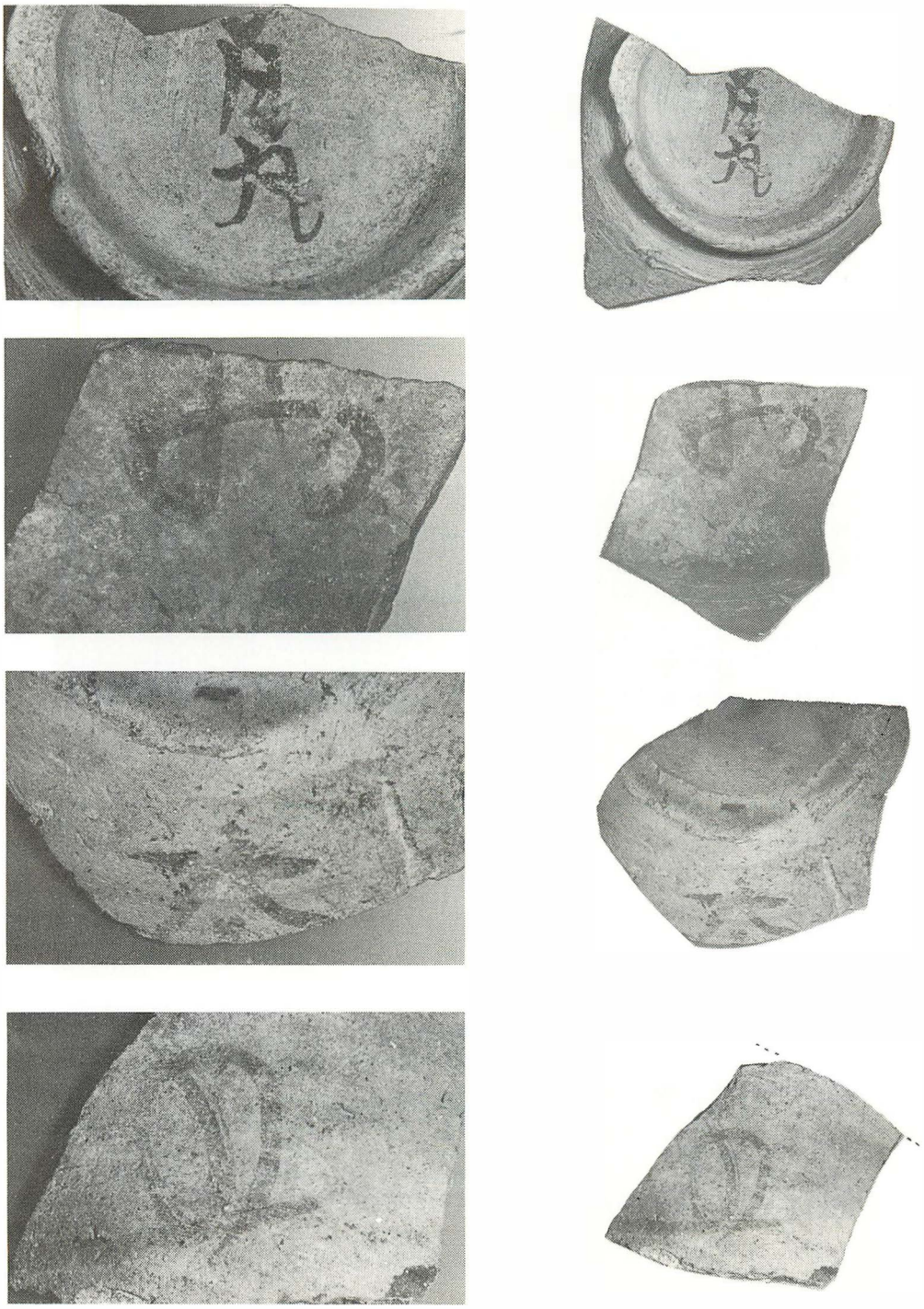


H48



H34

沈目立山遺跡出土　土師器と黒色土器

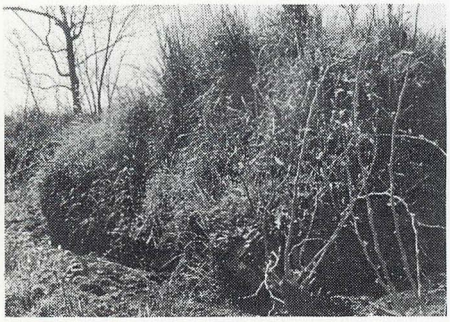


沈目立山遺跡出土　墨書銘土器

右のうち奥の一石

巨石が3個みえる・この石は今はない
(農道の西)

農道脇に小盛土あり　(農道の西)



土手下に石がのぞいている　(農道の東)

中央部の小盛土(農道の東)

編　集　後　記

報告書を作成するたびに思う。そこに何を報告しようとするのか、さらに報告書とは一体何だろうかということである。

報告書はそれが報告書である限り、事実の報告でよいのではないか。根底のしっかりしない論考は根無し草で、どんなに絢爛豪華であっても砂上楼閣に過ぎない。

客観妥当性という言葉がある。考古学上の発掘調査の記録は、原資料、事実というよりもむしろ、調査者の眼を通し、また解釈された事実ということになろうか。主体的条件、視点の相違により変易し、変化する事実ということになろう。

伝統的学問領域に Ontologie がある。存在の認識で、「である」の考及である。本稿においてどこまで「である」を追及し、事実に照明をあて得たであろうか。稿を終え、冷汗三斗の思いすらする。

文化財の発掘調査は一つの実存的行為である。突破を求められ、自己決断を迫られる。調査は自らを被投の境位におくことでもある。このようなことは調査過程において、吾人がしばしば経験するところである。ともあれ、ここに報告書を出すことが出来たことは欣びである。　（緒方）

沈　目　立　山　遺　跡

熊本県文化財調査報告　第26集

昭和52年８月25日　印刷

昭和52年８月31日　発行

発　行　熊本県教育委員会

熊本市水前寺町18番１号

印　刷　新写植出版㈱熊本支店

熊本市健軍１丁目６－２

電話　0963－67－1606

沈目立山遺跡　正　誤　表

頁	行	誤	正
2	32	群存	群在
32	1	口縁部を欠ち欠いている	口縁部を打ち欠いでいる
33	2	効み目	刻み目
84	31	H18は甕形土器	H18は竈形土器
85	7	……ものを城とした。	……ものを埦とした。
図版	8上	西より	南より
図版	23下	スクラッグ	スラッグ

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 26 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：沈目立山遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日